

マルコの福音書1章(Mark1)(#8029)

マルコの福音書を開きましょう。ヨハネ・マルコはバルナバの甥でした。イエスが公に宣教をされていた時に、彼は青年、というか実は少年でした。イエスが十字架にかけられた時は、だいたい12歳であったと考えられています。ヨハネ・マルコは興味深い洞察を与えてくれます。イエスがゲツセマネの園で捕らえられた時のことについてですが、園の中で人々が少年を捕まえようとしたけれども、少年はそれを振りきって園を脱出しました。これは、自分に何が起きたか個人的な証しをヨハネはしているのだと考えられています。彼は、パウロとバルナバといっしょに第一次伝道旅行に行きましたが、パウロとバルナバを離れて、いっしょに第一次伝道旅行を続けませんでした。パウロとバルナバが第二次伝道旅行に出かけようとしていた時、バルナバは再び甥のマルコをいっしょに連れて行きたいと思いましたが、パウロは反対しました。それで、マルコを連れて行くことをめぐってパウロとバルナバの間で議論になり、議論が余りに激しくなったので、別々に、パウロはシラスを連れて、バルナバはマルコを連れて行くことになりました。このために、1組ではなく2組の伝道チームとなりました。キリストの体の中では、意見の違いがあります。神は、パウロとバルナバの場合に1組ではなく2組の伝道チームをつくって外国での宣教活動を倍増されましたが、ご自分の働きを拓げるためにこのようなことをよく用いられます。ただ、議論や意見の違いは、決して尾を引くようなものではありませんでした。ですから、パウロがローマにいた時、マルコはパウロといっしょにいてパウロに仕えていました。後にテモテへの手紙の中で、パウロは、「マルコは私にとって大きな慰めである(2 テモテ4:11参照)」と言って、マルコに来てもらうように要請しました。そこで、この人が、「マルコの福音書」の題になっている、この書物の記者なのです。マルコは、その中に書かれている出来事を全部目撃するには若すぎました。ペテロにとって、マルコは、おそらくパウロにとってのテモテのような存在だったのでしょう。マルコは、ほとんどの時間をペテロと過ごし、ペテロがイエスの話をするのを聞いていました。ですから、実際はマルコを通してペテロの話があるのですが、これはペテロが話をするのを聞いたマルコによって書かれたものです。マルコの福音書が、福音書の中では一番先

に書かれたものだと考えられています。しかし、この点は常に議論のあるところで、絶えず些細なことにこだわろうとする人たちがいますが、どれが先に書かれたかで大した違いがあるわけではありません。しかし、学者の大方の見解はそのようです。

マルコの福音書の中で、イエスは神のしもべとして描かれています。ですから、この福音書を見ますと、その他の共観福音書のルカの福音書とマタイの福音書がキリストの誕生で始めているようには、始めていません。しかし、マルコは、バプテスマのヨハネのバプテスマというか、バプテスマのヨハネの宣教の預言から始めています。そこで、こう始めています。「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。(1:1)」福音は、良い知らせという意味です。神の子イエス・キリストの良い知らせのはじめ、ということです。預言者に戻っています。「預言者イザヤの書にこう書いてある。『見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。』(1:2)」これは、マラキ書3章からのものです。マラキ書3章の預言を見たら面白いかもしれません。というのは、マルコはマラキ書3章1節の預言の一部しか書いていないからです。「『見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。』(マラキ 3:1)」ですからここでは、彼らが尋ね求めているメシヤが突然その神殿に来て、使者のバプテスマのヨハネが道を整えるために来て、あなたがたが尋ね求めている主がその神殿に来る、ということです。「『あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。』と万軍の主は仰せられる。(マラキ 3:1)」そして、バプテスマのヨハネに関するマラキの預言を引用してから、イザヤ書に目を向けています。3節です。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主(エホバ)の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』(1:3)」つまり、イザヤ書40章に再び戻って、このイザヤの預言を引用しているのです。ここでイザヤは、「主の道を整えよ。」と呼び掛けています。3節です。「荒野に呼ばれる者の声がする。『主(エホバ)の道を整えよ。荒地に、私たちの神の大路をまっすぐにせよ。すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。』(イザヤ 40:3-4)」さて、これに注目して下さい。イザヤの預言は、「主(エホバ)の道を整えよ。」です。では、ヨハネは、誰の道を整えていたのでしょうか。誰のために道を整えに

来たのでしょうか。エホバ・シュワ(訳者注: イエスのヘブル語名)であるイエスのためでした。エホバの証人がもう少しきちんと聖書を理解していたなら、このところでかなり困難を覚えたはずです。しかし、残念なことに、彼らはそこまできちんと聖書を理解していません。それで、こんなことも見過ごしています。しかし、イザヤ書の預言に戻ると、このギリシャ語のクリオス(kurios)という言葉は、ヘブル語ではエホバです。「主(エホバ)の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。(1:3)」王がある地方を通られる時に、その前に行って王が来られるために大路を整えさせたことがよくあったと言われていました。曲がった所をまっすぐにし、暗渠(訳者注: culvert。上部を開放しない水路またはケーブル用の溝。)や谷を埋め立て、山を崩し、王のために大路を整えさせるためでした。霊的な意味において、王が来られるために道を整える、というようなことをバプテスマのヨハネはしていたのです。

それで、「バプテスマのヨハネが荒野に現われて、罪が赦されるため悔い改めのバプテスマを説いた。そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。(1:4,5)」とあります。旧い契約の中で最も偉大な預言者であるバプテスマのヨハネ。これまでに起こされたすべての預言者の中で、ヨハネよりも偉大な預言者はいませんでした。バプテスマのヨハネの宣教のときに、庶民の間でものすごい霊的覚醒が起きていました。どういうわけか、彼らにとってヨハネは魅力的な人物でした。それで、人々は、行ってヨハネからバプテスマを受けていました。ヨハネはどうも一風変わった人だったようです。ヨハネは、らくだの毛で織った物を着ていました。こんなものは着心地が良いはずはありません。腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていました。ですから、苦行者みたいな面白い人で、荒野にいました。エリコからあまり遠くないアイノンの近くのヨルダン川で、バプテスマを授けていました。バプテスマのヨハネの宣教のことを聞いて、たくさんの人がユダヤから出て来ました。庶民の間で、霊的覚醒が起きていました。けれども、宗教的指導者の間では、懐疑主義がはびこっていました。

7節です。「彼は宣べ伝えて言った。『私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値打ちもありません。私はあなたがたに

水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。』(1:7-8) 」ですから、イエスについてのヨハネの預言は、「私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。」です。二つのバプテスマです。ヨハネのバプテスマ。罪が赦されるための悔い改めのバプテスマです。バプテスマを授けていたのは、ヨハネでした。人々がバプテスマを受けたのは、水が要素でした。ヨハネは、「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値打ちもありません。…その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。(1:7-8)」と言いました。ですから、二つ目のバプテスマは、聖霊によるバプテスマです。これは、力のバプテスマです。イエスは、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、…わたしの証人となります。(使徒1:8) 」と言われました。イエスがバプテスマを授ける方であることに注目して下さい。この方があなたがたにバプテスマをお授けになります。イエスによってバプテスマを受けるときには、聖霊が要素でした。水のバプテスマ、これは水に浸かる考えですが、それと同様に、イエスが私たちに聖霊によってバプテスマを授けて下さるとき、私たちに聖霊に浸らせて下さいます。

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来られ、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお授けになった。(1:9) 」この時、イエスは、およそ30歳ぐらいであったと考えられています。イエスは、ナザレで世に知られず暮らしておられました。ナザレで育ち、ヨセフの職業と同じ職業に就き、大工としての仕事を学び、おそらく、くびきや鋤を製作しておられたと考えられます。今日大工というと、私たちは家を造ることを考えます。それは、家が木の枠組みだからです。しかし、当時実は家は石でできていました。ですから、大工は、家を建てるより、くびきや鋤、おそらくは家具をつくるが多かったのです。イエスは、世に知られず暮らしておられましたが、安息日には会堂へ行き、聖書を読まれたことにちがひありません。さて、ここでガリラヤのナザレから来られたことがわかります。ナタナエルが、「ナザレから何の良いいものが出るだろう。(ヨハネ 1:46) 」と言ったように、ナザレは評判のよくない町でした。ガ

リラヤは、エルサレムの宗教指導者たちからはさげすまれていました。軽蔑的な言い方で、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれていました。

「イエスは、…ヨハネからヨルダン川でバプテスマをお受けになった。そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて、御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。そして、天から声がした。『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。』(1:9-11)」ですから、三位一体を見つけることができます。イエスがヨハネによってバプテスマを受けられ、聖霊がイエスにくだり、父の声が天から、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」とお語りになりました。ジーザス・オンリーと呼ばれるグループがありますが、彼らはイエスしかいないと主張します。イエスが父であり、子であり、聖霊であると。しかし、この人たちも、聖書の箇所を困難をきたしています。多くの人が三位一体についてひっかかると感じるのは、これが奥義だからです。神の奥義は偉大です。神が肉において現れました。これは奥義なのです。私たちは、人間的な次元で三位一体のたとえを用いることも、それに等しいものを持つことも本当には何も持つことはできません。従って、神の三位一体を理解するのは困難です。父・子・聖霊が神の人格ですが、ひとつの神であり、三つの人格において現れているのです。人間の頭では神の真理を理解するのが困難なため、これを単純にしようとする人たちがいます。例えば、エホバの証人などは、エホバだけを認めて、イエスが神である事を否定し、聖霊が神である事を否定します。ジーザス・オンリーは、イエスだけに集中して、この方が父であり、子である、と言いますが、ちょっとジーザス・オンリーの言うことを考えてみて下さい。イエスがバプテスマをお受けになった時、ご自分が天に昇られて、天から声をかけて、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と告げたのですから、この方は腹話術師だということになります。やはり、これは奥義としておく方がよいのです。それをそのまま信じていますが、理解はできません。やはり理解できません。でも信じてはいるのです。ひとりの神がおられて、父・子・聖霊の三つの人格において現れておられるのです。私には理解できませんが、理解する必要もないのです。私はただ信じればよいのです。

「そしてすぐ、御霊はイエスを荒野に追いやられた。イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。(1:12,13)」面白いですね。宣教の初めに、イエスがこの宣教のために初めに御霊によって力をお受けになってから聖霊がこの方にくださったときに最初に起きたことは、イエスが御霊によって荒野に追いやられたことで、これは、試みの時、誘惑の時、闇の力との対立の時でした。四十日間荒野において霊の戦いが展開していたこの時に、御使いたちが来て、イエスに仕えていました。

「ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。(1:14)」マルコは、13節と14節の間に、イエスの生涯に1年間の空白を設けています。ここには時間の空白があります。この期間に起こったことの一部を(使徒)ヨハネが補足しています。しかし、マルコはイエスの生涯の1年間を飛ばしています。それで、「ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音、あるいはよき知らせを宣べて言われた。『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて、福音を信じなさい。』(1:14,15)」とあります。悔い改めの招きに注目して下さい。バプテスマのヨハネは悔い改めを招きました。イエスは、悔い改めに招かれました。なぜでしょうか。それは、悔い改めの必要があったからです。ヨハネの黙示録では、紀元一世紀の終りに、イエスが教会に対して悔い改めるように招かれています。繰り返し、繰り返し、変わりなさいと悔い改めに招かれました。もしイエスが今日教会に語られたら、もしイエスがヨハネの黙示録において七つの教会に手紙をお書きになったように、今日の私たちに手紙をお書きになるとすれば、欠点、弱点、私たちの落ち度を指摘なさるにちがいありません。そして、私たちの多くに対するイエスのメッセージは、教会が方向転換して、イエスが望んでおられる教会になるための悔い改めのメッセージにちがいありません。

「ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。』すると、すぐに、彼らは網を捨てて置いて従った。また

少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。(1:16-19) 」シモンとアンデレは、湖で網を打っていました。ヤコブとその兄弟ヨハネは、網を繕っていました。「すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った。(1:20)」ですから、イエスは、後に使徒と呼ばれるようになり、教会を監督させ、世界中に福音を宣べ伝えることを任せられた人たちをご自分のまわりに集め始められたのです。その人たちは普通の人たちでした。ガリラヤ湖で漁師をしていた人たちでした。イエスがエルサレムの宗教学校に行かれたのではないことは、興味深いですね。ガマリエルの所へ行って、優等生を探すようなことはなさいませんでした。そうではなく、イエスは、世界中に福音を宣べ伝えることをお任せになるために、ガリラヤ湖のほとりに行かれ、ごく普通の人たち、漁師をお集めになりました。

それから、イエスは、ガリラヤ地方のカペナウムに行かれました。そこは、もちろんイエスが宣教の大半の時間を費やされることになったところです。「そしてすぐに、イエスは安息日に会堂にはいって教えられた。人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。(1:21,22) 」これは、山上の説教が終った所にも書かれていますが、人々はイエスの教え方に驚きました。それは、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからでした(マタイ 7:28-29 参照)。律法学者たちが教える時には、権威ある者のようには何も言いませんでした。「えっと、ラビのハレル先生は、このように解釈されます。ラビのエリジヤ先生は、このように解釈されます。」というような言い方で、いつも誰かラビが言ったことを引用していました。今日もこれにそっくりで、教会に行くと、心理学者の言っていることをいろいろ発見するのです。権威ある者のように神のことばを教えていないのです。さて、山上の説教でイエスは、「…とされていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。(マタイ 5:21、22等) 」と言われ、権威ある者のように教えられました。「…とされていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。」と。それで、人々はイエスの教えの方法に驚きました。それは、イエスが権威ある者のように教えられ

たからでした。それは、人々が以前に聞いたことがないものでした。神のことばが、権威ある者のように教えられる。「神が宣言されているのはこれである。」「神が言われているのはこれである。」と。イエスは、権威ある者のように教えられました。

「すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った(1:23)。『かまわなだけでくれ(新共同訳1:24)。』興味深いですね。「かまわなだけでくれ。」悪者が叫ぶのいつもはこれです。汚れた霊につかれた人が、「かまわなだけでくれ。」と叫びました。一年ちょっと前、この教会でデモがありました。もう数年前のことになりますか、私たちの教会の男性たちが、同性愛者が大半を占める地域に証しをして、聖書を教えるためにウエスト・ハリウッドに行ったからです。そこへ行って証しをしている男性たちに腹を立てた人たちが、この教会に来てデモをしたのです。残念ながらそのとき私はハワイに行っていました。こんなデモがある中に私をここにおいておくよりもその方がよいことを主はご存知でした。(笑)私よりも冷静な息子がその日曜の朝は説教壇に立っていました。しかし、そのときのデモのビデオを何巻か見ましたが、その人たちが「かまわなだけでくれ。」「かまわなだけでくれ。」と叫んでいたのは、興味深いことでした。悪者は対決されるのが嫌いです。かまわれたくないのです。「私たちが間違っていると言わないでくれ。」「私たちが罪を犯していると言わないでくれ。かまわなだけでくれ。」この霊につかれた人が叫んだと同じ言葉です。悪霊が、「かまわなだけでくれ。」と叫んでいるのです。

「ナザレのイエス。いったい私たちに何をしようというのです(1:24)。」この福音書の記録によると、興味深いことに、イエスは、ピリポ・カイザリヤまでは「イエス」と言われているのです。ピリポ・カイザリヤでイエスが弟子たちといっしょにおられる時に、イエスは言われました。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」彼らは答えて言いました。「バプテスマのヨハネだと言う人もいます。あなたは死者からよみがえったのだと。エリヤだと言う人もいます。あなたがエレミヤだと信じている人もいます。また預言者のひとりだと言う人もいます。」「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロは、「あなたは、メシヤ、キリスト、生ける神の子です。」と答えました。(マルコ 8:27-29参照)このとき以降になって

初めて、イエスは、イエス・キリストと言われるようになりました。しかし、この福音書で、ペテロの告白までは、ただイエスとしか言及されていません。ここでは、「ナザレのイエス」と言及されています。マルコの福音書では、イエスを言及するのに「神の子」という言葉が使われているのは、4回です。2回は、悪霊が使っています。そして、大祭司が、「おまえは神の子(リビング・バイブル マルコ 14:61)、メシヤなのか。」と言いました。イエスは、「わたしは、それです。」と肯定してお答えになりました。「ナザレのイエス、かまわないでくれ(新共同訳1:24)。」「いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちに滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です(1:24)」悪霊は、「私はあなたがどなたか知っています。」と言いました。質問は、「あなたは私たちに滅ぼしに来たのでしょうか。」でした。ルカの福音書では、ガダラで男の中に悪霊、レギオンが入っていたケースがあります。この悪霊もイエスのことを認め、アブソス(訳者注:ギリシャ語 abussos。 底知れぬ所)に行け、とはお命じになりませんようにと言いました。それで、覚えていらっしゃるでしょうが、イエスは、山のそのあたりにいた豚の群れに悪霊が入ることをお許しになり、豚がガリラヤ湖へいきなりかけ下って溺れたのです(ルカ8:27-33 参照)。悪霊はイエスが自分達に対し権威を持っているを認めていました。「わたしには天においても、地においてもいっさいの権威が与えられています(マタイ 28:18)。」とイエスは言われました。地におられるときさえ、イエスは汚れた霊に対して権威をお持ちでした。汚れた霊は、それを認めました。理解していました。ここで尋ねています。「あなたは私たちに滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」「イエスは、彼を、」つまり汚れた霊を「しかって、『黙れ。この人から出て行け。』と言われた。すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。『これはどうだ。新しい教えではないか。』(1:25-27 参照) 」イエスは、権威ある者のように教えられただけではありません。権威を持って汚れた霊にお命じになると汚れた霊でさえイエスに従ったのです。このため、人々の間で大きな騒ぎになりました。人々は、イエスが権威ある者のように教えられたことに驚き、権威を持って汚れた霊を取り扱われたことに驚きました。いったいこの権威はどうだ、この人は誰だ、汚れた霊に命令し、汚れた

霊が従うとは、と。「こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。
(1:28)」

「それから、会堂を出るとすぐに(1:29)」、その日は安息日でしたが、「ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家にはいられた。(1:29)」すぐにというのは、会堂のすぐそばという意味です。ですから、シモン・ペテロの家は、カペナウムの会堂のすぐ近くにあったと考えられていました。このため、今日カペナウムにある会堂に行くと、－ その会堂はイエスの時代の会堂の廃墟の上に紀元2世紀に建てられた会堂ですが、－ その会堂から出てすぐの所に空飛ぶ円盤のように見えるものが、いわゆるペテロの家と呼ばれているところの上に建てられています。ここに建てられている教会はかなり新しいもので、ここ数年のうちに建てられたのです。かつては、ここに行っても、この現代風のスタイルの教会はありませんでした。ある家に「シモン・ペテロの家」の標識がかかっていましたが、今はこの教会がその上に建てられました。これが本物かどうか、かなりあやしげですが、シモン・ペテロの家が会堂の近くにあったというのは明らかかなようです。ですから、イスラエルの人たちは、「私たちは、その場所の近くにいます。この辺りのどこかで起こったはずですが。けれども、建っている教会が『パンと魚の教会(churches of the loaves and fishes)』と呼ばれているのに、あまり振り回されてはいけません。」とよく言います。というのは、面白いことに、「パンと魚の教会」は、マグダラに建てられていますし、パンと魚の奇跡は、湖の向こう側のベツサイダで起こったのです。ヨルダン川に橋がかけられるまでは向こう側に行くのは大変でしたので、そのマグダラに教会を建てて、「パンと魚の教会」だとする方が簡単です。本当にわかっている人はあまりいないでしょう。

彼らは会堂を出て、その近くのシモン・ペテロの家にはいりました。ところが、シモンのしゅうとめ・・・、ということはシモンは結婚していたのです。シモン・ペテロが結婚していて、アンデレ、ヤコブ、ヨハネもみな結婚していたことは疑いの余地はないのですが、私がおもしろいと思うのは、福音書の記録にも、新約聖書にも使徒の家族、妻子などについて何の言及もされていないことです。使徒たちが所帯持ちであったことを教えてくれるのは、これだけで

す。「ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床に着いていたので、人々はさっそく彼女のこ
とをイエスに知らせた。イエスは、彼女に近寄り、その手を取って起こされた。すると熱がひ
き、彼女は彼らをもてなした。(1:30-31) 」おそらく彼女は人々に昼食を用意したのでしょ
う。

「夕方になった。日が沈むと(1:32)・・・」午後には人々はあまり何もしません。暑すぎるの
です。夕方になって日が沈んだ後に涼しくなってくるので、そのときに人々が外出を始めま
す。「人々は病人や悪霊につかれた者をみな、イエスのもとに連れて来た。こうして町中の
者が戸口に集まって来た。(1:32-33) 」おそらく、ペテロの家の戸口だったのでしょう。「イエ
スは、さまざまの病気にかかっている多くの人をお直しになり、また多くの悪霊を追い出さ
れた。そして悪霊どもがものを言うのをお許しにならなかった。彼らがイエスをよく知ってい
たからである。(1:34)」イエスはまだ、ご自分がメシヤであることを、公に知らされて認めら
れることを望まれませんでした。イエスは、神の定めた時を強く意識しておられました。イエ
スは、ご自身がメシヤとして示される時があることをご存知でした。ですから、その時の前
には、できる限りそのことを現さないようにされていました。ですから、ここで悪霊、悪魔がも
のを言うのをお許しにならなかったのです。彼らがイエスをよく知っていたからです。それは、
会堂の中で悪霊が、「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。(1:24)」と言っ
た場面でよく示されています。

「朝早く(1:35)」・・・いろいろあった日でした。会堂にも行き、権威ある者のように教え、汚
れた霊につかれた人が救われ、ペテロの家に行き彼のしゅうとめを癒し、夕方には群衆、
大勢の群衆、たぶん町中からの者がペテロの家の戸口に集まりました。人々は、病人、悪
霊につかれた者を連れて来ていました。そしておそらくイエスは、夜遅くまでこれらの人々
に仕えておられたのでしょう。私たちの時間の割り振りですと、「じゃあ、明日は遅くまで寝
よう。今日は、いろいろあったから。」と言うことになるのですが、このように書かれています。
「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。
(1:35)」いろいろな事が動き、起こり始めていました。人々がイエスの御力を認め始めてい

ました。イエスの宣教が発進しはじめていたのです。イエスは、父と時間を過ごす必要があることがわかっておられました。それで、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈られました。「シモンとその仲間、イエスを追って来て、彼を見つけ、『みんながあなたを捜しております。』』と言った。(1:36-37)」「群衆が来ています。人々は、あなたのことを捜しています。」と。「イエスは、彼らに言われた。『さあ、近くの別の村里へ行こう。そこにも福音を知らせよう。わたしは、そのために出て来たのだから。(1:38)』カペナウムに戻って教会を建てることは、いつでもできたのです。しかし、イエスは、未知の地域に前進しようと言われました。その人にも福音を知らせる必要がある、と。「こうしてイエスは、ガリラヤ全地にわたり、その会堂に行き、悪霊を追い出された(訳者注:1:39には「福音を告げ知らせ」の箇所は英語にはない)。」」ここでも、悪霊の世界に対して力を持っておられることを現し、示されました。

「さて、ひとりのらい病人が、イエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。『お心一つで、私はきよくしていただけます。』(1:40)」これは、信仰を表明したものです。「私はきよくしていただけます。(1:40)」は、イエスの持つておられた力と権威を認めているのです。「あなたは私をきよくすることがおできになるのです。」この人は、主のお心だけが関心事でした。「お心一つで」、もしあなたの御心ならば、「私はきよくしていただけます。」私たちも、多くの場合、主のお心が関心事になります。この場合、主が何かを行なわれる力について、私たちの信仰が欠けているというわけではありません。主がおできになることは分かっています。私たちの質問は、それが主のお心であるかどうかです。これは、いつも私たちにわかることではありません。このため、私たちが祈る時、私たちの願うようではなく、あなたのみこころのようになさってください、と言うのです。主よ、お心一つで、私はきよくしていただけます、と。らい病人がイエスのところに来たことに注目して下さい。イエスの前にひざまずきました。律法によると、この人はイエスに近づくべきではありませんでした。律法によると、もしイエスが近づいて来たのであれば、「汚れている。」と叫ばなければならなかったのです。しかし、この男は必死でした。今朝のメッセージで、らい病、特に聖書の言うらい病につ

いて話しました。モーセの律法の中のらい病のことです。もし、今朝いなかった人は、今朝のメッセージ・テープを入手してください。らい病の詳細の一部は繰り返さないからです。ただ、当時らい病は完治不可能だと言うにとどめておきます。今日も依然としてらい病は完治不可能ですが、抑えることはできます。体の中での進行を停止させることはできます。ですから、今日らい病の人は、ほぼ通常の生活をすることができます。しかし、当時はそうではありませんでした。硫黄剤も何もありませんでした。ですから、らい病は進行する病気なので、神経を殺し、感覚を破壊しました。らい病の人は、らい病が神経を攻撃してその細胞が破壊されたところは、痛みの感覚や意識がありませんでした。それは、らい病が非常に危険な点ですが、例えば、らい病の人が手を熱いコンロの上に置いても、熱を感じないので、ひどい火傷になることがあります。らい病の人の主な問題は痛みの感覚がないことで、怪我をしても気が付かないことです。切り傷があるのに気がつかず、出血多量で死んでしまいます。また、手がひどく焼けて、火傷を負ってしまって、敗血症になってしまうのです。ですから、通常らい病で死ぬのではなく、らい病に関連して他の要因によって死んでしまいました。らい病の人には、希望がありませんでした。従って、必死でした。「イエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。『お心一つで、私はきよくしていただけます。』(1:40)」そして、こう書かれています。「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって…(1:41)。」今日指摘したように、らい病の病気は、その性質から、罪の型として用いられます。人間の基準では完治不可能で、腐敗により破壊し、進行性の性質を持つので、罪の型なのです。罪は破壊する効果があります。罪には進行性の側面があります。イエスは、深くあわれみました。らい病の人を見て、腐敗した肉からの悪臭を嗅ぐのは、普通ひどく気持ち悪くなります。ダミアン神父がモロカイにあるらい病者の居留地に行ったときの一番の問題は、ひどい悪臭でした。家の中に入ると、彼は、本当に、肉体的に気分が悪くなって、悪臭のために吐きました。家に入ることは、本当に大変でした。あまりに気持ち悪くさせるような臭いなので、吐きそうになります。私たちが、らい病者を見て、らい病の進行しているのを見て、例えば手あるいは腕の一部がなくなっているのを見れば、気持ち悪くすると思いますが、イエスは御覧になると、深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわったのです。らい病者に

触れることは、律法に反することでした。儀式的には、さわった本人も汚れてしまいます。「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。『わたしの心だ。きよくなれ。』』というところを読むと、イエスが渡されて十字架につけられる前の日の夜に、ピリポに言われたみことばのことを考えてしまいます。ピリポがイエスに、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と言ったとき、イエスは、『ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。』とお答えになりました(ヨハネ 14:8-9 参照)。気持ち悪くなるような状況にいてこの男を取り扱われたイエスを見ましょう。イエスは、深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって、「わたしの心だ。きよくなれ。」と告げられました。ここに父を見るのです。私たちの状況を深くあわれんでくださり、手を伸ばして、さわって下さり、そう、お心によって癒されるのです。「主よ、お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは、「わたしの心だ。」とおっしゃいました。「きよくしよう。」と。イエスが、今日私たちを助けて下さることがおできになるだけでなく、「わたしの心だ」と思っておられるのを知っておくとよいでしょう。

さて、霊的な観点から見て、らい病を罪の型と見るとき、神は、どんな罪を犯したのであっても、すべての人を赦すお心があることがわかります。神は、「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2 ペテロ3:9)」ですから、決して疑わなくてもよいことが一つあるのです。それは、神があなたを救い、罪を赦すお心があるということです。これは、決して問題になることではなく、疑うことではありません。神がそのようなお心であることを確信できるのです。手を伸ばしてさわって下さり、あなたを破壊しているもの、基本的にはあなたの罪ですが、これを打ち壊して下さるお心をお持ちです。罪はらい病のように破壊的です。罪の犠牲者を破壊します。罪はあなたを破壊しています。しかし、イエスのお心は、手を伸ばして、さわって下さることです。それは、あなたの状況を深くあわれんで下さっているからです。私はこの話が大好きです。新約聖書のなかのどの箇所でも、イエスが深くあわれんで下さるところが大好きです。イエスは、人間の必要を見ると、いつも深くあわれんで下さいました。私の自分の必要をよく認識していますので、イエ

スが私の必要を御覧になるとあわれんで下さるのを知ることは、私にとって慰めです。私が深くあわれむことがあります、残念なことに私にはそれについて何もする力がないのです。子供病院に行き、小さい子供たちがベッドにいるのを見て、(体が)変形している子供たちを見て、この体の状態を見ますと、私は子供たちのことを深くあわれみます。私の心は子供たちを深くあわれみます。しかし、残念なことに私にはそれについて何もする力がないのです。「ああ、主よ。この小さい子のところに行って、手を取り、イエスの御名によっていやされよ、と言う力があればどんなにうれしいことでしょう。」とよく思いました。しかし、そのような力は私にはありません。そのような力がないことを神のせいだと言っているのではありません。おそらく、私の中の何かのせいでしょう。しかし、すばらしいのは、神が深くあわれんで下さると、それについて何かする力があるということです。それについて何かする能力をお持ちです。ですから、「きよくなれ。」とおっしゃると、「すると、すぐに、そのらい病が消えて、その人はきよくなった。(1:42)」その人が、だんだんよくなったのではないのです。医者が、「どうやら、誤診だったようだ。」と言ったのではないのです。「私はらい病だと思っていたのだが、診断が間違っていたようだ。私はだいじょうぶだ。」と言ったのではないのです。「すぐに」だったのです。白く腐った肉が元どおりになって(訳者注:英語ではピンク色になったと言われていますが、この色は白人の場合なので、「元どおり」としていません。)健やかで強くなったのです。すぐに、そのらい病が消えたのです。そして、その人はきよくなったのです。

イエスは、彼をきびしく戒め、「気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々へのあかしのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめの供え物をしなさい。(1:44)」と言われました。レビ記14章を開いて下さい。そこに、らい病人がきよめられるときのおしえについての興味深い聖書の箇所があります。レビ記14章1節です。「ついで主はモーセに告げて仰せられた。『らい病人がきよめられるときのおしえは次のとおりでなければならない。その者を祭司のところ連れて来る。祭司は宿営の外に出て行き、調べて、もしらい病人のらい病の患部がいやされているなら、祭司はそのきよめられる者のために、二羽の生きているきよい小鳥と、杉の木と緋色の燃

り糸とヒソプといっしょに取り、湧き水の上でほふった小鳥の血の中に、その生きている小鳥といっしょにそれらを浸す。それを、らい病からきよめられる者の上に七たび振りかけて、その者をきよいと宣言し、さらにその生きている小鳥を野に放す。きよめられる者は、自分の衣服を洗い、その毛をみなそり落とし、水を浴びる。その者はきよい。そうして後、彼は宿営にはいることができる。しかし七日間は、自分の天幕の外にとどまる。七日目になって、彼はすべての毛、その髪の毛と口ひげとまゆ毛をそり落とす。そのすべての毛をそり落とし、自分の衣服を洗い、水そのからだに浴びる。その者はきよい。八日目に彼は、傷のない雄の子羊二頭と傷のない一歳の雌の子羊一頭を取り・・・(レビ14:1-10) 」と、らい病人がきよめられるときのおしえが続きます。しかし、それでもらい病は完治不可能だったのです。今日でも完治方法がないのと同じで、らい病の完治方法はありませんでした。ただ進行を抑えるだけです。しかし、その当時進行を抑えることさえできませんでした。では、神は、らい病の完治方法がないのに、なぜらい病人を共同体に受け入れる律法をつくられたのでしょうか。らい病人が癒されることができたのは、ただ神の癒し、お働きしかありませんでした。ですから、神は、みこころよって神の恵みの働きが行なわれることを、律法の中に設けられました。神の恵みの働きがもたらされた人は、社会に、人間の共同体に戻ることができました。私にとっては、これは幸いなことです。神は、律法の中にも、恵みが、神の恵みがらい病人に働くように備えをされました。ですから、イエスは、この人に、「行って、モーセの律法に従い、自分を祭司に見せ、モーセが命じた物をきよめの供え物としなさい。」と命じられたのです。「そして、だれにも言わないように。これは、わたしとあなたの間だけのことだから。」と言われました。

「ところが、彼は出て行って、この出来事をふれ回り、言い広め始めた。(1:45)」この男のことは非難できませんよね。自分の人生がむちゃくちゃななって、自分の人生はもうおしまいになって、自分の人生は破壊されて、ひどいらい病によって、村八分となり、希望がなかったのが、突如、元気になったのです！人々は、「どうなったんだ。」と言うでしょう。そうしたら、言わざるを得ません。言いたいですよ。「すごいだろ。イエスがきよくしてくれたん

だ。」と。「イエスは、おことばを下さっただけなんだ。そしたら、すぐに白い腐った肉が変わって、僕はイエスのおことばで良くなったんだ。」とみんなに言いたいでしょう。自分の人生で主の働きを経験した結果がそれです。それで、キリストのあかしをするのです。同じことです。それは、主があなたにしてくださったからです。ダビデが言ったように、「私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。(詩篇40:2)」のです。沈みそうになっているときに、下に行きそうになっているときに、泥沼に沈みそうになっているときに、突然イエスが引き上げて下さるのです。突然新しいのちが与えられるのです。あなたを引きずり下ろし、破壊していたものがなくなりました。主と交わることができ、主との交わりの喜びを持つことができれば、それを他の人みんなに伝えたいのです。別に講座を受講してどうあかしすればいいか学ぶ必要はありませんね。イエス・キリストの力によって解放された人の心にある当然の願いです。主が私にしてくださったことを伝えたいという願いです。基本的に、証とはこのことです。主があなたにしてくださったことを伝えることです。この人は、出て行って、この出来事をふれ回り、言い広め始めました。会う人みんなに話したのです。

そのためイエスは表立って村にはいることができず、町外れの寂しい所に行かれましたが、そこに人々はあらゆる所から、あらゆる村からイエスの所にやってきました。ですからイエスは、町外れの寂しい所でお過ごしになり、ご自分から村にはいるのではなく、人々がご自分のところに来ることができるようになさいました。それは、奇跡、癒し、悪霊に対する、らい病に対する、様々な病気に対する力によって広められた評判のためでした。父を、父のお心を、父の願いを人々に現されたからです。「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ 14:9)」ですから、今晚私たちはどのような興味深い父の側面を垣間見ることができるのでしょうか。父は私たちを深いあわれみをもって見て下さる方です。手を伸ばし私たちに触れて下さる方です。そして、私たちが破壊するものから救って下さる方です。私たちが仕えている神は何とすばらしい方でしょう。

マルコの福音書2章(Mark2)(#8030)

マルコの福音書2章と3章のはじめに、マルコは、キリストの生涯からちょっとした幾つかの挿話を入れています。その一つ一つの場面で、イエスと当時の宗教指導者たちの間に敵意が起こり始めたことを、マルコは私たちに示そうとしています。当時の宗教指導者たちがイエスのあらさがしを始めているのがわかります。イエスを注意深く観察したり、批判したり、イエスを告発する理由や方法を探し始めました。それが、3章6節で最高点に達しています。そこには、こう書いてあります。「そこでパリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどうして葬り去ろうかと相談を始めた。(3:6)」ですから、ここでイエスに対する批判と憎しみが増し加わるのを見ます。批判的な気持ちを持つのは良くありません。いったん批判的な気持ちをいだと、何に対しても、すべてに対して欠点を見つけることができるようになってしまいます。人をさばく立場に立ってしまうのは、悲しいことです。他人の行動や活動、考え、意図、動機をさばく権利があるものだと思ってしまう。これが、個人にも、実際教会にも起こりえることを私は見つけました。批判的な気持ちを持って牧師のあらさがしを始め、いったん教会が牧師の欠点を見つけてその牧師を追い出してしまうと、どんな牧師が来てくれても欠点が見えるようになってしまいます。前任の牧師に欠点が見つかってその牧師を追い出した教会の牧会には、私は決して行きません。それは、私の欠点を見つけて、私が追い出されるのは時間の問題だからです。もしそのような型にはまっているなら、それは悲劇です。色眼鏡で物を見てしまうようになるからです。常に、分析的な批判的な頭で何が間違っているのかを探し、欠点を見つけながら物を見ているからです。これが、宗教指導者たちのものの考え方になっていました。イエスがなさることのどれに対してもあらをさがすのです。すべてのことについて挑み、疑問を挟みます。そのため、2章でそれぞれの短い場面(vignette)で、宗教指導者たちによるあらさがしや批判を見いだします。イエスがカペナウムに戻ってこられるとそれが始まります。

さて、1章の終りで、イエスはらい病人をいやされ、この人は、イエスが何をして下さったかをみんなに言い広め、イエスの評判があまりに大きく広まりました。そのため、イエスもはや表立って町の中に入ることができなくなり、町はずれの寂しい所に滞在しなくてはなくなり、人々がイエスの所に来ていました。しかし、イエスは、カペナウムの町にこっそり戻ってこられました。すると、「家におられることが知れ渡った。(2:1)」イエスは気付かれずに来ることはできず、誰かが見ていたのです。ほどなく町の人すべてが、イエスがカペナウムの家におられることを知るようになりました。この家はおそらくペテロの家だったのでしょう。「それで多くの人が集まったため、戸口のところまですきまもないほどになった。この人たちに、イエスはみことばを話しておられた。(2:2)」そこで、イエスがそこにおられるという噂が広まると、すぐに人々が家にぎっしりと詰め掛けました。その当時、生活にはあまりプライバシーがありませんでした。戸が開いていれば、誰が入ってきてもよいという招きのしるしでした。けれども、人々はいつも戸を開きっ放しにしていました。もてなしをすることが非常に大切にされていました。聖書の中にも、このもてなしの大切さを見ることができます。今日でも、ベドウィン部族の間で、それを見ることができます。もてなしの大切さ、旅人を歓待することはずいぶん昔にさかのぼるのです。聖書は、このようなもてなしをするようにさえ勧めています。「旅人をもてなすことに注意するように。知らないで御使いたちをもてなしているかも知れないから。(ヘブル 13:2 参照)」と。御使いをもてなしたアブラハムのようです。そういった考えです。わからないかも知れません。ひょっとすると神の使いかもしれません。それで、戸は開けたままだったので、ほどなく家は人でいっぱいになりました。余りに人が多く集まったので、家に入ろうと戸口のところまで隙間もないほどになりました。そして、イエスはこの人々にみことばを話しておられました。

そのとき、イエスのところに四人の人が中風の友人を担架に乗せて来ました。群衆のためにイエスに近づくことができないと、この人たちはとても工夫するのが上手で、屋根に登り、屋根の一部をはがし、友人をイエスがおられる前につり降ろしました。この人たちが屋根をひっぺがしている騒ぎや騒音を聞き、この人が担架に乗せられてゆっくりとイエスの前

につり降ろされるのを群衆は見ていましたが、どのような反応だったか想像することができません。おそらく、イエスは、クスクスお笑いになったのではないかと思うのです。この男が自分の目の前につり降ろされるのを見てクスクスお笑いになっているイエスが目に浮かんできます。「イエスは彼らの信仰をみて、中風の人に、『子よ。あなたの罪は赦されました。』と言われた。(2:5)」注釈者の中には、この人の中風が梅毒に関連したものではないかと言う人もいます。というのも、その当時はペニシリンの薬はありませんでしたので、梅毒の完治方法はなく、もちろん進行性の病気でしたから、脳をやられ、究極的には中風や失明をきたしたのです。このため、中風とこの男の状況を関連させているのです。人の罪と身体の状態につながりがあることがよくあります。もし、酒を飲みすぎると、ついには肝硬変になります。肝臓がもはや、ろ過や浄化ができなくなり、破壊されて、肝硬変になります。多くの場合、人の罪と身体の状態には直接関係があります。イエスは、そのような関係がこの人にもあると思われるようです。

しかし、「子よ。あなたの罪は赦されました。(2:5)」と言われたとき、この人を連れてきた四人の人は、まだ自分達が屋根にあけた穴のところに立っていたでしょう。「いや、いや。主よ。私たちがこの人を連れてきたのはそういう理由からではありません。」と言いたかったはずです。間違っただけで主のところに来る人がよくいます。特権や利益のために主のところに来る人がよくいます。体のいやしに関心があるのですが、必ずしも罪の赦しには関心がないのです。私たちが人のために祈るとき、基本的な問題、その人の罪についてはあまり祈りません。私たちはとにかく、症状を神になんとかしてもらおうように祈ります。例えば、友人でアルコール中毒になりそうになっている人がいるとして、「神よ。彼が飲むのをやめるようにして下さい。飲むたびに気分が悪くなるようにして下さい。主よ、飲むのをやめるように助けて下さい。」と祈るのです。ひょっとすると、その人は飲むのを止めるかもしれませんが、そして、しらふの状態です。しかし、しらふの罪人です。それで、ほんとうにその人を助けたことになるのでしょうか。本当の問題は罪です。イエスは、一番の問題を先ず最初に取り扱っておられるのです。人の人生における最大の必要は、罪が

赦されることです。中風が治るより、罪が赦されることのほうが大切です。イエスは、基本的な問題をまず取り扱われました。「子よ。あなたの罪は赦されました。(2:5) 」

この人の友人が気を悪くしたかもしれませんが、友人よりもパリサイ人のほうがもっと気を悪くしました。というのは、そこに座っていた律法学者は心の中で理屈を言っていたからです。「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。(2:6) 」イエスが神をけがしていると非難しています。ここから(批判が)始まっているのです。イエスが、「子よ。あなたの罪は赦されました。(2:5) 」と宣言されたことに対する彼らの反応は、「神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。(2:6) 」というものでした。さて、彼らは半分は正しいのです。「神をけがしているのだ。」と彼らが思ったことは間違っていますが、「神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」という想定は正しかったのです。罪は神の律法を違反することです。従って、罪は神に違反することです。そして、神のみが罪を赦すことができになります。ダビデは、友人の預言者ナタンに罪を指摘された後に、「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私の背きの罪をぬぐい去って下さい。(詩篇51:1)」と祈りましたが、「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。(詩篇51:4)」と言いました。ダビデはバテ・シェバと姦淫を犯した時、神に対して罪を犯しました。それは、神が、「あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。(申命5:21)」と言われたからです。ダビデは、ウリヤを殺させた時、神に対して罪を犯しました。それは、神が、「殺してはならない。(申命5:17)」と言われたからです。ですから、ダビデは、神に対し、「私はあなたに、罪を犯した」と認めています。罪が神に対する罪なのであれば、神のみが罪を赦すことができになるのです。

さて、あなたが言って嘘をついたという意味で、私に対して罪を犯すかもしれません。みなさんはなさらないでしょうが、他の人が私について嘘をついたとします。これまでに何人かいました。その嘘で、私の評判に影響が出るかもしれません。何年か前にジョン・トッドという名の人が出て、それ以来ずっと彼は雲隠れしていますが、全米を回って途方もないほら

をふき回りました。とてつもない哲学を語ればみんな信じるだろうということなのか、自分は魔女の世界の親玉だとかなんとか、ものすごく乱暴な話を本当にしていました。彼が、このカルバリー・チャペルに来て、マラナサ・ミュージック設立のために私に700万ドルを与え、それは、ロックのような音楽で、若いクリスチャンの人たちを腐敗させるためだったという話しだったのです。全米の多くの人たちが、彼の言うことを聞いていました。彼は主にバプテストの教会を回って、自分の説を話していました。実際何が起こったかと言いますと、私のテープを買っていた人たちの多くが購入をキャンセルしてきました。それは、ジョン・トッドのテープを聞いて、おや、この男はとても卑劣な人間だ、聖書を教えるが、この男は魔女の世界の協会に買収され利用されているんだという理由からでした。彼は、私のところに来ませんでした。もし来て、「チャック、私はいろいろ嘘をついた。申し訳なかった。赦してくれますか。」と言ったのであれば、聖書にのっとって、私は「ええ、赦します。」と言わざるをえなかったはず。しかし、罪によって、私の評判や一部の人に影響が出たかもしれませんが、彼の本当の罪は神に対する罪でした。私が赦すと言っても、彼に神からの赦しがもたらされるわけではありません。彼は、神に対して罪の赦しを乞わなければなりません。彼は、神に対して罪を犯したからです。「あなたの兄弟に対し、偽りの証言をしてはならない。(申命6:20参照)」と言われたのは神だからです。ですから、すべての罪が神に対する罪であるように、彼の罪も基本的に神に対する罪でした。ですから、本当に赦すことができるのは神です。私が赦すと言っても、あまり役には立ちません。神のところに行って、この問題について神と取り組まなければなりません。ですから、ここでの、「神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」という想定は正しいのです。

しかし、「神をけがしているのだ。」という想定は正しくありませんでした。担架の上で中風でふせっている男について言えば、イエスが、「子よ。あなたの罪は赦されました。(2:5)」と言われたとき、この人はとてもほっとしたと思います。大きな重荷が取り去られたと思います。この人の心は喜びではちきれそうだったと思います。なぜかといいますと、預言者がダビデに、「あなたの罪は赦された。(サムエル第二12:13参照)」と言った時、ダビデは、「幸

いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。(詩篇32:1)」と書きました。自分の罪が赦されたことがわかるのは何という喜びであり、ほっとすることでしょうか。自分の良心を悩ませてきたものが赦されました。そして、もし中風が不倫と関係していて梅毒が移ったのであれば、この病気が進行しているのを見ながら、結果的にとうとう中風になってしまい、来る日も来る日も床にふせて、このような災いを自分の人生にもたらした経験の事で、さいなまれていたことでしょうか。この人が頭の中で、「なぜこんなことをしてしまったのだろう。なんて、ばかだったのだろう。」と、繰り返し、繰り返し言ったのがわかりますか。自分の愚かさの結果を見て、この人は、罪責感で自分を殺さんばかりになっていたでしょう。先週、(山の)上のキャンプ場で中学生に話をしましたが、愚かさについて、たとえ一回であっても冒険して罪を犯すことについて、警告しようとしてました。たった一回の瞬時の愚かさが、一生ひきずるような結果をもたらすことがあるのです。たった一回のことです、ただ一度の愚かな決断、1秒にも満たない瞬時に行なわれた決断が、一生に影響を及ぼし得るのです。私が高校生の時、サンタ・アナのノース・ブロードウェイに住んでいましたが、そのとき若者が隣に住んでいました。その若者は運転免許を取得したばかりでした。そして、ここオレンジ郡の中を運転していました。前に遅い車がいたので、丁度カーブのところでは追い越しをすることにしました。車線から出て、どうしようか、追い越すべきか、やめるべきか、その時に、ええい、いっちゃえというときに、エンジンをふかしカーブを曲がり始めたところで、そのカーブに対向車が来ました。正面衝突です。この若者は脊髄を損傷し、首から下が麻痺状態になりました。愚かなたった一瞬のことが、生涯に影響を及ぼしました。そのような事が起こると、繰り返し、繰り返し、その体験を思い起こし、「なぜあんなことをしてしまったのだろう。」と言って、精神的にやられてしまいます。愚かなたった一瞬のことが、一生涯の悲しみになります。ここに、自分の罪意識のために、感情的にも霊的にも打ちひしがれた人がいます。イエスはあわれみとやさしさの目でその人を見て、「子よ。あなたの罪は赦されました。(2:5)」と言われるのです。何とほっとすることでしょう。罪の責めはもうなくなりました。しかし、律法学者は、「神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。(2:6)」と考えていました。

イエスは、彼らの考えに注目され、言われました。「なぜ、あなたがたは心の中でそんな理屈を言っているのか。(2:8) 」イエスが彼らの心の中にどのような考えがよぎっていたかご存じでした。ヨハネは、「人についてだれの証言も必要とされなかったからである。(ヨハネ 2:25) 」と言いました。イエスは、人をご存じでした。人の内にあるものを知っておられました。人が何を考えているかご存じでした。そして、イエスは、言われました。「中風の人に、『あなたの罪は赦された。』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け。』と言うのと、どちらがやさしいか。(2:9) 」明らかに、「あなたの罪は赦された。」と言う方が簡単です。それは、あなたが権威を持つ者として言ったかどうか証明することも反証を挙げることもできないからです。罪が赦されたとき、この言葉が力と権威を持って語られたかどうか示すものは、目ではすぐに何も見えません。日曜学校で、かつて黒い心が白い心になるのを見ました(訳者注:おそらくは色画用紙をハートの形かなにかに切ったのだと思います。)
「赤になると、それはイエス様の血で、白に変わる。」と言ったものでした。すばらしいものでした。それを見ることができました。でも、本当は見ることができませんでした。罪が赦された時の人の心の変化を見ることは本当はできません。ですから、食わせ者だって、あちこち行って、ただ、「あなたの罪は赦された。」、「あなたの罪は赦された。」、「あなたの罪は赦された。」、と言うことができます。その人が食わせ者だと、どうすれば証明できますか。見ることができませんね。しかし、もし足なえの人に、「起きて、寝床をたたんで歩け。」と言うのであれば、その言葉に力と権威があるかどうかすぐにはっきりします。少しはもがいたとしても、依然として床にふせったままで起き上がらないのであれば、「この人の言葉には力も権威もない。」と言うでしょう。しかし、その一方、その人が起き上がり、床あるいは担架を取り上げ、歩いて出て行くのであれば、この人の言葉には権威と力がある目に見える証拠が目前にあります。それで、イエスは言われました。「中風の人に、『あなたの罪は赦された。』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け。』と言うのと、どちらがやさしいか。(2:9) 」

そして、次が全体の鍵なのですが、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。(2:10) 」イエスは、ご自分のことばには力と権威があることを

証明しておられるのです。「私はより難しい方を行なおう。」イエスは、その男の方を向いて言われました。「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、歩きなさい。(2:11参照)」すると彼は起き上がり、すぐに床を取り上げて、歩きました。それでみなの方がすっかり驚いて、「わあ。こういうことは、かつて見たことがない。新しいことだ。」と言いました。マルコの福音書の中で、イエスがメシヤの称号である「人の子」をお使いになられたのは、これが初めてのことでした。イエスは、もう何回かこれをお使いになります。ご自分のことを「人の子」と言及されています。ダニエル書7章13節に戻ると、ダニエルが夜の幻について話している時に、「見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」と言いました。ですから、ダニエル書の「人の子」の称号は、メシヤと、この方が国をお受けになることを言っています。従って、メシヤの用語、あるいは称号の一つが「人の子」でした。ですから、イエスはご自身が罪を赦す力があることを証明するために、この称号が使われています。床を取り上げて出て行く男が、イエスが力をお持ちになっている証拠です。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。(2:10)」イエスは、神の大権を主張されているのです。イエスは、ご自分が神であると言われているのです。「神おひとりが罪を赦すことができになります。わたし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」そして、イエスは、その男に、床を取り上げて、歩くようにお命じになり、ご自分の罪を赦す力を証明されました。「人の子」は、2章で再び使われます。28節です。「人の子は安息日にも主です。」8章31節です。「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」マルコ8章38節です。「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」マルコ9章9節です。「さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはな

らない、と特に命じられた。」9章12節です。「イエスは言われた。『エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。』」9章31節です。「それは、イエスは弟子たちを教えて、『人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる。』と話しておられたからである。」マルコ10章33節です。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、人の子を死刑に定め、そして、異邦人に引き渡します。」10章45節です。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」13章26節です。「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」13章32節です。「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」34節です。「それは(人の子が)ちょうど、旅に立つ人が、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目をさましているように言いつけるようなものです(訳者注: 英語の聖書では 34 節の始めに、Son of Man という言葉があるが、日本語の聖書にはない。)」14章21節です。「確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」14章41節です。「イエスは三度目に来て、彼らに言われた。『では、ぐっすり眠って休みなさい。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。』」そして、最後は62節です。「そこでイエスは言われた。『わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の組に乗って来るのを、あなたがたは見るはずで。』」ですからこのメシヤの称号は、イエスご自身がこれをお取りになり、繰り返し繰り返しお使いになったものです。それは、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるためです。すばらしいですね。イエスは、あなたの罪、私の罪を赦す権威を持っておられるのです。イエス・キリストによって私たちが赦されたことを、神に感謝します。

「イエスはまた湖のほとりに出て行かれた。(2:13)」家はぎゅう詰めで、みんなに仕えることができなかつたので、家から出て広い場所に行かなければなりませんでした。「イエスはまた湖のほとりに出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって『わたしについて来なさい。』と言われた。すると彼は立ち上がって従った。(2:13-14)」カペナウムの村、あるいはカペナウムの町は、ヨーロッパからアフリカへの主要道路にありました。イスラエルの地は、ヨーロッパからアフリカへの懸け橋の役割をしている土地です。ヨーロッパからアフリカへの商品はすべてイスラエルの地を通過しなければなりませんでした。大都市ダマスコから来る道路で最初に来る所がカペナウムでした。このためそこに、通過する商品の輸入税と輸出税を徴収する収税官がいたのです。そして、マタイあるいはアルパヨの子レビは通過する商品の関税を徴収していた収税官の一人でした。ほとんどの取税人は名うての詐欺師であり、嫌われていました。彼らは人々から法外な金を要求していました。一般的には、彼らにはローマ政府に渡さなければいけない一定の割当てが課されていました。その割当て以上の分については、自分のものにできました。このため、人々に不当な金額をふっかける大きな誘引があったわけですが、彼らの背後にはローマ政府の権力がありました。このため、彼らはとても嫌われていました。取税人(publican)という言葉がありますが、実際この言葉は収税吏(tax collector)という意味です。イエスがアルパヨの子レビをご覧になったとき、彼は自分の税関の席に座っていたのです。そして、イエスが、「わたしについて来なさい。」と言われると、彼は立ち上がってイエスに従いました。おそらく、彼の献身は、ペテロやアンデレ、ヤコブ、ヨハネよりさらに大きなものであったでしょう。彼らは自分たちの舟を捨ててイエスに従いましたが、いつでも漁に戻ることができました。ヤコブとヨハネと父のゼベダイは舟を、おそらくは漁船団を、召使などを所有していたのです。ですから、もしイエスに従うことが上手いかなければ、彼らはいつでも元の生活に戻ることができたのです。しかし、マタイの場合は、戻って再就職することは不可能でした。一旦この仕事をやめればそれで終りでした。完全に過去の扉が閉ざされることでした。「イエスに従う決心をした、戻れない、戻れない(訳者注:I have decided to follow

Jesus, no turning back, no turning back.を訳者が翻訳したもの。バプテスト連盟が使っている新生賛美歌に訳があるはず。)マタイの場合は、戻れなかったのです。

「それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。(2:15)」イエスに従ってマタイがまずしたことは、昔の仲間である取税人に別れを告げることでした。他の人は取税人とは付き合いがなくなかったので、取税人の間で付き合いがありました。それで、マタイは自分の家で、大きな宴会、大饗宴を開きました。それは、イエスが自分の友人に話をして、彼らもイエスに従ってもらうようにするためです。「それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。取税人や罪人たちも大ぜい…(2:15)」取税人と罪人は同類項にされています。取税人なら罪人だったからです。ザアカイがイエスを見るために木に登りましたが、彼も取税人でした。群衆に混じることができませんでした。イエスを見るためには、群衆から離れて高い所に登らなければなりません。イエスは木のところに來られて、降りてくるように言われて、彼の家に行き食事をすることにしているとされました。取税吏、取税人のところに行ったということで、また彼らはイエスのあさがしをしました。イエスは、「人の子は、失われた人を捜して救うために來たのです。(ルカ19:10)」と言われ、再び「人の子」の称号を使われています。ザアカイは言いました。「主よ。だれからでも、私がだまし取った物は、倍にして返す…」云々(ルカ19:8参照)。イエスは、「きょう、救いがこの家に來ました。(ルカ19:9)」と言われました。取税人がだまし取るというのは、よくあることでした。しかし、真の改心のしるしは、悔い改めや変化や回復でした。「取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた。こういう人たちが大ぜいいて、イエスに従っていたのである(2:15)。」ここでもまた、律法学者やパリサイ人といった批判的な宗教指導者がいて、イエスが取税人や罪人たちといっしょに食事をしておられるのを見て、イエスに言ったのではなく、イエスの弟子たちに対して、「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。(2:16)」と言いました。批判的で、あさがしをしています。それぞれの短い話を読むと、彼らがいかにイエスを非難しようとしていたかがわかります。彼らにとっては、罪人に触れただけでも、罪が自分たちに轉移するというものでした。ですから、彼らが通りを歩くと

きは、自分たちの衣をしっかりとつかみ、衣がひらひらして罪人に触れることがないようにしました。彼らは関わりたくなかったのです。触れたくもなかったのです。それなのに、ここでイエスは、彼らと食事をいっしょにしておられました。その文化の中では、食事をすることはただ触れるよりもそれ以上のことで、その人と一体となるという意味がありました。それで、彼らはイエスの弟子たちに対して、「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。(2:16)」と挑みかかっています。どうやら、聞こえるほど大声で言ったのか、イエスはこれを聞いて、「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。(2:17)」と言われました。いっしょにいた人たちは病人であるが、自分は癒すために来たと理解されてきました。前の章でイエスがらい病人をさわられました。誰もしないようなことです。しかし、ただ癒すためにおさわりになったのです。イエスが彼らといっしょにおられたのは、ただ彼らを救うためでした。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。(2:17)」もし、今日イエスがおられるとして、この方が行かれる場所やお仕えになる人たちについて、今日の私たちはびっくりすると思うのです。私たちは、律法学者やパリサイ人といった人たちのようではないかもしれませんが、「ちょっと待って下さいよ。」と、びっくりするのではないのでしょうか。「なぜ、あのようなところに行かれるのでしょうか。」と。失われた人たちを捜し出し、救うためだけなのです。イエスは、常に、必要を一番持っている人に関心を持っておられます。正しい人が変わるために来られたのではなく、罪人が変わるために来られたのです。

ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていたと書かれています。どうやら、(その時は、)一般的に一年のうちに人々が断食する日に当たっていたようでした。人々が断食をする日がありました。おそらく宗教的に断食をする日だったので、イエスの弟子たちは断食をせず食事をしていました。それで、パリサイ人たちは、イエスに言いました。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか。(2:18)」さて、彼らは、弟子たちに向かってイエスのことを話していたのが、今度はイエスに向かって弟子たちのことを話しています。「イエスは彼らに言われた。『花婿が

自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです。しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。(2:19-20) イエスは、「わたしがここにいる間は、私が花婿だ。」とおっしゃっているのです。「喜びの時だ。宴会の時だ。わたしが取り去られる日が来ます。その日には断食します。」と。断食は、宗教的体験の一環となってきました。ユダヤ教とキリスト教だけに限ったものではなく、いろいろな宗教の舞台と背景において断食は守られています。私は断食には価値があると感じます。断食によって霊的に得るものがあると感じますが、「断食して、祝福を受けるのだ。」、「神が働かれるまで、断食するんだ。」といった機械的なものではありません。それでは、断食を行ないにしていまいます。自分が断食したからというので、神が働くことを義務付けるように求めることになります。何をなさるのも、神は純粹に恵みによってそれをして下さるのです。私たちは、自分の人生の中で、神に働いていただくに値しないし、そのようなことは不可能です。もし、誰か何か特別な祝福を神からいただくことと断食するなら、その人の断食の概念は間違っています。ある牧師が神から御声を聞くまで断食する、というのを讀んだことがあります。そして、その人は43日间断食し、神から御声を聞きました。(笑) その人は死にました。しかし、私にとっては、断食の概念そのもの、また私が見出すことのできる断食の価値は、自分の内に肉と霊の対立があることに気づくことです。聖書は、私たちの内で起こっている霊的な戦いについて語っています。肉の願うことが御霊に逆らい、御霊は肉に逆らいます。この二つは互いに対立しています。(ガラテヤ5:17参照)私たちは、自分がしたいと思うことをしているのではなく、するつもりではないことをしています。(ローマ8:15参照) さて、肉と霊の二つの性質があることを知っているので、肉の性質あるいは肉の人が定期的に一日3回食事を取れるように私たちはとても注意を払います。一回でも食事を抜きたくありません。定期的に食事をすることに注意を払っています。しかし、御霊の人はよく断食しています。それは、私たちが御霊の人に食事を与えていないからです。定期的に聖書を讀んでいないのです。行き当たりばったりなのです。もし、肉の人と同じように御霊の人に食事を与えるなら、霊的にとても強くなるはずですが。しかし、もし、御霊の人と同じように肉の人に食事を与えるなら、おそらく死んでしまってい

るでしょう。不規則な食事の仕方なのです。これが、肉に対してはきちんと食事をするけれども、とかく霊に対しての食事はなおざりになっているのが普通の状態なのであれば、霊と肉の戦いで、頻繁に肉が霊に勝つのはもっともなことなのです。ですから、断食は、通常の過程に逆行することです。つまり、御霊の人に食事を与え、神のみことばを読み、自分の霊に食事を与えるのです。その一方で、肉の人は少しの間食べ物が無いままにして、弱くさせるのです。食べない結果、弱まるのです。従って、御霊に属するものを食べると、霊的に建て上げられ、霊的に強くなるのです。それが私にとっては、断食の本当の価値です。何かのために断食するのではないのです。特定の要求に答えるように神の側に義務を課して断食するのではないのです。ただ、神のみことばをたくさん食べて、神を待ち望んで、交わりをし、祈ることによって、御霊の人を建て上げて御霊に属するものによって強くなるためのものです。断食と祈りはよく結び付けて語られますが、断食が効果的であるためには、この二つは結び付いていなければなりません。祈りをもって断食をしなければなりません。イエスは、言われました。「彼らが断食する日が来るが、わたしがいっしょにいる時は断食する必要がない。それは、わたしが花婿だからで、お祝いをするからです。しかし、彼らが断食する日が来る。」

それから、イエスは、批判している人たちに対し話されます。「だれも、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、新しい継ぎ切れは古い着物を引き裂き、破れはもっとひどくなります。(2:21)」その当時サンフォライズド(訳者注: Sanforized。特許防縮加工を施した布地)防縮加工といったものはなく、初めて洗濯をする時は、いつも着物がかなり縮んだのです。それで、繰り返し洗濯された古い着物は、もう縮まなくなっています。もし、破れがあって、新しい布切れで古い着物の継ぎをすると、初めて洗濯する時にその継ぎが縮みます。縮むと、古い着物を引き裂きます。ですから、古い着物は、新しい布切れで継ぎをしないのです。「また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。(2:22)」新しい皮袋は、柔らかく、しなやかですが、古くなると皮袋は硬くなり、硬くなってしまった皮袋に新しいぶどう酒を入れると、ひびが入り、裂けてし

まいます。それで、柔らかく、しなやかな皮袋に入れます。イエスが言われているのは、律法学者やパリサイ人が属していた古い宗教制度は、神が行なわれる、または願われている新しいみわぎをどうにもすることができなかった、ということです。それで、神は新しいみわぎを行なうために、既存の宗教制度の枠を出られたのです。なぜなら、新しいみわぎは、ただ古い制度を破壊して引き裂いてしまうからです。これは、総じて歴史を通して起こっていることだと思います。ぶどう酒の皮袋はすぐに、古くなり、硬くなり、こわばって、柔らかさを失ってしまいます。ですから、神が新しいみわぎを願われている時、普通、組織化された宗教制度の枠を出て、柔軟で、柔らかく、柔順なところでこの新しいみわぎを始められます。私が、「柔順な者は、幸いです。その人は壊れてしまわないからです。(Blessed are the flexible, for they shall not be broken.)」というたとえを得たのは、基本的にここの箇所からです。私たちが柔軟であり続けることはとても大切です。神が働かれない時に、働かれることができるためです。特定の手順とか、特定の方法によって神のみわぎを制約してしまわないためです。私たちが古い皮袋になってしまうと、とかくそのようになってしまうからです。私たちが、組織化すると、どんどん皮袋はきつくなって、硬くなって、硬直してしまいます。人間の宗教制度にも同じことが言えます。神が働かれないときは、人々の心や人生の中でこの新しいみわぎや新鮮な働きをするために、よく既存の教団や制度の枠の外に出られません。カルバリー・チャペルは、新鮮な働きだと私は信じています。神が新しい皮袋をつくって下さったのです。神が新しい働きをしたいと望まれたので、神の御霊をその上に注ぎ、人々に触れるために、この新しい皮袋をつくって下さったのです。神が私たちが硬くならないように助けて下さいますように。もし主が来臨を遅らせているのであれば、かの日に神が私たちを助けて下さいますように。もし、主がずっと遅らせているのであれば、私たちは死んでいってしまいます。しかし、何年も経った後で、もし人が、「チャックがいたときに、こういうふうにチャックがやったのだ。」と言うなら、私は戻ってきて、その人に付きまといやりますよ。(笑)(訳者注:チャックは、自分がしたのではなく、神がなさったのだと言いたいのだと思います。)柔軟でなければいけません。神の霊に用いてもらうためには、開放的でなければなりません。私たちが硬直化しないことがとても重要です。このために、私たちは他のカル

バリー・チャペルと教団のような関係を築かないように努力してきたのです。ですから、どの他のカルバリー・チャペルも私たちに報告書を送ってこないし、財務報告書を送ってこないし、ただ私たちから金を借りるだけです。(笑) 息子たちみんなは、父ちゃんのところに戻ってきますが・・・(笑)(訳者注: 多くの場合、他のカルバリー・チャペルの牧師とチャックは、父親と息子のような関係です。) そんな硬直化した統制ができるのを見たくありません。ずっと柔軟でいたいのです。開放的なままにしておきたいのです。もし、神の御霊が働き続けて下さるには、そうしておくことがとても重要なのです。神の御霊が働き続け、私たちがしなやかで、柔軟でいつづけることが私の願いです。ですから、イエスは、「君たちは、みんな古い皮袋だ。神は、宗教制度から外に出て行かれる。神は、司祭といったものを通して来られるのではない。神は、外に出られる。それは、神の霊が新しいみわざを行なわれるからだ。」とおっしゃっています。

そして、2章の最後の短い話しに入りますが、そこでも彼らはイエスのあらさがしをします。「イエスは麦畑(訳者注: 英語では麦畑ではなく corn fields となっており、「とうもろこし畑」をさす言葉になっています。)の中を、」あるいは穀物の畑の中を「通って行かれた。(2:23)」そこには、アメリカにあるようなとうもろこし(corn)はありませんでした。とうもろこしは、アメリカのものです。アメリカのインディアンのものです。cornとは、大麦の粒(barleycorn)です。大麦の粒を聞いたことがありますか。あるいは麦(wheat)です。麦の粒(corn of wheat)あるいは、大麦の粒(corn of barley)のことです。彼らが畑を通っていきました。すると、安息日に弟子たちが麦あるいは大麦の穂を摘み始めたのです。5月の終りから6月の始めに、春小麦が色づきます。実際、穂あるいは先端の部分を摘むことができます。手の中でこすると(訳者注: チャックは手で、こするしぐさをしています。) 殻がもみから取れます。すると、一握りの麦(wheat)ができます。麦は食べられます。柔らかい穀物で、このように新鮮だと食べられます。それに、とても栄養価が高いのです。それになかなか美味しいのです。私もよく麦をとって、こすって食べたことがよくあります。ガムみたいになるんです。子供のころ、鶏の餌の中の麦を全部つまみ出して、ガムみたいになるまで

噛んだものです。この麦のガムを一日中噛んでいました。しかし、健康的でした。お母さんは、いつも麦を食べるのを許してくれました。麦は健康的だということをお母さんは知っていたからです。しかし、安息日に弟子たちは、麦を摘んで、手の中でこすり、食べ始めました。「するとパリサイ人たちがイエスに言った。『ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にはしてはならないことをするのですか。』(2:24)」安息日には、働いてはならないのです、と。パリサイ人たちの律法の解釈ですと、穀物を摘んで、手の中でこすって食べることは、仕事になったのです。「イエスは彼らに言われた。『ダビデとその連れの者たちが、食物がなくてひもじかったとき、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家にはいって、祭司以外の者が食べてはならない供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。(2:25-26)』」それを、読まなかったのですか、と。つまり、イエスは、人間の欠乏や人間の飢えや人間の欠乏を満たすことのほうが、安息日を守ることよりも重要であるとおっしゃっているのです。空腹と欠乏のためにダビデさえ、もちろん律法ではしてはならないことでしたが、主の前にあるパンを祭司以外の者が食べてはならないのですが、欠乏のために食べました。それは、実際の人間の欠乏は、こうした行為を正当化するからです。それで、「また言われた。『安息日は、人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではありません。(2:27)」安息日は、神から人への賜物なのです。体を回復させペースを変える、休みの日が必要です。神は、人間の便益のために安息日を設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではなく、安息日は、人間の便益のために設けられたのです。そして、イエスが次のように言われましたが、当然パリサイ人は腹を立てたでしょう。「人の子は安息日にも主です。(2:28)」さて、イエスに対し最も敵対心を起こした問題点は、イエスが彼らのしきたりに則った安息日の守り方をしていないことのようにでした。その日は安息日でしたので、イエスに挑みました。それは、イエスの弟子たちが、空腹のために畑の中を歩いて行く道々で穂を摘んで食べることをイエスが許されたからです。イエスは、この点に対し応えられて、「ご覧なさい。わたしは、安息日にも主です。」と言われました。安息日は、人のために、人の便益のためにつくられたのであって、人に重いくびきとするためにつくられたのではない、ということで

す。しかし、パリサイ人たちの律法の解釈やしきたりではそうなっていました。それで、「安息日にも主です。」とあるのです。3章にはいると、次の問題点も安息日に起こりました。それによって、この安息日の問題点のために、イエスに対する憎悪がかたまり、イエスが厄介者であり、殺されなければならないと判断が下されたのです。来週、マルコの福音書3章を学ぶ時に、それに入っていきます。

マルコの福音書3章(Mark3)(#8031)

マルコの福音書3章をお開き下さい。みことばの通読の学びを続けていますが、3章に入るとイエスがカペナウムにある会堂にお入りになる話を見ます。その会堂には、安息日に片手のなえた人がいました。さて、ギリシャ語から、この人の片手のなえている状態は、生まれつきのものではないことがわかります。脳卒中の結果だったのだろうと考えられています。原因がどうであれ、この人は片手を使うことができませんでした。「彼らは(3:2)」、つまりそれは律法学者たちのことですが、彼らは会堂にいました。礼拝をするためではありません。しきたりが守られているかどうか、秩序が、しきたりが乱されていない監視するためでした。律法学者たちは、イエスが安息日の伝統的な守り方を破っていないかどうか、じっと見ていました。彼らのしきたりに従って、つまり、律法ではなく彼らの解釈に従ってイエスを見ていたのです。律法は、安息日にはどんな労働の仕事もしてはならないと言っています(レビ23:7)。律法学者たちは、この「労働の仕事」に癒しがあると解釈していました。従って、安息日に誰かを癒すことは、律法違反であると考えていました。律法学者たちは、人のいのちを救うのに必要なことはできると言っていました。もし人が出血多量で死にそうになっているなら、三角布で縛るといった応急処置をとる事はできましたが、安息日が終わるまで癒しにつながることは何もできませんでした。これは飽くまでもしきたりであって、律法にはまったくない律法の解釈でした。それで、律法学者たちは、イエスが律法の解釈を破って、安息日に癒されるかどうかじっと見ていたのです。さて、前章の2章の最後の一こまで、イエスが安息日に弟子たちと麦畑の中を通られた時に、彼らが麦を摘んで、穀を取るために手で擦って、それを食べた時、パリサイ人たちは過ちを見つけ、「なぜあなたの弟子たちは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」と言いました。イエスは、「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません。人の子は安息日にも主です。(2:28)」と告げられました。このことは、彼らを怒らせました。さて、

今度はカペナウムでの安息日でした。同じ問題、安息日についてのパリサイ人たちの律法の理解と解釈についてです。イエスが安息日にその人を直すかどうか。それはイエスを訴えるためでした。パリサイ人たちは、イエスのあさがしをしようとしていました。イエスを訴えるためなら、何でもよかったのです。

ですから、イエスは律法学者たちの方を、イエスを訴えようとしていた人たちの方を向いて、「安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。(3:4)」とお尋ねになりました。片手のなえた人を癒すことは、善です。能力があるのに、片手のなえた人を癒さないことは悪です。「してよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。(3:4)」これは、とても論理的な質問でした。彼らはぐうの音が出ませんでした。善を行なってはいけないとは言えませんでした。ぐうの音が出ませんでした。イエスはそれを知っていました。それで、彼らはイエスに答えませんでした。「癒すことなのか、それとも殺すことなのか。善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。癒すことなのか、それとも殺すことなのか。」とイエスは言われました。彼らはイエスに対し答えがありませんでした。

それで、イエスは手のなえたその人に、「手を伸ばしなさい。」と言われました。その人に、「手を伸ばしなさい。」と命じておられますが、その人が行なうのが全く不可能なことを命じておられます。不可能な命令です。この時点で、この人には選択肢があります。一つは、イエスの命令に対して議論して、イエスになぜ自分が手を伸ばすことができないかいろいろ理由を言うことです。脳卒中なり何なり、手が損なわれてしまった原因をイエスに話し、自分がなぜできないかいろいろと理由を言うことです。「できないんです。何度もやろうとしたけれど、うまくいきません。自分では、どうしようもできないんです。」と。イエスに対し、この人は自分の弱さをいろいろ語ることもできました。あるいは、この人はイエスの命令に従うこともできました。再び手が動くように頭が手にメッセージを送るようにすることもできました。この人は、後者を選びました。この人はイエスの命令に従おうとしました。そうした瞬間、不可能な命令だったのに、従うのに必要なものすべてが御霊によって与えられました。これ

は、ここにいる私たちにとって大切な教訓です。それは、イエスが私たちに人生の損なわれた部分、弱い部分、なえてしまった部分に命令をなさっているからです。そして、イエスは、そのなえてしまった部分を取り扱って下さいます。それは、ある罪に対しての弱さや切迫した状態かもしれません。主があなたに、「あなたの人生のその部分において勝利しなさい。」と言われます。しかし、残念なことに、多くの場合私たちは、主に対しなぜできないかの理由を話します。何度やってみたか、いかに自分たちが弱いかを。私たちはなぜできないのか、色々弁解を言ってしまいます。一方、もし私たちに従う意思があるなら、即座に従うのに必要なものが私たちに与えられることがわかります。

イエスの敵は、弟子たちでさえより、またここにいる大勢の私たちより、この方についてのさらに鋭い洞察力を持っていたらしいと気づきます。というのも、安息日に会堂にイエスがお入りになったとき、そこに片手のなえた人がいるのを知りながら、イエスが会堂に入られるやいなやすぐにイエスと片手のなえた人と関連付けました。彼らはイエスがこの片手のなえた人に関心を持たれるであろう、助けるのに関心を持たれるであろうことを知っていました。それで、彼らは、イエスがその人を直すかどうかじっと見ていました。イエスがその人に関心を持たれ、助けたいと考えられることを知っていました。彼らは、最も困窮している人とイエスを関連付けました。先にイエスが言われたように、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。(2:17参照)」イエスは、最も必要を持っている人に仕えるために来られたのです。彼らはそれを知っていました。直観的にイエスがその人に関心を持たれるであろうと悟っていました。私たちはとかく、主が私たちに関心を持って下さらないだろうと感じてしまいます。私たちが困っていると、暗い影がある、弱さがあると、主は私には飽き飽きしておられる、主は私を助けるのに食傷気味だ、主は私には関心を持っておられない、と感じるのです。辺りを見回すと、どういうわけか、正しい人、すばらしい人が見えてしまいます。「主はああゆう人たちに関心をお持ちなのだ。それは、わかる。主は本当は私には関心がないのだ。私は失敗したし、弱さもあるし、自分には傷ついているところがあるから。」しかし、主が最も引き寄せ

られているのは、あなたなのです。それは、主が失われた人をさがし、救うために来て下さったからです。弱い人を助け、癒すためです。

「イエスは怒って彼らを見回し・・・(3:5)」とあります。このような感情、怒りは、あまりイエスと関連のない感情です。イエスは、最も冷静な方でした。何によっても妨害されていないようでした。しかし、例外は、宗教的盲目でした。他の箇所ではイエスがお怒りになられたところを覚えていらっしゃいますか。宮に行かれた時に、人々が宮を食い物にしているのをご覧になられた時でした。犠牲のための認定書付きの鳩や動物を売って、人々は宮を個人的な利益のために利用していました。イエスは、むちを作り、怒って人々を追い出し始められました。ここでもイエスの怒りは、宗教者によって起こされました。これらの宗教者たちは、偏狭的な宗教的しきたりのために、神が人にふれてくださること、神の助けを経験することを阻んでいました。イエスは、これに対しお怒りになりました。それは、当然だと思います。偏狭的な宗教的しきたりのために、神が人にふれてくださるのを阻んでいました。神は祝福したいと願っておられますが、宗教的しきたりが阻んでいます。当時それはイエスを怒らせました。今日もそのようなことはイエスを怒らせると思います。

さて、その人が癒されるやいなやすぐ、パリサイ人たちはヘロデ党の者たちと一緒になって相談をしました。ヘロデ党の者たちは、ローマ帝国の味方でした。パリサイ人たち、律法学者たちやパリサイ人たちは、異邦人と食事をするなどこれっぽちも考えませんでした。異邦人とつきあったり、触れるなど全然考えませんでした。しかし、ヘロデ党の者たちは、ヘロデの宮廷の一員で、ローマ帝国の味方になったユダヤ人たちで、ローマ帝国の機嫌を取っていました。ですから、ヘロデ党の者たちと、律法学者、パリサイ人たちは、互いに反目しあっていました。しかし、イエスを葬り去るという共通の願いにより、両者は手を組みました。今朝指摘しましたように、イエスを葬り去りたいというのは考えられないことです。なぜでしょう。イエスが、彼らの宗教的信念に反して、片手のなえた人を癒したからでした。その日は安息日だったからでした。それで、彼らはイエスを殺したいと思いました。「殺してはならない。」というのは、気にならなかったようです。何たる矛盾でしょうか。何という盲目的な

のでしょう。それで、彼らはイエスをどうして葬り去ろうかとしました。この時点から、イエスと宗教指導者たちの間の不和がどんどん大きくなり、最後にはイエスは虐待され、ピラトのところへ連れて行かれ、十字架刑の宣告を受けることになるのです。ピラトがイエスを取り調べた後、人々のところに出て行って、「取り調べたところ、罪は別に何も見つかりません。(ルカ23:14 参照)」と言いました。人々は、ただ狂ったように「十字架につけろ」と叫びました。ピラトは、「あの人がどんな悪いことをしたというのか。何か罪をあげてみなさい。(ルカ23:22 参照)」と言いました。しかし、人々は全く理性を失っていて、さらにいっそう、「十字架につけろ」と叫びました。イエスの宣教をまとめると、いろいろな所へ行って良い事をし、あらゆる病気を癒されたというものです。それが、イエスがなされたことの話です。良い事しかなさいませんでした。イエスは、私たちが互いに愛すべきであると教えられました。私たちが互いに赦し合うべきであると教えられました。あわれみ深くなれるように。イエスは、私たち争ってはいけない、他人をねたんではならないと教えられました。イエスの教えられたことは正しいことでした。よい考えでした。よい生活をする、聖い生活をする、正しい生活をする、汚れのない生活をする。イエスは良いことしかなさいませんでした。それなのに、イエスは、宗教指導者にとっては脅威でした。「ピラトは、彼らが、ねたみからイエスを十字架につけるために引き渡したことに気がついていて。(マルコ 15:10参照)」と聖書は教えています。それが、彼らの心の中にあった本当の動機でした。律法がきちんと守られるようにするというのは、全くの茶番狂言でした。彼らは奥底でねたんでいました。彼らはすでに、「この男の人氣が続けば、我々の商売はあがったりだ。みんなが、彼の方に引き寄せられている。人々が神を礼拝するために宮に来た時に、人々から金をだまし取ることができなくなる。」と言っていました。それで、何とかしなければいけないと彼らは心に決めました。悲劇です。悲劇です。

もっと悲劇なのは、依然として今日イエスを葬り去ろうとしている人がいることです。私たちの社会の中で、彼らは、イエスの影響を葬り去ろうとしているのです。神を葬り去ろうとしているのです。それで、科学の名の元に、様々な奇抜な話、おとぎ話をでっち上げています。

神から離れて私たちの存在を説明しようとしています。私が子供のころ、次のような話がとても好きでした。小さなお姫様が池でかえるを見つけ、その小さいかえるのことが気に入りました。とても、人なつっこいかえるでした。ある日、思わずかえるに寄って、キスをしました。すると、かえるはすぐハンサムな王子様になったのです。二人は結婚しました。この王子は、魔女か何かから呪いを受け、美しいお姫様がキスをしてくれなければ、ハンサムな王子様に戻れないというものでした。そして、この後、かえるから王子様が変わった後、二人は、幸せに暮らしたという話でした。こんな話を、本当に信じますか。しかし、科学者は、今日このような話をしているのです。ただ、すぐにそうなったのではなく、20億年かかったと言っているだけです。しかし、かえるが王子様になったと。人になったと。時間が長くかかっただけです。200万年あるいは20億年でも、一夜にして起こった、すぐに起こったと言うのと同じくらい奇抜なことです。まやかし(hokum)と同じです。面白いのは、いや、ただ面白いだけです。(笑) かえるのDNAの遺伝子コードの方が、みなさんの体の遺伝子コードよりずっと複雑なのです。ですから、進化論的に言うと、かえるが私たちに向かって進化しているというより、私たちがかえるに向かって進化しているのです。こういう小さいことは無視したいようです。

さて、今、このようにしてイエスを葬り去るための企てがなされていますが、対立は今ではありません。将来起きるのですが、今はその時でないのです。その時が来たら、イエスは、エルサレムに行くのにとんでもない人たちに直面されます。時が来ればそうなりますが、まだ、その時ではないので、「イエスは弟子たちとともに湖のほうに退かれた(3:7)」のです。カペナウムを出て、ガリラヤ湖の岸辺に行かれました。「すると、ガリラヤから出て来た大ぜいの人々がついて行った。また、ユダヤから…(3:7,8)」いまや人々は、南にあるエルサレムの地域からもガリラヤ地方に集まってきて、ユダヤからも人々がやってきて、ガリラヤの周りにいる人々も集まってきました。ヨセフ(訳者注:キリストが地上におられるときに生存していたユダヤの歴史家)によると、イエスが宣教をなさっていた時期に、デカポリスの10都市の人口は、各都市で少なくとも約2万5千人はいました。ですから、ガリラヤ地方は、かなり人口がいました。けれども、それだけでなくユダヤ、エルサレム、さらにイドマヤの地

域からも人が来ました。イドマヤは、死海を渡った南にありました。また、ヨルダンの川向こうやツロ、シドンあたりのフェニキアの沿岸地域からも来ました。大ぜいの人々が、イエスの奇跡のいやしのことを聞いて集まってきました。「大ぜいの人々が、イエスの行なっておられることを聞いて、みもとにやって来た。(3:8)」それで、「イエスは、大ぜいの人なので、押し寄せて来ないよう、ご自分のために小舟を用意しておくように弟子たちに言いつけられた。(3:9)」とあります。それで、イエスは、小舟に乗り込み、少し岸から離れ、人々を教えておられました。人々が押し寄せてきたからです。群衆がどういう動きをするかわかりでしょう。近づきたいのです。押し寄せてきます。実際、彼らはイエスにさわりたかったのです。大ぜいの群衆が押し寄せてきていたので、とても大変だったに違いありません。それで、小舟を漕ぎ出すことができたので、福音書の一つには、イエスが少し漕ぎ出すように言われて、舟から群衆に教えられたことが書かれています。そこで、ここでは、「大ぜいの人なので、押し寄せて来ないよう、ご自分のために小舟を用意しておくように」とあります。「それは、多くの人をいやされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押しかけて来たからである。(3:10)」疫病を持っていた多くの人が、押し合いへし合いして、イエスに近付き触ろうとしていました。人は疫病があると、重い病気があると、助けを得るために押しが強く強引になることがあります。そのため、「イエスのみもとに押しかけて来た」のです。「また、汚れた霊どもが、」悪霊が、「イエスを見ると、みもとにひれ伏し、『あなたこそ神の子です。』と叫ぶのであった。イエスは、ご自身のことを知らせないようにと、きびしく彼らを戒められた。(3:11-12)」

そして、「イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来た。(3:13)」ことがわかります。ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたことに注目して下さい。これからイエスは、ご自分に従っていたたくさんの弟子の中から、十二弟子と呼ばれる人たちを任命されようとしていたのです。しかし、それはイエスがお選びになる人たちでした。彼らをお選びになるのは、イエスでした。そして、後にヨハネの福音書15章で、裏切られた夜、あの最後の夜に、イエスは弟子たちの方を向いて、「あなた

がたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを弟子になるように任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためです。(ヨハネ 15:16参照)」ですから、イエスはこれらの人たちを呼び寄せ、呼び寄せた人たちをお選びになり、任命されて、使徒になるように定められたのです。「それは、…彼らを遣わして福音を宣べさせ、(病人をいやし)悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。(訳者注:3:14,15.欽定訳には15節に“to heal sicknesses”とある。)」つまり、イエスが行なわれていたことを彼らが行なうためでした。イエスは彼らを任命されました。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、ご自分が行なわれていたことをさせるために権威を持たせるためでした。

「そして、シモンにはペテロという名をつけ」られました。(3:16)彼の名前を変えたのは、イエスでした。イエスが、彼に最初にあった時に、「あなたはシモンです。あなたをケパと呼ぶことにします。(ヨハネ 1:42 参照) 」と言われました。ピリポ・カイザリヤで、イエスが、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。(マタイ 16:15.以下マタイ16:16-18)」と言われると、ペテロは、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えました。イエスは、言われました。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。」「バルヨナ」、つまり「ヨナの子」です。バルとは、息子の意味です。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは肉と血ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロスです。」つまり、あなたは石、小さな岩、ということです。「わたしはこのペトラの上にわたしの教会を建てます。」これは、言葉の遊びです。ペトロスとは、小さい石のことです。ペトラは大きな岩のことです。イエスは、「あなたは、ペトラ、大きな岩です。」とおっしゃっているのではなく、「小さい石です。」とおっしゃっているのです。「わたしはこの大きな岩の上にわたしの教会を建てます。」「この大きな岩」とは、何でしょうか。イエス・キリストが、生ける神の御子であるというペテロの告白です。これが、教会が建てられている基です。「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。(1 コリント 3:11) 」とパウロは言いました。

ですから、「あなたはペトロです。小さい石です。わたしはこのペトラの上にわたしの教会を建てます。」なのです。彼をお呼びになったのは、イエスでした。面白いのは、たくさんいた(弟子の)中で、一番ふらふらしていたのは、おそらくペテロではなかったかと思うのです。いつも優柔不断だったのです。しかし、イエスは、「あなたは岩になるのです。」とおっしゃいました。それは、聖霊の力によって、どのようになれるかをご存知だったからです。イエスを否定した者です。剣を抜いて戦い始め、「剣をさやにおさめなさい。」とイエスにしかられた者です。水の上を歩いて沈みかけた者です。とにかく、きちんとできませんでした。それなのに、主は、「あなたは岩になるのです。」と言われました。主は、岩という名に変えられました。ロッキー(訳者注:ボクシングの映画のロッキーと、ロック(岩)を呼び名にしたロッキーとを掛けている。)です。

そして、主は、ヤコブとヨハネの名も変えられました。ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネの名です。名字を変えて、ボアネルゲ、つまり雷の子という名をつけられました。おそらく、イエスがあだ名をつけられたのでしょう。それは、イエスの敵に対して、天から火を下らせようとしたのがこの二人だったからです。誰かがイエスに嫌がらせをしている時に、「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。(ルカ9:54)」と言いました。ですから、おそらくその時以来、イエスは彼らを雷の子と呼ばれたのでしょう。そして、アンデレです。アンデレはペテロの兄弟でしたが、以前はバプテスマのヨハネの弟子でした。イエスが通り過ぎられる時、バプテスマのヨハネといっしょに立っていました。ヨハネは、イエスに、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。(ヨハネ 1:29。以下ヨハネ 1:37-42参照)」と言いました。そして、アンデレは、イエスのところに行きました。すると、イエスは立ち止まりました。アンデレは、何を言えばいいのかわからない感じでしたが、「今どこにお泊まりですか。」と言いました。イエスは、「来なさい。そうすればわかります。」と言われました。そして、ペテロのところに行って、「私たちはメシヤに会った。」と言ったのはアンデレでした。ですから、彼の兄弟ペテロを連れてきたのは、アンデレです。他の箇所でもそうですが、アンデレが登場するときは、いつもイエスのところに人を連れてきています。これはよい働きです。

山腹に群衆がいて、イエスが、「この人たちに食べさせなければいけない。(ヨハネ 6:5参照。)」とおっしゃったときに、パンを五つと魚を二匹持った少年をイエスのところに連れてきたのは、アンデレでした。ペテロをイエスのところに連れてきたのは、アンデレでした。「キリストにお目にかかりたい。(ヨハネ 12:21)」とギリシャ人が来た時、ギリシャ人がイエスに会いたいことをイエスに伝えたのは、アンデレでした。そして、ピリポがいました。そして、バルトロマイがいました。さて、バルトロマイは、ナタナエルという名でもありました。ですから、イエスが「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。(ヨハネ 1:47)」と言われた人物であり、「来て、そしてメシヤを見なさい。(ヨハネ 1:46)」とピリポが呼んできた人物でもありました。そして、イエスに会った時に、イエスが、「偽りが無いイスラエル人だ。」と言われた人物でした。そして、マタイがいました。さて、マタイは福音書を書いた人物であり、取税人でした。前回の学びから、私たちはマタイについては、少し知っています。それから、トマスがいました。疑い深い、懐疑的な人でした。知らないことについては、わかったふりをしない人でした。イエスが、「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています。(ヨハネ 14:1-4)」と言われると、トマスは、「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。(ヨハネ 14:5)」と言いました。私たちは、うなずいて、「はい、はい、わかります。」と言ってしまうことがよくあります。でも、トマスはちがいました。「教えて下さい、と言いました。そして、アルパヨの子ヤコブがいました。このヤコブについては、私たちは何も知りません。ここに列挙されている以外には登場してきません。このヤコブ、アルパヨの子ヤコブについては、私たちは何もわかりません。そして、タダイがいました。さて、彼はユダとも呼ばれていました。イエスとの最後の夜、ヨハネの福音書14章で、イエスが、「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。

(ヨハネ 14:21)」と言われましたが、「イスカリオテでないユダがイエスに言った。『主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。』(ヨハネ 14:22)」このユダについて、私たちが知っているのはこれだけです。記録にもう一度登場していますが、過越しの祝い(paschal)の夜での質問でしか現れません。そして、カナン人シモンがいました。熱心党员としても知られています。熱心党员は、革命的な過激集団でした。過激な人たちです。彼は、間違いなくキリストのために過激になったでしょう。でも、彼についてあまり知らされていません。イスカリオテ・ユダですが、もちろん彼についてはかなりのことが分かっています。このユダがイエスを裏切ったのです。

彼らは家に、あるいは家庭に入って行きました。ギリシャ語ですと、イエスが泊まれたのは概ね家庭で、おそらくそれは、カペナウムにあったペテロの家庭だったのでしょう。「また、大ぜいの人が集まって来たので、みなは食事をする暇もなかった。(3:20)」本当にたくさんの人がいて、押し合いへし合いになって助けを求めてきたので、食事をする暇もなかったのです。これまでに、何回かそういう事を体験したことがあります。余りに忙しくて、食べる時間も取れなく、食事の時間もないのです。ですから、みなは食事をする暇もなかったのです。「イエスの身内の者たちが聞いて、イエスを連れ戻しに出て来た。『気が狂ったのだ。』と言う人たちがいたからである。(3:21)」イエスの身内の者たちは、イエスが気が変になっていると思ったのです。「気が狂ったのだ。(訳者注: beside himself)」という言葉は、気が変になっている人に、独り言を言うまでになっている人に使われます。ここでいう気が狂ったは、そういうことを言っています。「どこへ行くんだ。さあ、わからない。どこへ行くんだ。(訳者注: ぶつぶつと、自分で言った質問に自分で答えている人が演じられています。)」ですから、気が狂ったとは、こういうことで、独り言を言う人、おかしくなった人のことです。それで、人々がイエスを助けようと、連れ戻し、救おうとしました。「また、エルサレムから下って来た律法学者たちも、『彼は、ベルゼブルに取りつかれている。』』と言い、…(3:22)」これは、家の主という意味です。と言うか、律法学者たちが言っているのは、イエスがサタン力によって行なっているのだということです。「彼は、ベルゼブルに取りつかれて

いる。」さて、マタイの福音書によると(12章22節から)、イエスが悪霊によって盲目でおしになっていた人から悪霊を追い出した結果、このような批判が出たとなっています。悪霊によってこの人は、目が見えず、話すことができませんでした。それで、この人が見ることができ、話すことができるように、イエスは、この人から悪霊を追い出されました。それで、こうした奇跡を見ていた人々、エルサレムから下って来た律法学者たちもこうした奇跡を見て、そのままにはしておけませんでした。イエスは、否定ができないように、闇の力に対し神の御力をお示しになられたのですが。さて、彼らはすでに、イエスがメシヤではないとの結論に達していました。けれども、神の御力だということが、議論を挟む余地のない証拠を突き付けられていました。イエスがメシヤではないとの立場をとっていましたから、何とかしてなぜイエスがこのようなことをすることができるのか、悪霊を追い出し、この人に視力を与え話すことができるようにできたのかを説明しなければならなくなりました。それで、「彼は、ベルゼブルに取りつかれている。」と言ったのです。闇の力を持っているのだと。悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているだけだ。サタンの力を持っているのだ。悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているだけだ、と。「そこで、イエスは彼らをそばに呼んで、たとえによって話された。『サタンがどうしてサタンを追い出せましょう。もし国が内部で分裂したら、その国は立ち行きません。また、家が内輪もめをしたら、家は立ち行きません。サタンも、もし内輪の争いが起こって分裂していれば、立ち行くことができないで滅びます。』(3:23-26)」つまり、イエスは、彼らの言っていることの結論が全然筋が通らないことを示されています。「もし、家が内輪もめをしたら、サタンも、もし内輪の争いが起こって分裂していれば、立ち行くことができないで滅びます。」と。「確かに、強い人の家に押し入って家財を略奪するには、まずその強い人の家に押し入って家財を略奪するには、まずその強い人を縛り上げなければなりません。そのあとでその家を略奪できるのです。(3:27)」イエスは、ご自分の力がサタンの力よりも大きいことを言われています。ご自分が、闇の力を縛り上げる力を持っていて、サタンの家を略奪できると。

そして、イエスは、彼らに警告されています。「まことに、あなたがたに告げます。人はそ

の犯すどんな罪も赦していただけます。(3:28)」これは、興味深い言及です。どんな罪も赦していただけますが、例外が一つあります。キリストが死なれたとき、キリストは世の罪のために死なれました。これまでに犯したすべての罪は、イエスの死によっておおわれました。「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。(イザヤ 53:6)」ですから、もしあなたが不幸にも黙示録20章の大きな白いさばきの御座の前に立ち、書物が開かれそれらの書物に書かれていることに基づいてさばかれるのであれば、神があなたに対して告発される罪は一つしかありません。一生のうちに犯した細々とした罪をすべて問われるのではないのです。それは、どんな罪も赦していただけるからです。しかし、赦していただけない罪が一つあります。それは、イエス・キリストを拒否することです。神は、イエス・キリストを通して、罪からの赦しを備えて下さいました。神は、イエス・キリストを通して、救いのための備えをして下さいました。でも、これは、あなたの罪のために神が備えられた唯一の備えです。イエス・キリスト以外にあなたの罪が贖われる方法はありません。神が罪のために備えて下さったのはイエス・キリストのみです。ですから、あなたがイエス・キリストに来ないのであれば、イエス・キリストを拒否するのであれば、あなたは赦されない罪を犯しているのです。その過程にあるのです。これらの人たちはまだそこまでしていませんでしたが、それに近い所まで行っていました。イエスが悪魔の力、闇のかしらによってこのようなことをしているのだと彼らが述べた理由は、イエスがメシヤではないとの立場を取ったからでした。彼らは、イエスを拒否しました。今、彼らは、議論の余地のない証拠を見て、それを拒否しようとしているのです。ということは、彼らが、最終的にイエス・キリストが主であり救い主であることを拒否するという、赦されない罪に近い所まで行っていることを示していました。イエスは、あなたと関係を持って下さっています。イエスは、あなたのところに来て下さり、ご自分の愛と救いを差し延べて下さっています。あなたはそれを拒否するのですが、イエスはまた来て下さり、また来て下さり、また来て下さり、あなたはまたそれを拒否し、またそれを拒否し、そして、ヨハネの福音書12章38節(訳者注:39節のことか)に書かれているパリサイ人のように信じることができなくなるのが可能です。信じなかった(would not believe)ではなく、信じるができなかった(could not believe)のです。

さて、イエスは、「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ 3:17)」とおっしゃいました。それが、イエスがこの世に来られた目的でした。あなたを救うことでした。「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。(ヨハネ 3:18)」あなたは、すでにさばかれているのです。「すべての人は、罪を犯しました。(ローマ 3:23)」罪から来る報酬は死です。(ローマ 6:23)」もうすでに、あなたには死刑の宣告が下されました。もうすでに宣言されました。しかし、神は赦される道を備えて下さいました。神が備えて下さっている赦しをあなたが拒否するならば、選択肢はありません。あなたが受けるはずであったさばきからあなたを救うためにイエスは来て下さいましたが、そのさばきがあなたに下ります。あなたは、自分の罪のために、さばきに直面します。それは、あなたが神の備えを拒否したからです。従って、「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は…すでにさばかれている。」すでにさばかれているのです。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人は光のところに来ない。(ヨハネ 3:19-29参照)」あなたが、イエス・キリストに来ない、それが問題なのです。イエスは、なぜあなたが来ないのかお話になっています。それは、「人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。(ヨハネ 3:19)」ですから、イエスは、人に警告されています。神のわざをサタンのわざだと言うのであれば、聖霊をけがすのと同じであると。ですから、イエスは、「あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。(3:29)」とおっしゃっています。これは、彼らが、イエスは汚れた霊に取りつかれている、と言ったからです。

さて、サタンは、この聖書の箇所を取って、敏感な人に悪用するのが好きです。全く当惑してしまって私の所にやって来て、「チャック、私は赦されない罪を犯してしまいました。」と言う人がよくいます。私はいつもそのような人には、「もし、そのような罪を犯したのなら、あなたはここにはいないはずだ。」と言います。そのような罪を犯したならば、もう良心は失わ

れているでしょうし、イエスに対する思いもなくなってしまっているでしょうし、霊的なものに対する思いもなくなってしまっているでしょう。神の御霊が離れてしまったのであれば、神は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。(創世記 6:3)」と言われましたが、気になっているのですから、まだ神の御霊があなたのうちにとどまっているということです。もし、あなたが赦されない罪を犯してしまったのであれば、神はもはやあなたのうちにとどまっていらっしゃらないということです。あなたは、冷淡になっています。イエスに対しての感情がありません。永遠の救いに対して、感情がありません。もうあなたの電源が切れているのです。ですから、サタンに、「おまえ、しでかしたな！」と嘘をつかせてはなりません。自分の救いについて気になっている限り、そのような罪はまだ犯していないのです。けれども、永遠のいのちは、もてあそぶものではありません。賭をする対象ではありません。なんら疑問の余地がなく、絶対的確証が欲しいものです。永遠のいのちを話す時には、不明確な点が少しでもないようにしておきたいのです。はっきりとさせておきたいものです。

さて、イエスの兄弟たちと母が来ました。マリヤとイエスの兄弟たちが来ましたが、おそらくナザレから来たのでしょう。イエスが食事もせず、日夜、人々が押し寄せて、押し合いへし合いしていると聞いて来ました。ですから、おそらく彼らはナザレから来て、家の外に立っていたのでしょう。家の中には、人がたくさんいたので場所がなかったからです。それで、人をやり、家の中に伝言を届けさせました。その伝言の内容は、あなたのおかあさんと兄弟たちがあなたをたずねています、というものでした。それに対し、イエスは、「わたしの母とはだれのことですか。また、兄弟たちとはだれのことですか。」とお答えになりました。もし、仮に私がマリヤに私のためにとりなしをしてもらうとするなら、この聖書の箇所がとても問題になると思うのです。(訳者注:カトリックは、マリヤが仲介者であるという考えがある。)
「あなたのおかあさんが外におられます。」と言っているのに、イエスは、「わたしの母とはだれのことですか。」とおっしゃっているからです。「聖マリヤ、神の母、私たち罪人のために祈って下さい。」と言うには、この聖書の箇所が問題になると思うのです。マリヤのとりなしも、どのような聖者のとりなしも必要ではないことに、私は感謝します。神は、私が直接イエス・キ

リストの所に行くことができるように扉を開いて下さいました。「神は唯一です。人と神との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。(テモテ第一 2:5)」ですから、「わたしの母とはだれのことですか。また、兄弟たちとはだれのことですか。…神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。(3:33,35)」つまり、関係をもっています、ということです。面白いのは、ガリラヤのカナで水がブドウ酒に変わった奇跡のとき以来、初めてマリアの言及がなされているところです。マリヤは、ナザレで残る家族の面倒を見ていたようです。それに、マリヤはイエスが旅をなさっていたときにほとんど同行していませんでした。マリヤが同行したのは、少し後になってからで、それは、エルサレムでイエスが十字架にかかるときでした。イエスはここで、ある関係が存在していることを言われています。その関係は、血のつながっている家族の絆よりも深いことを言われています。それは、キリスト・イエスにある絆です。ですから、使徒パウロは、「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく…なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。(ガラテヤ3:28)」と述べています。キリストのからだの中に絆があります。それは、改心していない家族の血縁の絆よりも大きく近いものです。神の家族との方が、もっと親しく感じる事がわかるでしょう。血縁の家族より神の家族との方が、もっと愛や交わりを感じる事がわかるでしょう。ここで、マリヤと兄弟たちがイエスを助け出そうとしましたが、イエスは、「神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」とおっしゃったのです。私たちを、ご自分とのすばらしい親密な関係に招いて下さっています。すばらしい特権であり、すばらしい祝福です。

マルコの福音書4章(Mark4)(#8032)

私たちは新約聖書通読の学びを続けています。マルコの福音書4章では、イエスは、たとえの教えから始められています。たとえの使い方には意見の違いがあります。G. キャンベル・モーガン博士は、イエスがたとえを使った教えに変えておられるのは、人々の注目を集め、真理を知らせるためであり、たとえを使うことによって真理が現れるようにした、つまり例証としてたとえを使ったのだ、という強い意見を持っています。これら多くのたとえが、自分たちに対峙して使われていることをパリサイ人は気付いていました。自分の話をもっと面白いものするために、たとえが使われます。もし、会衆が自分の話集中出来なくなってきたら、この高いところからだそれがよくわかりますが、人々がこういう風になってしまうと・・・(訳者注:おそらくチャックは、コックリ、コックリ、居眠りの動作をしているのだと思います。)でしょ!自分の話集中してくれていないことがわかります。あなたに知恵があるなら、物語を始めましょう。昔々あるところに・・・するとみんな、「何だ」と思うのです。パリサイ人たちは、イエスがサタンの力を使ってわざをしていると言って非難しました。彼らは、もはやイエスが直接的に教えられているのに耳を傾けないようになっていました。このため、G. キャンベル・モーガンの意見によりますと、イエスは、続けて真理を与えるのだけれども、もっと巧みに与えるために物語を始められたと言うのです。物語によって注目を集めて、見ることができるようにされたのに、彼らはわかりませんでした。注目を集めて、聞くことができましたようにしましたが、彼らは悟らなかったのです。もし神がすべての人が救われることを望んでおられるのであれば、神がわざと人から真理を隠されるというのは信じがたいことです。神は、「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めにすすむことを望んでおられるの(2 ペテロ3:9)」です。ですから、神がわざと人から真理を隠されたというのはちょっと信じられません。そうではなく、神は、人が聞き入ってしまうように、話をおもしろくしたのです。でも、聞いたからって、必ずしもそのことがわかたり、理解したりしません。多くの場

合は、随分時間がたってから、あつと言わせるおちを見出だして、わかるようになるのです。たとえによって、突然、真理に光が照らされます。ゲール・アーウィン、話を語る達人です。丁度よいユーモアを盛り込んでくれるので、笑いころげてしまいます。ゲラゲラ笑っている時に、彼は、メスを入れるんです。痛いところを突いてくれます。それで、笑っている時に、出血多量で死にそうになってしまう。しかし、彼のやり方を観察すると、話がとても上手ですが、メッセージはとても鮮明に力強く心の奥底に浸透します。

それで、1節にあります、「イエスはまた湖のほとりで教え始められた。おびたしい数の群衆がみもとに集まった。それでイエスは湖の上の舟に乗り、そこに腰をおろされ、(4:1) 」つまり、舟は少しだけ岸から離れたところにあつたのです。「群衆はみな岸べの陸地にいた。(4:1) 」ほとんど手に負えない状態になりました。イエスの評判がシリヤや、ツロ、シドン、トランスヨルダンの地域、エルサレムに広がり、人々は至る所からやってきました。人々は、いやしの力のことを聞いて、病人をみな連れてきました。イエスの衣にさわろうとした女もそのことを聞いたに違いありません。ですから、たくさんの人がイエスにさわりました。イエスにさわろうと、押し合って近寄ってきました。人々が余りに殺到してきたので、もはや公には教えることができなくなりました。群衆が押し寄せてくるからです。それで、舟を入手し、イエスは少し岸から離れたところにおられ、人々は陸地にいました。この小さな舟からイエスは教えておられました。「イエスはたとえによって多くのことを教えられた。その教えの中でこう言われた。(4:2) 」さて、キリストの宣教の中で、これがたとえを用いられた初めとなりました。イエスは、神の御国のたとえから始められました。神学校で、「牧会を始めて少なくとも25年たたなければ、たとえを教えようとはしないように。」と言った教授がいました。「経験がたくさんなければ、本当にはたとえがわからない。」と言いました。私は、その教授と意見が合わず、牧会を始めた時、イエスのたとえを教えました。その説教が録音されていなかったことを嬉しく思っています。年月が経って、色々なことを異なった観点から見ようになりました。

神の御国のたとえは、まず、私たちがみなよく知っているたとえから始まっていますが、マ

タイの福音書13章にあります。「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。(4:3) 」大部分の人が農耕社会に暮らしていました。みな農夫でした。都市に住んでいる人でさえ田舎に小さい土地を所有していて、夏にはそこへ行って、夏に農業をする間、間に合わせの家に住みました。ですから、みんな種蒔きについてのたとえ、羊の世話についてのたとえ、様々な植物についてのたとえはよくわかっていました。人々がとてもよくわかっているたとえをお使いになりました。種を蒔くために、人が畑に出て行きました。「蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。(4:4-5) 」聖地には岩があります。岩地になっています。種を蒔く畑も、岩だらけです。多くの場所、特にベツレヘムの辺りはそうです。しかし、岩の多い丘の斜面は表土が浸食されてしまっていますが、穴や、割れ目に土壌が入っているところがあります。しかし、土のあるのは数インチ(約5センチ) です。土のあるのは、岩の穴、あるいは、岩のくぼんだところ。岩は熱を保持しますから、岩の土の少しあるところが、通常は春には真っ先に花、野生の花の咲く場所です。しかし、そこは又、真っ先に枯れてしまうところでもあるのです。土が深くないので、すぐに、瞬く間に乾燥してしまいます。ですから、人々は、そうした地形や土壌の状態をよく知っていました。「『土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった。また、別の種がよい地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。』そしてイエスは言われた。『聞く耳のある者は聞きなさい。』(4:5-9) 」イエスは、「聞く耳のある者は聞きなさい」のこの文句をよくお使いになりました。すべての人が聞く耳を持っているのではないけれども、イエスは招きをされているのです。

「さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた。そこで、イエスは言われた。『あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが・・・(4:10-11) 」あなたがたは、神の国の奥義を知ることができますが、

あなたたちのためです。でも、「ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、(4:11-12)』彼らは見ることができるのですがわからないのです。「『聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため。』」です。』そして彼らにこう言われた。『このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができれば。』(4:12-13)』つまり、ここにたとえの鍵といえるものがあるのです。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができれば。種蒔く人は、みことばを蒔くのです。(4:13-14)』さて、たとえを解釈する際に、いわゆる釈義上の不変性(訳者注: “expositional constancy”- 日本語の用語が現時点で分からないので、とりあえず「釈義上の不変性」と訳します。)と呼ばれているものがあります。釈義上の不変性とは、基本的に、何かを表すためにある物が使われたとすると、この物は不変に常に同じ考え、概念を前もって示すことを言います。つまり、ここで種が、蒔かれた神のみことばで、「種蒔く人は、みことばを蒔くのです。」とありますから、種は、神のみことばです。従って、たとえで種蒔きを見たら、それは、神のみことばを蒔くことなのです。たとえを理解するには、この釈義上の不変性が重要になってきます。もう少し先には、からし種が木に成長し、その陰に鳥が巣を作るたとえが出てくるからです。このたとえと、それと一対となっているマタイにあるパン種のたとえをどのように解釈できるかを見るときに、この釈義上の不変性の考えは重要です。

「種蒔く人は、みことばを蒔くのです。みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです — みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。(4:14-15)』さて、何がみことばを持ち去ったのでしょうか。来た、鳥でした。ですから、たとえにおいて、鳥は悪い物を表しています。みことばを持ち去る物を表しています。この場合は、すぐサタンが来て、彼らの心に蒔かれたみことばを持ち去ってしまったのです。大衆伝道に対する批判がよくなされます。ビリー・グラハムのクルセードやハーベスト・クルセードに対する批判がなされます。「たくさんの人が前に出て行くが、みな(信仰に)とどまるのではない。多くが、その時は感情的になって、応答して前に出て行くが、多

くの人には信仰を持ち続けたい。」と言います。イエスは、大体そのことをこのたとえの中で指摘されているのです。種の落ちたところには、4つのタイプの土壌がありました。4つのうち、実際に実を結んだのは1つだけでした。前に出る人全員が信仰を持ち続けたいと批判するより、信仰を持ち続ける4分の1の人がいることを喜ぶべきです。神に感謝しましょう。真に悔い改める人が一人いるなら、天はその人のことを喜びます。ですから、私は大衆伝道の意義を信じています。神の御霊が働かれるのを見るのはわくわくします。種が蒔かれ、前に出てくる人がいます。でも、その人たちが戻るとすぐ、その人の友人が、「君、前に出たの。変だよ。」と言います。すると、その人は、「行ったけど、本気じゃないさ。」と言ってしまいます。サタンが来て、引き抜いてしまいます。一時的なことでした。一時的な応答でした。しかし、何も結果はありません。ただ、そこで終わってしまうのです。それっきりです。実際芽が出る機会が与えられる前に、サタンがすぐ来て、みことばを引き抜いてしまいます。

「同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです — みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが(4:16)」こういう人は、とても興奮して、沸き立って、まる一週間喜んでいます。しかし、「根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。(4:17)」土が深くなく、根が張っていません。私たちが神のみことばに根を張り、しっかりと根づくことは、なんと大切なことなのでしょう。なぜなら、誘惑が来るからです。迫害が来るからです。聖書の中で、私がしっかりと握り締め、愛して、大事にしている約束がありますが、聖書の中の他の約束の中には、あまりうれしくないものもあります。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。(2 テモテ3:12)」これにはあまりわくわくしません。それでも、これは約束です。ですから、爆弾や流星花火のようにやって来る人がいますが、そういう人はすぐに灰になってしまうのです。根がないのです。

「もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、(4:18)」こういう人のことが私は一番気になります。来て、聞き、受け入れるクリスチャンがいます。少しは成長するのです。しかし、霊的に発育停止状態になってしまいます。死にはしないのです。残りはするのですが、同じ

靈的狀態のままです。ひよっとすると、パウロが、「キリストにある幼子(1 コリント 3:1)」と呼んでいる人のことかもしれません。十分成熟して、みことばの堅い食物を食べることができるところであるはずなのに、いまだに哺乳瓶の状態、乳以外のものは無理なのです。いつも、靈的にわくわくすることを探しています。靈的なセンセーションを求めているのです。しかし、その人の生活に、本当の実が結ばれないのです。こういう人たちは、依然として肉的な状態にいて、教会の中でいつも何かに対して、気を悪くしていたり腹をたてています。満足していません。かまって欲しいのです。耳がうずうずしているのです。洗練された説教が聞きたいのです。いばらが一緒に成長し、実を結ぶのをふさいでしまいます。いばらとはどのようなものでしょうか。「もう一つのいばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことです。 — みことばを聞いてはいるが、世の心づかひや、富の惑わし、その他いろいろな欲望がはいり込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。(4:18-19) 」こういう人たちはここに(教会に)来ます。定期的に出席します。しかし、気が多いのです。世の心づかひや、富への欲望、富の惑わし、その他いろいろな欲望のために、靈的発育が停止状態にあります。ここに来ていて、まだ生きているのですが、それ以上にはなれないのです。実がないのです。実がふさがれています。

「良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、実を結ぶ人たちです。(4:21 参照)」これはすばらしいです。三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶものもありました。実のあるクリスチャン生活を見ることは、何と栄光に満ちあふれているのでしょうか。その人の人生が実を結んでいて、その人の生活から、内にある神の愛が放たれているのです。御霊の実がその人の人生に豊かに実っています。成熟、成長を見ることができます。新約聖書の中で、靈的に成熟していないことを懸念しているところがあります。ヘブル人への手紙の記者は、「私たちは、キリストについての初歩の教え、死んだ行ないからの回心、手を置く儀式、きよめの洗いについての教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。(ヘブル 6:1、2参照)」と述べました。パウロは、「ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として(エペソ 4:11) 」と言って、賜物を与えられた指導者について

話していますが、これらは、「聖徒たちを整え」るためであると言っています(エペソ 4:12)。つまり、成熟へ聖徒を導くことだと言っています。「それは聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、…完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。(エペソ 4:12-13)」私たちが実を結ぶようになるために、成熟が必要なのです。ですから、私たちがみな自分を見て、自分の生活はイエス・キリストのために実を結んでいるかどうか自問自答してみればよいと思います。御霊の実が、自分の人生に結ばれているかどうか。御国のために、自分は実を結んでいるかどうか。

「また言われた。『あかりを持ってくるのは、枘の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。(4:21)』』言い換えれば、あかりの目的は、照らすこと、他の人にあかりをもたらすことだということです。山上の説教で、イエスは、「あなたがたは、世界の光です。…また、あかりをつけて、それを枘の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。(マタイ 5:14-15)」と言われました。ですから、あなたの人生が実を結ぶということは、あなたのまわりの世界の光となることです。しかし、もしあなたが、まわりの世界と同じように生活し、まわりの世界の関心があなたの関心と同じなのであれば、世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望がはいり込んでいるのであれば、あなたは、物質的な生活より霊的な生活が優れていることの模範として輝いていないのです。「隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。(4:22)」イエスが黙示録の中で、それぞれの教会に対し語られた時、それぞれの教会に対しイエスは、「わたしは、あなたの行ないを知っている。」と言われました。実に矢で刺すような言葉ですね。「わたしは、あなたの行ないを知っている。」「隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。聞く耳のある者は聞きなさい。(4:22-23)」ここで、また繰り返されていますね。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

「また彼らに言われた。『聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあ

げるその量で、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。』(4:24-25) 」つまり、聞く耳のある者は聞きなさい。けれども、聞いていることによく注意しなさい、ということです。これは現在によく当てはまります。「聞いていることによく注意しなさい。」人は、「心を開いておきたい。みんなの意見を聞きたいのだ。」と言います。おや、おや、それではあなたは、目立ちますね。人は、あなたのことを探していますよ。くだらないものをあなたの思いにどさっと落とそうとしています。聞いていることによく注意しなさい。注意しなさい。また、量るのに注意しなさい。人に量ってあげるその量で、自分にも量り与えられます。

「また言われた。『神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き…(4:26-27) 」これは、寝て、起き、寝て、というふうにより一日一日が過ぎて行く過程です。「種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。(4:27)」蒔かれた神のみことばは、すばらしいものです。時間が経つと、私たちは変わって、変化します。日々私たちがみことばを受けると、変化が起こって行きます。そして、時が経つと、私たちがみことばを読んでいるうちに実が結ばれます。基本的に、これが、ここカルバリー・チャペルの奉仕の原則です。神のみことばをひたすら教えることです。種を蒔くことです。時が経ち、過ぎてゆくと、種が実を結ぶようになります。あたりを見回して、「見てください。すごいでしょ。」と言うのです。これは、ただ、神のみことばを人の心に蒔き、蒔き続けた結果、知らないうちに成長していることです。さて、種に面白いことがありますして、それは、種の中にDNAの分子があることです。種の中のDNAの分子の中に、この種の植物に似たものを新たにつくるための、コード化された情報がすべて、コード化された情報がすべてあるのです。でも、そこにある命が、DNAが、そこにある情報が、新たな生命と生態を生み出すのです。それは、美しい花かもしれませんし、雑草かもしれません。桃の木かもしれません。種には、生み出すためのコード化された情報があります。私にとってすばらしいことは、種である神のみことばにコード化されたすべての情報が入っており、みなさんの心に蒔かれると、みなさんをイエスの

ようにすることです。そして、神のみことばが入ると、そこに変化を起こす力があるので、みことばによってみなさんはイエス・キリストの姿に変えられます。ですから、人が地に種を蒔き、「夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実がはいります。実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです。(4:27-29)」それで人の心に神のみことばが蒔かれて、栄光に満ちた収穫の時になるのです。

「また言われた。『神の国は、どのようなものと言えよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう。(4:30)』神の国について、みなさんにお話したい。何になぞらえることができるか。何にたとえたらいいかと、たとえを出すために探しておられます。「それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。(4:31-32)」さて、このたとえには二つの解釈があって、互いにかなり違っています。マタイにあるこのたとえは、パン種のたとえと関係しています。イエスは、天の御国が、三サトン(訳者注:英語では三斤のパン)の粉を持っていた女が、パン種を取って、それにいれると全体がふくらんで来るようなものだとおっしゃっています(マタイ 13:33)。一つ目の解釈は、教会が始まる時は、調子がよくないということです。とても小さく、地に蒔かれる種のようなものであるのです。けれども、時間が経つと、教会の影響力が世界の中で大きくなり続け、ついには世界全体がキリスト教に改心するというものです。この解釈は、教会の中で、リベラル派の人たちに人気がありました。つまり、リベラル派が宣べ伝えていた社会的福音がほどなく地上に神の御国をもたらすことを唱道していたのです。イエス・キリストが御国を建設するために来られるのではなく、御国は、教会を通して建設されるのです。教会の影響力が次第に広がり、ついには世界全体がキリスト教の教会の影響力の下におかれるというものでした。このたとえについては、長い間この解釈が一般的でした。また、聖書講解者の多くもこの解釈をしてきました。けれども、この立場をとりますと、釈義上の不変

性をポイ捨てすることになります。というのは、証書、旧約聖書で、パン種は、決して何か良いものの型ではなく常に何か悪いものの型でした。実際パン種は腐敗を通してふくれるので、これは、腐敗しながら悪が広がる罪の型となっていました。イエスは、「パリサイ人のパン種には注意して気をつけなさい。(マタイ 16:6)」と言われましたが、これはパリサイ人の偽善についてお話になっていたのです。パウロは、たとえの形でパン種を用いて、「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。(ガラテヤ5:9)」と語り、悪を少しでも教会の中で許すと、教会を通して悪が浸透してしまうことを話しています。歴史的にみて、教会はイエス・キリストの真の証しになってきていないことに注意すべきです。私が大学にいたとき困ったことの一つに、歴史の中で教会が行なったことを教授たちが持ち出してくることがありました。キリスト教の名の下で、教会の名の下で行なわれた殺戮や、戦争、特定グループの人の皆殺しを持ち出されました。私が気付いた興味深いことは、教会が墮落するのにそんなに時間がかからなかったことです。アジアの7つの教会に対するイエスの教えを読むと、次のことがわかります。この教えが書かれたのは、教会が誕生して40年くらいしてからのこと、あるいは少なくとも60年くらいしてから、60年もたっていないころのことでした。60年のうちに、教会の証しがあまりにも退廃してしまったので、イエスは、7つあった教会のうち5つに対して非難を、厳しい非難をされました。彼らは、初めの愛から離れてしまいました(黙示録 2:4参照)。そして、様々な偽の(spurious)教えが教えられ行なわれていました。生きているとされていましたが、実は死んでいました(黙示録 3:1参照)。彼らは、みじめで、衰れで、盲目でした(黙示録 3:17参照)。60年のうちにそうなったのです。教会は、神が意図されていた教会ではなかったと、私は思います。パン種が教会に据えられてしまったと思います。紀元一世紀が終わる前に据えられて、教会を通して浸透しました。そして、現在でも、依然としてたくさんのパン種が教会にあります。悪を許容すると、全体のパンが悪で満ちるまで浸透してゆきます。これは私見ですが、イエスがここでおっしゃっているのは、きれいごと、教会の影響力が次第に世界に広まって世界がキリスト教に改宗することではありません。先にもお話ししましたが、聖書で鳥は、悪のときに使われています。そして、からしの陰の鳥は、良いものではありません。この陰は悪を隠しているのです。教

会史は、まさにそれでした。ただ、これはとても一般化して話しています。長い年月を通して、ずっと忠実な残された者がいたことを神に感謝します。(悪と)袂を分かち、神の御霊にきよめの働きをしていただいた人たちがいました。教会史を通して、常にそのような集団は、孤立し、しばしば主流の教会から遠ざけられてきました。しかし、神が人々の心の中で働き始められると、聖霊の御業、聖霊のきよめの御業が始められると、彼らはしっかりとイエス・キリストの証人となりました。けれども、残念なことに、神の御霊の動きがあるたびごとに、時間が経つと、その中に政治やその他のものが入り込んで、神の御霊の動きの全体の効果が阻害されてしまったことです。すると、神はそこから外へ出られ、また別の動きを始められました。7つの教会への教えの最後に、イエスは、「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいる。(黙示録 3:17 参照)」とおっしゃっていますが、イエスが外に置かれていて、中に入ろうとされていることは大切なことですので注目して下さい。ですから、これらのたとえから、私は、教会の影響力で、世界全体がイエス・キリストに来るようになり、緩やかな微妙な良い影響力が地上に浸透することによって私たちが神の御国を地上にもたらすようになることを見ることはできません。けれども、残念ながら、教会に浸透してくる影響力によって、世界に対しての教会の効力や証しが減るのです。先にも言いましたが、同じたとえでも色々な解釈があります。

「イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。(4:33)」さて、24節に戻ってください。「さらにその上に増し加えられます。(訳者注: 欽定訳は“unto you that hear shall more be given”となっており、「聞く者は、さらにその上に与えられる」となっています。)」とあります。神のことばを聞く耳があることは、すばらしいことです。神の真理を学びたい、聞きたいという願いがある人、聞く人には、さらに与えられるのです。そして、イエスは、このように多くのたとえで、「彼らの聞く力に応じて、みことばを話された」のです。イエスは、彼らが対処できる力に応じて、与えられたのです。イエスの宣教の終わりのほうで、弟子たちにイエスが最後にお話になったとき、「わたしには、あなた

がたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。(ヨハネ 16:12)」とおっしゃいました。イエスの死について、死による贖罪の価値については、彼らは耐えることができませんでした。イエスがご自分の死について語られるたびに、彼らは感情を害しました。気分を害して、話をそらせました。ですから、イエスは、他にも話すことがたくさんありましたが、彼らが対処できなかったので、話すことがおできになりませんでした。御霊に心を開いて、御霊に教えていただくことが大切です。御霊が神のみことばを教えようとなさっているのに、偏見や先入観のために私たちの心が閉じられてしまっていることがよくあります。ですから、もし私たちに聞く耳があるなら、さらに受けます。聞く人には、さらに与えられます。イエスは、彼らの聞く力に応じて、みことばを話されます。神は、私たちをみことばを聞く者とされます。聞く耳を下さいます。「たとえによらないで話されることはなかった。ただご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。(4:34)」公にはイエスはたとえをお使いになりました。弟子たちとだけになられたときに、たとえの真理を弟子たちに解き明かされました。

「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう。』と言われた。(4:35)」彼らは、カペナウムの地方にいました。そして、イエスは、小さい舟の上で教えておられていたわけですが、夕方になり、群衆が帰って行ったので、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われました。ガリラヤ湖の上端にいて、カペナウムを通り、向こう側のゲラサに行くのは、せいぜい小さい舟で5マイル(8km)の旅でした。全然遠くありませんでした。「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。(4:36)」イエスは舟から降りることもされず、おそらく乗ったままでお連れしたのでしょう。「他の舟もイエスについて行った。(4:36)」とありますから、一団となって湖の向こう岸へ向かって進み始めました。「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。(4:37)」2年前に私たちがイスラエルにいたとき、ガリラヤ湖が激しい嵐にみまわれました。波の高さは、10フィート(3m)から15フィート(4.5m)にもなりました。テベリヤの町に波が吹き付けました。小さな湖に大波が起こった結果、湖岸のホテルにかなり被害を及ぼし

ました。ガリラヤ湖は、海拔マイナス600フィート(180m)のところにあり、山に囲まれています。片側は、ゴラン高原、もう一方の側は、レバノンの山々になっています。極端な温度変化のために、激しい風が谷へ吹き下ろされ、湖を動かし、急に波がとても荒くなります。そのような風が吹き始め、湖が荒くなりました。突風が起こりました。舟は波をかぶり、舟は水でいっぱいになりました。そして、舟が沈み始めました。「ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。(4:38)」さて、舟の後ろの方には小さな台があり、通常は枕とかがあり、船長はそこでゆっくりしていました。舵手は前に何があるか見えるようにもう少し前にいました。イエスは、とものほうで、眠っておられました。それ自体、奇跡です。そのような海の状態で眠るのは、人によってはたやすいことではありません。私自身は、けっこう荒い海に行きましたが、寝心地が良かったです。ちょうど赤ちゃんが、ゆずられているようでした。イエスは、枕をして眠っておられました。弟子たちはイエスを起こしました。弟子たちは、狼狽していたに違いありません。そして、弟子たちは、イエスのことを非難して言いました。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。(4:38)」私たちの苦境を気にかけて下さらないのですか。私たちが大変な目に遭っているのに、あなたは平気なのですか。みなさんは、そのように主におっしゃったことはありませんか。主よ、私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。私たちの苦境にお気づきにならないのですか。主よ、どうなっているのかご存じではないのですか。あなたは、私たちをここで死なせてしまわれるのですか。これまでに何度も、私が呼んだときに、イエスは私のことを聞いて下さっていないと感じたことがありました。舟は水でいっぱいになっていました。絶対沈んでしまうと思ったことがありました。どういうわけか、私は沈んだりしませんでした。イエスは、決して私を沈ませたりはなさいません。沈みそうになったことはあります。舟が水でいっぱいなのを見たことがあります。しかし、主はいつも真実でした。私たちの信仰が試されるときがあります。信仰が試されることには価値があります。あなたは、どの程度主に信頼する気がありますか。どの程度まで行ったら、舟から飛び下りますか。

それで、イエスは起き上がって、まず風をしっかりとつけ、湖に「黙れ、静まれ。(4:39)」と言わ

れました。イエスは風をしっかりとつけられました。ここの言葉は、イエスが悪霊をしっかりとつけられたときと同じ言葉が使われています。イエスは風をしっかりとつけられました。そして、湖に「黙れ、静まれ。」と言われました。「すると風はやみ、大なぎになった。(4:39)」そして、イエスは、弟子たちをおしかりになりました。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。(4:49)」イエスにとって、それらの弟子たちとともに働くのはたやすいことではなかったことがお分かりになるでしょうか。弟子たちは、いつも真理を把握することができたとは限りませんでした。真理の中で、彼らが意図的に抵抗したものがかなりありました。イエスが十字架にかけられたときでさえ(訳者注:「復活された後でさえ」のことか?)そうでしたし、エマオへの途上をクレオパともう一人の弟子と歩いておられたとき、「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。(ルカ24:25)」と言われました。その時点でさえ、弟子たちは、すべてを信じず、心が鈍かったのです。イエスが教えられたのにそうでした。イエスにとって、それらの弟子たちといっしょに働くのは、みなさんと、また私といっしょに働くのと同じくらい、がっかりすることだったと想像できます。何度もイエスは、首を振って、「いったい、いつになったらわかるのかい。」とおっしゃることでしょう。「いつになったらわかるのです。信仰がないのは、どうしたことです。嵐のときに、なぜ狼狽しているのか。なぜ、沈む、沈没すると心配しているのですか。信仰がないのは、どうしたことです。どうしてそんなにこわがるのです。」と。私たちが狼狽しはじめるような状況に直面するたびに、こわくなり、気分を害し、イエスに対し、「主よ、起きて下さい。御覧下さい、こんなことになってしまいました。」と叫ぶのです。主は、状況を対処して下さるのですが、戻ってきて、「おや、どうしたのです。どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」とおっしゃいます。イエスは、ご自分の再臨について語られたとき、懸念を表されましたが、「人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。(ルカ18:8)」と言われました。それに関して、イエスは、懸念を表されました。「あなたの信仰はどこですか。信仰がないのは、どうしたことです。」と。

「彼らは大きな恐怖に包まれて。(4:41)」これは、違った種類の恐れです。彼らはイエスの

御力に畏怖の念を抱きました。これは、イエスの宣教の初めに起こったことでした。これは、ペテロが、イエスに、「あなたは、行ける神の御子キリスト(メシヤ)です。(マタイ 16:16)」と告白する前のことです。この時点で、彼らはそういう可能性があると考えていましたが、彼らはイエスのものすごい御力が分かり始めるのです。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。(4:41)」風に命令することを想像してみてください。「恥知らずめ。止まれ。」イエスは風をおしかりになったのです。そして、荒れ狂う波に対し、「黙れ、静まれ。」とおっしゃいました。そして、即座に風が止み、鏡のように静かな海になりました。いったいこの方はどういう方なのだろう。イエスは、神の御子です。イエスは、受肉された神でした。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。ことばは人(肉)となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子として栄光である。この方は恵みをまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:1、3、14) 」人を超えた方です。神の御子なのです。「聞く耳のある者は聞きなさい。」聞く耳のある者は、さらに与えられます。聞く耳のない者は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。何と厳粛な、恐ろしい警告でしょう。神は私たちに聞く耳を下さいます。

マルコの福音書5章(Mark5)(#8033)

マルコの福音書5章を開きましょう。イエスと弟子たちは舟で、ガリラヤ湖の上の端カペナウムからゲラサ人の地に行きました。ガド族はヨルダンの東岸に定住していました。ゴラン高原から南のヤボク川の地方が、ガド族の土地でした。ですから、この地方全体は、ゲラサ人の地として知られていました。マタイは、イエスが実際お着きになったのはガダラ人の地だと語っていますが(マタイ 8:28)、ガリラヤ湖の西側全体はゲラサ人の地でした。それでマルコは、イエスがゲラサ人の地におられたと語っています。「イエスが舟から上がられると、すぐに、汚れた霊につかれた人が墓場から出て来て、イエスを迎えた。(5:2)」さて、聖書では特にマルコの福音書で、汚れた霊や悪霊、または「悪霊につかれている人」と呼ばれていたもの対しイエスが持っておられた力のことが強調されています。ここのギリシャ語の言葉はデモナイズド(demonized)です。(訳者注:ギリシャ語読みは「ダイモニゾマイ」)悪霊(demon)の起源が何であるかは憶測や意見でしかわかりません。多くの人の考えは、— おそらく正しい考えだと思いますが — 悪霊は、自分の領域を守らずに、神に対するサタンの反逆に加わった御使いであるというものです。この被造物のサタンに関して聖書が教えています。天使の中で高い位を持ち、高い階級の御使いでした。サタンはケルビム級だったのです。ケルビムが神の御座の回りにいる天使であることは確かです。エゼキエルから、「油そそがれた守護者ケルブ(エゼキエル 28:14)」と呼ばれました。サタンは神に反逆したとき、黙示録12章によると、この反逆において、「天の星の三分の一を引き寄せ(12:4)」たようです。これは天使の別の言い方です。覚えていらっしゃるでしょうか、神が地の基を定めたときに明けの星々、すなわち、天使が共に喜び歌いました。(ヨブ38:4、7参照)ですからサタンは、天の星の三分の一を引き寄せました。従って、サタンが神に反逆したとき天使の三分の一がサタンの反逆に加わったと推測できます。そして自分の領域を守らずに、さばきの日ために束縛をもって閉じ込められている御使いがいることがわかって

いますから、(ユダ6) それでこれらの悪霊は、実は墮落した御使いであり、体のない霊だが体を破壊するために自分が宿る体を求めていると一般に信じられています。ですから、決して良い目的のためではなく悪の目的のためだけに宿ります。聖書では、ギリシャ語で誰も「悪霊につかかれていた(demon possessed)」とは決して言っていません。使われている言葉は、「悪霊化していた(demonized)」でした。これは、悪霊が体の運動機能を支配することができることを示すものです。悪霊は、意識のある精神と体の運動機能の間のどこかに入り込み、その人の体を乗っ取り、その人を通して話すことができます。そして、悪霊は運動機能を支配することができて、支配している時はその人に超自然的な力と超自然的な能力が付与されることが多くあるようです。大抵は悪霊はアブソ(底知れぬ所)と呼ばれている所に閉じ込められています。黙示録を読みますと、大患難時代に底知れぬ穴を開くかぎを持っている御使いが下って来てこの穴を開くと、こうしたたくさんの悪霊が大患難時代に地球を侵略するのです。(黙示9参照)

今日では、特に宣教師から悪霊に遭遇したという話があります。今週生涯をボリビアで宣教師として過ごした人に会うことになっていますので、楽しみです。この人の父親はそこで宣教師をしていた人で、この人はお父さんの仕事を受け継ぎました。この人は緑の丘の国ボリビアで優れた仕事をし、福音をセラノイ・インディアンに伝えました。ジャック・アンダーソンは、ジャングルに行くと何度も悪霊が人の形で出現することや、ボリビアのジャングルで原始的な生活をしている人々の間に悪霊の活動がどれほど広がっているかを話しています。さて、私たちのもっと洗練された社会でも、依然として悪霊につかれた(demonized)人に遭遇します。多くの場合人間の方が霊の世界の扉を開きます。よく、こっくり板(Ouija board)を通してそれを行ないます。よく霊の案内人を求めて霊の世界の扉を開きます。多くの有名な作家が、文章を書いたときに霊の案内人が導いてくれて、自動書記をしたと言います。霊の案内人がやったと言うのです。面白いのは、公立学校に通っている子供たちさえが、瞑想することや、自己の中にいる人をどうすれば発見できるか、また困難な時に導きや行くべき道を示してもらうために、どのようにその自己の中にいる人を探せば良いかを教

えられます。ですから、私たち米国にいる者は一層クリスチャンでなくなりつつあります。異教の侵略は上手に公立学校や公的な生活を攻略しました。個人の中にさらに悪魔的な力が現れているのが見受けられますが、将来もそれはさらに増すでしょう。ですからこの場合のように、悪魔的な力がある個人を完全にのっつてしまうと、先に申し上げたように、その目的は常に悪で破壊的なのですが、その人は扉を開いてもどこへつながっているかわからないことが多いのです。それで余りに深入りして、乱れた霊に体がつかれて、もう自分を支配することがなくなるのです。

「イエスが舟から上がられると、すぐに、汚れた霊につかれた人が墓場から出て来て、イエスを迎えた。この人は墓場に住みついており、もはやだれも、鎖をもってしても、彼をつないでおくことができなかつた。(5:2-3)」この人は超自然的な力を持っていました。鎖をもってしてもつないでおくことができませんでした。「彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまったからで(5:4)」超自然的な力、悪魔的な力でした。「足かせも砕いてしまったからで、だれにも彼を押さえるだけの力がなかつたのである。(5:4)」マタイの福音書によると、実に彼は、ひどく狂暴で、人々はその道を通れないほどでありました。(マタイ 8:28 参照)「それで彼は、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた。(5:5)」今日イスラエルを旅行すると、最近の遺跡発掘によって、ガリラヤ湖の北東部湖岸にこのゲラサ人の町が発掘されました。おそらく、ベツサイダからやや南、3マイル(4.8km)から4マイル(6.4km)離れたところであると思われます。近くの山には洞穴があります。この洞窟に、この人、無論マタイは二人いたと言っていますので、この有名な方の方が住んでいたと思われます。洞窟から下がった近くの丘には、唯一ガリラヤ湖につながっている険しい所があります。ガリラヤ湖一帯は湖にむかって緩やかな斜面になっていますが、ガリラヤ湖につながっている唯一険しい絶壁があります。ですから、ガリラヤ湖を散策すると、この特定の出来事が起こった所がどこかだいたいわかります。マルコが描写してくれている情景を思い浮かべることができるでしょうか。この人の人生はどうしようもない状態にありました。昼も夜も嘆き叫び、人々は山にいるこの人の声を聞くこと

ができました。自分の体を石で傷つけていました。見るのも、聞くのもひどい光景でした。「彼がイエスを遠くから見つけ、(5:6)」小舟で来られるのを見ました。「駆け寄って来てイエスを拝し」ました。悪霊がイエスに気がついたのは、面白いですね。反抗していたのにもかかわらず、イエスのことを礼拝するのを強いられていました。「大声で叫んで言った。『いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。』(5:7)」マルコは私たちに、悪霊がイエスを知っていたことを教えています。悪霊はイエスが誰であるかを知っていたので、イエスは普通悪霊に黙るようにお命じになりました。会堂の中で悪霊にとりつかれていた男は、「私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。(1:24)」と言いました。悪霊はイエスが誰であるがわかっていました。ここでは悪霊は、イエスをいと高き神の子と呼んでいます。この肩書きは、ガブリエルがイエスのことをマリヤに話したときに使われたものです。「神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。(5:7)」さて、ルカの福音書によりますと、「アブソ(底知れぬ所)に行け、とはお命じになりませんようにと願った。(ルカ8:31)」とあります。悪霊は、もう少しこの地上で自由にしたいことを願いました。「アブソ(底知れぬ所)に行け、とはお命じになりませんように。」

「それは、イエスが、『汚れた霊よ。この人から出て行け。』と言われたからである。それで、『おまえの名は何か。』とお尋ねになると、『私の名はレギオンです。私たちは大ぜいですから。』と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した。ところで、その山腹に、豚の大群が飼ってあった。(5:8-10)」ガリラヤは、異邦人のガリラヤと呼ばれていましたが、律法によると豚は汚れた肉でした。イスラエルの民は、豚肉を食べてはいけませんでした。勿論これは食事に関する律法でした。長い年月を経て、なぜ神がこのようなことを食事に関する律法に盛り込まれたかの理由がわかっています。豚肉には特定の虫がいて、十分に調理しないと、必ずしも虫が死なずに孤虫症(訳者注:sparganosis「擬葉目、裂頭条虫科の種類の幼虫期のものが人体に侵入、寄生するものを言う。」[医学大辞典。医歯薬出版(株)。483頁])を起こしてしまいます。ですから、神は、食べる前に云々

の温度で調理しなさいと言うのではなく、豚肉を食べないようにと律法に盛り込まれました。そこで実際起こっていたのは、モーセの律法によると、不法な産業が営まれていたのです。養豚が行なわれていたのです。「彼らはイエスに願って言った。『私たちが豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください。』(5:12)」自分の犬が悪霊にとりつかれていると思った人を知っていますが、ここで面白いのは、たとえ豚でも肉体をとることを求めたことです。「イエスがそれを許されたので、汚れた霊どもは出て行って、豚に乗り移った。すると、二千匹ほどの豚の群れが、陰しいがけを駆け降り、湖へなだれ落ちて、湖におぼれてしまった。(5:13)」それは、人に二千の悪霊がいたことを示しているのではなく、数匹の豚がパニック状態に陥れば群れ全体が駆け出すのです。それで悪霊が豚に乗り移ると、駆け出しました。豚は悪霊に入られたくなかったので、湖におぼれてしまいました。

「豚を飼っていた者たちは逃げ出して町や、」町はここからわずか 1.5 マイル(2.4km)から 2 マイル(3.2km)のところ。「村々でこの事を告げ知らせた。人々は何事が起こったのかと見にやって来た。そして、イエスのところに来て、悪霊につかれていた人、すなわちレギオンを宿していた人が、着物を着て、正気に返ってすわっているのを見て、恐ろしくなった。(5:14-15)」何という対比でしょう。よみの力によって支配されていた人は狂人でした。自分を制することができませんでした。みじめで、泣き叫んで、自分のからだを石で傷つけていました。狂暴でした。今は、自分を制して、座って、着物を着て、正気になっていました。このような変化に、人々は本当に喜んだと思いませんか。ひどく苦しめられていた人がいまや正気になり、もはや地域社会にとって脅威ではなくなり、鎖でつながれる必要もなくなり、どっちみち鎖ではつないでおけなかったのですから、自然な反応だったらとてもわくわくするのではないのでしょうか。「見ていた人たちが、」つまり豚を飼っていた人たちが、「悪霊につかれていた人に起こったことや、豚のことを、つぶさに彼らに話して聞かせた。すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださるよう願った。(5:16-17)」「出て行ってもらえませんか。」とは何たる反応でしょうか。この人の必要より、自分たちの豚のことを考えていたことは悲劇です。動物の必要を人の必要より上に置きました。考えられないことです。人よ

りも動物を大事にする人とはどのような人でしょうか。私たちは自然を人の上に置く、神のない概念に戻っているようですね。パウロが伝えているように、「造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。(ローマ 1:25) 」

「すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださるよう願った。それでイエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人が、お供をしたいとイエスに願った。(5:17-18) 」このことは理解できます。私なら、自分より豚のことを大事にする人の回りで暮らしたくありません。そのような社会あるいは地域社会には、住みたくありません。「しかし、お許しにならないで、彼にこう言われた。『あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、そんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。』そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で、…」これはガリラヤ上部の10の都市のことですが、「…言い広め始めた。人々はみな驚いた。(5:19-20) 」さて、おもしろいのは、次の章の53節で、イエスがまた湖をお渡りになっています。ゲラサ人の地、ゲネサレの地に、ゲネサレの地あたりに来られています。舟から降り、岸に上がられると、すぐに人はイエスのことを気づきました。この人は、うまくイエスのことを言い広めました。人々はイエスのことを知っていました。ここに悪霊に対抗するイエスの力を現す興味深い話があるのです。

「イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、…」人々は立ち去るように願ったので、ガダラの地、あるいはゲラサ人の地を去り、カペナウムの地方に戻ってきました。「イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、大ぜいの人の群れがみもとに集まった。イエスは岸べにおられた。すると、会堂管理者のひとりでヤイロという者が来て、イエスを見て、その足もとにひれ伏し、…(5:21-22) 」さて、イエスは、カペナウムで様々な機会に会堂に出席されました。マルコの福音書1章で、安息日に、カペナウムの会堂でイエスは、悪霊につかれた人をお救いになりました。3章で、イエスは、手のなえた人をカペナウムの会堂でお癒しになりました。このために、指導者(rulers)やパリサイ人らは、イエスを葬り去る決心をしました。イエ

スが安息日に癒しをして、ユダヤ人と宗教指導者によって造られた安息日のしきたりを守っていなかったのを、会堂管理者(rulers)のひとりであったヤイロが、イエスに対し腹を立て気分を害した可能性がかなり高かったと言えます。宗教指導者と同じで、ヤイロもイエスに対し偏見を持っていました。しかし、ヤイロには今問題がありました。ヤイロの小さい一人っ子の娘が死にかけていました。ヤイロは、唯一助けることができる方を知っていました。それは、イエスでした。神は愛ゆえに、私たちがどうしようもない状況に入ることをお許しになり、私たちが無理やりイエスのところへ行くようになさることがよくあると思います。B. M. マックスウェル著の「キリストへと押しやられる(Crowded to Christ)」という題の本がありますが、この本のテーマは、神が様々な状況を用いて、私たちに圧力をかけ、キリストへと押しやられることがよくあるというものです。そこでは、キリストしか私たちを助けることができないのです。キリストのみが私たちが直面している災難から救うことができになるのです。私たちがキリストへと押しやられるために、私たちが方向転換させるために、神がよくそのような状況をお使いになります。ヤイロもこのようなケースでした。希望がありませんでした。小さい娘は死にかかっていた。ヤイロは、イエスの力を見たことがありました。ヤイロは、奇跡を見ました。ヤイロにとって唯一の希望は、イエスが自分の家に来て、自分の小さい娘にさわって下さることでした。このため、ヤイロは偏見に逆らい、宗教指導者に共通してあった態度に逆らって、あえて彼らのイエスに対する反感に反して、自分の小さい娘を助けるために、イエスの所に来ました。ヤイロに関して言えば、自分の娘は他の誰よりも大事でした。それでヤイロは、イエスがもし彼女を助けることができれば、主に来ていただき自分の小さい娘を癒していただくために、自分の宗教上の誇りを捨ててイエスの足元に平伏する用意がありました。

何年か前に、それは私が初めて牧会をしたときでしたから、何年も、何年も、何年も前のことになりますが、1948年にさかのぼります。私たちは、アリゾナ州プレスコットで初めて牧会をしました。ある婦人が電話をかけてきました。私たちは知らない人でしたが、その人の名前はアリー・ゴルフでした。彼女は私たちに、アリゾナ・ウイスタル病院という退役軍人

病院にいる、結核で死にかかっている彼女の息子に会いに来てもらえないかと頼みました。そこは、結核患者のサナトリウムのような場所でした。私は、「勿論、行って会わせていただきます。」と言いました。彼女は、「いえ、いえ、まだ行かないで下さい。彼は、神に激しい苦みを持っています。今行けば、あなたを罵ったり、ひどい事を言うのではないかと心配です。ただ、準備をお願いします。いつか彼が機嫌のよいときに、この時だと思ふ時に電話しますから、その時に来ていただけませんか。」と言いました。私は彼女に、彼が腹を立てて私を罵ってもかまわない、いつでも喜んで行かせてもらいますと言いました。その日の午後、彼女はまた電話をかけてきて、「スミス先生、今日の午後行っていただかなければなりません。医者は、明日まで持たないと言っています。ですからこれが最後のチャンスです。」と言いました。それで私は、ウイスタル病院に出かけ、この青年の病室に行きました。その当時30代の前半だったでしょう。彼は、ガリガリに痩せていて喘いでいましたが、意識はとても鮮明でした。それで、私は彼に語りかけ、彼との関係を築きました。そして、彼にイエスについて、彼が自分の人生をイエス・キリストに明け渡す必要について話し始めました。彼は自分の経歴を話し始めました。彼の父親はペンテコステ派の説教者でした。彼は完全に神に反抗し、家族にも反抗しました。彼は、ミシガン州デトロイトのパープル・ギャング(訳者注:暴力団の一種か?)に関わるようになり、犯罪に深く手を染めました。彼は、「私は、一年前体重が135ポンド(61.2kg)だったのに、今の私を見て下さい。おそらく、110ポンド(50kg)くらいだと思います。」と言いました。結核が、彼のいのちを吸い出していました。彼は、「このような状態でイエス・キリストを受け入れれば、弱虫になってしまう。」と言いました。「もしまだ強くて健康なら、話しは別だが、弱虫になってしまう。私は弱虫ではない。」と言いました。私は、「ハワードさん。神は、あなたが知り尽くせないほどあなたのことを愛しているのですよ。神は、あなたを罪から贖うためにご自分の御子をお遣わしになりました。神は、あなたが自分のことを知っているよりもあなたのことをよくご存じです。神は、あなたが強く健康である限り、あなたは神に対して反抗し続けることをご存じでした。神は、あなたを愛して下さっているので、とても愛して下さっているので、あなたが神に自分の人生を明け渡す唯一の方法は、このような死に直面するような状況に置くことだということを知っておられたという

ことがわかりますか。あなたが、あまりにもどうしようもない状況のために神の方を向くことを知っておられたのです。ひょっとすると、これはあなたに対する大いなる愛のもう一つのしるしかもしれませんよ。神は、あなたのことを本当に救いたいと考えておられるので、もうどうしようもない状態だから神に助けを求めようにするために、神は、あなたがこのような状況になるのをお許しになったのです。」と言いました。彼はずっと黙って、私を注意深く調べました。そして彼の顔が笑みでほころび、「チャック、あなたの言うとおりだ。」と言いました。私は、彼の手を取り、彼がイエス・キリストを彼の心に、人生に、受け入れたとき、私はいっしょに祈りました。

神は私たちをご存知なので、私たちが神の方向を向くには、私たちがどうしようもない窮地に立たせなければならないことが時としてあるのです。これは、ある意味で悲しいことです。どちらかといえば私は、強く健康体のときに主の所に行きたいです。人によっては余りに頑固なので、神がご自身に、ご自分の愛にその人を近づけるために、思い切った手段を用いなければならないのは悲しいことです。ヤイロの場合は、そのようなケースの一つでした。どうしようもない状態でなければ、ヤイロはイエスの所には決して来なかったでしょう。それで、主は、ヤイロがもっとも愛している者に触れなければなりません。それは、ヤイロの大事な小さい娘でした。彼女は12歳で、ヤイロの人生に大きな喜びと幸福をもたらしてくれました。可愛い少女の父親になるとはどういうことなのか、私にはよくわかります。その娘のためには自分のいのちをも惜しみません。大いなる喜びです。もちろん、息子たちもすばらしいです。母親は、自分の息子たちに自分のいのちを惜しみません。もし、父親と娘の間に関係があるなら、それは特別な関係です。(訳者注:A 面からB面に変わる所で、途中で少し抜けているような感じです。) 神は、ヤイロが最も愛している者に触れられました。ヤイロは必死でした。余りにも必死だったので、自分の立場を危うくしてでもイエスの所に来る気がありました。おそらく、この体験の後、会堂管理者でいることはなかったでしょう。パリサイ人は、誰でもイエスがメシヤであると主張する者がいれば、会堂から追い出すと決定していたので、ヤイロはおそらく会堂から追い出されたのでしょう。しかし、もうそんなこと

は関係ありませんでした。ヤイロは必死でした。ヤイロの関心事は、自分の小さい娘が死にかけている事でした。この時点で、唯一彼女を救うことができる可能性があったのはイエスでした。それでヤイロは、イエスに一生懸命願いました。とてもおもしろいですね。ヤイロは、イエスに懇願しました。必死になってイエスに懇願して言いました。「私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。娘が直って助かるようにしてください。(5:23)」ヤイロには、イエスがさわって下さるなら、それが自分の小さい娘を死の扉から、死から救うことができるという信仰がありました。

私たちが主のおできになることに、よく限界を設けてしまうことも変ですね。主が働いて下さる時間の枠組みを私たちの方から設定してしまうのです。多くの場合、主は私たちの時間の枠組みの中で働いて下さらないのです。それで私たちはがっかりし、「主よ。機会があったのに。主よ、なぜ、働いて下さらなかったのですか。4時ではなかった。主よ、遅すぎます。」と言います。自分の頭の中に主が働いて下さることのできる時間の枠組みが設定されていて、その後なら遅すぎるといわけです。「機会を棒に振った。」ということになります。兄弟ラザロに関してのマリヤとマルタの態度は確かにそうでした。「主よ。早くお越し下さい。あなたが愛しておられる者が病気で。(ヨハネ 11 章参照)」と伝言を送ったのに、イエスがおそらく6日間来られませんでした。使いがヨルダン川に行くのに2日かかり、イエスが戻ってこられるのに2日かかりますが、イエスはベタニヤに向かって出発されるまでに伝言を受取ってから2日ヨルダン川でお待ちになったからです。ですから、イエスが到着されたころには、すでに遅すぎたのです。「主よ。もしここにいて下さったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。(ヨハネ 11:21)遅すぎます。もう墓の中に入れられて四日もたっています。なぜ、そんなに時間がかかったのですか。」私たちは、神が私たちの祈りになかなか答えて下さらないと思うことが時々あります。なぜ神は、私たちの叫びにすぐ答えて下さらないのでしょうか。多くの場合は、私たちが実際求めているよりも神がもっと私たちに与えようとされているから、というのが遅い理由です。主は、ヤイロの家に行くことを遅らせられました。その間に使いの者が来て、「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わ

すことがありましよう。(5:35)」と言いました。ヤイロは、自分の娘が死なないようにイエスが間に合って、娘の上に手を置いて下さることを期待していました。しかし伝言は、彼女が死んだというものでした。「主よ。遅すぎました。」これから読んでいきますが、主は、決して遅すぎることはない、とおっしゃっています。主のタイミングはいつも完璧です。ヤイロはイエスに懇願しました。自分の信仰を表明しました。「あなたが、たださわって下されば、娘は生きます。あなたが、ただ触って下されば、直ります。」と。

「そこで、イエスは彼といっしょに出かけられたが、多くの群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った。(5:24)」ちょうどイエスが群衆を解散させようとしておられた瞬間、群衆に「もうついてきてはいけない。」とおっしゃろうとしていた瞬間、群衆なしに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネとその父と旅を続けようとしておられた時に、その時に群衆を解散させることもできたのです。しかしマルコによると、イエスは、群衆が押し合いへし合いするのをお許しになりました。周りにいた群衆がイエスに押し迫るのをお許しになりました。群衆が押し迫っている時に動くのは大変です。みんなが近づこうとしていました。みんながつかまえようとしていました。マルコの福音書3章では、イエスをさわった者が病気や疫病から癒されたとあるので、イエスにたださわれば癒されるという噂が広まっていた。どこへ行っても、人々が手を延ばしてきて触ろうとし、押し迫ってきて、押し合いへし合いするのが想像できるでしょうか。この状況が余りにひどく、食事をする時間ありませんでした。イエス自身の家族は、イエスが気がふれたのかと思いました。頭がおかしくなってしまった、働き過ぎで変になってしまったと。それで、家族は、イエスを群衆から救おうとやってきました。しかし、イエスはその救助を断られました。ですから、イエスがヤイロの家の方に向かわれたとき、この父親が不安だったことが想像できます。下がれ、場所をあける、この方を通してくれ、と言ったことが想像できます。それでも人々はイエスに押し迫っていました。イエスがお歩きになっているところを、つかもうとしていました。「ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。(5:25)」と書かれています。この女は人々が押し迫っている中、イエスの近くまで行きました。この女は多くの医者の方に行き、持ち物をみな使い果たしてしまっていました。それなのに、

状態は悪化するばかりでした。この女がイエスのことを聞くと、「イエスをさわれば癒される」と聞いたに違いありません。それで、この女は、「群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物を握った、さわった。(5:27参照)」そのギリシャ語の言葉は強い言い回しで、つかまえた、握った、ひつつかんだということです。「『お着物にさわることでもできれば、きっと直る。』と考えていたからである。(5:28)」

さて、両者共にイエスに対する信仰を表明しています。一人は、イエスが自分の小さい娘にさわりさえすれば、きっと娘は直ると考えていました。もう一人の信仰は、自分がイエスにさわることでもできれば、きっと直るというものでした。今朝指摘しましたように、レビ記15章に、血の漏出物がある女に関する律法があります。生理の期間が過ぎても出血がある場合、出血している間中その女は汚れていると考えられていました。そのような状態では、神を礼拝するために聖所に入ることができませんでした。この状態において、だれでもその女に触れる者は、洗いの儀式を行なうまで、神を礼拝するために宮に入ってくる資格がなくなりました。そのような状態で、その女が寝た寝床に触れる者もみな汚れ、神を礼拝するためには水浴の儀式をしなければなりませんでした。誰でもこの女の座った椅子に触れれば、その人は汚れて、礼拝のために宮に入るためには、水浴の儀式をしなければなりませんでした。これは酷いことで、女は人の周りにいることができなくなり、家族や神から村八分にされました。しかも12年間もです。今や彼女の状況はさらに悪化していました。状況の悪化により常に出血していることから、体力が弱まり彼女の死はそんなに遠いことではありませんでした。自分の体力は弱まっていたが、この女は決意を固めていました。イエスがこのようにたくさんの群衆に取り巻かれていても、この女が余りにも必死だったので、人を押してでも、突きのけてでも、ひじで押し分けてでも、イエスに十分近づいて手を延ばし、イエスの着物のへりにさわられるように押し分けて進みました。さわるとすぐに、癒されるのを感じました。出血が止まりました。彼女は感じることができました。すると、イエスは立ち止まって振り返り、「だれがわたしの着物にさわったのですか。(5:30)」と言われました。するとすぐに、女は自分の身に起こった事を知り、恐れおののきました。弟子たちはイエスに、「主よ。

『だれがわたしにさわったのか。』とは、どういう意味ですか。あなたは群衆に押され、突かれ、押し迫られているのですから、『だれがわたしにさわったのか。』とは、どういう意味ですか。』と言いました。いつもおもしろいのは、群衆は押しているように見えるのですが、中にはさわる人がいました。群衆の間でイエスを押しているのと、さわるとには、大きな違いがありました。イエスは、「いや、わたしのうちから力が外に出て行くのを感じたのだ。」と言われ、見回してその女をお探しになりました。イエスの目がその女を見据えたに違いありません。女はイエスをご存知であることに気がきました。それで、女は前に出て、自分の話を打ち明けました。12年間出血が続き、自分のお金を医者にすべて使い果たしてしまったが、かえって状況は悪くなる一方だった、と。イエスにさわることができれば直ると、この女は知っていました。「そこで、イエスは彼女にこう言われた。『娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。』(5:34)」

イエスが、「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」との慰めの言葉をかけておられると、この言葉をかけておられると、使いの者が到着しました。ヤイロはそこにいて、一部始終を見ていたのです。おそらく、とても不安になっていたでしょう。「主よ。早く。一刻の猶予も許しません。あなたはわかっていない。小さい娘は死にかけているのです。」と考えていたでしょう。しかし、イエスは話をお聞きになりました。ちょうどこの娘の誕生によって、いのちと喜びがこの家に到来したときに、この娘は12歳になっていましたが、12年前に、この女はじわじわと死に始めていたのです。しかし、今や事態は変わりました。女はすこやかになりました。イエスにさわったからです。イエスがまだこの女と話しておられるときに、使いの者がヤイロの所に来て、かなりぶしつけに、「あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生をわずらわすことがありましよう。」と言いました。遅すぎました。イエスは間に合いませんでした、と。「イエスは、その話のこぼれをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。『恐れなくて、ただ信じていなさい。』(5:36)」つまり、わたしを信じなさい、恐れなくて、わたしを信じなさい、と言われたのです。イエスは、だれも自分と一っしょに行くのをお許しになりませんでした。イエスは、

群衆を解散されました。イエスは、ペテロとヤコブとヨハネを連れて行かれました。おもしろいのは、特別な特権のためにこの3人がイエスに選ばれたことです。イエスが変貌の山におられたときに、イエスが連れて行かれたのもこの3人でした。イエスが弟子たちに祈るようにと命じられたゲッセマネの園で、イエスはペテロとヤコブとヨハネをもう少し近い所まで連れて行かれました。どうやら、この3人をご自分ともっと緊密に交わられたようです。彼らが奇跡を、人の子がいのちを与えることができることを見ることできるように連れて行かれました。

それで、父親と5人はいっしょにヤイロの家へ向かいました。家に近づくと、1ブロック離れたところから泣く声が聞こえました。人が死にそうになっていると、その人の友人や、その当時にはプロの泣き屋がいて、なくなった人のことを泣くために雇われてきた人がよくいました。それは共同体に対し、どれほど愛する者がなくなったことを嘆いているかを示すためでした。どれほど自分たちがその人を愛していたかを示すためでした。ですから、すでに泣くことが始まっていました。その泣き声は、1ブロック離れたところに届いていました。近所の人はみなこの病気だった少女がなくなったことを知っていました。ヤイロの心中を察することができます。がっかりしたでしょう。希望を失ったでしょう。「私の小さい娘は死んだ。」彼らが中に入っていくと、イエスは彼らに言われました。「なぜ取り乱して泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです。(5:39)」しかし、「人々はイエスをあざ笑った。(5:40)」人々は、「あなたは、自分の言っていることがわかっていないでしょう。」と、冷笑してあざけり、笑いました。おもしろいですね。感情は浅薄です。わずかの時間で、泣いたり叫んだりしている状態から、あざ笑いに変わることができます。イエスは、ただその子どもの父と母、ペテロとヤコブとヨハネだけを伴って、少女の遺体を置いている部屋に入っていく行かれました。イスラエルでは、今日でも人が死んだその日に遺体を埋葬するのが慣習となっています。防腐保蔵処置はありませんし、斎場に置いて人に来て見てもらうこともありませんし、葬式の日取りを3日先や5日先に設定することはありません。人がなくなると、その日に埋葬します。ですから、この少女の遺体も部屋に置かれていたのでしょう。イエスは、

弟子たちとその子の父と母と一緒に部屋に入って行かれました。そして、「その子どもの手を取って、(5:41)」それは、この子の父が望んでいた、ふれるという行為でした。「娘にさわっていただければ。」それでイエスは、「その子どもの手を取って、『タリタ、クミ。』と言われた。」「私の子羊よ。起きなさい。」という意味でした。すばらしいですね。「私の子羊よ。」アラム語がおそらくは家庭で話されていた言語だったのでしょう。おもしろいのは、使徒行伝で、ペテロがヨッパにある教会に召喚されました。教会の一員で、たくさん施しをする女で、多くの人に良いわざをしたドルカスがなくなったためでした。それで、人々は近くのルダにいるペテロを呼びにやり、来るように頼みました。ペテロがドルカスが横たわっている所に来た時、ペテロはイエスと同じ状況に立たされたことがあり、イエスが「タリタ、クミ。」「私の子羊よ。起きなさい。」と言われるのを聞いていましたから、ペテロはドルカスに、「タビタ、クミ。(使徒9:40参照)」と言いました。それで、うまくいきました。彼女は生き返りました。

「すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。12歳にもなっていたからである。(5:42)」彼らは、つまりお父さんお母さんとペテロとヤコブとヨハネはたちまち非常な驚きに包まれた。わかりますよね。そして、「イエスは、このことをだれにも知らせないようにと、きびしくお命じになり(5:43)」ました。イエスが民に対してご自分がメシヤであると明すのに、定められていた時がありました。ヨハネの福音書全体を通して、イエスは、「わたしの時はまだ来ていません。」と言われました。しかし、十字架につけられる日に近づくと、イエスは、「その時が来ました。(ヨハネ 12:23)」と言われました。イエスは、神の時をとて意識しておられました。イエスは、時期早尚にご自分でメシヤの役割を宣言したり、強引にメシヤの役割を果たしたりするようなことはなさりたくありませんでした。すべては神の時の内にあり、イエスが民に対してご自分がメシヤであると明す特別な日があったので、それが時期早尚に起こることをお許しになりませんでした。イエスが自分がメシヤであると明される時とは、私たちが普通棕櫚の聖日と呼んでいる日です。それは、十字架につけられる直前の日曜日のことです。ろばにお乗りになり、エルサレムに凱旋入城されたが、人々にあざけられ拒否されたのは、その日でした。しかし、イエスは、神がメシヤ登場に定められていた公式の

時を待っておられました。ですから、イエスは、このことをだれにも知らせないようにとおっしゃったのです。「さらに、少女に食事をさせるように言われた。(5:43)」のです。主はいつも私たちの必要を意識しておられます。少女を生き返らせたイエスは、少女に何か食べ物を与えるようにとおっしゃいました。イエスは、私たちにこのようにふれて下さるのです。人の人生にそれは大きな変化をもたらします。

それで、マルコは、イエスが影響を与えられたこれら3つの話をしています。悪霊に支配され、悪霊によって自分の人生を破壊された人に対し影響を与えられたこと、つまりこの人が闇の力から解放されたことと、出血していた女に対し影響を与えられたこと、つまり彼女の病気に対するイエスの力と、ヤイロの娘に影響を与えられたことです。それは、死に対するイエスの力でした。マルコは、私たちの主の栄光に満ちた力と、イエスがふれると起こる人生の変化を教えてください。私たち一人一人、今晚、イエスがふれて下さることがどういう意味だったかを証しすることができます。イエスがふれて下さったことで、どのような変化が起こったかを証しすることができます。

マルコの福音書6章(Mark6)(#8034)

私たちの聖書通読の学びは、6章まで来ました。「イエスはそこを去って、(6:1)」「そこ」とは、ガリラヤ湖、カペナウムの地方のことでしょう。「郷里に行かれた。(6:1)」それは、ナザレの地方、イエスの郷里のナザレの町のことだと思います。「弟子たちもついて行った。(6:1)」今朝も言いましたように、十二弟子だとは考えないようにしてください。群衆として考えて下さい。たくさんの弟子が、イエスに従っていたからです。そのような弟子たちの中から、弟子には男も女も含まれていましたが、その弟子たちの中から、イエスは使徒と呼ばれる12人をお選びになりました。後で、使徒行伝で読みますが、教会の組織編成のようなものがあり、というか、たぶん教会の組織作りがあったわけですが、何も編成するものがなかったので組織が作られたのです。彼らが聖霊を待っていた時に、ペテロが立ち上がり、「イスカリオテのユダの代わりになる人を用意する必要がある。」と言いました。それで、彼らは、最初から私たちと行動をとともにした者の中から、最初から参加していた弟子の中から、またイエスの復活の証人となる者から選ぼう、と言いました。そこで、二人を選び、主が選ばれているのはどちらかを知るためにくじを引きました。けれども、最初から行動をとともにした者は大勢いたのです。ですから、ここで「弟子たち」というと、ただ十二使徒だけではなく、十二使徒も含んだ広範囲の弟子の集団のことを言っています。それで、イエスは郷里のナザレに行かれました。

そして、こう書かれています。「安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。『この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。(6:2)』」ここの会堂に来られたという記述を、ルカの福音書の記述と混乱させてはいけません。ルカの福音書4章では、イエスがヨルダン川でヨハネからバプテスマをお受けになった後、御霊に導かれて荒野に行かれ、四十日間断食された後、サタンの誘惑をお受けになり、

ナザレにお戻りになりました。16節には、こう書かれています。「それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。(ルカ4:16-17) 」彼らはイエスにイザヤの巻き物を手渡し、イエスは、私たちの聖書の、この預言書の61章にあたる所をお開きになりました。そこにはこう書かれています。「『わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。』イエスは書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみなが目がイエスに注がれた。イエスは人々にこう言って話し始められた。『きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。』(ルカ4:18-21) 」ですから、メシヤに関する預言を読んだ後、イエスは、「きょう、聖書のこのみことばが、実現しました。」と宣言されました。この発表を彼らが聞き損ねたのはもちろん明らかですが、それは、イエスがメシヤであるというものでした。「みなイエスを証言し、その口から出てくる恵みのことばに驚いた。『この人は、ヨセフの子ではないか。』と彼らは言った。(ルカ4:22)」イエスはこの他にも言われましたが、彼らは恵みのことばとは解釈しませんでした。彼らは怒り、29節には、「立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。」とあります。イエスを崖から投げ落とそうとしたのでした。「しかしイエスは、彼らの真ん中を通り抜けて、行ってしまわれた。(ルカ4:30)」それからイエスは、カペナウムに下られ、そのガリラヤ湖周辺で宣教を始められました。さて、それからイエスは、ある程度の期間すでに宣教をされてました。イエスは、すばらしい神の御業を行なわれていました。実際イエスは、メシヤがなさることについてのイザヤの預言の通りのことをなさっていました。イエスは、貧しい人に福音を伝え、闇の力、汚れた霊に捕らわれていた人たちを解放し、多くのすばらしいわざを行なわれ、イエスの評判は広まっていました。そして、もはや無名の人物、重要でない人物としてではなく、すばらしい奇跡とすばらしいわざを行なう評判のある者として、ナザレに戻ってこられたのです。

そして、またいつもどおりに、安息日に会堂に入れ、また会堂で教え始められました。この時も人々はまた驚き、「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう。この人は大工ではありませんか。(6:2-3) 」人々は以前に、「この人は、ヨセフの子ではないか。」と言っていたのですが、ここでは、「この人は大工ではありませんか。」と述べています。人々はイエスのことを知っていて、よく知っていたことがつまづきになってしまいました。人々は、イエスを大工として知っていました。近所の人として知っていました。職人として知っていました。ひょっとすると、人々はイエスがお作りになったくびきとか、鋤、椅子、テーブルなどを買ったことがあったのかもしれませんが。「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、(6:3) 」ルカでは、人々は、「この人は、ヨセフの子ではないか。」と言っていました。ここでは、「マリヤの子」だと言っています。ひょっとすると、1回目にナザレに行った時と2回目の間にヨセフが亡くなったのかもしれませんが。しかし、イエスの名声や評判が広まり、イエスがなさっている素晴らしいことがナザレに伝わってくると、以前話されていた陰口が、イエスについてのいぶかりが持ち出された、と言う方が可能性が高いでしょう。つまり、マリヤとヨセフが結婚する前にマリヤが妊娠したこと、結婚後にすぐイエスが生まれたことで、今回は、「この人は、ヨセフの子ではないか。」ではなく、「マリヤの子で」と言ったのです。「兄弟たちも私たちとここに住んでいるではありませんか。」これで当然、マリヤが終身処女であったというカトリック教会の教義が弱まります。カトリック教会は、マリヤについていろいろな教義を確立しました。マリヤが、みなさんとイエスの間の仲介者の一人であるという教義があります。マリヤの仲介の務め(mediation ministry of Mary)です。マリヤの終身処女性(perpetual virginity of Mary)の教義。マリヤの無原罪の教義。これは、マリヤも罪がない状態で生まれたというものです。また、マリヤの被昇天の教義。つまり、マリヤが天国に昇天したというのですが、これはカトリック教会でかなり最近宣言された教義ですが、やや問題をきたしました。エルサレムのシオン山に美しい教会があつて、そこは聖マリヤ墳墓教会として知られていた教会でした。ですから、マリヤが墓に葬られたのではなく昇天したと決められた時、問題になってしまいました。終身処女性の教義は、「ヤコブ、ヨセ、ユダ、

シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。(6:3)」という発言によって打ち壊されます。彼らはまだその町に住んでいました。このために人々はずまずいて、困惑しました。(訳者注:それぞれの教義は、日本語で特定の神学用語になっていると思います。ビデオ化する前に調べた方がいいと思います。)

「イエスは、彼らに言われた。『預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。』(6:4)」イエスの兄弟たちは、イエスが死者からよみがえられた後になるまで、メシヤであることを信じなかったようです。それから兄弟のヤコブは、初代教会の主要な指導者の一人となりました。ゼベダイの子の一人で、ヨハネの兄弟ヤコブで、使徒ヤコブと呼ばれていた弟子のヤコブは、教会史のかなり早い段階で殉教しました。ヘロデが教会に対し手を伸ばし、ヤコブを斬首させましたが、それがユダヤ人の気に入ったのを見ると、ペテロをも投獄し、ヤコブにしたことと同じことをペテロにもしようとしました。しかし、ペテロは、祈りによって救われた、いや、主によって救われました。聖徒たちの祈りが関係あったかどうかわかりません。ペテロが戸を叩いたとき、彼らは信仰を持たずに祈っていました。ロダという少女が応対に出ると、「誰ですか。」と尋ねました。ペテロは、「ペテロです。中にいれて下さい。」と言いました。それで、ロダは、奥へ駆け込んでペテロのために祈っていた人たちに、「ペテロは門の外に立っています。」と知らせると、彼らは、「冗談だろう。幽霊だ。ペテロであるはずはない。ペテロは、牢屋にいるのだから。」と言いました。ペテロを出獄できたのは、彼らの信仰によってでないことは確かです。ですから、ヨハネの兄弟ヤコブは、教会史のとても早い段階で殉教しましたが、もう一人別のヤコブが立たされ、第一回教会会議の議長のような役割を果たしました。そのヤコブが、アンテオケの異邦人に対して送られた教会会議の決議を出しました。そして、この人は、自分の名前で書簡を書いたヤコブです。新約聖書の最後の方にあるヤコブの手紙は、イエスの兄弟のヤコブが書いたものです。ヨセフがヤコブの父ですから、厳密に言うと彼はイエスの半兄弟でした。そして、短いユダの手紙のユダは、ヤコブの兄弟でした。ですから、イエスの復活の後に彼らは信者となり、弟子となり、初代教会の指導者となったのです。しかし、イエスを良く知っていたので、彼ら

はイエスを知っていると思っていたので、それが彼らのつまづきとなりました。それは困難なことで、彼らにとってつまづきの石となりました。

「イエスは、彼らに言われた。(6:4) 」いや、(訳者注:チャックは、4節を読み始めましたが、実は5節を読むつもりだったようです。)」それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。(6:5) 」さて、彼らに信仰がなかったために、それがイエスの力を邪魔したというではありませんでした。神は、ご自身の力によって主権をもって働くことができになります。彼らに信仰がなかったために、神がお働きになる力が妨げられたとか、制限されたというではありません。そうではなく、彼らの不信仰のために、彼らが助けを求めてイエスのところに来ることができなかったのです。もしイエスのところに来る信仰さえあれば、ナザレで何人の人が助かったのでしょうか。もしイエスのところに連れてくる信仰さえあれば、素晴らしいわざを見ることができたのです。しかし、不信仰のために、イエスのところに来れなかったのです。現在でもそうです。不信仰によって人々は、イエスのもとに来さえすれば体験して知ることのできる、素晴らしい神の御業を自分たちの中で見ることができないのです。「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。(6:6) 」彼らは、イエスが行なわれていたわざを聞き、知っていました。それに、ヨセフがイエスの父ではないということから、さらにイエスがメシヤであるとの確証が強まったはずでした。なぜなら預言者イザヤが、「主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。処女がみごもっている。そして男の子を生む。その名はインマヌエルと呼ばれる。訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。(イザヤ 7:14 とマタイ 1:23 参照) 」と言ったからです。彼らは、イエスが約束された処女の息子である、人々の間に住まれた神である、と悟るべきだったのです。「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。」不信仰は、良い意味でなくて面白い意味で、驚きであることが多いのです。驚きです。なぜ人は信じないのでしょうか。何が信じることを阻んでいるのでしょうか。イエスを信じることによって得るものがたくさんあるのに、なぜ人は信じないのでしょうか。このように証拠があるし、イエス・キリストの力によって人生が変えられた証人が、何千人、何万人もいるのに、なぜ人は依然として信

じないのでしょうか。なぜ人々は、イエスのことを滅ぼしたいほど反対するのでしょうか。これは通常、受け身的なものではないのです。イエスについてはどうも受け身的でいるのが大変なようです。イエスのことを熱狂的に愛しているか、それとも強く否定的な態度であるかどちらかです。「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。」

「それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。また、十二弟子を呼び、(6:6-7) 」これは、イエスが使徒として選ばれた12人のことです。「ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。(6:7) 」さてこれからは、福音と神の御業がさらに広められることになりました。イエスは、使徒たちをふたりずつ遣わされました。これには知恵があると思います。あなたといっしょにいる仲間は、大きな助けです。あなたと同じようにイエスへの愛と信仰を持ち、それを共有できる人がともにいることは力となります。それで、イエスは、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになり、彼らに、旅のための携帯物を持っていかないように命じられました。「杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。袋も(訳者注:英語の scrip は「代用紙幣」のことですが、日本語の訳では「袋」となっています)、これは、財の交換のために使用されました。「パンも、胴巻に金も持って行ってはいけません。(訳者注:6:8 欽定訳は、「袋」と「パン」が新改訳とは反対に列挙されている。)」ただ行きなさい…イエスは、信仰をもって弟子たちを送り出されました。私は、神が海外宣教に召されていると感じている人から手紙をもらうのですが、笑わせるものが時々あります。役員会に対し、要求リストが送られます。巨大な船便の荷物をマツソン・ラインで(訳者注:アメリカ版の日本通運みたいな会社。)送りたい。リオデジャネイロに素敵なアパートが欲しいのでお金が欲しい。一ヶ月の家賃が1250ドルするようなアパートです(訳者注:ちなみに、1996年時点で、教会の近くにある訳者の庶民的アパートの一ヶ月の家賃は765ドル)。召使のために一ヶ月400ドル欲しい。云々と、リストはどこまでも続きます。それで、私は、これじゃ、この人たちがもしイエスの弟子の一人だったら、駄目だったろうなと思ってしまいます。イエスは、胴巻は持って行ってはいけない、袋も持って行ってはいけない、お金も持って行ってはいけない、ただ、杖一本で行きなさい、と言われました。今日

もし、「信仰によって一歩踏み出さない。主が導いて下さいます。主はあなたと共におられます。主が世話をして下さいます。」と言って送り出すなら、虐待していると思われるかもしれません。「そんなのは、嫌です。給料の保証が欲しいです。」と言われてしまいます。イエスは、「くつは、はきなさい。しかし二枚の下着を着てはいけません。(6:9)」と言われました。

「また、彼らに言われた。『どこでも一軒の家にはいったら、その土地から出ていくまでは、その家にとどまっていなさい。』(6:10)」さて、東洋では、すばらしいもてなしをします。村に来ると、泊まる所を探さなくてもいいのです。村人は、訪問者を見つけ、招き入れる義務感を持っています。東洋のもてなしはすばらしいです。ですから、誰でも受け入れてくれる人がいたら、その土地から出ていくまでは、その家にとどまっていなさい。「もし、あなたがたを受け入れない場所、また、あなたがたに聞こうとしない人々なら、そこから出て行くときに、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落とさない。(6:11)」さて、面白いのは、ユダヤ人は、異邦人と全く接触を持ちたくなかったのです。そのため、国境まで来て異邦人の領地からユダヤ人の領地に入る時に、異邦人の領地からユダヤ人の領地にちりを運び込みたくなかったので、いつも履物からちりを払い落としていました。ちりを払い落とす儀式をしていたのです。それは、もし異邦人のちりをイスラエルに持ってきたら、土地を汚すことになると考えていたからでした。それで、自分の履物からちりを払い落とすという考えがあったのです。不和、隔てをつくっていたのです。間に不和をつくったのです。それで、その人々に対する証言として、履物からちりを払い落とさない、とあるのです。「まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりはまだ耐えやすいのです。(訳者注:6:11の後半部分にあるが、新改訳にはありません。マタイ10:15を引用しました。)」さばきの日が来ます、というのが、この箇所を教えていることです。みなさばかれるのです。ソドムとゴモラの地の人は、さばかれるために神の御前に立ちます。神の真理を拒否した人、受け入れない人は、神の真理に触れたことがなくて酷いことをした人よりも、もっと大きな、もっと厳しいさばきを受けます。なかなかソドムとゴモラよりは、悪くなれません。あまりにも酷かったので、神はこれらの町が滅ぼされるようにお命じにな

りました。しかし、それらの人がさばきの前に立つとき、彼らはあまり神の律法について理解も知識もなかったので、真理を知って真理に背を向けた人、真理を聞いて拒否した人、真理に対し心を閉ざした人よりも、そのさばきは耐えやすいのです。「では、アフリカの奥地に住んでいる異教徒で、イエス・キリストの福音を一度も聞いたことのない人が死んだら、神は、愛の神は、その人に永遠の地獄の罰を下されるのですか。福音を聞く機会が一度もなかったのに。」という、お決まりの質問をする人によく会います。アフリカのかわいそうな異教徒にとっても心を配っている人がいると知ることは、いつも心暖まることです。とても、良いことです。そんなに心を配っているなら、なぜ宣教師としてイエス・キリストの真理を伝えるに、そこに行かないのかと私は不思議に思うのです。しかし、そのような人たちは、自分自身のことを心配した方がよさそうです。彼らは真理を拒否したのですから、その人の方が、彼らよりも、主の御前に立つとき耐えやすいのです。ですから、イエスは、さばきの日には、ソドムとゴモラにいる人は、福音の光を拒否した、受け取らなかった人よりも耐えやすいのです、とおっしゃったのです。

「こうして十二人が出て行き、悔い改めるべきことを説き広め、(6:12)」これが福音の知らせです。変わりなさい。向きを変えなさい。肉に従う生活はもうやめなさい。肉の欲に従うのはもうやめなさい。人間の性質の一部である、怒りや、悪意、憤り、争いといったものに負けてはなりません。神の御霊によって、変わることができるのです。愛し、赦し、忍耐強く、親切で、優しくなることができます。「悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。(6:13)」癒しや病人のために祈る時に、油を塗ることが行なわれたことがわかります。ヤコブの手紙の中で、ヤコブは、「あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、(オリーブ)油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。(5:14-15)」と言いました。ですから、病人に油を塗って祈る考えは、聖書的なのです。福音書にもあり、書簡の中で教えられています。

「ヘロデ王、(6:14)」このヘロデ家のことを調べようとするなら、本当に混乱してしまいます。

区別が大変ということです。そもそもヘロデ大王が発端です。問題は、ヘロデ大王に妻がたくさんいすぎたことです。それにヘロデ大王は誇大妄想的な小男でした。息子が自分に対して陰謀を企てていると恐れていました。それで、本当に多くの息子を殺したので、「豚の方がヘロデの息子になるより安全だ。」との諺ができたほどです。ヘロデ大王の妻の一人で、おそらく一番名が知られているのは、— と言うのも、ヘロデ大王が本当に彼女のことを愛してたらしいからですが、— この妻は、二人の息子を生まれました。その一人の名は、アリストビュラス(Aristobulus)でした。でも、ヘロデ大王は、アリストビュラスと彼の兄弟と母のマリアムネ(Mariamne)が自分に対し陰謀を企てていると思い、彼らを殺させました。それで、ヘロデ大王は良心の呵責を感じ、マリアムネのためにエルサレムのヨツパの門に美しい塔を建てました。しかし、マリアムネの生んだヘロデの息子のアリストビュラスは、ハスモネ家の人(Hasmonean)と呼ばれました。別のマリアムネと結婚したからです。彼はこの名前が気に入ったのでしょう。アリストビュラスは、父によって殺される前に、ヘロデヤ(Herodias)という娘をもうけました。ボスジ家の人(Boethusian)と呼ばれていたもう一人のマリアムネには、ヘロデ・ピリポ(Herod Philip)という息子がいました。ヘロデ・ピリポは統治に関心がなく、ローマに転居して豪華な家に住み、ローマの社交界に登場しました。でも、ヘロデ・ピリポは自分の姪のヘロデヤと結婚しました。さて、ヘロデ大王には、マルセイス(Malthace)という名のまた別の妻がいて、この息子はヘロデ・アンティパス(Antipas)と呼ばれました。ヘロデ・アンティパスはローマへ行って、半兄弟のヘロデ・ピリポを訪問しました。そこで、自分の姪であり義理の姉妹であるヘロデヤに対し、ヘロデ・ピリポと別れて自分と一緒に戻り自分の妻になるように誘惑しました。それで、ヘロデ・アンティパスは、自分の兄弟のヘロデ・ピリポの妻のヘロデヤを取って誘惑し、ヘロデヤは、その地方の王の夫人になる野望を抱いて、ヘロデ・アンティパスといっしょに戻ってきました。ヘロデ・ピリポと結婚していた時、ヘロデヤはサロメという名の娘をもうけました。ガリラヤ湖のテベリヤに住むために、サロメもヘロデヤといっしょに戻ってきました。さて、事の張本人のヘロデ大王に戻りますが、彼にはクレオパトラ(Cleopatra)という名のまた別の妻がいました。また別の妻の名はドリスで、彼女の息子も殺されました。この息子も、ヘロデ大王に陰謀を企てていると

思われたからです。ともかく、ヘロデ大王には、クレオパトラという名のまた別の妻がいました。有名なエジプトのクレオパトラと区別するため、彼女はエルサレムのクレオパトラと呼ばれていました。彼女にはテトラルコス(分邦指導者 Tetrarch)ピリポと呼ばれていた息子がいました。このピリポは、姪であり同時に兄弟の孫娘(grandniece)のサロメと結婚しました。ですから、全体がごちゃごちゃになっていて、絡み合っているのです。これで、次の話を読む時に、少し頭の整理ができるのではないのでしょうか。

このヘロデ王は、ヘロデ・アンティパスでした。ローマに行って、義理の姉妹で同時に姪である人を誘惑した人です。私は自分のお爺さんですと言っているようなものです。「ヘロデ王の耳にも入った。(6:14)」弟子たちが出て行って、使徒たちが出て行って、奇跡を行っていたので、ヘロデ王の領内でのこの動きのうわさが、ヘロデ王の耳にも入ったことは明かです。ヘロデ王はガリラヤ地方のテトラルコスだったのです。「イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にもはいった。人々は(訳者注:ここの主語はHe。つまりヘロデ王となっている。)、『バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ。』と言っていた。(6:14)」ヘロデ王は、バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえることを期待していたと思います。ヘロデ王は、ヨハネの処刑について悪いことをしたと思っていました。「別の人々は、『彼はエリヤだ。』と言い、さらに別の人々は、『昔の預言者の中のひとりのような預言者だ。』と言っていた。しかし、ヘロデはうわさを聞いて、『私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ。』と言っていた。実は、このヘロデが、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、人をやってヨハネを捕らえ、牢につないだのであった。(6:15-17)」ヘロデがローマに行って兄弟ピリポのヘロデヤを誘惑したことはお話ししました。このヘロデヤは気分を害していました。「これは、ヨハネがヘロデに、『あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です。』と言い張ったからである。(6:18)」ヨハネはこの結婚の反対していました。それで、ヘロデヤを怒らせました。女の怒りは買いたくありませんね。「ところが、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、果たせないうでいた。(6:19)」ヘロデヤは、ヨハネが説教したことなどでとても腹を立てていました。それ

で殺したいと考えていましたが、できませんでした。「それはヘロデが、ヨハネを恐れ(6:20)」ていたからでした。ヘロデはヨハネを尊敬していました。ここでの「恐れ」という言葉は、ヘロデがヨハネを尊敬していたという意味です。ヨハネを正しい聖なる人と知って、ヨハネの言うことに耳を傾け、保護していました。「ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも(訳者注:欽定訳は「多くのことをして」“he did many things”)、喜んで耳を傾けていた。(6:20)」ヘロデは、ヨハネに魅了されていました。ヨハネは、ちょっと変わった人でした。ヨハネは正直者でした。それをヘロデは知っており、ヨハネに魅了されていました。しかし、ヘロデヤからの圧力で、ヨハネを牢につなぎました。「ところが、良い機会が訪れた。ヘロデがその誕生日に、重臣や、千人隊長や、ガリラヤのおもだった人などを招いて、祝宴をもうけたとき、ヘロデヤの娘、」その名はサロメでしたが、「がはいって来て、踊りを踊ったので、ヘロデも列席の人々も喜んだ。(6:21)」さて、王女はこのような踊りをするほど自分の身をやつしていました。というのは、これは、挑発的な、性的にとても挑発的な踊りだったからです。その目的は茶番劇のようなもので、性的に興奮させることで、ヘロデも列席の者も興奮しました。そこで王は、この少女に言った。ストリップ・ダンスのような踊りだったので。「そこで王は、この少女に、『何でもほしい物を言いなさい。与えよう。』と言った。また、『おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう。』と言って、誓った。そこで少女は出て行って、『何を願いましょうか。』とその母親に言った。すると母親は、『バプテスマのヨハネの首。』と言った。そこで少女はすぐに、大急ぎで王の前に行き、こう行って頼んだ。『いますぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に、』これは大皿のことです。「『載せていただきとうございます。』王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった。そこで王は、すぐに護衛兵をやって、ヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女は、それを母親に渡した。ヨハネの弟子たちは、このことを聞いたので、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めたのであった。(6:22-29)」これが、バプテスマのヨハネの最後でした。「さて、使徒たちは、」十二弟子のことですが、「イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。

(6:30)「自分たちに何が起こったか、何をしたのか、教えたこと、経験したことの報告を持ってきました。分かち合いの時でした。「そこでイエスは彼らに、『さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい。』と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。(6:31)」全くゆっくりする時間がありませんでした。イエスは、弟子たちが奮闘をして、疲れていたことをご存じでした。それで、イエスは、寂しい所へ行って、元気を取り戻すようにしなさいと誘われました。そこで彼らは小舟に乗り、「自分たちだけで寂しい所へ行った。ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先についてしまった。(6:32-33) 」カペナウムから向こう側に渡るのは、そんなに遠くありません。おそらくは5マイル(8km)ほどの距離です。小舟だと、10時間ほどの船旅になります。ですから、唯一休憩できたのは舟にいますときだけでした。舟に乗るのはとても落ち着きます。湖に出て、風が吹き、さざ波を見ているのは、とても安らぎのある体験です。ですから、彼らの休息は、向こう側に渡る間でした。向こう側に着いたときには、大勢の群衆が彼らを待ち受けていたからでした。弟子たちが、頭を振って、「もう、いい加減にしてくれよ。」と言っているのが想像できます。しかし、イエスは群衆を御覧になると、深くあわれまれたとあります。(6:34)舟がどの方向に進んでいるかを見るのは簡単です。カペナウムから、彼らが向かった反対側のベツサイダ地方を見ることができます。舟が進む全行程を見ることができます。反対側につくのを見ることができます。ですから、人々は舟がどの方向に向かっているのかがわかると、湖の上の側を回って走り始めました。そんなに遠くありません。人々が様々な町や村を通って行くと、デカポリスの都市を通って行くと、人々はどんどん加わり、ボストン・マラソンのようになりました。加わった人は、「何事なんだ。どこへ行くんだ。」「イエスがあっちにいるんだ。」「おお、そうか。」ということで、みんな向かってしまいました。それで、彼らが舟を、ベツサイダから少し行った寂しい所につけると、多くの群衆が待ち受けていました。何千人もいました。そこに小舟が到着するのを待っていたのは、おそらく1万5千人ほどいたでしょう。

「イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいな

い羊のようであるのを深くあわれまれました。(6:34)空腹で、さまよい、案内する者が誰もなく、導く者が誰もいなかったのです。それで、イエスは「いろいろと教え始められた。(6:34)そのうち、もう時刻もおそくなったので、(6:35)おそらく、この時は4月だったと思われます。ガリラヤ湖での日没は、夕方6時ごろです。それで、日没に近づいていたのです。「弟子たちはイエスのところに来て言った。『ここはへんぴな所で、もう時刻もおそくなりました。』(6:35)主よ。もう時刻も遅くなっています。みんなを解散させてください。帰ってもらいましょう。一日中ここにいたのですから。帰ってもらいましょう。「そして、近くの部落や村に行ってお何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください。(6:36)ここには何も食べる物がありませんから(訳者注:この部分は欽定訳にはあるが、日本語の聖書にはない)。「すると、彼らに答えて言われた。『あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。』そこで弟子たちは言った。『私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか。』(6:37)何をおっしゃっているのですか。「するとイエスは彼らに言われた。『パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。』彼らは確かめて言った。『五つです。それと魚が二匹です。』イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。(6:38-39)つまり、列にさせ、グループに分けたということです。「そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。(6:40)百人のグループ、五十人のグループが固まりになっていっしょにすわっていました。「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。人々はみな、食べて満腹した。(6:41-42)」「満腹した」というギリシャ語の言葉は、飽食状態という意味です。みなさんわかりますね。感謝祭の日なんか、動けなくなるくらいまで食べてしまいます。(訳者注:米国では感謝祭の日には、ご馳走がたくさん用意されます。)

「そして、パン切れを十二のかごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。(6:43)始めよりも、終わった時の方が量が多くなりました。「パンを食べたのは、男が五千人であった。(6:44)もちろん、それに加えて女や子供がいました。

「それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。(6:45)」さて、ベツサイダは二つありました。一つは、ガリラヤ湖の北東岸に、もう一つは西岸にありました。それで、イエスは弟子たちに舟に乗り、行くように命じられ、自分は群衆を解散すると言われました。「それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。(6:46)」さて、興味深いことがあります。この日は激務の日でした。多く世話をした日でした。多忙な日でした。大勢の群衆のため、休もうとしてきたのに休むことができませんでした。イエスご自身は夕刻になるまで人々にお仕えになっていました。そして、このすばらしい奇跡をなさいました。五つのパンと二匹の魚で、群衆に食事をお与えになりました。そして、今度は弟子たちを向こう岸に送られ、群衆を解散されました。気分転換をし、元気を取り戻すために、イエスは何をされたのでしょうか。イエスは、父と時間を過ごすために山に登られました。まさに神との交わりから、力が来るのです。神を待ち望むことを通して、力が来ます。私は、何か邪魔が入って、夜に目が覚めて、再び眠りにつけられない時、「ああ、睡眠がひどく必要なのに、何てことだ。起きるまでに睡眠が必要だ。」とっていました。でも、夜に目が覚めてしまったら、祈りの時間を持つことを学びました。そうすると、寝たときよりも元気になります。あるとき、とても慌ただしい週末を迎えたことがありました。金曜日にソルトレーク・シティーに行き、モルモン教会の本部で、モルモン教会の指導者の何人かと面白い経験をしました。土曜日に大きな会議があつて、私は2回話すことになっていました。経費節約のために、私は他の男性とホテルで相部屋にすることにしました。その男はとても大きないびきをかきました。いびきをかいただけでなく、それといっしょになりました。それで、金曜日の夜の大半を祈って過ごしました。ようやく寝入ると、物音がし、起こされてしまったからです。それが何だか気付かずに、「うわっ。」と。それで私はその人の妻のために祈りました。けれども、土曜日の朝、私は一晩中ぐっすり眠ったかのように、すっきりした気分で、元気を取り戻していました。神との交わりの時間を持ったからです。祈りの中で主と時間を過ごすことは、とてつもない力となります。とてつもない力です。不眠症の方は感謝し、その時間を祈りのために使いましょう。寝なくてもよいのです。寝るのと同じくらい、祈りは私たちをすっきりさせ、

元気を取り戻させてくれます。イエスは、激務の日の後、とても忙しくされた後、「わあ、ぐっすり寝なきゃ。」と言うのではなく、出て行って、夜通し祈られました。寝ることよりも祈ることに、活力を見出だされました。ですから、ここでも、骨が折れる多忙な日だったので、ヘロデがイエスについて知っているという報告をお聞きなつたので、弟子たちを送り出し、ご自分は山へ行って祈られたことがわかります。

「夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。(6:47)」イエスは弟子たちを御覧になりました。満月だったのかもしれませんが。実際、満月の澄み渡った夜は、ガリラヤ湖は向こう岸まで見えます。湖の真ん中にあるものを見ることができます。月が湖に反射されているからです。満月の夜には見えます。「イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのを御覧になり、(6:48)」面白いですね、イエスの命令に従ったために、弟子たちは骨を折っていました、困難にぶつかっていました、向かい風に逆らって漕いでいました。さて、そのような状況の時に、簡単なこと最も賢いことは、向かい風に逆らって苦労して漕ぎあぐねるのではなく、向きを変えて風の方向に進み帰ってくることです。陸に戻ってきて、次の日に出掛けて行くことです。しかし、弟子たちはキリストの命令に従おうとしていたので、向かい風に逆らって行こうとし、困難に立ち向かい苦労していました。面白いのは、主が必ずしも私たちを簡単な、快適な場所に行くようにはなさらないことです。主の命令に従うと、流れに逆らって動かなければならないことがよくあります。主の命令に従おうとすると、困難な場所に自分がいることがわかります。「第四の夜回りのころ、(訳者注:マルコ 6:48。ここは新改訳では、「夜中の三時ごろ」とありますが、欄外注を参照のこと。)」これは夜の最後の夜回りでした。夜は四つの夜回りに分けられていました。第一の夜回りは、夜の9時頃まで、9時から真夜中までが第二の夜回り、真夜中から午前3時までが第三の夜回り、午前3時から6時までが第四の夜回りでした。ですから、午前三時ごろのことです。「湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれた。(5:48)」そのままそばを通り過ぎるように動かれました。彼らは湖を渡ろうとして、逆風のために苦労していたのに、イエスはそれをすり抜けて歩くことができました。ままそばを通り過ぎてしまわれるかのようで

した。「わたしは向こう側に行くよ。」というような感じでした。「しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと、(5:49)「霊だと」思い、叫び声をあげた。というのは、みなイエスを見て取り乱してしまったからである。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、『しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。』と言われた。そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。(6:49-51) 」その気持ちがわかります。「というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。(6:52)」不思議ですね。パンと魚がどうなったのか弟子たちは理解できなかったようです。イエスがなされたことが、頭にしっかりとはいらなかったのです。パンと魚を増やすことで、元素(element)に対するご自分の力を表されました。ここでも、同じ夜、というか次の日の朝早く、自然(element)に対するご自分の力を表されています。そして舟に乗り込まれると、風がやみました。ここでも自然に対するご自身の力を表されています。そして、弟子たちは驚きました。「わあ。すごい。」と。しかし、立ち止まって、さっきイエスは、五つのパンと二匹の魚で、五千人に加えて女、子供に食事を与えられたことを悟らなかったのです。弟子たちは、見えていなかったのです。私たちは、私たちの回りで起きている主の奇跡的な働きが、見えていないことがどのくらいあるのでしょうか。神はとてもしばらしいわざを行なったださっているのに、見てもいないことがよくあるのです。私たちの生活の回りで、ほとんど日々神が行なったださっている奇跡に気づかないのです。多くの場合、私たちの心はかたくなになっていて、浸透しないのです。私たちに影響を与えることがないのです。私たちは把握できないのです。

「彼らは湖を渡って、ゲネサレの地に着き、舟をつないだ。(6:53)」おそらくそこは、ガリラヤ湖の北西岸のカペナウムとマグダラの間のマグダラ地方だったのでしょうか。「そして、彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気がついて、そのあたりをくまなく走り回り、イエスがおられると聞いた場所へ、病人を床に載せて運んで来た。イエスがはいって行かれると、村でも町でも部落でも、人々は病人たちを広場に寝かせ、そして、せめて、イエスの着物の端にでもさわらせてくださるようにと願った。そして、さわった人々はみな、いやされ

た。(6:54-56)」ここでまた、女が群衆をかきわけて進み着物の端にふれたというところに戻らなければいけません。これは5章です。また3章で、人々がいやされるためにイエスにさわったと書かれています。イエスがどこへ行かれても、人々はイエスをつかまえてさわろうとしていました。そして、さわった人々はみな、いやされました。人が常にさわろうとしている状況がどのようであったか、想像がつかれるでしょう。私たちはみな自分の空間を確保したいのです。人込みの中でおされたり、脇に追いやられたりするのが嫌いです。自分の空間を確保したいのです。とにかく私は、自分の空間を確保したいのです。みなさん全員のことを代弁できません。そういうのが好きな方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、私は、自分の空間を確保したいのです。スーパーで列にならんで、後ろの人が近づいてきて私を押しするのは、ぴったりくっついてこられるのは嫌です。そういうのは嫌いです。「私の空間をちゃんととれるようにしてくれ。そんなに近くに立たないでくれ。」と言いたくなります。私は、自分の空間を確保したいのです。ですから、イエスが行かれる所はすべて、人々がイエスに押し寄せて来たという状況が想像できますね。イエスが見上げられると、群衆がみな近づこうとして、押し合いへし合いして、近くに来ようとして、手を伸ばして、イエスをつかまえようとしている、さわろうとしているのを御覧になったのです。それに対し、イエスはどのように応答されたのでしょうか。反応されたのでしょうか。イエスは、「私の空間をちゃんととれるようにしてくれ。下がってくれ。」と言われたのでしょうか。そうではありません。イエスは、あわれみをもって人々を御覧になり、彼らの必要を御覧になりました。いつでも、必要を持っている人がさわってもかまわないとお考えでした。ですから、今晚もしあなたに必要ななら、イエスはあなたの必要のために応じてくださいます。あなたがさわってもイエスはいやがったりなさいません。実は、それを快く思ってください。イエスは、あなたが手を伸ばして触りあなたが癒されることを、助けを得ることを望んでおられます。問題が何であろうと、人々はイエスに触りさえすればよい、問題がなくなるということを知っていました。まさにその通りです。イエスに触りさえすればよいのです。ただ、イエスに触れて下さい。信仰によって触るのであれば、イエスはいつもそれに答えて下さいました。もし、あなたが手を伸ばし、信仰によって触るのであれば、今晚イエスはあなたに答えて下さいます。

マルコの福音書7章(Mark7)(#8035)

マルコの福音書7章に入りますと、「パリサイ人たちと幾人かの律法学者がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。(7:1)」と書かれています。この人たちは、問題を起こして、問題を探すためだけに来ていました。友好的な社交的な訪問ではありませんでした。彼らはいつも何かあら探しをしていました。「イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者があるのを見て、誤りを見つけた。(訳者注:「誤りを見つけた」は、欽定訳“they found fault”の訳。)」食事の前に手を洗う事は、当時はもっと大切だったと思います。手を使って食べていたからです。ナイフやフォーク、スプーンといった食器はなく、ただ手を使って食べていたのです。一般的な食べ方としては、丸い平たいパンがあって、それをちぎって、汁物に浸していました。焼き物があつたら、ただ肉をちぎって食べていました。むろん、手は油だらけになってしまいますから、食事の途中で何回か手を洗わなければいけませんでしたが、最も一般的には、食事の終わりにパンの最後の一切れで指の油などをみなパンで拭きとって、そのパンを食卓の下にいる子犬に投げてやりました。いつも子犬は、手を拭く最後のパンを待っていました。彼らにとってそれはお手拭きのようなものでした。当時はお手拭きはなかったのですから、パンの最後の一切れが、お手拭き代わりになりました。ここでの問題は、ただ単に手を洗うことではありませんでした。問題は、儀式的に手を洗うことでした。手を洗う儀式によると、量を計量した水が必要でした。金だらいの水では手を洗えませんでした。流れる水で手を洗わなければなりませんでしたが、ですから、助けが必要です。手を洗う時に、誰か手に水を注いでくれる人が必要でした。量を計量した水が注ぎかけられたのですが、手を差し上げなければなりませんでしたが、上から水が注がれる時上下にこするのですが、結構まっすぐに上げなければなりませんでしたが、水が腕の方に流れて行かないよう注意しなければいけません。水が真っ直ぐに滴るようにしなければなりません。上下に洗い、それから、また手を下に向けて洗わなければなりません。

んでした。水はこの時も、床や地面に滴りおちなければいけません。でも、流れる水でなければなりません。それに、この他にいろいろな儀式が関わっていました。弟子たちが漁師だったことを思い出してください。少なくとも4人はそうでした。彼らにとって手を洗うことは、最も重要な事ではありませんでした。

問題は、パリサイ人と律法学者が、手を洗う事を正しい行ないと見ていたことでした。単なる衛生上のためではなく、正義のためでした。このため、こうした儀式的な方法でまず食事手を洗ってから食事をしないと、罪だと考えていました。自分たちは儀式的に手を洗っていたので、自分の義は他の人より優れていると思っていたのです。ですから、ここでの問題は、ただ手を洗うという事ではなく、どのように手を洗うか、儀式的に手を洗うか、または、彼らがつくり出したしきたりにのっとって手を洗うかどうかという事でした。それで、マルコは次のように説明しています。「パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器(訳者注:欽定訳には、さらに「テーブル」が加わっています。新共同訳では、これが「寝台」となっています。)を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある。(7:3-4)」ですから、こういったものを儀式的に洗う方法がいろいろあったのです。興味深いのは、今日でさえ、肉専用の金属食器があり、いつもの菜食主義のような食事をする時の金属食器を使いません。とても注意を払います。酪農品の時には、それ用の金属食器のセットと皿のセットがあります。そして、肉を食べる時には別のセットがあるのです。同じ金属食器を使うことさえしません。スプーンさえもそれでコーヒーにクリームを入れてかき混ぜれば、それは汚れてしまったということで、肉を食べる食器として使えなくなってしまう。そのスプーンに付いていたクリームが全部きっちり洗い落とせていないかもしれないからです。自分の胃の中で、酪農品がわずかでも肉製品と混ざるなどとは、とんでもない事なのです。ですから、酪農品の食事と肉製品の食事には別々の食器があるのです。今日でさえ、この問題については、非常に厳しく注意が払われています。彼らにとっては正しさに関する問題なのです。つまり、こ

のことで自分の義が決まるのです。これによって自分が正しくなる、神の前に正しいのだ、と彼らは感じているのです。宗教的にこれがなされています。さて、こういった洗うことについて、衛生面に限って言うならば、おそらく何か言えることがあるでしょう。けれども、クッキーの入れ物からクッキーが床に落ちてしまい、それを拾って食べれば、おそらく衛生的ではないでしょうが罪ではありません。そこが問題です。彼らは、それを罪だと見なします。そして、洗いの儀式が正しい行ないだと見るのです。それで、5節で、パリサイ人と律法学者たちは、「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」と尋ねたのです。

「イエスは彼らに言われた。『イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。“この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。”』(7:6-7) 」イエスは彼らにイザヤの預言を示されました。その預言でイザヤは、民は口先では神を敬ったが、その心は、神から遠く離れていることを話しています。それからイエスは、「彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。」と付け加えられています。これはイザヤ書からではありません。エレミヤ書にこれに幾分似た預言があります。コロサイ人への手紙2章に、言い伝えと長年の間ユダヤ人が培ってきたものについて、パウロは2章8節で、このように言いました。「あのむなしい、だましごとの哲学によってだれもとりにこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。あなたがたは

罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定め の債務証書を取りのけ・・・(訳者注：最後の部分は欽定訳の“blotting out handwriting of ordinances”に合わせて訳者が言い換えました。)」覚えてますか、異邦人の信者が律法とどういう関係を持つべきかを決めようとして、教会会議が招集され、ペテロが、「それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首にかけるのですか。(使徒15:10)」と言いました。人々は律法を憎むべきものにしてしまいました。恨めしいものにしてしまいました。それは、モーセの律法に、いろいろ言い伝えを付け加えてしまったからでした。それで、パウロは、イエスが「私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、『すぎるな。味わうな。さわるな。』というような定め に縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。(コロサイ2:14-23)」と言いました。こういったものは、ただ自分が正しいと思わせるだけで、本当の正しさとは何の関係もないのです。本当の正しさは、イエス・キリストを信じるの信仰によってあなたのものになるのです。洗いのしきたり

や定めに左右されるものではありません。神に関して言えば、イエス・キリストへのあなたの信仰が義とみなされるのです。

ですから、ここで彼らは弟子たちのあら探しをしていました。それは、弟子たちが言い伝えを守っていなかったからでした。それでイエスに、「なぜあなたの弟子たちは手を洗うことについての言い伝えを守らないのですか。」と言い掛かりをつけたのです。イエスは、「イザヤがあなたがたを偽善者だとあばきました。外見上は、口先では近づきます。また外見上の義がありますが、内側、心は神から遠く離れています。」とおっしゃいました。また、「主を拝んでも、むだである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。」と言われました。これは、人が囚われやすいところですよ。文化的なものですよ。どうも、どの分野にも文化があるようです。聖書よりも、文化的な言い伝えの方が人を縛ってしまうのは不思議です。ほとんどどんなものよりも、言い伝えを打ち破る方が難しいのです。どうも言い伝えは、私たちの一部になっています。ユダヤ人の場合は、自分がユダヤ人であると考え、言い伝えを守ることでした。言い伝えを守らないのであればユダヤ人ではなかったのです。言い伝えを守ることが、ユダヤ人たるゆえんでした。それでイエスは、「あなたがたは、神の戒めを捨てて、[杯、水差しを洗うこと、その他あなたがたが行なっているような]人間の言い伝えを堅く守っている。(訳者注:7:8 ここのかぎ括弧の部分は欽定訳にはあるが日本語の聖書にはない。)」と言われました。つまり、神の戒めの語っていることを、あなたがたはそれ以上に、杯を洗うことなどを教えています。これが教えで、これが聖いことで、これをすることが義であると言うのです。「また言われた。『あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。』(7:9)」今日でも教会においてでさえも、これはその通りです。教会の中には、言い伝えにドブブリ漬かっている教会があります。神の戒めよりも言い伝えを守ろうとします。神の戒めは、「いかなる偶像も造ってはならない。上の天にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。(出エジプト20:4-5 参照)」です。しかし、たくさんの教会に像があります。イエスの像あるいは聖人の像があります。像のところまで行って、像の爪先にキスをします。神の戒めはどうなっ

ったのでしょうか。言い伝えの方が神の戒めより優先されています。

イエスは彼らに例を示しておられます。「モーセは、『あなたの父と母を敬え。』また『父や母をののしる者は、死刑に処せられる。』と言っています。(7:10)父と母を敬うという考えは、彼らが年をとった時に実際に世話をすることでした。かつて、それは義務でした。当時、福祉国家があったわけではありません。ですから、父母が年をとって働けなくなったら、子供たちは父母の世話をする、食べさせることになっていました。あなたの父母はあなたが小さかった頃あなたを食べさせてくれたのですから。ですから、考え方としては、あなたが彼らの世話をするというものでした。それは、父と母を敬うということの一部でした。思い出していただきたいのですが、ナオミがルツと戻ってきて、ルツがボアズと結婚し、息子が生まれると、ナオミの友人がみなやってきて、喜び、「その子は、あなたの老後をみとるでしょう。(ルツ4:15参照)」と言いました。あなたの面倒を見てくれる人ができましたと。年老いた両親を食べさせ、面倒を見ることは、子供の責任の一つになっていました。「それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、これはコルバンになりました、(つまり、これは神に捧げました)、と云えば、(7:11の言い換え) 私は自分の銀行口座を神に捧げました、と云えば、「私からあなたのために上げられる物は、」「あなたに差し上げるべきであった物は、神に捧げました。すみません、あなたには差し上げられません、それは神に捧げました。」と云えば、「その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。」それなら、あなたの父や母にもうあげなくてもいいのです、あなたはそれを神に捧げたからです、と言わせています、ということです。人が、私の持っている物はすべて神の物です、と言うのを聞いたことがあります、神はそれを決して御覧にはなりません。しかし、うまく言い逃れをします。捧げる必要はありません。それは、すべて神の物だからですと。私の持っている物はすべて主の物です。だから、私は神に何も捧げません。それは全てが神のものだからですと。誰かが、「神に捧げました。」と言うと、あなたは、「それなら、両親の面倒をみなくてもいいのです。神に捧げたのですから。」と言うのです。「こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のことばを空文にしています。そして、これと同

じょうなことを、たくさんしているのです。(7:13)」とイエスはおっしゃいました。

「イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。『みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。外側から人にはいって、人を汚すことのできる物は何もありません。(7:15)』言い換えると、わずかの汚れは、何ともないということです。あなたを汚したりしません。不義にはしません。床のあめを拾って食べても、不義にはなりません。外側から人にはいるもの、そのようにして食べる物によってあなたが不義になることはありません。体にはよくないかもしれません。むろん体によくないものをたくさん食べてますよね。神にそれで祝福して下さいとお願いするべきではないと思います。(訳者注:チャックはたぶん高カロリーのものや甘い物のことを指して話しているのでしょう。祝福というのは、食前感謝の祈りのことだと思われます。) ただ食べて、その結果を苦しめばよいのです。真夜中にピザなど食べたら、体には良くありません。サラミ・ソーセジのピザとか。食べたいなら、どうぞお食べ下さい。「ありがとうございます。」と神に感謝しても、それを祝福してもらおうとしてはいけません。でも、それは出て行きますよ。イエスは、基本的にそれがあなたから出て行くとおっしゃっているのです。だから、あなたを汚したりしないと。しかし、人の口から出て来るものが、人を汚すものなのです。それが本当に汚すものなのです。それで、イエスは、このように言われました。「人から出て来るものが、人を汚すものなのです。聞く耳のある者は聞きなさい。(7:15-16)(訳者注:新改訳の 16 節は欄外にある。)」これが真理です、これを悟りなさい、とイエスはおっしゃっているのです。わたしの言うことを聞きなさい。たった今このような会話をしました、わたしの言うことを聞きなさいと。あなたの口に入って行くものではなく、あなたの口から出て来るものが、人を汚すものなのです。それで、イエスが群衆を離れて、家にはいられると、弟子たちは、「主よ。どういう意味ですか。」と言いました。「イエスは言われた。『あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人にはいって来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。(7:18)』あなたを不義にするのではありません。「そのような物は、人の心には、はいらないで、腹にはいり、そして、かわやに出されてしまうのです。また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側か

ら、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。』(7:19-23) 」心の中にあるもの、それがあなたを汚すのです。

さて、イエスはそこを出て、海岸地方のフェニキアの都市ツロと、ツロからそう遠くないシドン地方に行かれました。「家にはいられたとき、(7:24)こっそりと入ろうと思われたのですが、「だれにも知られたくないと思われたが、隠れていることはできなかつた。(7:24)」イエスはテレビに出ておられたわけではありませんでしたが、人が話をするので、イエスが行かれる所にはうわさが広まりました。「汚れた霊につかれた小さい娘のいる女が、イエスのことを聞きつけてすぐにやって来て、その足もとにひれ伏した。この女はギリシャ人で、スロ・フェニキヤの生まれであった。(7:25-26) 」彼女は契約の民ではありませんでした。「そして、自分の娘から悪霊を追い出してくださいるようにイエスに願い続けた。(7:26)」イエスの足元で、自分の娘から悪霊を追い出してくださいるようにイエスに願ったのです。「するとイエスは言われた。『まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、犬(訳者注:欽定訳では dog「犬」となっており子犬とは限らない。)に投げてやるのはよくないことです。』(7:27参照)」この女に対するイエスの応じ方がなかなか理解できない人がたくさんいます。それは、私たちが知っているイエスの品性とは全くずれているように見えるからです。繰り返し、繰り返し、イエスが人々を深くあわれまれたことが書いてあるからです。イエスは深くあわれまれました。ここに、イエスの足元に膝まづいている女がいて、自分の娘を癒してほしいと懇願しています。そして、イエスはこの女を侮辱されます。彼女を犬だと呼ばれました。さて、面白いことに、ヘブル語には罵る言葉がありません。もし罵りたいなら、英語や他の国語を使わなければなりません。すっきりしてますね、ヘブル語には罵る言葉がないのです。でも、最も卑劣な言い方としては、「あいつは異邦人の犬だ。」と言うことでした。あさましくて狂暴な、群れで動くゴミあさりの野生の犬がいました(訳者注:「ゴミあさり」は“scavenger”で、直訳は『腐食動物』。秃鷹やカニや蟻がこの類に入る。)ですから、犬という言葉はとても軽蔑的な言葉でした。犬というのは、最もひどい呼び方の一つでした。

野生のゴミあさりの狂暴な犬で、やせこけていてウロウロして攻撃してくる犬です。しかしイエスがその女に、「子どもたちのパンを取り上げて、犬に投げてやるのはよくないことです。」と言われた時に、そのギリシャ語の言葉をお使いになりませんでした。イエスは、指小語をお使いになりましたので、これは「子どもたちのパンを取り上げて、子犬に投げてやるのはよくないことです。」とも訳すことができる言葉でした。イエスは、あさましい軽蔑的な犬、ゴミあさりの犬という言葉はお使いになりませんでした。ですから、これについてはあまりイエスに厳しくなりすぎないようにして下さい。(訳者注:「犬」はクオーンだが、「子犬」はクナリオン。この語尾の部分(アリオン)が指小辞と呼ばれるもので、英語だと、例えばTommyのyに当たる。通常、小さいものを表すときや、親愛感をもたせるときに使われる。)

「しかし、女は答えて言った。『主よ。その通りです。でも食卓の下の子犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます。(7:28)』さて、イエスはすべてのことをご存じでした。イエスは神でした。イエスは、この女の信仰をご存じでした。イエスはただ、この女の信仰の表現を最大限に引き出そうとなさっていたのだと思います。イエスはこの女の娘をずっと癒そうと思っ
ていらっしやっただと思います。イエスは、「これに限っては、彼女を癒してやろう。」とはおっしゃらなかったと思います。イエスは、意図的に彼女の信仰の表現を引き出そうとなさっていたのだと思います。イエスが一步下がられると、彼女は二歩前進しました。ですから、イエスは彼女が十分表現するようになさいました。「主よ。食卓の下の子犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます。」「それで、イエスは言われた。『そうまで言うのですか。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。女が家に帰ってみると、その子は床の上に伏せており、悪霊はもう出ていた。(7:29-30)』」

「それから、イエスはツロとシドンの地方を去り、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた。(7:31)」デカポリスはガリラヤ上部の10大都市のことでした。デカポリスはもちろんギリシャ語で、10都市ということです。そこは、異邦人のガリラヤと呼ばれていました。ですから、イエスは依然として、10都市であるデカポリスの異邦人のガリラヤ地方とされている所を通っておられたのでした。「人々は、耳が聞こえず、口のきけない人を

連れて来て、彼の上にてを置いてくださるようお願いした。そこで、イエスは、その人だけを群衆の中から連れ出し、その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。そして、天を見上げ、深く嘆息して、その人に『エパタ。』すなわち、『開け。』と言われた。すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった。イエスは、このことをだれにも言うてはならない、と命じられたが、彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした。人々は非常に驚いて言った。『この方のなされたことは、みなすばらしい。』(7:32-37) 「何というイエスの証しででしょうか。「この方のなされたことは、みなすばらしい。つんぼを聞こえるようにし、おしを話せるようにしてくださった。(7:37)」

さて、このことは面白いと思うのです。イエスは、人を癒される時、一定の形式を使い続けられたのではないのです。イエスは目の見えない人をたくさんお癒しになりました。ある場合では、その時つばをお用いになりました。地面につばを吐いて泥をつくり、目の見えない人の目に塗られ、シロアムの池に行って洗うように言われました。他の時には、イエスがお話になっただけで癒されました。他の場合には、手を置かれました。イエスはいつもいろいろ異なった方法で行なわれたのです。イエスは一つの教訓を教えておられると思います。私たちは、形式が、公式が、しきたりが好きです。ですから、祈るために人に手を置くしきたりすらつくってしまうことが容易なのです。油を塗るしきたりもあります。なぜだかわかりませんが、私たちはいとも簡単に形式化させてそのやり方にこだわってしまうのです。このやり方でやらないと正しいやり方ではないと。ここで、イエスが取り扱われていたのは、まさにそのことでした。弟子たちが言い伝えられているやり方で手を洗わなかったので、人々は気分を害していました。イエスは、彼らの言い伝えに反対する発言をなさいました。また、ここでは様々な方法を使って癒されました。耳の聞こえない人の耳に指を差し入れられました。「エパタ。」すなわち、「開け。」と言われました。それからつばきをされ、そのつばをどうされたのかわかりませんが、イエスはその人の舌のもつれを解かれました。イエスがその人の舌につばきされたのかどうかわかりませんが、イエスはある一定の形式にはめるのではなく、異なるやり方でなさいました。イエスは私たちが公式化したい傾向があるのをご存じだ

ったからです。正しいやり方をあみだしたいことを。イエスは、私たちがしきたりをつくるのを止めさせようとして、そのようになさったのではないかと感じるのです。神は一つのやり方に縛られるのではないことをご存知でした。教会の中で分裂をもたらすのは、大抵しきたりなのです。「伝統的に私たちは後ろ向きにバプテスマを授けます。」「伝統的に私たちは前向きにバプテスマを授けます。」「それなら、あなたたちとは礼拝できません。私たちは独自の教派をつくります。」「私たちは滴礼をします。」「それでは、悪魔を葬ることにはなりません。悪魔を怒らせるだけです。あなたたちとは礼拝できません。あなたたちは、滴礼の型式を作り上げたからです。」こうしたしきたりが教会に分裂を引き起こしたのです。私たちがこの伝統に固執しているので、誰か他の人が私たちと同じようにやらなければ、私たちは、その人が自分たちよりも霊的でなく、自分たちと同じようにしていないので神がその人に心を留めておられないだろう、と考えがちです。ですから、この章は、多かれ少なかれしきたりについて取り扱っており、イエスがいかにしきたりとはかけ離れた方かを、しきたりが出来上がらないように絶えず手段を変えていかれたかが取り扱われています。ですから、私たちは、自分の生活や霊的な経験を吟味してみるのが良いでしょう。なぜなら、誰か他の人が私たちのしきたりに反したことをすると、私たちは普通怒ってしまうからです。私たちはかなりのものを許容することができ、幅広い視野を持つことができますし、寛容であることができます。でもそれは、私のしきたりに反するようなことをされるまでです。そこで問題が出ます。ですから、神が私たちを助けてくださいますように。あの古い諺に戻ってしまうのです。「柔軟な者は幸いです。その人は、折れないでしょう。」しきたりに縛られたとたんに、堅くなってしまい、柔軟性を失ってしまいます。そうすると、折れてしまう危険が出てきます。自由でいましょう。柔軟でいましょう。神に、ご自身が働きたいように働いていただきましょう。それが、私たちの慣れている伝統的なやり方であれ、神が新しい方法でお働きになりたいのであれば、心を開いていましょう。もし神が望んでおられるのであれば、神に、新しい方法で私たちの心と人生と教会に働いていただきましょう。しきたりにがんじがらめにならないようにしましょう。もし、そのようになってしまうとどうなるでしょうか。御霊はお働きになりたいのです。御霊はお働きになりますが、しきたりは、古く乾いたぶどう酒の革袋のようなものです。新しい

ぶどう酒をそのような革袋に入れることはできません。入ると、破れてしまいます。もう、柔らかくないのです。ですから、心を開いておきましょう。神は、すばらしい方法でお働きになっています。神がなさっていることに私たちはワクワクしています。しかし、何が起るのかわかりません。私たちが新しい世代に伝えるには、どのように順応してゆく必要があるのかわかりません。もし、私たちが柔軟でなく、ラブ・ソングやその他のグループが教会に来るのを喜んで受け入れていなかったら……。伝統的ではありませんでした。それで、私たちは随分噂されました。しかし、神は伝統的ではない方法でお働きになりたいと思っておられました。そして、神は働いて下さいました。その時私たちがどのような動きをしたかをしきたりにするのはやめましょう。みなさんは、もうヒッピーではないのは明らかです。ですから、その時代に神がヒッピーの間で働いて下さったことはすばらしいことでした。でも、心の扉を開いておきましょう。鍵を掛けて神を締め出してしまうのはやめましょう。そのようなことをすれば、私たちはしきたりにしっかりとハマってしまうからです。口先だけではなく、心から神に近づきましょう。神の御霊が働き、動いて下さるように、いつも心を開いていきましょう。

マルコの福音書8章(Mark8)(#8036)

マルコの福音書8章です。聖書通読の学びを続け、新約聖書のマルコの福音書8章に入りました。「そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、(8:1) 」人はいつも数にこだわります。いつも頭数を数えているかのようです。「こんなにたくさんの方が出席した。こんなにたくさんの方が、前に出た。こんなにたくさんの方にバプテスマを授けた。」と言いたいからです。教会には、前に掲示板を置いて、今日の教会出席人数、先週の日曜日の教会出席人数、一年前の教会出席人数など、いろいろな統計の数字を掲げているところさえあります。私たちは統計の数字に関心があるようです。けれども、聖書の中で単に、「人の群れ」と言っているところが私は好きです。「また大ぜいの人の群れが集まっていたが、食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。『かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。』(8:1-2) 」イエスの教えには、人々の間のお働きには、これほどの強い関心が寄せられたのです。彼らはさびしい所に来ていました。「さびしい所に行かれた。」と書かれています。この「さびしい所」を解釈しましょう。ガリラヤ湖の周辺はさびしい所ではなく、青々としていて、とても綺麗な所だからです。現在でもさびしい所があります。イエスが行かれたのは、かなりさびしい所でした。えっと、例外は、数年前にウォーター・パーク(訳者注:プールが中心のテーマ・パークが出来たのか?)が出来たことということですが、それは新約聖書とあまり合っていません。ガリラヤ湖からはウォーター・スライド(プールの滑り台)は連想出来ません。イエスが5千人の給食をされたあたりには、現在ウォーター・パークがありますが、当時はかなりさびしい所でした。彼らは三日間もそこにいましたが、何も食べていませんでした。彼らはおそらく、夜そこで寝たのでしょう。朝になって、朝の光が差し込んだら、イエスは再び教え始められたのでしょう。イエスは、再び人々の間でお働きになったのでしょう。彼らは強い関心を持っていたので、そこに三日間もいました。大ぜいの人の群れがいました。女や子どもは除い

て、およそ四千人の男がいたと書かれています(訳者注:英語でチャックは、about four thousand menと言っています。) マルコはそのようには言っていません。ただ四千人(four thousand)と言っていますが、マタイは、「女と子どもを除いて(マタイ 15:38)」とつけ加えています。

それで、イエスは、「かわいそうに」とおっしゃいました。なぜでしょうか。なぜなら、「この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。空腹のまま家に帰らせたら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます。(8:2-3)」ということだったからです。ですからイエスは気にしておられます。群衆はこれから家に帰ろうとしていますが、イエスはだいじょうぶか気にしておられます。人々が動けなくなってしまうかわいさかと気にされています。人々の弱さを知っておられたので、イエスはかわいそうに思われ、物理的に人々にお仕えになりました。イエスの霊的な宣教は、いつもすばらしいものです。この宣教は三日間続いていましたが、依然としてこの肉体の中にいますので、人間のからだの弱さやもろさを持っています。主は、それを知っておられます。気づいておられます。主は、私たちが塵から造られていることをご存じですから、その人間の弱さを気づいておられるのです。けれども、私にとってはこれは慰めです。主が人間の弱さに気づいておられて、人間の弱さのゆえにかわいそうに思っておられるのです。あなたが疲れていることを、主はわかって下さいます。仕事をできる状態でないのを、わかって下さっています。身体的な問題を、身体的な苦しみを抱えているのを、わかって下さっています。主は、単にわかってくださるだけでなく、かわいそうに思っておられます。主はあわれみ、かわいそうに思っておられます。

「弟子たちは答えた。『こんなへんぴな所(荒野)で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができましょう。』(訳者注:8:4 「へんぴな所」は、欽定訳では「荒野」)」いったいどうすれば、この人たちに食べさせることができるのでしょうか。こんな寂しい所で、どのようにすれば、この人たちに十分パンを食べさせることができましょう。弟子たちは、自分たちの歴史を余り覚えていなかったようです。彼らの先祖が荒野で40年間さまよ

っていた時、神が天からのパンを備えてくださいました。詩篇78篇で、詩篇の記者が荒野での出来事を記録しているのを思い出します。神が民にマナを備えてくださっているのに、民はマナに飽きてしまったと言いました。「神は荒野の中で食事を備えることができようか。(詩篇78:19)」「神は肉を備えることができようか。(詩篇78:20 参照)」そして、民は肉を欲しがり、神は荒野で肉を備えることがおできになることを示されました。ここで、弟子たちはこんな荒野でどのようにパンを備えることができるのだろうかと考えていました。「すると、イエスは尋ねられた。『パンはどれぐらいありますか。』弟子たちは、『七つです。』と答えた。すると、イエスは群衆に、地面にすわるようにおっしゃった。それから、七つのパンを取り、感謝をささげてからそれを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。また、魚が少しばかりあったので、そのために感謝をささげてから、これも配るように言われた。人々は食べて、(8:5-8) 」またこの「満腹した」という、飽食という意味の言葉が使われています。人々は食べて、満腹しました。「そして、余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。(8:8) 」七つのパンから、あまりが七つのかごのパン切れになりました。「人々はおよそ四千人であった。(8:9) 」マタイは、それに女と子どもを加えています。

「それからイエスは、彼らを解散させられた。そしてすぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方へ行かれた。(8:9-10)」さて、ダルマヌタは、一つの区域で、ダルマヌタ郡と言っているようなものです。これは、ガリラヤ湖の反対側、西岸にありました。イエスは、五千人の給食をされた時は、ガリラヤ湖の東岸、北東岸におられました。五千人の給食をされたほぼ同じ場所で、四千人の給食をされました。そこで、興味深い点が出てくるのですが、どういうわけかこの奇跡を、弟子たちにきちんと理解してもらえなかったことです。イエスが五千人の給食をされたのは、どういうわけか弟子たちの印象に残りませんでした。どういうわけか、この奇跡的な部分に、弟子たちは目をくらまされていました。五千人の給食の後の6章の52節を読むと、「というのは、彼らはまだパンの奇蹟のことを理解できずにいて、心を堅く閉ざしていたからである。(訳者注:これは現代訳からの引用。欽定訳の“miracle”という言葉が出ています。)」とあります。さて、これは弟子たちのことが語られているのです。

勿論弟子たちは、海に出ているとき、もうだめだと思って心配していました。イエスが歩いて弟子たちの所に来られ舟に乗り込まれると、風がやみましたが、彼らの心中の驚きは非常なものでした。驚きました。それは、弟子たちは、イエスが宇宙の、元素の支配者であること、パンを増やすことがおできになる、魚を増やすことがおできになること、水の上を歩くことがおできになる、嵐を静めることがおできになることを、どういう訳かまだ悟っていませんでした。どういうわけか、理解できずにいました。それは、彼らの心が堅くなっていたからでした。神が私たちの心を開き、御霊の働きに敏感であり続けさせてくださることを祈ります。神の創造とその力に、いつも驚いて、不思議に思っているように。それを当たり前と思うのではなく、いつも神の恵みや神の愛や私たちの間の神の働きによって、それを思い起こし、新たな思いでいられますように。神は、ここを本当に長い間祝福してくださっています。どの日曜をとっても、ここで起きていることは、世界中から来ている、死んだ教会に長いこと座って神の働きやその御手を見たことのない人にとっては、全くの驚きです。実にこんなに長く続いているので、神がなさっていることを恐れうやまって驚き怪しみ、神のすばらしさと祝福を見て、絶えず祝福され絶えず感激するのではなく、これを当たり前になってしまうのではないかと時々心配になります。

それで、彼らは舟に乗り、ダルマヌタに到着しました。それは、西岸に戻った所にあり、カペナウムのやや南にありました。ガリラヤ湖のそこには、小さいマグダラの村がありました。もう現在は存在しません。ただそこには、誤ってパンと魚の教会(Church of the loaves and the fish)と呼ばれている小さい教会があるだけです。その教会を建てた人は、聖書を注意深く読んで、奇跡が湖の反対側で行なわれたことに気づかなかったようです。奇跡の後で、彼らはダルマヌタに来ました。しかし、その昔は、湖の向こう岸への道がなかったため、イスラエルに来る巡礼者が反対側に行くのは大変でした。それで、もっと便利な場所に教会を建てて、そこに巡礼者を連れて行き、「これがパンと魚の教会で、床のモザイクを御覧下さい。ここがイエスが四千人の給食をしたところです。」と巡礼者に言うためでした。巡礼者もかわいそうに、聖書をちゃんと読んでいなかったのも、それが湖の反対側だということ

とをわかっていませんでした。観光客の場合にも言えます。イスラエルにはこのような場所がたくさんあります。ここがその場所です、と言うのですが・・・面白いですね。むろん、マグダラは小さい村で、マグダラのマリア(Mary Magdalene)の出身地です。Magdalene は、「マグダラの」という意味です。マグダラのマリアは、ここの出身です。それで、彼らは、横切ってダルマヌタ地方へ来ました。マタイはもっと特定して、彼らがマグダラに来たと書いています。(訳者注: マタイ15:39は、欽定訳ではMagdalaになっているが、新改訳では「マガダン地方」となっている)彼らは実際、もっとさびしい所、湖の向こう岸に来ていました。そこには、10都市デカポリスがありました。異邦人のガリラヤで評判になったところでした。そこから、彼らはその時に湖のユダヤ人側に戻ってきました。マグダラやカペナウムといったところでした。

ここで、「パリサイ人たちがやって来て、イエスに議論をしかけ、天からのしるしを求めた。イエスをためそうとしたのである。(8:11)」イエスがどのようにお感じになったか察しがつきます。死者がよみがえり、足なえが歩けるようになり、目の見えない人が見えるようになり、5つのパンと2匹の魚だけで、さらにまた7つのパンと数匹の魚で群衆が食事をしました。それなのに、彼らはしるしを見せてくれと言っているのです。「イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。(8:12)」おそらく、「おい。いい加減にしてくれよ。何が起きているのか、見えないのか。」ということだったのでしょう。「イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。『なぜ、今の時代はしるしを求めなのか。』(8:12)」よくあることのように、今の人も依然としてしるしを求めています。どういうわけか、神がなさっていること、してくださったことが見えなくなっています。さて、マタイは、この時点でイエスが次のように言われたことに触れています。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる。』と言うし、朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ。風になるぞ。』と言うのです。あなたがたは、偽善者です。そんなによく、天のしるしを見分けることができるのに、・・・」彼らは天からのしるしを求めていました。「天のしるしを見分けることができるのに、時のしるしを見分けることができない。(マタイ 16:1-4 参照)」それでイエスは、「しるしは与えられません。」と言われ

ました。マタイは、「しかし、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。(マタイ 12:39-40)」と述べています。つまり、イエス・キリストの死者からの復活が、この方が実にメシヤであり神の御子であって、私たちの罪を負うために神から来て遣わされたことの、最も大きな最後のしるしだということです。イエスの死者からの復活が、イエスが宣言されたすべてのことの証拠になるということです。この方が実に神の御子である最終的な証拠として、これがイエスの発言の証印になりました。このため、サタンは、死者の復活の真理に対抗して、イエスの復活に疑いを吹きかけるのです。

「イエスは彼らを離れて(8:13)、」イエスは、そこであまり時間は取られませんでした。「また舟に乗って向こう岸へ行かれた。(8:13)」ですから、かなり頻繁に渡っておられます。東岸、北東岸で群衆に食事を与え、西岸に来て、パリサイ人にしるしを求められたりして難癖をつけられ、それから舟に乗って向こう岸に戻り、今度はイエスが以前におられたところよりやや北のベツサイダ地方に来られました。ベツサイダは、ガリラヤ湖の北岸にあたるからです。その当時、北岸はそんなに広くありませんでした。ガリラヤ湖は南北に長くなっています。長い方の岸は、南北に沿った岸でしたが、北岸も南岸もそれ自体は、そんなに広くありません。ベツサイダは、ちょうど北岸にありました。ですから、イエスは再び湖の向こう側に来られたのでした。「弟子たちは、パンを持ってくるのを忘れ、舟の中にはパンがただ一つしかなかった。(8:14)」うっかりしていました。パンを持ってくるのを忘れて、舟の中にはパンがただ一つしかありませんでした。それで、イエスが弟子たちに、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。(8:15)」と話された時、弟子たちは何のことを言われているのか理解しませんでした。「パン種だって、何をおっしゃっているのだろう。」ある弟子が、「わかった。パンを持ってくるのを忘れたからだ。イエスはたぶん私たちを叱っておられるのだ。しまった。」と言いました。弟子たちはイエスがおっしゃっていることがわかったと思っていました。けれども、弟子たちはイエスのおっしゃっていることを全然わかっていませんでした。このようなことは、よくあることです。自分が聖書を理解していると思っ

のです。聖書が何を言っているのか理解するのですが、聖書が何を言っているのか本当はほんの少しもわかっていないのです。エデンの園でエバがりんごを食べたと、権威的に話すのを聞きます。ここである時、議論をしたことがあります。カリフォルニア州立大学フラートン校の大学の先生が何人か来て、ギシヨン博士、ヘンリー・モリス博士と議論しました。フラートン校の大学の先生の一人で、はつらつとした人ですが、無論この人は進化論側に立って論じていました。「みんな聖書を読むが、聖書をわかっていないのだ。」と話していました。それでこう言いました。「例えば、ほとんどの人が、エバがりんごを食べたと信じているが、りんごではなくざくろだった。」と言いました。その人がどこからざくろ(という情報)を得たのか知りませんが、私たちはエバがりんごを食べたとも信じていません。この人は、りんごだと信じている無知な人のことを話しましたが、それはざくろだと言いました。その人がどの聖書を読んだのか知りませんが…。残念ながら、それが実情です。聖書が言っている事を権威的に話す人がいますが、それが全く聖書が言っている事ではないことが多いのです。ですから、ここでも、「そうだ。何を言われているのかわかるぞ。パンを持ってくるのを忘れたんだ。」と言いました。彼らは自分たちで解釈しようとして、ついに、「そうだ。」ということになりました。

「それに気づいてイエスは言われた。『なぜ、パンがないとって議論しているのですか。』(8:17)」なぜあなたは議論しているのですか。あなたは回答を出したが、なぜそれだと議論しているのですか。「まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。(8:17)」五千人の給食の後、彼らは悟らなかったことを思い出してください。「あなたの心はまだ堅く閉じているのですか。あなたは、少しのものから増やすわたしの能力をあなたがたは二度も見たのです。」それで、イエスは弟子たちに思い起こさせておられます。「『目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『十二です。』(8:18-19)」これからあなたは何かわかることはないのですか。何が起きているかわから

ないのですか。五つのパンが十二のかごになったのです。「『四千人に、七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。』彼らは答えた。『七つです。』イエスは言われた。『まだ悟らないのですか。』(8:21)」後でイエスはエマオへの途上の二人の弟子に、「ああ愚かな人たち。信じない、心の鈍い人たち。(ルカ 24:25 参照)」と言われました。私たちの誤解で、主が私たちに失望されることが幾度あるんでしょうか。特に、私たちは主の恵みを誤解しています。私たちは、神のすばらしい恵みをただ受け取るのではなく、かえって神の恵みをもらうために頑張ったり、祝福を受けるために頑張ることがどれほどあることでしょうか。「あなたはわからないのですか。」パウロは、「ああ愚かなガラテヤ人。そんなにすぐに真理から離れてしまうとは、だれがあなたがたを迷わせたのですか。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰について聞いたからですか。(ガラテヤ3:1-2 参照)」神を信じるのが神をあがめ、神がそれに応じてくださるをわからないのですか。神が応えてくださるのは、あなたの行ないによるのではないのです。そうではなく、あなたが神の恵みとすばらしさに応答する必要があるのです。

さて、イエスは、盲目を取り扱っておられるのです。それは、パリサイ人たちの盲目です。ここで、イエスは数多くの奇跡を行なわれました。こんなにたくさんのことを行なわれたのに、パリサイ人たちはしるしを求めました。もし、しるしが見えないのであれば、彼らは目が見えなかったのです。それは、イエスがメシヤであるというしるしです。牢にいたバプテスマのヨハネから弟子たちが遣わされて来たとき、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか。(ルカ7:20)」とたずねました。つまり、ヨハネは、はっきりさせましょうよと言っているのです。それは、ヨハネさえも、イエスがすべての人の贖いの代価として、ご自身のいのちを与えるために来られたことを知らなかったからです。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか。」イエスは、まさにその時に、ご自分のところに来た病人をたくさんいやされ、奇跡を行ない、神の愛と真理を伝えていました。それでイエスは言われました。「あなたがたは行

って、自分たちの見たり聞いたりしたことをヨハネに報告しなさい。足なえが歩き、盲人が見えるようになり、貧しい者に福音が宣べ伝えられています。(ルカ7:22)「これらは、メシヤのしるしでした。「足なえは喜びでとびはね、盲人が見えるようになり、おしは神をほめたたえる。心の貧しい人たちに福音が伝えられる。(イザヤ 35:5-6 参照) 」と書かれています。ですから、ここにメシヤのしるしがありました。ヨハネはそれに気づきました。ヨハネは、弟子たちが戻って来ると気づきました。「すごいです。盲人が見えるようになり、足なえが歩けるようになり、イエスが人々に神のすばらしい愛を教えるのを見ました。」ヨハネが理解したのはそのようなしるしでした。メシヤのしるしでした。しかし、パリサイ人らはそのようなしるしが見えていませんでした。「しるしを見せてくれ。しるしを与えてくれ。」イエスの弟子さえも見えていませんでした。イエスのなさっていることが見えていませんでした。イエスは、五つのパンと二匹の魚から女や子どもの他に五千人に食事をお与えになり、残りを集めると12のかごいっぱいになりました。

それでは、イエスが「パリサイ人のパン種に十分気をつけなさい。」と言われたのは、どのような意味だったのでしょうか。別の箇所ではイエスは、「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。(ルカ12:1)」と言われました。パン種は、パンの生地をふくらませるものでした。パン種はものを、実は腐らせます。パンの生地が腐ってくると、酸素が発生して気泡ができ、パンの生地がふくれます。でも、初めに必要なパン種はわずかです。初めに入れるサワードーで、少し入れると生地全体に広がります。パウロはコリント人に、「あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。(1コリント5:6)」と話しましたし、ガラテヤ人にも話しました。コリント人に対しては、交わりの中に悪い者を許しているという文脈の中で話しました。パウロは、「悪を許すことが、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。」と言いました。過越の祭の時には、作ったパンにパン種が入っていないことが重要でした。少しもパン種が入っていないことが、律法の絶対の命令でした。ですから、過越の祭の時には、家中を探してパン種をすべて処分しました。それは、パン種の発酵なしに

過越の祭を守るためでした。このため、聖書では、パン種が罪の型となっています。少しでも罪を許してしまうと、罪があなたの生活全体に広がります。ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませます。さて、この偽善は、パリサイ人のパン種のことですが、これは外面的な宗教のことです。すべてが、外面的な見せかけのために行なわれました。自分がいかに霊的か、正しいかを人に印象づけるために行なわれたのです。すべて外面的なものでしたが、内側にはそれがありませんでした。内側には、悪意や、争い、ねたみといった内側のすべての悪がありました。イエスが、「あなたがたは白く塗った墓のようなものです。(マタイ 23:27)」と言われた通りです。「墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨でいっぱいです。皿の外側はきよめるが、その中はあらゆる汚れでいっぱいです。(マタイ 23:25-27 参照)」ですから、そのような外面的に見せびらかす宗教に気をつけなさい、ということなのです。けれども、あなたの心の中で起きていることではないですか。宗教は外側から内側に働きかけようとしませんが、キリスト教は内側から外側に働きかけるのは興味深いことです。神はあなたの心に中にわざを始められ、それが外側に現れます。でも、宗教はみな、「汝何々をすべし。汝何々をすべからず。」といった外面的な規定です。みせかけになってしまいます。律法の下に、見せかけの正しさを着ることになります。でも、これは偽善です。単なる芝居です。フポクリシスは、ギリシャ語で俳優です。(訳者注:英語で偽善はヒポクラシー)彼らは芝居をしているだけで、心の中では現実ではありません。イエスは、「それに気をつけなさい。」とおっしゃいました。

「彼らはベツサイダに着いた。(8:22)」ガリラヤ湖の北端、いや北端に戻ってきました。「すると人々が、盲人を連れて来て、さわってやってくださるようにイエスに願った。イエスは盲人の手を取って村の外に連れて行かれた。(8:22-23)」面白いですね。ベツサイダにおいて、人々が盲人を連れて来ましたが、イエスはその盲人を連れて行かれました。イエスはその盲人を連れて行かれたのを心に描くことができますか。ここでも、やさしさ、あわれみがあります。群衆が、大勢の人がイエスを求めていたときに、たった一人の人に喜んでお仕えになりました。この一人の盲人のために時間をとられました。「イエスは盲人の手を取

って村の外に連れて行かれた。そしてその両眼につばきをつけ、(8:23)面白いですね。何章か前に、イエスはおしの舌につばをつけられ、しゃべることができるように舌のもつれを解かれました。今度はイエスは、盲人の目につばきをつけられました。もう一つの場合は、エルサレムでありました。盲人がイエスの所に来たとき、イエスは土につばきをして、つばで少し泥をつくり、その泥をその人の目に塗られました。そして、「行って、シロアムの池で洗いなさい。(ヨハネ 9:7)」と言われました。そして、その人が言って洗うと、見えるようになりました。イエスが再び癒しを形式を拒まれたのは興味深いことです。色々な方法でわざをなさいました。必ずしも同じ方法ではありませんでした。それは私たちが、一つの特定の方法や一つの特定のやり方に、イエスを閉じ込めないようにするためでした。私たちはとても公式を作りたいのです。画一的にやりたがります。こうして、ああして、こうすれば、・・・AたすBはCだ、というように。主は、公式に限定されるような方ではありません。けれども、新たな教派を作りたいのであれば、公式があれば十分です。「目につばき派」、「目に泥派」といった具合です。イエスが私になさったのはこのやり方だった。主があなたにそのようにされなかったら、主はあなたに本当の御業をされなかったのだ、という風に。けれども、イエスはいろいろな方法で働いて下さいます。「イエスは盲人の手を取って、」私はやさしさを見ることが出来ます。「村の外に連れて行かれた。そしてその両眼につばきをつけ、両手を彼に当ててやって、」「見えるか。」いや実際は、「『何か見えるか。』と聞かれた。すると彼は、見上げて、『人が見えます。木のように歩いているのが見えます。』と言った。(8:23-24)」つまり、彼はぼんやり見えたのです。人だとはっきり区別することはできませんでした。ひょっとしたら、木が動いているのかもしれないかという程度でした。癒しの過程が次第に起こったというのは、私にとって面白いことです。また、これも重要な点だと思うのです。いやしは次第に起こることが多いのです。必ずしも突然一気に癒されるものではありません。多くの場合、癒しは次第に起こります。「それから、イエスはもう一度彼の両眼に両手を当てられた。そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。そこでイエスは、彼を家に帰し、『村に入っていくように。だれにも話さないように。』と言われた。(訳者注:8:25-26 欽定訳には、「だれにも話さないように。[新改訳マタ

イ8:4 参照]の部分がある。) 」ベツサイダに戻らないで、ただ家に帰りなさい、と言われました。

「それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。(8:27)」さて、ベツサイダからピリポ・カイザリヤまでは、およそ50マイル(80km)から55マイル(88km)あります。ですから、彼らはこの時、ガリラヤ上部と呼ばれている地方を旅していました。ピリポ・カイザリヤに上って行くのは、ちょうどヘルモン山のふもとに行くことでした。ピリポ・カイザリヤは、ヨルダン川の二つの大きな水源がある所でした。ちょうどピリポ・カイザリヤには、巨大なバニヤス(Banias)の泉があり、近くのダンの町にはダンの泉がありました。ですから、三つあったヨルダン川の大きな水源の二つがあったのです。ヘルモン山の麓の基底の岩から流れ出ていました。これはピリポ・カイザリヤのバニヤスでした。ですから、イエスははるかに上の北端のイスラエルの国境まで来ていました。「イエスはピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられ、その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。『人々はわたしをだれだと言っていますか。』(8:27)」人々はわたしについて何と言っていますか。わたしをだれだと思っていますか。「彼らは答えて言った。『バプテスマのヨハネだと言っています。』(8:28)」これはヘロデの評価でした。「ヨハネが生き返ったのだ。」と言いました。「エリヤだと言う人もいます。(8:27参照)」主の来臨の前に、人の心を準備するためにエリヤが来るという預言がありました。「また預言者のひとりだと言う人もいます。(8:27)」モハメッドもそう言いました。イエスが預言者のひとりだと。「するとイエスは、彼らに尋ねられた。『では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。』ペテロが答えてイエスに言った。『あなたはメシヤです。』するとイエスは、自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。それから、・・・教え始められた。(8:30-31) 」あなたがたは、わたしのことをメシヤだと認めたのだから、あなたがたはもう一つ知っておく必要があると言って、彼らがもう一つ見えなくなっている点を取り扱っておられます。パリサイ人が見えないことや、弟子たちが見えないこと — 心が堅く閉ざされていたので、パンと魚が増えた奇跡に気がつきませんでした。そして、ベツサイダでの盲人。この場合は、身体的に目が見えないことでした。そして、またイ

エスは霊的な盲目を取り扱われています。「あなたはメシヤです。」そのとおりです。しかし、あなたがたはメシヤの目的が見えていません。あなたがたはわたしがいますぐ神の国を建てると考えていますね。御国にいますぐ偉大な医者を持つことができると考えていますね。ローマ帝国を倒し、今神の国を立てると考えていますね。あなたがたは間違っています。あなたがたは見えていません。旧約聖書の中にあるたくさんの預言が成就されなければならなかったのです。「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。…私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。(イザヤ 53:3、5) 」ダニエル書によると、「彼は断たれなければならない(ダニエル9:26参照)」のです。イザヤ書によると、「生ける者の地から絶たれ(イザヤ 53:8) 」るのです。詩篇によると、キリストは十字架につけられなければならないのです。(訳者注:詩篇22篇等を指していると思われる。)

ですからイエスは、メシヤに実際に起こることに彼らの目を開こうとされました。それで、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長たちに捨てられ(マルコ 9:31 参照) 」と教え始められました。「家を建てる者たちの捨てた石(詩篇118:22)」イエスは、家を建てる者たちに、祭司長、長老たちに捨てられなければなりません。そして、「殺され」なければなりません。「ほふり場に引かれて行く小羊のように、…彼は口を聞かない。…生ける者の地から絶たれたことを、彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。(イザヤ 53:7、8参照) 」イエスは、「殺され、三日の後によみがえらなければならない(マルコ 9:31 参照) 」のです。どういうわけか、弟子たちは、メシヤとその支配についての彼らの考えとあまりに違うのに驚いてしまい、イエスがご自分が殺されることを話されると、その時点で彼らの頭が機能なくなり、残りの部分が聞こえませんでした。三日の後によみがえることが聞こえませんでした。あまりに衝撃的な話をされると、自分が何に衝撃を受けたので「わあ! 」と言ったのか理解したり、あるいは把握するために、その後で言われたことを聞くことができなくなるほど衝撃的な話しをすることは可能です。何年も前の復活祭の日曜日に、イースターの日曜日のメッセージを衝撃的な発言で始めました。ちょっと、みんなの関

心を集めるためでした。私は、「イエス・キリストは本当は死者からよみがえらなかつた。復活はない。」と言い、そして、「それについて、どうお感じになりますか。」と言いました。今日そのように言っている人がたくさんいます。そして、もしキリストがよみがえらなかつたら、私たちの希望はどうなるのかなどについて続けて話しました。ドアのところで挨拶をしていると、あるご夫妻が来て、教会の後私に向かってどなりました。「こんなひどいことを聞いたのは始めてだ。人にキリストがよみがえらなかつたと言うなんて。」と。「あなたは私の説教を全部聞かなかつたのですか。」と、思ってしまった。それは、ただ冒頭の発言だけだ。どうお感じになりますか、と言ったのです。しかし、そのようなことを言っている人が今もいるのです、と。私は続けて、キリストがよみがえられたと説教しましたが、彼らはその後の説教を聞きませんでした。余りに衝撃を受けたので、その後は頭の機能が停止してしまつたのです。イエスが「私は殺される」と言われたときに、弟子たちも「わあ！」つとなつてしまつたのです。三日の後によみがえることが聞こえませんでした。そのことは、彼らの頭の上をさつと通り過ぎてしまいました。

「するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。(8:32)」主をいさめることを想像してください。ペテロつたら・・・。「しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかつて言われた。『下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(8:33)』つまり、あなたは霊を見分けることができないということです。さて、ペテロが、「あなたは生ける神の御子メシヤです(マタイ 16:16参照)」と言つたとき、イエスは、「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは肉と血ではなく、天にいますわたしの父です。(マタイ 16:17)」と言われました。神はあなたに啓示を与えてくださっています、と。イエスは、「人の子は、・・・」これは、メシヤの称号の一つですが、「人の子は殺されなければならない。」と言われると、ペテロはイエスをいさめ始め、「主よ。そんなことはとんでもないことです。」と言いました。「そのような考えは、失せてしまえ！」イエスは、「下がれ。サタン。」と言われました。ペテロは、神の御霊の啓示が何であり、サタンからの啓示が何であるかの区別がつかせませんでした。ペテロは霊を見分けることができ

ませんでした。一方で、神の啓示を受け、その一方でサタンの言葉を話していたのです。しかし、ペテロが御霊に満たされたとき、それは変わりました。使徒行伝で、ペテロが霊を鋭く見分けているのがわかります。アナニヤとサツピラの場合、サマリヤの占い師シモンの場合があります。しかし、この段階では霊を見分ける能力が欠けていて、何が神からのものか、何が人からのものかわかりませんでした。

「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』(8:34)」自己中心の生活を捨てなければなりません。聖書は、自己中心の生活に反対した教えをしています。それは、自分中心の生活、自分勝手な生活です。イエスに従うためには、イエスがご自分を中心とした生活をお捨てになったように、自己中心の生活を捨てなければなりません。「あなたがたの間では、そのような心構えていなさい。それはキリスト・イエスのうちのも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられ、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。(ピリピ 2:5-8参照)」ですから、もしイエスに従うのであれば、自分を中心にした生活をやめなければなりません。それは、ご自分を無にされたイエスと同じようではありません。私たちは、自分たちがこうであると思っていたものから自分を無にし、他の人に仕えるために、助けるために、奉仕をするために、仕える者の姿をとらなければなりません。自分のことを気にかけるのではなく、他の人のことを気にかけて考えなければなりません。「自分を捨て」ます。自己中心の生活を捨てて、イエスに従うことを妨げるものを完全に捨てなければなりません。パウロは、「すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。(1 コリント 6:12)」と言いました。私の神との歩みの前進を妨げるものがあります。間違ったことではありません。罪のレッテルを貼ることはできません。ただ妨げるものです。ヘブル人への手紙では、「いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて(ヘブル 12:1)」と書かれています。イエスに従うのに障害となり妨げになるものです。ですから、

自分を妨げる、道に立ちはだかるものを捨てるのです。第二に、「自分の十字架を負い」ます。十字架刑が迫っていたとき、イエスは、杯を取りのけてくださいと祈られました。「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。(マルコ 14:36)」と付け加えられました。ですから、イエスが「自分の十字架を負い」とおっしゃったのは、あなたの願いを神のみこころに完全に明け渡すことを話しておられます。神のみこころを行なうために、自分の願いを脇に置くのです。それがどんなことであれ、それにどんなことが伴っても、神のみこころを行なうために自分の野心を脇に置くのです。第三は、「わたしについて来なさい」です。これはイエスが模範を残されたことです。ペテロが言ったように、イエスは苦しみによって、「その足跡に従うようにと、私たちに模範を残されました。(ペテロ第一 2:21 参照)」つまり、イエスに従って、この自己犠牲の模範、同情の模範、愛の模範、人を世話する模範に従うのです。これがイエスがあなたに望まれている生き方です。与えること — 受けるよりも与えることに気をかけていること — 愛すること、赦すこと、優しさは、イエスがあなたに持ってほしいと願われている品性です。これらはイエスの生涯の特徴になった品性です。私たちはこのことを覚えて置く必要があります。私たちは自分の凝り固まった頑固なやり方にはまってしまいやすいのです。「こうやってほしい。こういうやり方でしてほしいのに。」と。しかし、それはキリストらしからぬやり方なのにもかかわらず、私たちは相手のやり方をさばいて、この上もなく霊的だと感じるのです。それはキリストらしからぬやり方なのです。私たちは、あの人はどうかしてると思って、うんざりするのです。しかし、イエスはそのような人たちを見てかわいそうに思われました。私たちは、カッカときて、「こんなことをして。絶対に赦してやるものか。」と思うのです。しかし、彼らがイエスにしたことを見て下さい。イエスは、「父よ。彼らをお赦し下さい。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ23:34)」と言われました。私たちはまだまだですね。ある意味でがっかりしますね。こんなに長い間主に従おうとしているのに、自分の生活をイエスの生涯と照らし合わせると、まだまだほど遠いのです。ああ神さま、人に対するすべての行ないにおいて、すべての反応において、私がキリストのようにする必要があり、キリストに従う必要があることにいつも気づいていることができますように。

そしてイエスは、神の原理と私が呼んでいるものを与えられています。これに反論できませんし、とても論理的で道理に合っているので議論の余地がありません。「いのちを救おうとする者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。(9:35)」自分のために生きて、自分自身にしがみついて、わがままな生活をおくれば、生きるための本当の意味を失います。しかし、キリストのために自分のいのちを失うなら、キリストにあって本当のいのちを見出だすのです。イエスに明け渡してゆだねて生きれば、「そうだ、これだ！」と、これがいのちであることがわかるのです。「これだ！」とわかるのです。これがいのちだと。「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。(8:37)」キャンプで子供たちに話をしていましたが、私たちの問題の一つは、永遠を見失ってしまうことです。私たちはこの地上にいますが、それはとても短い時間なのです。先日、実際に、人間がこの地上にいるようになってからの期間がいかに短いかを考えていました。人間の歴史は6千年です。アダムの時代から現在までの歴史です。それはそんなに長くありませんね。実際、百歳まで生きれば、人間の歴史の六十分の一生きてことになります。面白いですね。けれども、永遠を考えれば、永遠と比較すれば、私が仮に人間の歴史の六十分の一生きてとしても、とてもわずかな短い時間です。もし、その短い時間の中に世の富を得たとします。今日新聞で、あるメキシコにいる男がここ数年間に66億ドル蓄財したという記事を読みました。この人は、ロス・ペロー（訳者注：米国の金持ち。その豊かな資金力を背景に、92年大統領選挙に出馬、落選。）より3倍金持ちです。メキシコでは腐敗が横行しているからです。もし、腐敗した行為によって得をしても、いのちを損じたら、何の得がありません。そして、第二に、「自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。(8:37)」あなたは自分のいのちを何と引き換えにしますか。あなたが自分のいのちを売るために、サタンがあなたにいくら差し出せばよいのでしょうか。エサウは長子の権利を憎みました。あるいは、侮りました。気になりませんでした。一杯のちゃんこ、レンズ豆のスープと引き換えに長子の権利を売りました。今日も、一杯のちゃんこ引き換えに自分のいのちを売る人がいるのです。サタンのごみ、たわごとのために。初期のアメリカにきたヨーロッパ人のことを読むと恥ずかしくなり、不名誉に感じます。インデアン

をだまし、キラキラ光るガラス玉を金と引き換えにしました。私たちは、人が他の人を利用した、歴史のその部分について、ばつの悪い思いをし、恥ずかしくなります。貴重な金をキラキラ光るガラス玉と取り替えたのです。しかし、何と多くの人が今日自分のいのちをサタンのキラキラ光るたわごとと取り替えているでしょう。何たる悲劇でしょう。何たる悲劇でしょう。「自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。」

それから、イエスははっきり言われました。「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばをはじるような者なら、(8:38)」どうもイエスは今の時代のことを話しておられるように聞こえます。「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」恐ろしいですね。今日、キリスト教に対して大きな圧力があります。リベラルの人たちが、クリスチャン叩きをするのがどんどん流行しています。同性愛や同性愛の生活様式を叩くのは、政治的には全く正しくないことです。そのようなことをすれば、大問題になります。でも、彼らはクリスチャン叩きをするのが楽しいようです。「わざわざいなるかな、彼らは悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい(イザヤ5:20)」という聖書の箇所を思い起こさせてくれます。そして、悪を呼んで善といい、善を呼んで悪という人に支配されている国は、わざわざいなるかな。私たちの住んでいる時代は、イエス・キリストのため、イエス・キリストのことばのために立ち上がると、犠牲を払わなければなりません。正義を支持し、真理を支持し、純潔と道徳を支持すると犠牲を払わなければなりません。今日何をすれば刑務所に入れられるのでしょうか。考えてみたことがありますか。ナイフをとって、自分の夫の体の大切な部分を取り去ると、刑務所に入らなければなりませんか。(訳者注: 米国で、夫から虐待を受けた妻が夫の性器を切り取るという犯罪が起きたが、この妻は精神的苦痛を受けたという理由から、有罪にならなかった) いいえ。誰かを殺したらでしょうか。腕利きの弁護士がいればそうではありません。(訳者注: チャックはO.J.シンプソンのような事件のことを言っているのだと思います。) 教会に入って行って、わいせつな言葉を叫んだりわめいたりして、礼拝を中断させることはどうでしょうか。いいえ。何をすれば刑務所に入

れられるのでしょうか。中絶クリニックの前で祈ったら、刑務所に入れられます。私たちの住んでいる時代は何とんでもないでしょう。圧力があります。イエスは、「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばをはじるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」と言われました。キリストのために立ち上がらなければならないでしょう。教会に対する迫害が増すでしょう。あざけりが増すでしょう。そのようなものに対抗するのに、真の試練が来たときに、十分な神の恵みと御霊があなたの内にあるのでしょうか。今晚私たちは、このように特別な集団の中にいて、主のこと、主に関することに利益や関心があるので容易です。けれども、本当の圧力が来たとき、持ち堪えることができるのでしょうか。キリストから十分に受け取っているのでしょうか。十字架までキリストに従う深い確信を持っているのでしょうか。神が私たちを助けて下さいますように。

マルコの福音書9章(Mark9)(#8037)

…聖書通読の学びを続けています。(訳者注:テープの頭が切れていて、部分的にしか聞き取れない。)

イエスはピリポ・カイザリヤ地方におられます。そこは、イスラエルの国の最北端にありました。ピリポ・カイザリヤは、ヘルモン山のちょうど山麓にありました。そこが、イエスが弟子たちに、「人々は、わたしをだれだと言っていますか。(8:27)」とお尋ねになり、弟子たちが人々が話している色々な意見を話した場所です。イエスは、「ではあなたがたは、わたしをだれだと言いますか。(8:29)」と言われました。ペテロは答えて言いました。「あなたは、生ける神の御子メシヤです。(マタイ 16:16参照)」マルコの福音書8章31節には、「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」と書かれています。「しかもはっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。(8:32)」さて、イエスは、ご自分の死について話されたところでした。弟子たちが、イエスが御国を立てられるのを期待していたことを思い出していただけるでしょうか。弟子たちはイエスがメシヤであると確信していました。ユダヤ人の言い伝えによると、メシヤがこの地上で神の御国を立てられるはずなのです。メシヤは、権力と栄光を持って、地上を支配することになっていました。全世界が、メシヤの支配下に入るようになっていました。詩篇2篇には、「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。(詩篇2:8)」と書かれています。旧約聖書全体が、メシヤに関する預言になっています。ですからペテロが、「あなたは、メシヤです。」と認めたととき、イエスはご自分の死について、三日の後によみがえることについて話し始められました。これは、メシヤの考えをめちゃくちゃにするものでした。弟子たちは、イエスのこのことばに身震いしたに違いありません。しかし、8章の最後の節の38節で、イエスはそのとき、

「このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」と言われました。ですから、イエスは再臨されることについてお話になっています。父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来られることをです。今回イエスは、死なれませんが三日の後によみがえられます。しかし、イエスは聖なる御使いたちとともにまた来られます。それで、「イエスは彼らに言われた。『まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。(9:1)』さて、このことは弟子たちの頭の中で謎となりました。死ぬことを語りながら、どうして御国と力について、来るべき御国と力について、話すことができるのだろうか。頭の中は完全に混乱していました。弟子たちは、これらのものをつなげて考えることができませんでした。面白いことがあります。弟子たちは、イエスが死なれてもなぜ御国に入ることができるのか完全に混乱していました。彼らにとっては謎でした。それなのに、考えてみてください。あの十字架上の強盗が、死につつあるイエスを見て、「イエスさま。あなたの御国のくらいにお着きになるときには、私を思い出してください。(ルカ32:42)」と言いました。びっくりしますね。十字架上の強盗が、イエスご自身の弟子が把握できなかったことを、把握していたようです。つまり、イエスは、死を通して御国にお入りになるのです。ここでイエスは、そのことを暗に言われています。ご自分の死についてお話になっていますが、今は、「ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」とおっしゃっているのです。

イエスはきっと、次に起こった事を言われてたのです。つまり、それは、イエスがペテロとヤコブ、ヨハネをヘルモン山の山頂に連れていかれ、そこでイエスが彼らの前で御姿が変わったことです。御姿が変わったという言葉は、変身したとか、体が変わったということです。それで、イエスは変身をされて、「その御衣は、雪のように非常に白く光った。(訳者注:9:2 欽定訳から訳出)」その光りは、御子が栄光や力で光っているからで、その御衣は雪のように白かったのです。「地上のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。(9:2)」さ

て、さらし屋は、当時の洗濯屋のようなものでした。当時、洗剤はありませんでした。服を洗濯するのに大抵アルカリ性物質を使いました。服を小川に入れて、子供を雇って、それを踏ませて汚れを出させ、それが小川に出ていきました。苛性物や様々なアルカリ性物質を使って、汚れを取り除き、それから日干しにしました。太陽でさらしました。当時も今ももちろん考えは同じですが、白い物を白く保つことでした。さらし屋、洗濯屋が上手かどうかは、どれだけ服を白くできるかでした。しかし、それは、さらし屋では、とてもできないほどの、あるいは漂白できないほどの白さでした。

「また、エリヤがモーセとともに現れ(9:4)」さて、エリヤは旧約聖書の人物で、預言者のかしらだった人でした。エリヤを考えることは、預言者たちのことを考えることです。モーセは、律法をもたらした人です。旧約聖書は、基本的に律法と預言者とに分けられます。彼らは神の使いです。律法による神から人へのお告げと、律法を守るように勧めた預言者による神から人への御告げです。モーセは、律法を代表する人でした。彼らはモーセの言うことを聞きました。モーセの言うことに耳を傾けました。モーセの作品、トーラー(律法)を読みました。それは、彼らにとって聖なるものでした。そして、モーセを通して神のみことばを聞きました。人々は預言者のことを聞きました。そして、会堂で預言書を読みました。ですから、彼らはモーセの言うことを聞き慣れていました。人々はエリヤの言うことを聞き慣れていました。さて、もう一つ別の福音書は、モーセとエリヤがイエスといっしょにイエスが遂げようとしておられるご最後について語っていたと伝えています。(ルカ9:30-31 参照) 彼らは、近くに迫る十字架刑とよみがえりについて話していました。それで、エリヤとモーセが現れ、彼らはイエスと語り合っていました。

「すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。『先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。私たちが、』天幕あるいは、『幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。』実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖にうたれたのであった。(9:5-6)」よくあることですね。どう言ったらよいかわからないので、何か言わないといけないと感じて言うと、何か愚かなことを言って

しまう。もし、どう言ったらよいかわからないのであれば、口を閉じて、何も言わない方がいいのです。もし何を言えばいいのかわからないのであれば、誰かがこんなことを言っていました。「黙っていて、あなたが愚かであると思わせておく方が、口を開いて、疑いがすべて取り除かれるよりよい。」それで、ペテロは、言うべきことがわからず、恐れていました。彼らにとって、恐ろしい体験だったのです。「幕屋を三つ造りましょう。ここにとどまっています。丘を降りて行きたくありません。ここに、このすばらしい体験にとどまっています。あなたの力と栄光を見る経験に。ここにとどまっています。」と言いました。私たちは自分の心や人生に神からすばらしい啓示をいただくことがよくあります。この夏、若い人たちの多くが夏のキャンプで体験したような体験を持っています。家に帰りたくないと感じてしまうのです。ここにとどまっていたい。主が私と会って下さった、ここにとどまっていたい。御霊の促しを受けたこの場所にとどまっていたい。あるいは、神が心に触れて下さった場所にとどまっていたい。世的な世俗的なものに戻りたくない。ただ、ここにとどまっていたい、と。けれども、私たちが靈的に山頂にいて体験するものは、日々の体験に置き換えられてなければいけません。もし、みなさんの靈的体験が現実的に日々の生活に当てはめることができないなら、本当には何の価値もないのです。すばらしい靈的な体験でしょうが、それが目的ではありません。本当の目的は、それが日々の生活の中で、日々の行なっている事の中で、生かされることです。神のしてくださった御業、特別な神の御業が、普段の変わらない日々の場面で、適用されてゆくことです。

「そのとき雲がわき起こってその人々をおおい(9:7)」さて、神の臨在はいつも、というか大体雲に象徴されていました。旧約聖書で、幕屋に降りて来た雲を覚えていらっしゃるでしょうか。それは、神の臨在を表していました。神殿を建てた時に、雲が神殿に降りて来ました。それは、神が人々の間におられたことを意味しました。そして、ラビは、メシヤが来られる時は、雲がメシヤを覆うと信じていました。これもまた、神が人々の間におられたことを象徴していました。それで、雲が降りて来て彼らを覆って、「雲の中から、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。』』という声がした。(9:7)」彼らはモーセの声を

聞き、エリヤと預言者の声を聞きましたが、今度は神が、「彼の言うことを聞きなさい。」と言っておられます。ヘブル人への手紙1章には、「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終りの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、(ヘブル 1:1-3)」栄光が輝き出ている、などとあります。神は、「彼の言うことを聞きなさい。ここに啓示がある。」とおっしゃっています。神がどのような方が知りたいですか。神の特性や性質がどのようなものか知りたいですか。それなら、イエスを見ましょう。イエスのおっしゃることを聞きましょう。イエスは、神がご自身を人間に最終的に啓示された方です。イエスは言われました。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。(ヨハネ 14:9)」ですから、イエスは神の現れでした。イエス・キリストにあつて、神がご自身を人間に最終的に啓示されました。この方にあつて、神は私たちへとてつもない神の愛を現してくださいました。

「彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。(9:8)」モーセとエリヤは消え、雲も消え、イエスがそこに弟子たちとおられました。栄光にあふれた、すばらしい霊的な体験でした。しかし、彼らは山から降りて来ました。私たちは降りてこなければなりません。「さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。(9:9)」「ただ。死人の中からよみがえるとは、何のことだ。」と弟子たちは思いました。イエスは、ご自分が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と言われました。「そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。(9:10)」「何のことをおっしゃっているのだろう。イエスは、何を話し続けておられるのだろう。死とか、死人の中からよみがえるとか。イエスはご自分がメシヤだということをご存じないのだろうか。御

国を立てられることになっていることを。」それで、「彼らはイエスに尋ねて言った。(9:11)」イエスは、死人の中からよみがえるとか、メシヤに関する質問のことを話されました。「彼らはイエスに尋ねて言った。『律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。』(9:11)」さて、マラキ書には、エリヤが来て、メシヤの道を備えて、「父の心を子に向けさせる(4:6)」と預言されています。実際、旧約聖書の最後の約束はマラキ書にあります。それは、メシヤの来る前にエリヤが来るという約束でした。マラキ書4章の5節です。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。(4:5-6)」ですから、律法学者たちは、エリヤが来ると教えていました。ユダヤ人たちはエリヤが来ると信じていました。過越の祭の食事の時のテーブルにある空の椅子は、エリヤのためのものです。戸を開いたままにしておいて、通りまで出てエリヤが来ているかどうか探しに行きます。これは、ユダヤ人たちの過越の祭の食事のしきたりの一環となっています。ですから、マラキの預言の成就を期待していました。ですから、弟子たちは、「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っています」と言ったのです。

「イエスは言われた。『エリヤがまず来て、(9:12)』エリヤはまず来ます。「すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。』」とイエスは言われました。弟子たちはイエスの再臨を見ていたのでした。イエスが再臨される前に、エリヤは来ます。そして、ユダヤ人の間で霊的覚醒が起こります。黙示録11章だったと思いますが、イエスが二人の証人が来ることを話しておられます。その一人がエリヤであることは間違いありません。もう一人が誰かは、もちろん私たちは知りませんが、おそらく、いえ、おそらくではなくひょっとするとですが、ひょっとするとモーセかもしれません。しかし、エリヤが、黙示録11章での二人の証人のうちの一人であることがわかっています。ですから、弟子たちはそのことが起こるのを見ていましたが、イエスは、こう言われます。「では、人の子」すなわちメシヤに「ついて、多くの苦しみを受け、

さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。(9:12)」「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、・・・しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。(イザヤ 53:3、5-6) 」なぜ、メシヤについて、預言者が「日の目を見ない。人々からのけ者にされる。」と言ったのでしょうか。(訳者注:新改訳の12節の「どうしてなのですか」の部分は、欽定訳で“set at nought”となっている。これは、「日の目を見ない」という意味がある。)ですから、イエスは、全ての預言を成就するには二度来臨がなければならないことを指摘されているのです。まず、栄光と力によって来られて支配される前に、日の目を見ないことがなければならないのです。「イエスは言われた。『エリヤがまず来て、』彼がまず来て、『すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。』(9:12-13) 」ですから、イエスはバプテスマのヨハネのことを話しておられるのです。バプテスマのヨハネはエリヤの霊と力を持って来ました。それは、御使いガブリエルが、バプテスマのヨハネの父ゼカリヤが宮で奉仕していた時に言った言葉でした。ガブリエルは、年をとっているゼカリヤの妻エリザベツが男の子を生むので、その名をヨハネとつけるように、また、「彼はエリヤの霊と力で主の前ぶれをし、人々の心を立ち戻らせる。(ルカ1:13-17) 」と言いました。バプテスマのヨハネに関する預言は、エリヤの霊と力でした。ヨハネの福音書1章で、彼らはバプテスマのヨハネに、「あなたはエリヤですか。」と尋ねました。バプテスマのヨハネは、「そうではありません。」と言いました。「あなたはあの預言者ですか。」「そうではありません。」「あなたはだれですか。」「バプテスマのヨハネは、『主の道をまっすぐにせよ。』と荒野で叫んでいる者の声です。」と言いました。ですから、バプテスマのヨハネは、預言の完全な成就ではなかったのですが、エリヤの霊と力を持っている者でした。ですから、やや不可解なところがあります。つまり、まだエリヤは

来ていないということです。その預言はまだ将来に起こることなのです。それをイエスは指摘されているのです。もし霊的に受け入れることができるのであれば、ヨハネがそうだったのです。彼は来たのです。彼は前ぶれをしたのです。しかし、人々は彼について書いてあるとおりのことをしたのです。

それで、彼らが丘を降りて来て、他の9人の弟子たちがいるところまで下ってきたとき、イエスが「見ると、その回りに大ぜいの人の群れがおり、また、律法学者たちが弟子たちと論じ合っていた(訳者注:9:14「論じ合って」の部分の英語は、questioning で、「質問をしていた」になる。)」そのギリシャ語の言葉は、論じ合っていたです。そこは論争の真っ最中でした。「そしてすぐ、群衆はみな、イエスを見ると驚き、走りよって来て、あいさつをした。(9:15)」丘のふもとまで来ると、議論が起こっていました。律法学者たちが弟子たちに、ひどい企みを巡らしていました。「すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。『先生。おしの霊につかれた私の息子を、先生のところに連れてまいりました。その霊が息子に取りつきますと、所かまわず彼を引き裂きます。そしてかれはあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、霊を追い出してくださるようにとお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。(9:17-18)」イエスは尋ねて言われた、というか、「イエスは答えて言われた。『ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいななければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。(9:19)」「不信仰な世だ。」とあります。律法学者たちがそこにいましたが、イエスを信じる信仰は全くありませんでした。この方の真理にわざと盲目になっていました。そこに弟子たちがいました。信仰は弱かったのですが、信じたいと願っていました。そしてこの父も、この時点では信仰がありませんでした。それは、弟子たちが自分の息子を助けることができなかつたからでした。さて、この症状は、大発作 (grand mal seizure) のように読めます。しかし、この子に起こっていたのは、大発作ではありませんでした。そのように言うのは、非常に残酷です。そう言うと、大発作が悪霊につかれた結果だと暗に主張することになるからです。そうではありません。誰でもてんかんのあ

る人が、てんかんは悪魔の活動によって起きていると考えるのは、あまりにも残酷です。てんかんは、脳の中、脳波の問題によって起きるのです。ですから、純粹に身体的なことなので、この子が大発作を起こしていたと考えたり、言ったりするのは間違っています。この子は、おしでもあったことに注目して下さい。

しかし、悪霊、汚れた霊が、この子の体を所有し、その子を滅ぼそうとしていました。このため、その子の父は、この子をイエスの所に連れて来ました。「霊がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。イエスはその子の父親に尋ねられた。『この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。』父親は言った。『幼い時からです。この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちがあわれんで、お助けください。』(9:20-22) イエスはサタンについて、「敵が来るのは盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。(ヨハネ 10:10参照)」と言われました。罪は破壊的です。罪の結末は死です。罪は滅ぼします。このため神は罪に抵抗するようにお命じになったのです。罪は破壊的だからです。ここで、悪霊はサタンの目的を現しています。それは、人を滅ぼすことです。この子を溺れさせるために水の中に投げ込んだり、焼くため、焼却するために火の中に投げ込んだりして、滅ぼそうとしました。とても嘆かわしい、とても嘆かわしい光景です。子供は話すことができません。でも、その子は地面の上で、ころげ回り、口からあわを吹いていました。そして、その子の父親はイエスに、「もし、おできになるものなら、何でもしてください。」と懇願しました。弟子たちは、何もすることができなかったので、父親はイエスの能力にまでに疑問を抱いています。「もし、おできになるものなら」不思議なのは、弟子たちは悪霊を追い出す力を与えられて出て行って、悪霊を追い出したことがあり、戻ってきて、「あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。(ルカ10:17)」という事を喜んだことがありました。けれども、ここに弟子たちに服従しない悪霊がいました。このため父親は、「もし、おできになるものなら、私たちがあわれんで、お助けください。」と疑っています。イエスは、それを逆にして言われました。「もし、あなたが信じることができるなら(訳

者注:9:23日本語の聖書だと、「できるものなら、と言うのか。」とあるのですが、欽定訳は、If thou canst believe となっています。) 」と。父親はイエスに、「もし、おできになるものなら」と言っているのですが、イエスは、「もし、あなたができるなら、」とされています。「もし、あなたが信じる事ができるなら、信じる者には、どんなことでもできるのです。」と言われました。「するとすぐに、その子の父は涙を流して叫んで言った。『主よ、信じます。』(訳者注:9:24「涙を流して」と「主よ」は、欽定訳からの訳出) 」この父親は正直に、疑っていたことを認めています。「不信仰な私をお助けください。」主よ。そこにある疑っている部分を何とかして下さい。私は信じます。主よ。疑っている部分を助けて下さいと。

「イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、(9:25)」つまり群衆が群がりよってきたのです。このような事があると、大勢の人が引き寄せられます。ここには小さい男の子が地面を転げ回っていました。好奇心のために人々が走りよってきました。「イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。『おしとつんぼの霊。わたしが、おまえに命じる。この子から出て行きなさい。二度と、はいつてはいけない。』(9:25)」さて、イエスは、悪霊が追い出されると、世界中を歩きめぐって、住むことができるもう一つの体を探すと教えられました。何も見つけることができないと、追い出された体に戻ってくるのがよくあるのです。戻ってみると、掃除がされてきちんとかたづいていましたが、取り去られたものの代わりのものが入っていないと、悪霊は他に七つの霊を連れてきて、みなはいり来んでそこに住みつくと、その人の状態は、はじめよりもさらに悪くなります。(ルカ11:24-26参照)ですから、イエスは、悪霊に対し、出て行って、二度と入らないように命じておられるのです。神の御霊に支配され満たされるためではなく、ただ特権や利益の得るために主のもとに来る人がたくさんいます。この人たちが欲しいのは助けだけです。私には問題がある。解決が欲しい。私は困難を抱えている。回答が欲しい。自分の人生は明け渡したくない。自分の人生を主で満たしたくない。私はこの問題の助けが欲しいだけだ。それは、危険です。何かが出て行くのであれば、空の部分のままにはおけません。それを埋めないのであれば、それより悪いものが入ってきます。それで、この命令があります。

「出て行って、二度と入らないように。」するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、(9:26)おそらく大きな痙攣が起こったのでしょう。そして、おしが、その子が叫び、それからその子は死人のように横たわりました。悪霊は出て行って、その子を気の抜けた状態にしました。その子は死人のように横たわっていました。このため、実際、「多くの人々は、『この子は死んでしまった。』と言った。(9:26)」

「しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。イエスが家にはいられると、弟子たちがそっとイエスに尋ねた。『どうしてでしょう。私たちには追い出せなかったのですが。』すると、イエスは言われた。『この種のものは、祈りと断食によらなければ、何によっても追い出せるものではありません。』(訳者注:9:27-29 「断食」は、欽定訳の中にある。新改訳の脚注参照) 」弟子たちにはできませんでした。この子にとりついていた、ある特定の悪霊が、力の強い悪霊であったことは明かだったことに注目してください。悪霊には、いろいろな等級の力と権威、霊力、力などの位が有りました。彼らは、悪霊を追い出すことが何かは知っていました。しかし、ここには弟子たちがいくら努力して追い出そうとしてもそれに抵抗した悪霊がいました。弟子たちは、イエスが男の子を救い出されるのを見ると、「なぜ私たちにはできなかったのでしょうか。」と言いました。この子がイエスの所に連れてこられたとき、悪霊がその子を地面に倒したことに注目して下さい。そこで、ちょっとした見せつけをしました。その子は、あわを吹きながら、ころげ回りました。おそらく、人々がこの子を弟子たちの所に連れてきたときも、おそらく同じようなことが起こったのでしょう。悪霊は、自分自身を現しました。弟子たちが、その子を支配する悪霊の力に圧倒され恐ろしくなり、その子を救い出すイエスの力を見失った、という可能性があります。問題や状況に圧倒されて、遥かに偉大な神の力を見失うことがよくあります。私たちは、暗闇の力に圧倒されてはいけません。驚いたり、怖がったりしてはいけません。弟子たちは、このような状態にあって、この場合にあって、無力でした。けれども、イエスは、「この種のものは、祈りと断食が必要なのです。」と言われました。

「さて、一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った(passed though)。イエスは、人に知

られたくないと思われた。(9:30)」イエスは、いわば、ひそかに通り過ぎよう(pass through)とされたのです。一行は、イエスが十字架につけられる場所となるエルサレムに行こうとしていました。イエスは、十字架につけられることを弟子たちに話して、明かにされていました。ですから、イエスは、まもなく、すべての事を彼らにお任せになろうとしていたため、弟子たちと時を、内容のある時を過ごそうとされていました。このときイエスがどんなお気持ちだったか想像してみてください。彼らが、「わたしが御国の鍵を与えよう。わたしの務めをゆずる。」とイエスが言われた者たちなのですが、ここで、もうすでに失敗していたのです。弟子たちは、この悪霊の試みに失敗したのです。彼らがイエスがお任せになる者たちなのですから、イエスにはきつと、それにふさわしくなるように彼らを建て上げようと、切迫感があったのでしょう。それで、イエスは、人に知られたくないと思われて、通り過ぎようと考えました。「それは、弟子たちを教えて、(9:31)」これが、イエスの目的でした。弟子たちに教えるために内容ある時を持つという目的です。「『人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる。』と話しておられたからである。(9:31)」再びこのことを話されたのです。さて、思い出してください、山をペテロ、ヨハネヤコブとともに降りながら、イエスは彼らに、「わたしがよみがえるまでは、だれにも話してはならない。」と話されましたが、彼らは、「どういう意味なのか。死人の中からよみがえるとは、何のことだろう。」と言っていました。それで、再びイエスは、弟子たちにご自分の死とよみがえりを話されているのです。「しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。(9:32)」ペテロは、先に問題を起こしました。彼は、イエスがご自分の死を語られたのをいさめて、イエスは彼をしかられました。ですから、彼らは、イエスが話されていることの説明を求めるのを恐れていました。彼らは、まだ理解できていなかったのです。

「カペナウムに着いた。」イエスのガリラヤの本部のようなところですが、「イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された。『道で何を論じ合っていたのですか。』(9:33)」彼らは、帰り道で、激しい議論をしていたのです。カイザリヤから帰る途中で、たぶん50マイル(80

km)から60マイル(96 km)の距離ですが、弟子たちは論じ合っていました。それでイエスは、「何を論じ合っていたのですか。」と言われました。けれども、「彼らは黙っていた。道々、だれが一番偉いかを論じ合っていたからである。(9:34)」想像してみてください。ここには、これから殺されて、よみがえると話されているイエスがいます。弟子たちは、理解できないで、論じ合っているのです。「だれが一番偉いか。俺が一番偉いのだ。お前じゃない。俺だ。イエスが俺をご覧になる見方をみててみる、俺のことは信頼してくださっているが、お前のことは信頼しておられないぞ。」彼らはこのようなことを論じ合っていたのです。まだ、イエスが御国を即座にお立てになると考えていたのです。弟子たちは全然理解していませんでした。イエスが、エマオに行く二人の弟子に、なぜ次のように言われたのがよくわかります。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。(ルカ24:25)」それで、「イエスはおすわりになり、十二弟子を呼んで、言われた。『だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなの子ながりとなり、みなに仕える者となりなさい。』それから、イエスは、ひとり子どもを連れて来て、彼らの真中に立たせ、腕に抱き寄せて、彼らに言われた。」子どもを連れて来て、腕に抱き寄せられたのです。『だれでも、このような幼子たちのひとり、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。』(9:35-37)」ですから、子どもに仕えるのはとても大切です。私たちは、大勢の人に仕えたいと思いますが、イエスは、子どもを連れて来て、子どもに仕えなさい、と言われます。幼子を、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れ、わたしを受け入れるならば、父を受け入れるのです、と言われます。弟子たちは、自分が偉くなることを求めていましたが、イエスは、偉くなる道は、仕える道です、と言われていきます。「御国で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者となりなさい。」イエスは、ご自分が引き渡される夜に、手ぬぐいを取って弟子たちの足を洗われました。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」「はい、わかります。」「あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたは正しい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗う

べきです。(ヨハネ 13:12-14 参照) 奉仕をする立場です。仕え合うことです。御国で偉くなりたいと思う者は、仕える者になりなさい。

「ヨハネがイエスに言った。『先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました。』(9:38)」ヨハネは、教派をつくらうとしています。悲しいですね。「私たちの仲間ではないので。」私は、ヨハネがイエスから「ヨハネ。お前は正しい。」と言われるのを期待していたのではないかと思うのです。彼らは、まだ御国で偉くなろうとしていました。「主よ、私たちはやめさせました。」というふうに。「しかし、イエスは言われた。『やめさせることはありません。わたしの名を唱えて、奇蹟を行ないながら、すぐそのあとで、わたしを悪く言える者はないのです。(訳者注:9:39 欽定訳は、「奇蹟」となっている。新改訳の脚注参照) 』」人々が、イエスの御名の力を発見していることに気づいてください。ここにそのひとりがいます。この人は、イエスに従っていませんでしたが、イエスの御名の力を発見して、この御名によって悪霊を追い出していたのです。「わたしの名を唱えて、奇蹟を行ないながら、すぐそのあとで、わたしを悪く言える者はないのです。わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。あなたがたがメシヤのものであるという名目で、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは、確かなことです。(訳者注:9:39-41 新改訳の脚注参照。欽定訳は直訳を採用しているが、チャックはキリストをメシヤと言い換えている。)」ですから再び、主の御名によって、水一杯を与えるという奉仕の考えです。

「また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は… (9:42)」おそらく、あの子どもは、まだそこにいるのです。イエスは、まだ子どもを抱いておられます。私は、子どもがイエスに引き寄せられる様が好きです。イエスは子どもを抱いておられて、こう言われました。「わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、」ああ、何て子どもの信仰は、純粋で美しいのでしょうか。私は、この子たちの祈りを聞くのが大好きです。この子たちにイエスのこと、神のことを話すことが大好きです。彼らの信仰は単純で美しいのです。想像できるでしょうか。子どもがイエスを信じる信

仰を滅ぼそうとする人の思いは、どれほど悪魔のような思いか。子どもの信仰を意図的に滅ぼそうとするなんて。イエスは、「むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。」と言われました。イエスもちよっぴり法に反抗する精神をお持ちのようですね。なぜなら、石臼は、500ポンド(約 227キロ)以上あるからです。子どもの信仰を滅ぼそうとするようなら、神の怒りを買うことを知りなさい、と。「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。(9:43)」これは、本当にとてつもなく難解な箇所です。イエスが文字通りに話されているのではなく、比喩的に話されていることを理解しなければいけません。イエスは、あなたの全生涯で最も大切なことは、天の御国に入ることであって、それより大切な事はありません、と言われているのです。これが、自分の全生涯の中で最も大事なのです。これは、あなたの手よりも大切です。目よりも大切です。世界中の何物よりも大切なのです。そのため、イエスは、語気の強い、驚愕するようなことばを使われているのです。

「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身で永遠のいのちにはいるほうが、両手そろって地獄に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。(訳者注:9:43参照。チャックは、「いのち」を「永遠のいのち」に言い換えている。また、欽定訳では、「ゲヘナ」でなく、「地獄」となっている。)」「地獄」は、ゲヘナのことです。ここではハデスではなく、ギリシャ語ではゲヘナとなっています。ゲヘナは、ヒノムの谷と関連しています(ヨシュア15:8、ネヘミヤ 11:30参照)。これは、エルサレムの町の南側の谷です。これは、アハズ王がモレク神に偶像を立てた谷です。火を、たき火を焚いて、民はほしくなかった赤ん坊を連れて来て、モレクへのささげ物としてこのたき火の中に投げ入れます(2列王 16:3 参照)。当時は墮胎をする手段がなかったので、モレクのために火の中に生きている赤ん坊を投げ入れました。現在はもっと洗練されて、赤ん坊がまだ胎の中にいる時にモレクにささげています。モレクは快樂の神です。後にマナセが現れてましたが、彼はアハズよりも悪を行ない、ヒノムの谷でこのおぞましい、恐ろしい慣例を続けていました(2列王 21:6 参照)。それで、ヨシヤが王となったとき、彼は改革を、霊的な改革を始めました。

彼はヒノムの谷を、町のごみ捨て場にしました(2 列王 23:13、14 参照)。さらに、ここを汚れた所としました。偽りの神が拝まれていたので、そこを汚したかったのです。それで、町のごみ捨て場にしましたのです。町から出たごみは、すべてヒノムの谷に捨てられました。そこで、ごみが絶えず燃やされていました。ごみが絶えず燃やされていて、ヒノムの谷からは絶えず煙が立ち上ぼっていました。動物の腐った死体などで満ち、うじ虫がわいていました。非常に生々しい光景だったので、イエスは、神の愛を拒む者、イエス・キリストによる神の救いの招きを拒む者が罰を受ける場所を描写するために、これを用いられました。それで、「両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込む」とあります。黙示録14章は、「彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上ぼる。(14:11)」と言っています。

「もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいのちにはいるほうが、両足そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らのうじは、消えることがなく、火は消えることはありません。もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出さなさい。片目で神の国に入るほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らのうじは、消えることがなく、火は消えることはありません。(訳者注:9:45-48 参照。欽定訳には、45節にも「消える火の中に」がある。また、46節が存在し、48節の「彼らを食らううじ」は、直訳になっている。新改訳の脚注参照。)」何年も前、私たちがオハイオ州のトリードにいた時のことですが、私はまだ大学にいました。私たちが会ったひとりの若い人が、私たちにいっしょにわなを使って獺をしようと言ってきました。お金を得るために、池にわなを仕掛けて、トリードにたくさんいるニオイネズミを捕まえていました。(訳者注:マスクラットとも言われる。ネズミ科の哺乳類。頭胴長 22-36センチ、尾長19-28センチの大型のネズミ。体は水生に適し、後ろ足には硬毛の列があり、水かきの代わりにする。北アメリカ原産。)彼は、ニオイネズミを捕まえたら、もちろん皮を剥いで、それを板にのっけて、鋏で留めて、毛皮を売っていました。それで私たちは、いいよ、わなを仕掛けよう、と言いました。それで、彼は6時に私たちが車を向かえに来て、池に行つてわなを使

った獵を始めました。一番初めのわなのところまで来ました。彼は私たちの前に行って茂みの中に入って、池の方に進んで行きました。彼がわなを見ると、「こりゃ、だめだ。」と言うのを聞きました。「どうしたんだい？」「このわなには、ニオイネズミの足があった。」彼はこう言いました。「もし、足がわなに引っ掛かったら、向きを変えて、自分の足を噛んで、わなに残すんだ。それで逃げてしまう。尻尾が引っ掛かった時も同じで、尻尾を噛んで、それを残してしまう。これで捕まえられるわけさ。」それで、「うーっ、自分の足を噛んじゃうの？」と思いますが、ニオイネズミはそんなに馬鹿じゃありません。3本の足で池を泳ぐ方が、4本の足で板に鋏で打たれるよりは良いことをわきまえています。イエスは、多かれ少なかれ、このことを言われているのです。もしあなたの生活の中に、神に完全におゆだねするのを妨げているものがあるならば、それを取り除きなさい、ということなのです。それは、痛いかも、大変な危険かもしれません。でも、最も大切なことは、私たちが天の御国に入ることなのです。天の御国に入るのを妨げるものは何でも、取り除かなければいけません。さて、教会史を通して、ある問題を解決しようと望んで、自分で自分の手足を切断した人たちがいました。オリゲネス(訳者注:アレクサンドリア生まれの神学者で、ギリシャ教父)は、情欲が大きな問題でした。それで、彼は去勢しました。けれども、後でこれでは解決にならないことがわかりました。まだ情欲があったのです。ですから、これは文字通りのことではなくて、霊的なことですが、とても大切なことです。イエスは、天の御国に入り、ゲヘナを免れることがどれだけ大事か強調されているのです。

「すべては、火によって、塩をつけられるのです。(9:49)」さて、旧約聖書では、全焼のささげ物は、ささげられる前に塩をつけられました。塩は、きよめの働きをするものとして用いられました。屠殺された肉は、冷蔵されないと、すぐに腐ります。腐敗を遅らせるために、肉にかなり塩をつけていたのです。塩は、表面のばい菌を殺したので、肉を保存しました。ですから、一番目に出てくる塩は、防腐剤と見なされました。火も、きよめの役割をするものです。溶けた金属の浮きかすを燃やします。ですから、イエスは、時には取らなければいけない大変な危険がある、神のきよめが私たちの生活の中で必要なことを話されています。そ

れは、私たちの生活から、浮きかすを燃やすためです。「すべては、火によって、塩をつけられるのです」というのは、火できよめられることです。ペテロは、「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、(1 ペテロ4:12)」と言っています。彼は、「信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちていく金よりも尊いのであって、(1 ペテロ1:7)」と言っています。ですから、火の目的は、金から浮きかすを燃やし尽くして、純粋な部分を残すことでした。従って、神が時に私たちにお与えになる燃えさかる火の試練は、浮きかすを取り除くため、生活の中の汚れた部分を取り除くためのものです。すべてのささげ物には、塩がつけられました。これは、旧約の律法でした。

さてイエスは、「塩は、ききめのあるものです。しかし、もし塩に塩けがなくなったら、何によってそれに味をつけるのですか。(記者注:9:50と新改訳の脚注参照)」と言われました。塩気のないオート・ミールより、まずい物はありません。何の味もなく、口当たりがよくないので、ちょっと食べられません。私は、オート麦で育ちました。子供の時のことを神に感謝します。しかし、当時もフィーゼーズやコーン・フレーク(記者注:どちらもケログのようなシリアルの類い。)はありました。今の子どもに食べさせている、くだらない物を見てください。これは悲劇です。今の子どもたちを、あわれに思います。箱詰めにされた手軽な砂糖づけのシリアルです。私は、全粒粉やオート麦、全穀で育ちました。けれども、私の母は、オート・ミールをつくる時、時々沸騰したお湯に塩を入れるのを忘れました。それは、本当に何の味もなく、蜂蜜を入れても、この無味乾燥した味を取り除くことはできませんでした。塩をつけないじゃがいももそうです。何の味もなく、口当たりがよくありません。ですから、「もし塩に塩けがなくなったら」とは、味づけのために塩を使わなかったら、ということです。ですから、こう言われました。「あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに和合して暮らさなさい。(9:50)」これは、いわば山上の垂訓からとられたものです。そこで、イエスは、「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にもたたず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

(マタイ 5:13) 」と言われました。クリスチャンは、防腐剤としてきよめに用いられる塩のように、世界にきよめをもたらす影響力がなければいけません。それだけでなく、クリスチャンは、生活に薬味と香味をもたらさなければいけません。クリスチャンの生活は、退屈で、面白みのないものではありません。すばらしく、ワクワクするものです。私たちは、人々に香味をもたらさなければなりません。ニュー・イングランドに行って木の葉の色が変わっているのを見ない限り、もう今年はや過ぎることはわかっていますが、私は、よく次のように言いました。「休暇をとる前に、必ずイエスを受け入れるようにしてください。キリストの目で見れば、これらのものがどれだけ美しいか驚くことでしょう。創造主に触れることができます。創造主と交わることができます。天は、さらに深みのある青に、地はさらに深い緑に見えるでしょう。すべての色に、キリストを受け入れていない目では見たことのない、何かが照り輝きます。」キリストを心に持っていなければ、その美しさを、創造の本当の美しさを見ることはありません。クリスチャンの生活は、沸き立つ喜びをもたらします。すべてに香味をもたらします。私は、イエスに属することができて、とてもうれしいです。

マルコの福音書10章(Mark10)(#8038)

マルコの福音書10章をお開き下さい。イエスは、ご自分の御姿が変わった山からそのまま来られているようです。その山では、モーセとエリヤが現われ、エルサレムでこの方が死なれることを話していました。変貌の山をお離れになると、イエスは、イスラエルの国の端から端までの旅を始められました。イエスは、この国の北端のピリピ・カイザリヤの地域におられました。ガリラヤの北部を通ってカペナウムに戻り、カペナウムにはただ立ち寄りただけでした。したがって、イエスはカペナウムを去って、そこからは、10章の話につながります。「イエスは、そこを立って、(10:1)」「そこ」とは、カペナウムのことです。「ユダヤの辺境と(訳者注:「辺境」は、欽定訳の“coasts”の訳)」これは、ユダヤ地方の境ということです。「ヨルダンの向こうに行かれた。(10:1)」つまり、ユダヤ地方を通って下っておられますが、ヨルダン川の向こう側におられます。ユダヤの管轄をやや越えたところです。パリサイ人や律法学者は、ヨルダン川の手前の方にいます。「すると、群衆がまたみもとに集まって来たので、またいつものように彼らを教えられた。(10:1)」イエスは、いつも父の恵みと栄光を教えておられました。いつも父のすばらしさを人々に教えられていました。人がいれば、教えたり、伝えたりされました。

「すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスを試そうとしたのである。(10:2)」誘導尋問的な質問です。ひっかけ質問です。本当は答えをほしいわけではありません。答えを求めているのではないのです。論争をしかけるためでした。誠実な質問と、不誠実な質問があります。質問のように見せかけますが、答えが欲しいと思っているのではなく、絶えず議論をしたいと思っていたのでした。これは、議論を仕掛けるための質問のひとつでした。イエスがモーセの律法に反することを言わせるように仕向けたのです。モーセの律法には、「人が妻をめとったとき、妻に何か恥すべきことを発見した場合は、夫は離婚状を書いてその女の手へ渡すことができる。

(申命24:1参照)」とあるからです。さて、彼らは長年に渡って、「妻に何か恥ずべきことを発見した場合」という言葉から、二つ明確に区別できる解釈をあみだしました。姦淫の罪を犯した場合に離婚状を書くことができるという、非常に制限された意味でこれを解釈した人たちがいました。しかし、また別のラビの学派は、「妻に何か恥ずべきことを発見した場合」というのに、非常にリベラルな解釈を施しました。あるラビは、それを、「もっとかわいい人が見つかって、もっと好きになったら」と言いました。ですから、イエスは、彼らが言い伝えによって律法を空文にしていると言われたのです(7:13参照)。けれども、「妻に何か恥ずべきことを発見した場合は、夫は離婚状を書くことについて、ラビの間でさえ意見が分かれています。しかしながら、それでもモーセの律法には、離婚状を書く規定があったのは否定ができませんでした。それで、パリサイ人たちは、イエスが、結婚に関してとても厳しい見方をされていることを知っていて、イエスをモーセの律法と争う立場に置こうとしました。それは、みんながモーセの律法は、神の律法であると認めていたからでした。つまり、モーセが神によって靈感を受けて、神がモーセに律法を授けられたということです。したがって、イエスがモーセの律法に反することを言われたら、どうやってご自分が神から来られたことを主張することができるか、という具合になります。実は、このことが、その質問の背後にあった争点でした。つまり、モーセの律法に反するように仕向けようとしたわけです。「イエスは答えて言われた。『モーセはあなたがたに、何と命じていますか。』(10:3)」イエスは、彼らがイエスをモーセの命令と対立させようとしていたのを、よくお分かりでした。「彼らは言った、『モーセは、離婚状を書いて妻と離別することを許しました。』(10:4)」妻に離婚状を書いて離別することができる言ったのは、モーセですと。

「イエスは言われた。『モーセは、あなたがたの心がかたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。』(10:5)」心がかたくななので、人間が神の理想に到達できないことをお認めになっています。神は、モーセの律法の中で、心のかたくなさのためにある一定の余裕を設けられました。これは神の意図ではなく、これは神のご目的ではなく、神が最も良いと思われていたことではありませんでした。ですから、イエスは、モーセの律法の前に溯

られます。「初めに、神が人を造られ、女を造られ、女をアダムに与えられました。(10:6の言い換え)」「初めに」つまり、神の意図、神のご目的、神の願いは、初めに、「神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。(訳者注:新共同訳10:6-8 欽定訳に出てくる表現で新改訳には出てこないが、この新共同訳に出てくるものが二つある。一つは、「妻と結ばれ」という部分。もう一つは、「一体」という訳である。)」というものでした。結婚による結びつきは、人が経験できるうちで、人間のレベルでは最も親密な結びつきです。二人が一体になります。これは、この上なく麗しく、この結びつきから産まれる子どもにあって、それがかなえられます。麗しい子どもを見るとき、「これは、私の子どもだ。」とは言えません。「これは、私たちの子どもだ。」と言わなければいけません。一体なのです。子どもの23の染色体は母親から来て、残りの23は父親から来るのですから、二人は、子どもにあって一体になるのです。その子は、私たちのものです。この子が悪さをしているときに、「あなたの子どもだ。」とは言えません。あなたの子どもでもあるからです。この子は、「私たちの」子どもなのです。良かれ悪かれ、「私たちの子ども」なのです。これは、麗しいことです。二人が組み合わせられたものが、子どもだからです。私たちの子どもには、私に独特の特徴があるし、ケイに独特の特徴があります。二人が一体になるのです。そこには、きずなと結びつきがあります。それからイエスは、「それは、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。(10:8-9)」と言われました。ですから、イエスは再び結婚に関して、とても厳しい命令をお与えになりました。これが神の理想であることをお認めになりました。初めは、これが神の意図だったのです。これが、神の目的、計画、神の理想でした。心がかたくななために、人間が神の理想によって生きることができないのは、悲しいことです。結婚において、相手に対して心がかたくなになるのは、悲劇です。「もうこの人は必要ない。もうこの人といっしょに住みたくない。」心がかたくなになっているのです。悲しいことです。互いを滅ぼすような関係になるよりも、モーセは、「離婚状を書きなさい。」と言ったのです。これは、彼らの心がかたくなだからです。しかし、これは、神が意図されていたことではなく、神が最も良いと思われていることではありません。このことを、理解しなければなりません。しかし、

心がかたくななので、神の最も良いと思われていることではないのですが、神はそれをお許しになって、許容なさっているのです。

それで、一行は家に戻りました。弟子たちは、このことを心に留めていました。それで、「弟子たちが、この問題についてイエスに尋ねた。(10:10)」11節で、「イエスは彼らに言われた。『だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。』(10:11)」この「別の女を妻にする」をイエスが実際に考えておられたことに言い換えるなら、「別の女を妻にするために妻を離別するなら、離別した妻に対して姦淫を犯すのです。」になると私は思います。牧会を長くしている中で、夫か妻のどちらかが出ていくと決めた場合を、数え切れないほど取り扱いました。一方が打ちのめされて、ぼろぼろになって、電話をかけてきます。「夫が出ていきました。この家族にはあきあきした、もういっしょに住みたくない、と言いました。」と言います。私はいつも、「別の女が絡んでますね。」と言うと、「いいえ、違います。そうとは思いません。」「私はわかっています。だれかが入ってきていないなら、出ていったりしません。」出て行く先がなければ、離れていかないことを繰り返し、繰り返し見てきました。ですから、「別の女を妻にするために妻を離別するなら、妻を離別する前の妻に対して姦淫を犯すのです。」同様に、「妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。(10:12)」さて、再びモーセの律法が、心のかたくなさのゆえに離婚状を書く権利の選択肢を与えたことに戻ります。もし、ひとりの人が離婚をして、再婚したら、その二人は姦淫の中で生きているのでしょうか。聖書は、「姦淫をする者は、神の国に入ることができません。(1 コリント 6:9-10 参照)」と言っていますが、その二人は神の国に入ることができないのでしょうか。モーセの律法の下では、離婚状が書かれたら、それでその関係が終わりました。さて、モーセの律法の下では、「何か恥ずべき事」は、厳密な意味では姦淫と解釈されました。モーセの律法では、もし、男あるいは女が姦淫を犯したら、律法における罰は、石打ちでした(申命22:22、ヨハネ 8:5参照)。ですから、もし妻が姦淫を犯したら、夫は長老に妻が姦淫を犯したことを報告します。長老たちはこの女を前に連れてきて、彼女を調べて、姦淫の罪を犯していたら、この女は石打ちにされます。妻が疑いを

持った夫の場合も同じです。もし実際に姦淫の罪を犯していたら、この男も石打ちにされます。したがって、罪を犯した方が、石打ちにされて殺されます。それで、あなたは他の人と結婚してもよくなります。その事実の効力によって、あなたはやもめ、あるいは男やもめになるのです。現在、私たちの住む時代にも、依然として心のかたくなさがあり、夫婦によってはいっしょにすることができなくなることがあります。二人が、神の理想まで到達することができず、あるいは到達しないのは、お互いのせいで、二人でやったことなのです。もしあなたが、何も悪くなくて、妻が、「もうこれでおしまいだわ。もうあなたとは関係ないわ。」と言って、他の男に興味を持つなら、あなたは罪のない被害者です。逆も真なりです。あなたの夫が出ていき、もうあなたに興味を失ない、他の関係をつくっているという逆の場合です。それであなたは、かつて存在していたきずなから自由になります。新しい関係が存在するので、もうその関係はないからです。

旧約聖書にダビデの話があります。彼は、「ご自分(神)のころにかなう人(1 サムエル 13:14、使徒 13:22参照)」と旧約聖書があかしする人です。神は、イスラエルの君主として、サウルを退けられました。神は、ご自分のころにかなう人を探しておられました。ダビデがその人でした。しかし、ダビデは、完璧に道徳的に正しかったわけではありません。誰もが、彼がバテ・シェバとの罪のことを知っています。これは、秘密裏に行なわれました。ダビデは、隠蔽しようとしてしました。バテ・シェバの夫ウリヤ殺害の企てをしたとき、上手く覆い隠せたと思いました。けれども、疑惑が残りました。それだけでなく、預言者ナタンに神からの啓示がありました。ナタンはついにダビデのところに来て、その罪を直視させました。ダビデは、預言者から言われた自分の罪を直視して、「私は罪を犯した。(2 サムエル 12:13参照)」と言いました。この預言者は、その後すぐに、「あなたの罪は赦された。」と言いました。さて、ダビデはバテ・シェバと離婚しませんでした。姦淫の関係で生まれた子どもは死にました。しかし、ダビデとバテ・シェバとの関係で生まれた二人目の子は、ダビデの次に王座を継いだソロモン王でした。ですから、ここに、ダビデに対する神のあわれみと恵みを見ることができます。神のあわれみと恵みが働く余地をいつも残しておかなければいけません。ヨハネ

の福音書8章で、姦淫の場で捕らえ、連れて来られた女の場合もあります。ここでもまた、「モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。(8:5)」イエスは言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。(8:7)」またここにも恵みがあります。「年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、女はそのままそこにいた。イエスは身を起こして、その女を見て言われた。『あなたを罪に定める者はなかったのですか。』彼女は言った。『だれもいません。』そこで、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。』(8:9-11 参照)」神の恵みは、神の恵みが働く余地をいつも残します。さて、神は、ひとつの関係から別の関係に移る許可書を与えておられるではありません。神は、私たちにきづなをつくること、ふたりの者が一心同体になることを求めておられます。神の理想は、あなたがたが神の御霊にあなたの心で働いていただき、あなたがたの違いを解決していただくことです。主のみこころを求めてください。あなたがたの心が御霊の働きに柔らかくなるようにしてください。あなたが自分をささげて、誓約した相手に柔軟になるようにしてください。聖書は、神が離婚を憎むと教えています(マラキ 2:16 参照)。離婚は、大変な経験です。辛い経験です。傷つく経験です。誰も無傷でいることはできません。心がかたくなになるとき、関係が気まづくなるとき、傷が、感情に傷がつきます。この関係を切ろうと努力すると、互いに傷つけ合うことになります。悲しい状態です。これは、神の願っておられることではありません。しかし、心がかたくななために、モーセの律法は離婚の余地を残しました。

「さて、イエスにさわっていただくこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。(10:13)」親ばかは、かわいいものです。人が自分の子どもを認めて注目を受けるのが、親は大好きです。何か特別なものがあるのです。自分の子が一番かわいくて、世界中で一番賢い子なのです。他人がそのことに気づいてくれるのも大好きです。親たちは、イエスが自分の子に注目していただきたいと思いました。ラビのところに行って触ってもらうという習慣は、現在にもあります。さわってもらって祝福を受ける、というものです。エルサレムにヤマ

ニ派のラビがいました。もう5年間も彼に会っていません。白髪ひげの、はつらつとした小柄な人物でした。大抵この人は、宮のある場所にいました。壁の横ではなくて、概して旅行者がいる方にいました。この小柄な人は、そのあたりをあちらこちら歩きながら、叫んで祈るのでした。はつらつとした小柄な、ヤマニ派のユダヤ人です。面白いのは、本当にたくさんの人、若者が彼のところに来て、触ってもらうことでした。祝福にあずかるためです。彼らは、触ってもらおうとして彼のところに行きます。これは習慣です。長く続いている習慣です。ラビのところ、著名なラビのところに行きます。それは、触れることで、このラビがあなたに祝福を分け与えるのです。ですから、触ってもらおうとして、両親が子どもを、ラビ、先生であるイエスのみもとに連れて来ました。

けれども、弟子たちは、不快感を覚えました。親たちを差し止めました。親たちをしかったです。「主の邪魔をしてはならない。わからないのか。」と言って、親たちをしかりはじめました。「イエスはそれをご覧になり、憤って、(10:14)」ここのギリシャ語は、「憤りに満ちて」という言葉です。弟子たちは、イエスのみもとに人が来るのを妨げたのです。イエスは、いつも心を開いて、接したかったのです。子どもをさわるといような些細なことであっても、自分はいつも人々と接する準備があることを知ってもらいたかったのでした。邪魔になりませんでした。イエスは、それを愛されました。イエスは、弟子たちが親をしかりしているのをご覧になり、憤りに満ちて、「彼らに言われた。『子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。(10:14-15)』子どものように心を開いて、単純に信頼して受け入れなければいけません。私たちがとても複雑になっていることは、悲しいことです。悲しいことに、私たちは仮面をかぶり始めます。自分をとり繕おうとするのです。子どもはそんなことはしません。彼らは無遠慮です。正直です。とても美しいです。私は、これがとっても気に入っています。私の孫娘は、私を見て欠点を全部指摘します。彼女はとっても正直です。痛々しいぐらい正直です。これは、子どもの特徴の一つで、隠しだてするものは何もありません。隠そうとし

ません。この純真さと正直によって、私たちも神の国を受け入れるのです。子どものように来るのです。「そしてイエスは子どもたちを抱き、(10:16)」何と美しい光景でしょうか。私は大好きです。イエスが、子どもたちを抱き上げるのです。私もそこにおいて、自分の子どもを連れて来て、イエスに抱かれるのを、手を置いて祝福されるのを見たかったと思います。何とすばらしい主の姿でしょうか。イエスが優しく触れて下さるので、私はこの方に引き寄せられるのです。

「イエスが道に出て行かれると、(10:17)」この道は、エルサレムへの道です。イエスは、エルサレムに行かれる途中でした。そして、十字架にかけられる途上におられました。イエスは、モーセとエリヤと、エルサレムで遂げご自分の死について話されました。一行がまだガリラヤ上部にいるときに、9章31節で、イエスは弟子たちに、「『人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる。』と話しておられた。しかし、弟子たちは、このみことばを理解できなかった。」けれども、イエスは、エルサレムへの途上におられました。イエスは、顔色ひとつ変えずに、十字架へ向かわれています。そして、イエスのみがこのことを悟っておられたようです。弟子たちは、このことに気づいていませんでした。まだ御国のことを考えていたのです。「イエスがエルサレムに着いたら、ローマ政府を転覆され、何もかもを正されるのだ。私たちは、この方が御国を立てられたら、その時に御国において、権威と権力を持つようになる。」と考えていたのです。

「イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、『尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか。(10:17)」他の福音書には、この人は若く、金持ちであったことが書かれています(マタイ19:20参照)。福音書の一つには、彼が役人であったことが書かれています(ルカ18:18参照)。彼は、これがあれば幸せな生活を送れると私たちが思っている物を持っていました。富さえあれば、また若くなることができたなら、余りに早く年を取ってしまった。遅すぎた。おぼれてしまった、と。今ある知識と持ち物があつて若くなることができたなら、金持ちにさえなれば、地位さえあれば、と私たちは考えますが、この人ははそのすべてを持っていました。

けれども、彼には欠けたことがありました。成功した人には、成功は、それほど意味を持ちません。。成功するために、目的を果たし達成するために、私たちがせきたて押しやるのは、幻想、空想です。けれども、一旦目的を達成する、果たすと、興奮が失せててしまいます。ドナルド・トランプ(訳者注:マンハッタンにトランプ・タワーなどを建てた建築家で、一時は大金持ちだったが、カジノの経営に失敗し落ち目になった。)は、「興奮は、追及することにある。見つけてしまったら、もうそれは興奮ではなくなる。」と言いました。テッド・ターナー(訳者注:CNNなどを所有する放送業界の大物。)は、「興奮は、追いかけることだ。捕まえてしまったら、もうむなしなのだ。」と言いました。期待する喜び、空想を私たちは持ちます。「もし、金持ちならば、もし、地位があつたら、私は満たされるだろう。」と思います。この人はすべてを持っていましたが、むなしかったのです。彼は、イエスの中に純真さと麗しさがあるのに気がつきました。ひょっとすると、子どもたちを見たのかもしれませんが。子どもがイエスにどうふるまったか、またイエスが子どもにどう対応されたかを見たのでしょうか。彼は、商売に明け暮れ、蓄財にかまけ、子どもと遊ぶ時間がなかったのです。

イエスが私たちの心と人生を支配されると、私たちの態度が本当に変わるので、驚きです。ずっと前に、牧会を始めて間もないとき、私たちはトゥーソンにいました。その時、私たちは、空軍の隊長の夫婦の家の隣に引っ越しました。神の御霊が彼らの心に特別に働いておられました。ジャンが最初に主を受け入れました。彼女は、新生したときから突進型の人でした。とても興奮して、イエスを主として、救い主として受け入れたときは、彼女は本当にすばらしい体験をしました。彼女は、喜びにあふれた、とてもすばらしい隣人でした。彼女が私に電話をしてきた日に、「チャック、私の家に来てください。話したいことがあります。」と言いました。彼女の家に行くと、「私は主が必要です。イエスを受け入れる必要があります。」ということでした。私たちは、彼女とともに祈り、彼女は主を受け入れ、さっきも言いましたが、新生したときから突進型の人で、喜びで満ちあふれました。彼女の夫のジムは、コーネル大学の教授でした。不可知論者でした。熱心な不可知論者でした。ですから、彼女は、自分がイエスを受け入れたことをどのようにして伝えるか、とても慎重になりました。彼

女は、彼の機嫌がいいときの夕方まで待つて、自分の体験を話そうと思いました。けれども、その夜に彼が空軍基地から帰ってきたら、娘たちがピョンピョン飛び跳ねて、「お母さん。チャックが今日ここにいたときのことをお父さんに話すんでしょ。」と言いました。彼は、「俺が不在のときに、いったい何が起きているんだ。」と言いました。それで、彼女は、彼に話さなければならなくなりました。それで、主は、ジムに伝える戸を開いて下さいました。私とジムと一緒にひざまずき、ジムがイエス・キリストを受け入れたあの日は、すばらしい日でした。二人には、三人のかわいい小さい女の子がいました。まるで、人形のようにです。ジムが主を受け入れた少し後、ジムは転勤になりました。ジムは、戦略空軍司令部(SAC)に勤務していました。ジムはアラスカに転勤になりました。ですから、彼はトゥーソンを離れ、アラスカにある空軍基地に行かねばならず、その間ジャンがすべて荷造りをして、空軍が彼らをアラスカまで引っ越しさせました。しかし、ジムが先に行きました。わたしはジムから手紙を受け取りましたが、その手紙を今でも大切にしています。ジムは、イエス・キリストに導かれたことを感謝し、「チャック、かつて私は子供は地上の災いだと言っていました。小さいわが娘を見て、厄介者だ、邪魔者だと思っていました。面倒な奴等だと。けれども、イエスが私の心に入ってきて下さって以来、子供たちがここに来てくれるのが待ち遠しくてならないのです。会いたくてたまらないのです。私たちの子供に対する態度に、イエスは大きな違いをもたらして下さいました。」と言いました。(訳者注:ここでA面からB面に移るので多少録音が切れている可能性あり。)イエスが小さい子供たちを祝福しておられるのは、何と麗しい光景でしょう。

さて、この金持ちの若い役人は、世俗的なことに関しては、すべてのものを持っていました。しかし、自分の心の中には空虚さがありました。「尊い先生。私は何をしたらよいのでしょうか。」さて、イエスは、面白い答えの仕方をしておられます。「なぜ、私を『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかに、だれもありません。(10:18)」このイエスの答えから二つのうちのいずれかの結論を出すことができます。イエスは、この若者に自分が尊くないとおっしゃっているのか、あるいは、イエスがこの若者の意識を呼び覚まし、イエスが

神であることを気付かせておられるかどちらかです。私は、後者がそうだったと思います。イエスは、この若者に、おっしゃいました。「気付かずに、あなたは認めていることがありますね。自分が認識したことを見て御覧なさい。あなたはわたしに何をを見つけましたか。わたしに何を願っていますか。わたしの子どもに対する愛に、人々に対する態度に何をを見つけましたか。あなたの認識した、この生活の資質(quality of life)は、神のいのちです。わたしは神です。あなたが人生に必要なのは、神です。あなたに必要なのは、神のいのちです。」そしてイエスは、若者に言われました。「戒めは、あなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』(10:19) 」十戒の石の板の二枚目にある第六の戒めは、人と人の関係について取り扱っています。彼は、「先生。私はそのようなことはみな、小さいときから守っております。(10:20)」と言いました。彼が空しく誇っていると私は思いません。この男は、品行方正だったのです。道徳的な人だったので、これはまた彼の資質となっていました。つまり、金持ちで、若く、地位があり、そして、品行方正だったのです。「私はそのようなことはみな、小さいときから守っております。」と彼が言った後に、「イエスは彼を見つめ、その人をいつくしまれました(10:21)。もしこの人が、偽って誇っていたとしたら、イエスはそれを遮られたでしょう。イエスは、偽善には我慢できなかったからです。けれどもイエスは、彼が本心で言っているのがわかりました。イエスは彼を見つめ、いつくしまれました。

そして、「言われた。『あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになるでしょう。そのうえで、自分の十字架を負い、わたしについて来なさい。』すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人には多くの財産を持っていたからである。(訳者注:10:21-22 欽定訳には、21節に“take up your cross”とある。)」 「あなたには、欠けたことが一つあります。」とありますが、興味深いことは、モーセの十戒石の板の一枚目は、神と私たちとの関係についてですが、一番最初の戒めは、「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。(出エジプト 20:3) 」でした。この人

は、道徳的にモーセの十戒の後半の方を守り、品行方正な者であり、隣人と正しく付き合っていました。彼と神との関係は正しくありませんでした。彼の生活には神があり、それは自分の財産でした。まことの生ける神のほかに、ほかの神がありました。それによって、すべてを神に明け渡し、完全に神に従うことができませんでした。イエスは、「完璧になりたければ、完全になりたければ、わたしに完全に従うのを阻んでいるものを取り除きなさい。」とされているのです。彼の場合は、それは金でした。イエスは、マタイの福音書で、このマルコにもありますが、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(マルコ 10:34)」とされました。イエスはこの若者に、彼の前に立ちはだかっている物を教えられました。それは、「あなたの財産が、わたしに従うのに妨げになっています。」ということです。イエスは、私たちに語られています。あなたの生活の中で、イエスに完全にゆだねて従い、神を第一とするのに立ちはだかっているものは何でも、イエスが指をさされて、「ごらん。これはなくなるといけない。」と言われます。私に従うのを押しとどめているのはこれだよ、と。あなたが望んでいる満ち足りた豊かな生活からあなたを押しとどめているのはこれだよ、と。何であれ、あなたの人生の中で神の場所を奪っているもののことです。

そして、イエスが立ち去ろうとされたとき、「見回して、弟子たちに言われた。『裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。』(10:23) 』何たる困難を経験したのでしょうか。弟子たちは、驚きました。イエスは、また彼らに答えて言われましたが、少し言い方を変えて言われました。「子たちよ。富にたよる者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。(10:24) 』弟子たちはますます驚きました。そのことは、弟子たちを驚かせました。そして、互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。(10:26) 』さて、イエスが「らくだが針の穴を通る」と言われましたが、それは、町の大きな門あるいは教会の大きな門の脇に、夜によく開けたままにされていた小さい門のことを指摘する人たちがいました。町の大きな門は締められました。大きな門のところで、いつでもなんとか通れる小

さい方の門がありました。らくだなどを連れてくるときは、らくだから荷物を下ろして、荷物をその小さい門をくぐらせ、その小さい方の門を通るために、ひとりの人がらくだの前に行ってらくだを引っ張り、もうひとりの人がらくだの後ろかららくだを推すのでした。このため、この小さい方の門は、「針の穴」と呼んでいました。つまり、何を言わんとしているかと言うと、強く押して、無理に進めるのであれば何とかなるということでした。十分努力すれば入れるということでした。しかし、イエスは、「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」という質問に対し、「それは人にはできないことです。(10:27)」と言われました。救いとは、どれだけ強く無理に進めようと、どれだけ強く引こうと、どれだけ努力しようと、自分で自分を救うことはできません。いかにあなたが道徳的であろうと、自分の道徳性があなたを救うことはできないのです。イエスは、きっぱりと言われました。「それは人にはできないことです。」と。救いは人間の能力を超えたものです。十分善人になることはできません。十分善を行なうことはできません。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。(10:27)」救いは主のもので、神は不可能をおできになります。神はあなたを救うことができになります。神はあなたを贖うことができになります。あなたを変えることができになります。どんなことでも、神にはできるのです。

「ペテロがイエスにこう言い始めた。『ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。』(10:28)」それは、その通りでした。彼らは自分たちの網を捨て、舟を捨て、漁業を捨てました。イエスに従うために彼らはそれらのものを捨てたのでした。自分の持ち物に背を向けました。イエスに従うために彼らはすべての物を捨てました。「イエスは言われた。『まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、』(10:29)」この「わたしのために、また福音のために」というところが重要な点です。「『その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。』(10:30)」イエスは、この若者に、すべての持ち物をすべて売り払えば、天に大きな宝を積む子になるとおっしゃいました。神はあなたに借りをつくれません。神は決して人間

に借りをつくれません。神に従うためにあなたが捨てたものは何でもそれに代わるものを提供することがおできになります。「その百倍を受けない者はありません。」それだけでなく、永遠のいのちが与えられるのです。「『しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。』(10:31) 」

さて、一行は、旅の途中でした。「一行は、エルサレムに上る途中にありました。(10:32) 」ヨルダンの谷を後にし、エルサレムに向かっていました。「イエスは先頭に立って歩いていかれた。(10:32) 」弟子たちは驚きました。イエスが考え込んでいらっしゃる風であることが、弟子たちにはわかりました。エルサレムで何が待ち受けているのか、イエスはご存じでした。弟子たちは、イエスが先頭に立って歩いていかれた時に、何が起こっているのかよくわかっていませんでした。「弟子たちは驚き、また、あとのついて行く者たちは恐れを覚えた。(10:32) 」何か、ひょっとすると何かたまり続けていたイエスに対する反感や様々なことがあるのではないかとこの予感があり、イエスがかなり真剣な様子であるのを見て、弟子たちは恐れを覚えました。「すると、イエスは再び十二弟子をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを、話し始められた。(10:32) 」イエスは、言われました。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、人の子を死刑に定め、そして、異邦人に引き渡します。すると彼らは、あざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺します。しかし、人の子は三日の後に、よみがえります。(10:33-34) 」イザヤ書50章に戻って下さい。イエスは、イザヤ書50章の預言を告げられているようなものです。4節にこう書かれています。「神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、(イザヤ 50:4-5) 」耳を開くとは、奴隷の印でした。これは、イエスに関する預言です。「神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間とおなじようになられたのです。自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ 2:6-8参照)「耳を開かれたのです。「父よ。わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。(ルカ22:42 参照)」と。父に従っておられます。「主は、私の耳を開かれた。」「打つ者に私の背中をまかせ(イザヤ 50:6)」とここで預言されているように、彼らはイエスをむち打つのです。「ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。(イザヤ 50:6)」ですから、これらのことが、イエスについてイザヤ書の中で預言されていました。イエスは、私がエルサレムに行くとこのようなことが起こるのだとおっしゃられたのでした。「まず、わたしは祭司長に引き渡され、彼らはわたしを死刑に定め、わたしを異邦人に引き渡し、異邦人はわたしのことをあざけり、むち打ち、つばをかけ、殺します。しかし、三日目にわたしはよみがえる。」と。しかし、どういうわけか弟子たちはそれを聞きませんでした。どういうわけかイエスが、自分は殺されると話されると、弟子たちはびっくり仰天し、それ以上聞きませんでした。

さて、ヤコブとヨハネがそこにいました。前回イエスが、9章で自分がエルサレムに行き、人々がどのように自分を殺すかを話をされた時、31節です。「人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる。」そのすぐ後、弟子たちは、だれが御国では一番偉いかを、激しく論じあっていました。イエスは、「人々がわたしを殺す。」とお話になったところでした。それで、弟子たちは誰が一番偉いかを議論していました。また、ここで、イエスは、わたしは殺されると弟子たちにおっしゃっているのです。それで、どうなったのでしょうか。「ゼベダイの子ヤコブとヨハネがイエスのところに来て言った。『先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。』イエスは彼らに言われた。『何をしてほしいのですか。』彼らは言った。『あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。』(10:35-37)」彼らは依然として地のものを求めています。さて、彼らが弟子だったのです。彼らは弟子でした。ある意味で、イエスの奉仕をするために、完璧な人を召されたのではないとわかって、慰められます。無論、誰も完璧な人はいないわけですから、できないことではあります。ですから、イエスは、私たちのような人を用いなければなりません。私たちは誤解をしますし、自己中心的な願

いや動機を持っていることもしばしばです。しかし、イエスは、私たちのような人をお用いになります。しかし、私たちをお用いになれる前に、変えられなければなりません。主の御霊で満たされなければなりません。聖霊によって変えられなければなりません。しかし、変えられて、世界をひっくり返したのはこのような人たちでした。ここでは、彼らは依然として競争していました。誰が一番偉いかを議論したことを認め、恥ずかしい思いをしました。イエスは、「仕える者にならなければいけない。他の人に仕えることを学ばなければいけない。」と言われました。それで、イエスは彼らにお尋ねになりました。「あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、」これは、御自分の死について言及されたのでした。「わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。(10:38)」「あなたがたは、そのようなものを対処できますか。」「彼らは『できます。』と言った。(10:39)」「彼らは、イエスが何のことをおっしゃっているのかも分かっていませんでした。彼らは野心のために盲目になっていました。「イエスは言われた。『なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた、あるいは備えられている人々があるのです。(10:39-40 参照)』つまり、そのことはすでに神に与えられていることですよという意味です。

「十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。(訳者注:英語は、filled with indignations)」「これは、「とても不機嫌になった」(訳者注:欽定訳では、displeased「不機嫌」が用いられている。)と同じギリシャ語です。「ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。(10:41)」「あいつら、抜け駆けしようとしやがって。」「そこで、イエスは彼ら呼び寄せて、言われた。『あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者を認められた者たちは彼らを支配し(lordship)、また、偉い人たちは彼らの上に権力(authority)をふるいます。(10:42)』人が人を支配しようとする、これが人の問題の一つです。つまり、支配権(lordship)、権力(authority)を行使したいという願いのことです。権力(power)をどう取り扱うかは、容易ではありません。慢心せずに権力を取り扱う能力のある人はわずかしきません。イエスは、異邦人の場合は慢心してしまうとおっしゃっているのです。選ばれた者は支

配権を行使し始めると。「しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。(10:43) 」イエスは、ここでギリシヤ語の「仕える者(servant)」という言葉を使っておられます。偉い人は誰でもあなたに仕える者です、と。「あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、(10:44) 」ここで、イエスは、しもべ(奴隷)、デュロスという言葉を使っておられます。ですから、「みなのもべになりなさい。(10:44) 」奉仕者(minister)と仕える者(servant)といった言葉はみな同じです。あなたの必要に使えるのです。残念ながら、長年使っている間に、こういった言葉が特別待遇を表す肩書きのようになってしまいました。The Reverend あるいは、the Most Right Reverend、the Most Holy Right Reverend (訳者注: the Most Reverend は、archbishop、bishop に対する尊称、the Right Reverend は bishop に対する尊称といったように聖職者、牧師の尊称を表す。)あまりにたくさんの言葉を肩書きにつけることができるので、びっくりさせられます。そして、そのような肩書きがつけば、自分が高くされたようになり、特権や、特別に引き立ててもらふことを求めるようになります。誰かに自分の鞆を持ってもらったりするんです。それは自分が実は、仕える者(servant)だから、おっと、牧師(minister)だからです(訳者注: 英語で minister と言うと牧師をさす場合もあるし、奉仕者という意味もあるが、どちらかと言えば、前者のことが多い。。「仕える者」というとそんなに地位が高いように聞こえませんが、本当の意味で「仕える者」という言葉を使うと、ミニストリーがどういうものであるべきかが理解でき始めます。それは、仕えることです。いえ、それ以上のことです。しもべ(奴隷)であることです。

「あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。(10:44) 」その例ですが、「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。(10:45) 」「わたしが来たのはあなたがたに仕えてもらうためではなく、あなたがたに仕え、あなたがたのためにわたしのいのちをあたえるためです。」と。真に偉大になる方法は、上ではなく下になることです。神の御国で偉くなりたいのであれば、みなに仕える者になること

を学ばなければなりません。さて、イエスは、エルサレムに向かう際に、このメッセージを弟子たちに印象づけようとされます。過越の祭の食事を二階の広間で祝うために集まった時、イエスは手ぬぐいを取られ、部屋を回って、それぞれの弟子たちの足を洗われました。それは、仕える者の仕事でした。そして、弟子たちの足を洗い終わり、イエスは言われました。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」弟子たちは、「はい、もちろんです。」と言いました。イエスは言われました。「あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたは正しい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。」(ヨハネ 13:4-14参照)。ここでも、仕えるという考えです。ミニストリーの場合は、奉仕の場です。

一行は、ヨルダンの谷からエリコに上がってきました。これは、ヨシュアの時代のエリコとは別の場所でした。そのエリコは、5マイル(8 km)ほど離れたところにありました。このエリコは、イエスの時代のエリコでした。北のエリコ(Upper Jerico)と南のエリコ(Lower Jerico)がありました。北のエリコは、エリートの人のためのものでした。ヘロデは、冬の宮殿、偉大な冬の宮殿をこのエリコに造りました。北のエリコに、ヘロデは、プールや体育館といった贅沢なものが備わった宮殿を持っていました。南のエリコは、どちらかという庶民の都市でした。この二つのエリコは、近くにありました。二つの間は短い距離でした。「彼らはエリコに来た。(10:46) 」これは、南のエリコのことでした。「イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、(10:46) 」つまり、ヘロデの宮殿があった北のエリコの方に出入るとという意味です。「テマイの子バルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた。ところが、ナザレのイエスだと聞くと、(10:46-47) 」バルテマイは、なぜ群衆が来ているのか、この騒ぎは何かと尋ねると、人々は、「ナザレのイエスが通っているのだ。」と言いました。すると、「『ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。』と叫び始めた。(10:47) 」イエスをメシヤの称号である「ダビデの子」と呼びました。イエスの弟子たちと同じように、バルテマイもイエスが御国を建設する、イエスが王座に着き、支配するのだと考え

ていたに違いありません。王国時代には、盲人が見えるようになり、足なえが歩くようになり、耳の聞こえない人が聞こえるようになると。イエスは、そのようなわざをなさっていました。イエスは、盲人の目を開いていらっやいました。バルテマイもイエスのことを聞いていました。イエスの名声は広まっていた。特に、虚弱者の間で広まっていた。特に盲人の間で広まっていた。みんなイエスが盲人の目を開いておられたことを聞き及んでいました。ですから、ここにバルテマイにも機会が与えられたのです。夢に見ていた、待ち焦がれていたこと、メシヤであるイエスにお目にかかる機会が与えられたのです。イエスが他の盲人になさったことを知っていましたから、自分も見えるようになるために、イエスにお会いしたいと願っていました。

それで、彼は、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めました。回りにいた人たち、群衆は、「黙りなさい。静にいなさい。」と言いました。しかし、彼は制止されたりしませんでした。彼は、ますます叫び立てました。「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」「すると、イエスは立ち止まって、(10:49) 」イエスはバルテマイの叫びを聞かれました。イエスは立ち止まられました。私は、このことがとても気に入っています。劇的な出来事が起こりました。イエスは立ち止まられました。イエスは、十字架に向かっておられました。イエスは、エルサレムに向かっておられました。イエスは顔を火打ち石のようにしておられました。イザヤ書50章を見ると、「私は顔を火打ち石のようにし、(イザヤ50:7) 」とあります。イエスは、十字架に向かっておられましたが、必要のある男に仕えるために、途上で立ち止まられたのです。立ち止まって、あなたの必要に仕えることができないほど、イエスが忙しすぎることは決してありません。「すると、イエスは立ち止まって、『あの人を呼んで来なさい。』と言われた。(10:49) 」イエスは、「あの人をここに連れて来なさい。』と言われました。「そこで、彼らはその盲人を呼び、『心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている。』』と言った。(10:49) 」それで、この男は興奮し、上着を脱ぎ捨て、立ち上がりました。今朝お話したように、上着を脱ぎ捨てることに何か重要性があったに違いありません。ひょっとすると、もうぼろぼろの古着になっていたのかもしれない。

イエスに会えば、もう古着を着続けることはないことに気付いたのでしょう。イエスに会えば、違った人生になる、人生が変わる、と。彼は、上着を脱ぎ捨て、イエスのところに来ました。「そこでイエスは、さらにこう言われた。『わたしに何をしてほしいのか。』すると、盲人は言った。『先生。目が見えるようになることです。』するとイエスは、彼に言われた。『さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。(訳者注:欽定訳では、「あなたを健やかにした」となっています。)](10:51-52)」ですから、私は、上着を脱ぎ捨てることに何か重要性があったと思うのです。それは、彼の信仰の証拠だったと思うのです。彼は自分の人生が同じままであることはないとわかっていた証拠だと。後でこの男が汚い古着を捜して、「誰か、私がおいておいた古着を知りませんか。」などと言ったとは思えません。彼は、もうこのようなものは必要ないと分かっていました。彼は、それを脱ぎ捨てて、イエスのところに来ました。ちょうど、白い杖を捨ててしまうのと同じです。イエスにお会いするのだから、もうこんなものはいらぬ、見えるようになるのだから、と。ですから、「イエスは、彼に言われた。『さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。』すると、すぐさま彼は見えるようになり、(10:52)」すぐさまだったのです。「イエスの行かれる所について行った。(10:52)」イエスは、「さあ、あなたの道を行きなさい。(訳者注:英語では、go your wayとなっている。)」と言われました。しかし、面白いのは、一旦イエスによって彼の目が開かれると、イエスの道が彼の道になったのです。私たちも一旦イエスに本当にお会いすると、イエスの道が私たちの道になります。「私たちはここにおります。」と言って、イエスに従うようになります。イエスの道に従います。何故でしょうか。それは、イエスが愛によって私たちの人生に触れて下さったからです。一旦イエスに本当にお会いすると、人生が同じままであることはありません。

マルコの福音書11章(Mark11)(#8039)

マルコの福音書11章をお開き下さい。10章の最後では、イエスがエリコを通りすぎて、ヨルダン側の向こう側のトランスヨルダンと呼ばれている地域から来られて、十字架にかかるためにエルサレムへ向かっておられたところで終わりました。イエスは、ご自分がこれから何に直面しなければならないかはっきりとご存じで、今やエルサレムへ向かっておられたのでした。それで11章は、エリコの地方を去り、エリコから18マイル(28.8km)ほどベテパゲ(Bethphage)の端とベタニヤまで進んで行った、エルサレムへ向かう道を上ってきたところから始まります。「さて、彼らがエルサレムの近くに来て、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づいたとき、(訳者注:11:1「オリーブ山のふもとの」は、英語では次のかぎ括弧に入っていますが、日本語の聖書に合わせています。)」ベテパゲとはいちぢくの家で、ベタニヤとはなつめやしの家です。「イエスはふたりの弟子たちを使いに出して、言われた。『向こうの村へ行きなさい。村にはいるとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。もし、「なぜそんなことをするのか。」と言う人があったら、「主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます。」と言いなさい。』そこで、出かけて見ると、表通りにある家の戸口に、ろばの子が一匹つないであったので、それをほどいた。すると、そこに立っていた何人かが言った。『ろばの子をほどいたりして、どうするのですか。』弟子たちが、イエスの言われたとおりを話すと、彼らは許してくれた。そこで、ろばの子をイエスのところへ引いて行って、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。すると、多くの人が、自分たちの上着を道に敷き、またほかの人々は、木の葉を枝ごと野原から切って来て、道に敷いた。そして、道を行く者も、あとの従う者も、叫んでいた。『ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。』こうして、イエスはエルサレムに着き、宮にはいられた。そして、すべてを見て回った後、時間ももうおそか

ったので、12弟子といっしょにベタニヤに出て行かれた。(11:1-11) 」

ベタニヤはオリーブ山の上にあります。ユダの荒野の方の斜面にあります。実際そこはエルサレムではなく、ユダの荒野に面しています。しかし、そこはオリーブ山の側にあります。イエスは来られるとき、弟子たちにつないであるろばの子について指示を与えられます。イエスはここでも超自然的な知識を現わされ、つないであるろばの子のことを話され、イエスのみもとに連れてくるよう命じられました。さて思い出していただきたいのですが、イエスはこの時点まで、ご自分がメシヤであることを公に認めることを避けてこられました。イエスをメシヤであると宣言するような動きがある度に、イエスは、群衆を残して姿を消されるか、あるいは、難しいことを話して、人々が首を傾げて去って行ってしまうようになさるかして、そのような動きを抑えられました。イエスがなされた特別な奇跡的な御業については、「行きなさい。誰にも言うてはいけない。黙っていなさい。」と言われました。時期早尚に民にイエスがメシヤだと紹介するような動きは、いかなる動きでも、抑えようとされたのです。これはとても重要でした。それは、神の時があったからです。神は、イスラエルに対するメシヤの来臨の時を定められていました。メシヤは、神が定められたその日に来なければならなかったのです。イエスを時期早尚にメシヤであると宣言することは、間違いだったからです。しかし、この日は違いました。というのは、神が民に対して約束されていたのはこの日だからでした。そして預言者ゼカリヤは、この日のことをとてもはっきりとした文言で語りました。「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。(ゼカリヤ9:9) 」と告げています。メシヤはろばに乗って入られると預言されていたので、イエスは弟子たちにどこでろばを見つけるか指示され、ろばを持ってきて、「ほどいて、わたしのところに連れてくるように。もし、『なぜそんなことをするのか。』と言う人があったら、『主がお入用なのです。』と言いなさい。そうすれば許してもらえます。」と指示されました。イエスは、ゼカリヤによって預言されているように、ろばに乗ってエルサレム入城をするように、意図的にエルサレムに入城するお膳立てをされていました。

これは、イエスがご自身をメシヤであると公言されていたことに関して、人々の疑いをすべて解消するためでした。人々は先に、「はっきりとそう言ってください。(ヨハネ 10:24)」と言っていました。これによって、こうした疑いは晴れます。これで、ゼカリヤの預言が成就します。

さて弟子たちは、その重要性を理解しました。それで、弟子たちは詩篇118篇を引用し始めました。この詩篇はメシヤについての詩篇の一つですが、それは、この日についての詩篇でした。詩篇118篇22節から読みます。「家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。」これは、イエスに関する預言であることがわかります。イエスは、家を建てる者たち、国の指導者たちから捨てられるけれども、彼が礎の石になるということです。「これは主のなされたことだ。私たちの目には不思議なことである。これは、主が設けられた日である。(詩篇118:23-24)」これは、石が捨てられる日です。主の御名よって王が来られますが、その方は捨てられます。「これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。(詩篇118:24)」「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。(ゼカリヤ9:9)」29節(訳者注:25節のことか。)の「どうぞ救って下さい(詩篇118:25)」という言葉は、ヘブル語ではホサナです。新約聖書では、ここが引用されたときに、その言葉が訳されずヘブル語のホサナのままで、「ホサナ」と始まっています。あるいは、「どうぞ救って下さい」という意味がホサナにあります。「ああ、主よ。どうぞ救って下さい。ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。主の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。主は神であられ、私たちに光を与えられた。(詩篇118:25-27)」そして、面白いのは、「祭壇の角のところまで祭りのいけにえを綱でひいて行け。(訳者注:新共同訳詩篇118:27。新改訳には「いけにえ」という言葉は出てこない。)」と続けられていることです。いけにえについて語られています。むろんそれは、この週が終わる前にイエスが成就されることでした。「これは、主が設けられた日である。」

ダニエル書9章で、イスラエルの民と聖なる都エルサレムの将来に関して、御使いガブリエル

エルがダニエルに指示を与えて、ダニエルに対し24節で、「あなたの民とあなたの聖なる都については、70週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、(9:24)」と告げました。これが、まさにイエスの来臨の目的でした。つまり、咎を贖うため、罪を終わらせ、そむきを終わらせ、そむきをやめさせ、「永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。」それから、ガブリエルは言いました。「これを知り、目覚めよ。エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから、…7週あり、また、62週あって危機のうちに…堀は再建される。(新共同訳9:25)」「その62週の後、油そそがれた者(メシヤ)は断たれ、」彼のためにではなく、というか、「彼は自分のために何も受け取らない。(訳者注:英語を訳者が訳しました。)」「やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こりその終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。(9:26)」エルサレム復興と再建についての命令が出されてから油注がれた(メシヤ)君の到来まで、69週つまり483年あります(訳者注:「週」は英語で sevens となっており、69×7を意味しています)。エルサレム復興と再建についての命令がクセルクセス王からネヘミヤに出されたのは、紀元前445年3月14日のことでした。エルサレム復興と再建についての命令が出てまさに17万3千880日の後、イエスがろばに乗りエルサレムに入城されました。ちょうど詩篇の記者が、「わたしたちに救いを。…祭壇の角のところまで祭りのいけにえを綱でひいて行け。(新共同訳詩篇118:25、27)」と示したように、またダニエルが、「メシヤは断たれ(ダニエル9:26)」と預言したように、イエスはメシヤとして受け入れられず、家を建てる者たちに捨てられましたが、神はこの方を礎の石とされました。ですから、実に数多くの預言が、この特定の日に関係しているのです。「これは、主が設けられた日である。(詩篇118:24)」イエスが、この日に関する預言が全て成就になるように、注意深くこの日の出来事のお膳立てをされたことに気づいてください。

さて、時は夕方でした。ベタニヤとベテパゲに近づいたときは、おそらく朝の時間だったのでしょう。弟子たちはろばの子を用意し、イエスは降りて来られました。マルコは、イエスがエルサレムのことで泣かれたことは何も語っていません。けれどもイエスは、オリーブ山か

らろばに乗って降りて来られ、弟子たちが、「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。」と叫けぶ真ん中を通られました。他の福音書には、パリサイ人がイエスに向かって、「お弟子たちをしかってください。これは冒瀆です。」と言ったけれども、イエスは、「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」と言われたことが書かれています(ルカ19:39-40参照)。私は、その小道にある石を何個か拾いました。イエスが近づいて来られたときに、この石はここにあったのだろうか、と考えました。弟子たちが黙っていたら、叫んでいたのはこの石だったはずなのです。チェスタートンは、確か、「ろばへの詩(Ode to the Donkey)」という本を書きましたが、確か、このようなくだりだったと思います。「魚が空を飛び、森が歩き、いばらにいちじくが生え、暫くの間、月が血となった時、その時に、巨大な頭をして、気持ちの悪くなるような声で泣き、できそこないの翼のような耳を持って私は生まれたに違いない。悪魔の四つ脚のものすべての生けるパロディーとして。悪魔、この世は頑固で、ぼろぼろになり、私のことを嘲り、むち打つ。私は口がきけないが、私は自分の秘密をしっかりと握り締める。愚か者よ。すぐに過ぎ去ってしまったが、素晴らしいチャンスの時が私にもあったのだ。私は自分の耳のまわりの叫び声を聞き、私の足の下には、しゅろの枝があった。(訳者注:G.K. チェスタートンは、19世紀終わりから20世紀始めにかけて活動したイギリスの作家で、C.S.ルイスは、チェスタートンのことを非常に尊敬していた。上記に引用されている詩は、イエスを乗せたロバの子がエルサレム入城について話しているという想定 of 詩。以下に引用部分の英語を記す。When fishes flew and the forest walked, and figs grew upon a thorn, some moment, when the moon was blood, then surely I was born with monstrous head and sickening cry, and ears like errant wings. The devil's walking parody of all four-footed things. The ancient outlaw, the earth was stubborn, tattered will mock me, scourge me. I am dumb, but I hold my secret still, fools. I also had my hour, ones far swift hour in sweet. I heard the shouts about my ears, and there were palm branches under my feet.)王の王イエスは、へりくだり、ろばに乗って入城されました。この世の君主と実に違います。そこにいたローマ人たちを想像できます。彼らはおそらく、以前に、ローマ軍団が戦利品を持って戻っ

てきて、ローマへ凱旋の行進をするのを見たことがあるでしょう。彼らは、雑多な群衆を見て、また、ろばに乗っている人が都に入るのを見て、クスクス笑っていたことでしょう。この方がローマの脅威になることは、まずなかったでしょう。しかし、宗教指導者にとって、彼は確かに大きな脅威だったのです。さて、この日は日曜日でした。月曜日に、12節によると、イエスは宮に戻られました。「翌日、」月曜日のことですが、「彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと思いに行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。(11:12-13)」もちろん、過越の季節でしたから、4月でした。まだ、いちじくのなる季節ではなかったのです。けれども、いちじくの木については、面白いことがあります。小さいいちじくは、普通、葉がつく前に出てきます。葉が出てくる前に、小さいいちじくを見ることができます。最初に実るいちじく、と呼ばれるものがあります。最初に実るいちじくは、いちじくの中でも最もおいしいのです。もし、最初に実るいちじくがあるなら、それは通常、普通のより大きくて、もっと美味しいのです。いちじくの木は、8、9月にならないと実を結びません。最初に実るいちじくは、ここアメリカでは、普通5月の終りか6月の初めに実ります。でも向こうでは、だいたいもっと早めの季節に実ります。ですから、その時に、いちじくに実があった可能性もあります。しかし、その時点では、まだちょっと食べられなかったはずで

木をのろうことは、イエスのご性格にあまりにもそぐわないと私は思います。ですから、私たちはそのことを、確かに文字通りに起こったのですが — これ自体が象徴的なものと言っているわけではありません。イエスは文字通り木をのろわれて、一夜にして木は文字通り枯れました。 — しかし、ここでののろいは、象徴的な行為であり、イスラエルの事を話されていて、イスラエルの民が例えられていて、神が願われていた実を結ばせることができたかと思っていかなければなりません。主に対して実を結ばせることができなかったのも、この国はしおれ、枯れるということなのです。いちじくの木は、旧約聖書で何度か、型という意味で、イスラエルの民に用いられています。エルサレムが破壊されたとき、神は、「わたし

のいちじくの木を引き裂き(ヨエル 1:7)」と言って、嘆かれました。エレミヤ書では、「腐っていて、とても食べられず、捨ててもいい、いちじくのかご(リビングバイブル24:2参照)」とあります。もうひとつの、実を結ばせなかった木のたとえでは、主はこう言われました。「主人が木を切り倒してしまいなさいと命じましたが、番人は、『もう一年お与え下さい。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。来年、実を結ぶか見てみましょう。』と言いました。(ルカ13:6-9参照)」つまりこれは、イスラエルの民に対する神の寛容と忍耐深さです。この民が実を結ばせることを待っておられました。けれども、実を結ばせなかったので、のろいをもたらしました。この国は、しおれ、枯れていきました。ですから私は、イエスのこの行為は、実を結ばせるという大切な教訓を、弟子たちに教えるための象徴的な行為であると見えています。旧約聖書では、イザヤがぶどう畑のことで神に嘆きました。神がぶどうの木を植えられて、実を集める季節に戻ってこられましたが、酸いぶどうしかありませんでした。それで、ぶどう畑をそのままにせよ、というものでした(イザヤ 5:1-6参照)。ここでも、これはイスラエルの民の型となっています。実を求めたのに、それにふさわしい実が見つからなかったのです。このことは、私たちにも語られています。イエスは、「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。(ヨハネ 15:5)」と言われたからです。これは、私たちの生活が主に對し実を結ぶという神の願い、目的を示しています。教会として、私たちは実を結ばせなければなりません。そしてパウロは、「聖霊の実は、愛です。(ガラテヤ5:22参照)」と教えています。興味深いことに、黙示録でイエスが教会に語られている中で、エペソの教会に対する不満は、行ないが足りなかったことではなかった事です。行ないはたくさんありました。そうではなくて、愛が足りなかったのです。彼らに対するイエスの警告は、初めの愛に戻らないなら、主の臨在が教会から去っていく、というものでした(黙示2:1-5 参照)。愛のない教会に、イエスがとどまられることはありません。私たちに対する、大きな警告であり、教訓です。神の愛が、いつまでもこの教会から、この場所から流れ出ますように。主よ、人々がここに入るときに、いつも愛、あなたの愛を感じるができるようにして下さい。そして、あなたの愛が、私たちから流れ出るようにして下さい。主よ、あなたが来られるとき、あなたの民の間に住まわれるとき、あなたの求めておられる実を見つけることができになりますように。

あなたの園で、楽しむことがおできになりますように。主よ、私たちの生活が実り多いものとなりますように。実を結ばせますようにしてください。こうして、いちじくの木は、のろわれましました。「イエスは、その木に向かって言われた。『今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。』弟子たちはこれを聞いていた。(11:14)」彼らは、木に向かって話すなんて、ちょっと変だと思ったでしょう。

そこで、まだここでは月曜日ですが、「彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮にはいり、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。(11:15-16)」宮は、ほとんど市場になっていました。そこにいる人々は、いけにえの動物を台にのせていました。両替人もいて、通り掛かる人は自分の物を持って、宮を近道にしていました。いけにえを持ってくるときは、傷のないものでなければなりません。さもないと、受け入れられません。欠陥のある物を神にささげることはできません。ただ完全な物だけが受け入れられたのです。それで、羊や、鳩や、いけにえを持ってくと、祭司はいつも、欠陥がないかどうか調べました。もしラビからの証明のラベル付きでないと、祭司は欠陥を見つけるまで調べ上げ、そして拒否し、高騰な価格で無理やり証明を受けたいけにえを買わせていたのです。従って、人々は、神にいけにえをささげたいと思っていたのに、搾取されていたのです。これは、ふんだくりと変わりません。そこでイエスは、怒られ、彼らを追い出されました。宮のシュケルだけしか、神にささげることはできませんでした。ローマの通貨は汚れているとみなしました。それを神にささげることはできない、宮のシュケルだけをささげることができる、としたのです。両替人がいたのは、その理由からです。人々からローマの硬貨を受け取り、交換の際は、25%の交換手数料で、宮のシュケルに交換しました。ここでも不正な金儲けをして、神を礼拝したいという人々の願いを利用して、利益を得ていたのです。彼らは、神を礼拝したいという人に内在する思いを利用できることを見出したのです。そして、それを食べ物にしていました。イエスは、彼らを追い出されたとき、イザヤ書66章7節を引用されて、こう言われました。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と

呼ばれる。』と書いてあるではありませんか。」それから、エレミヤ書7章11節を引用されて、「それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。」と言われました。神の家は、祈りの家であるべきなのです。彼らはそれを強盗の巣にしました。暴利をむさぼりました。「祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。夕方になると、イエスと弟子たちは、いつも都から外に出た。(11:18)」ですから、イエスは日曜日に勝利の入城をされました。月曜日に宮にはいられて、暴利と冒瀆から宮をきよめられました。

さて、「朝早く、」これは火曜日になります。20節です。「通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。ペテロは思い出して、イエスに言った。『先生。ご覧なさい。あなたのろわれたいちじくの木が枯れました。』」こんなにも早く、木が枯れたのにびっくりしたのです。イスラエルの民が枯れるのも、なんと早いのでしょうか。「イエスは答えて言われた。『神を信じなさい。』(11:22)」つまりイエスは、弟子たちに信仰の潜在能力と力を教えられるために、この例を用いられています。「まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります。(11:23)」イエスが文字通りの山を言われているのではない、と言う人たちがいます。ラビはよく、人が経験する困難を指して、困難の山と言っていました。そのことは、あまり問題ではありません。そこには、原則があるのです。信仰の原則です。イエスは続けてこう言われました。「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。(11:24)」さて、イエスが、まず最初に、誰にお話しになっているか思い出して下さい。なぜかと言いますと、この聖書の箇所を取り上げて、この箇所を基にして、自分が欲しい物を何でも持てるという、自分の肉と欲望を満たすための言い訳をする人たちがいるからです。彼らはこの箇所を、首にかけ金の鎖や、指にはめている大きなダイヤモンドや、高級スポーツ車や、高級保養地の島に家を持つことだと解釈したり、訳したりします。彼らは、イエスの

約束を、悲しいかな、このような滑稽なものにしてしまいました。

私が言ったように、まず最初に、イエスが誰に対して話されていたかを知る必要があります。いちじくの木がこんなに早く枯れてしまったのに驚いた、ペテロと弟子たちに話されていたのです。弟子になるには、どういうことが必要ですか。イエスは言われました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、(マルコ 8:34)」これがまず最初の条件です。これを、自分が楽しみにふけることができる約束だと解釈する人は、ここを完全に誤って受け止めています。「ただ信じれば、自分が欲しい物や、どんな贅沢なものでも、楽しむことができる。信仰の原則を働かせなさい。ただ、それを言えばいいのです。レーマです！語られた言葉に力があります。しかし、自分が何を言うかに注意しなさい。否定的なことを決して言うてはなりません。自分の言うことは何でも、その通りになるからです。否定的な告白をしたら、悲惨なことが起こります。その通りになります。あなたの言葉には、創造する力があるからです。」こんなのは、みなでたらめです。私たちはみな、男と女には大きな違いがあることをよく知っています。一部の人はその違いがわからないようですが、私たちはわかっています。大きな違いがあります。女性は、男よりもずっと広い幅で動きます。男はおおざっぱで、狭い幅で動きます。あまり興奮できないし、あまり悲しくなれません。その狭い幅の内にいます。けれども女性は、ずっと高い幅まで興奮することができますし、またずっと深く気持ちが沈み込むことができます。ですから、私なら部屋に入って、「ここは寒いね。」と言いますが、私の妻なら、その部屋に入ると、「凍え死にそうだわ。」と言います。彼女の言っていることが、実際にそのとおりにならなくて、私は嬉しく思っています。私なら、「おなかですいた。」と言うかもしれませんが、彼女は、「飢え死にしそうだわ。」と言います。彼らは、自分の言うことがすべて、そのとおりになるのです。否定的な告白で、気絶しなさい。いいえ、これでは、文脈から完全にはずれています。

イエスは、金額未記入の小切手を与えて、書き込みなさい(訳者注:つまり、好き勝手にしなさい、ということ。)、と言われているのではありません。楽しみにふけりなさい、出て行って、欲しいもの何でもそれにふけりなさい、と言われているのではありません。イエスは、自

分の十字架を負い、この方に従うために、自分を捨てた弟子たちに語られていたのです。イエスが模範であり、私たちはこの方に従うのです。そうすれば、私たちの願いは、この方の願いなのです。なぜなら、主としてこの方に従っているからです。イエスの願いから離れては、願わないし、願ってはいけないのです。ですから、この(箇所)上に印を押して、「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」という印を押すことによって、この約束を正しい観点から見ることができます。この約束は、自分を捨て、自分の十字架を負い、イエスに従う人に対して与えられています。このような人々にとって、これはすばらしい約束です。神のみこころが、神の御業が、自分の心と、自分の生活と、自分の回りの人たちにもたらされるのを見ることができます。なぜなら、この方を主として、完全に自分を明け渡したからです。

また祈っているとき、「立って祈っているとき、」ある人は、ひざまずいて祈ります。またある人は、横たわって祈ります。問題は、からだの位置ではなく、心の位置です。「立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます。(11:25)」イエスは、あなたが赦すことが、御父があなたを赦して下さる機会をもたらすことを教えておられています。あなたが人を赦すことがとても大切なのは、このためなのです。神があなたを赦される機会が開かれます。「立って祈っているとき、思いの中でだれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。父も、あなたを赦してくださいます。」私たちが立って祈るときは、大体において赦しを求めているのです。ですから、赦す事は大切です。そして、イエスはこのことを強調されています。「しかし、もし赦してやらないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの罪を赦してくださいません。(11:26 脚注参照)」赦しは、これほど大事なのです。それでは、救いは行ないによるのか、とおっしゃるかもしれません。私にはわかりません。私がわかっていることは、赦した方がいい、ということだけです。イエスのみことばの權威をそこなったり、修正したりしたくありません。これを、神の恵みと救いどう関連させればよいのかわかりません。しかし、私の知っていることは、これがイエスの教えで、はっきりとして単純であ

ることです。私は、これから何かを取り除くという罪を犯したくありません。キリストのみことばに従わない人を慰めて、偽りの慰めを与え、偽りの希望を抱かせる罪を犯したくありません。これは、イエスが言われたことです。重大なことなのです。あなたが赦す事は大切です。それにより、神があなたを赦して下さる機会が開かれます。「もし赦してやらないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの罪を赦してくだされません。」実に深刻な話しですが、それだけ重要なのです。

イエスがこのことを言われたのは、この時だけではありません。マタイによる福音書6章で、イエスは私たちの義について、どのように主の御前で行なうべきかを話されています。「祈るときには、自分の奥まった部屋にはいり、戸をしめなさい。(マタイ 6:6参照)」等、を話されていますが、こう言われました。「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちが試みに会わせないうで、悪からお救いください。国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。』(マタイ6:9-13)」それからイエスは、こう言われました。「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくだされます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。(マタイ 6:14-15)」これは、かなりはっきりとした、平坦な教えです。それからイエスは、ご自分が言われた事がどういう意味なのか説明するために、たとえを話されています(マタイ 18:23-35 参照)。ある王がいて、精算をしたいと思いました。彼は、1600万ドルの借りのあるしもべを見つけました。このしもべを連れて来て、返済を命じました。しもべは、「返済できません。」と言ったら、王は、「獄吏に投げ入れよ。」と言いました。しもべは泣き始めて、「どうかご猶予ください。そうすればお支払いいたします。」と言って請いました。そこで王は、巨大な借金を免除しました(訳者注:英語では、「赦す」も「免除する」も同じ forgiveが使われます)。ところが、そのしもべは、同じしもべの仲間、16ドルの借りのある者に出会いました。彼はその人をつかまえて首を絞めて、

「借金を返せ。」と言いました。彼の仲間がそれをできないと、債務者の牢に彼を投げ入れました。他のしもべたちはそれを見て、非常に悲しみ、王に報告しました。「あなたがお赦しになった1600万ドル借りのあるしもべを覚えておられるでしょうか。ついこの前、彼は仲間のしもべを、16ドルの借りで牢に投げ入れたのです。」それで王は、彼を呼びつけて言いました。「悪いしもべだ。大きな借金を赦してやったではないか。小さな借りをしている仲間のしもべを、おまえが牢に投げ入れたと聞いたが、これはいったいどうしたことか。」こうして王は、借金を全部返すまで、彼を獄吏に投げ入れるよう命じました。ここで言われているのは、「見なさい。神がどれだけあなたを赦して下さったかを。」ということです。私たちは、赦していかなければなりません。「私の兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」「ペテロ、それは違います。7度を70倍するまでです。(マタイ 18:21-22 参照) 」これは数字の問題ではありません。これは、私たちが赦しの心を持たなければいけないことです。今朝指摘しましたように、赦さない心を放さないでいると、人が自分に犯した罪を放さないでいると、苦々しく思い続けていると、怒っていると、恨んでいると、あなたに被害が及びます。イエスが指摘されているように、ただ単に霊的なもの、つまり赦しがあなたから閉じられてしまうだけではなくて、感情的な被害を被ります。怒った心、神経がピリピリしたような態度は、悪い化学的性質を造りだします。これは、あなたの体にも精神にも悪影響を及ぼします。感情的にも、肉体的にも、霊的にも、赦すことはとても大切です。

「彼らはまたエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、(11:27)」この日は、水曜日です。いや、火曜日ですね。月曜日に宮をきよめられたのですから。火曜日に戻って来られています。いちじくがしおれたりしたのは、火曜日のことでした。「彼らはまたエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、イエスのところにやってきた。」私は、水曜日、水曜日の夜にイエスが弟子たちと過越の食事をとられて、木曜日に十字架につけられたと信じています。後でこのことに触れますが、みなさん「聖金曜日は？(訳者注:つまり、受難日のこと)」と言われるでしょうが、聖金曜日と日

曜日の朝に3日3晩を入れようとする、問題が出てきます。イエスはまたエルサレムに来られました。宮の中を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、イエスのところにやってきました。宗教の全集団が来ています。「俺たちの縄張りに侵入してきたな。」という感じ。「そして、イエスに言った。『何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにこれらのことをする権威を授けたのですか。』(11:28)」この者たちは、いつも権威を探していました。バプテスマのヨハネが洗礼を、やってくる人々に授けていたときに、彼らが来てこう言いました。「何の権威によって、洗礼を授けているのですか。(ヨハネ 1:25 参照) 」私がモルモン教会の指導者のひとりに会ったとき、彼の質問は、これでした。「何の権威によって、この若者たちが出て行って、これらの教会において奉仕者になっているのですか。何の権威によって、ラウル・リースがサン・ガブリエルで会合を開いているのですか。だれが彼を按手したのですか。」私は言いました。「神が按手されました。彼に権威を授けられたのは、神です。」イエスが、全世界に出て行き、福音を宣べ伝えなさいと命じられたのです。権威は、神から来るのです。彼らはイエスに、「だれが権威を授けたのですか。」と聞きました。「そこでイエスは彼らに言われた。『一言尋ねますから、それに答えなさい。』(11:29)」わたしの質問に答えたら、あなたの質問にも答えましょう。「『わたしも、何の権威によってこれらのことをしているかを、話しましょう。わたしの質問は、ヨハネのバプテスマです。これは天から来たのですか。人から出たのですか。答えなさい。』彼らは、こう言いながら、互いに論じ合った。『もし、天から、と言えば、それならなぜ、彼を信じなかったと言うだろう。だからといって、バプテスマが人から、と言えば、人々はみな怒るだろう。彼らはヨハネが預言者だと思っているから。』『あなたの質問は、わかりませんね。』と彼らは言いました。イエスは、『わかりました。わたしもあなたがたの質問には、答えません。』と言われた。(11:29-33の言い換え) 」それで、イエスは、彼らを黙らせてしまいました。

マルコによる福音書12章(Mark12)(#8040)

マルコによる福音書を開いてください。今晚は12章です。イエスがちょうど、宗教指導者たちと猛然と対決されたばかりのところでは、イエスは宮に来られると、両替人を追い出し、宮を商売の道具にしていた人たちを追い出されました。ですから、彼らはイエスのところにやって来て、「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにこれらのことをする権威を授けたのですか。(11:28)」と尋ねました。イエスはお答えになったとき、わたしの質問に答えるなら、あなたの質問に答えよう、という提案をされました。「ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか。人から出たのですか。(11:30)」彼らは、互いに論じ合いました。「もし、神から、と言え、それならなぜ、彼を信ぜず、ついて行かなかったのか、と言うだろう。人から、と言え、人々は私たちに逆らうだろう。彼らは、ヨハネが確かに預言者だと思っているから。(11:31-32の言い換え)」彼らが、「わかりません。」と言うと、「しょうがありませんね。わたしも話しません。」と言われました。そして、彼らは依然としてイエスと対決しています。この対決の真っ最中です。

「それからイエスは、…彼らに話し始められた。(12:1)」彼らとは、宗教指導者たち、律法学者、パリサイ人、サドカイ人のことです。「イエスは、たとえを用いて彼らに話し始められた。『ある人ぶどう園を造って、垣を巡らし、酒ぶね(winefat)を掘り、』現代の英語では、貯蔵室になります。「『やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。』」イザヤ書5章で、イザヤはぶどう園のたとえを使っています。ぶどう園は、イスラエルの民を表していました。神が最も上等の植物を植えられて、やぐらを回りに建てて、確実においしい実がなるためのすべてのことをされました。ぶどう酒の貯蔵室を造られました。それを保護するために、回りに壁を造られました。最高級のぶどうを造られていました。ところが、時がたって実を結ばせると、酸いぶどうしかできませんでした。それで、そのさばきとして、壁をくずして、保護を取り除いて、荒れすたれるに任せ、踏みつけたままにするようにされました。このぶ

どう園は、神の求めておられた実を結ばせなかったのです。さて、イエスは再び、ぶどう園をたとえて用いられています。聖書研究で、「釈義の不変性(expositional constancy)」と呼ばれるものがあります。つまりこれは、たとえてぶどう園がイスラエルの民に用いられているなら、たとえてぶどう園が用いられているところはどこでも、釈義不変によると、イスラエル、イスラエルの民のことを言い、言及していることになります。ですから、イエスは再び、ぶどう園を持ち出されておられますが、彼らはすぐに、イスラエルの民がぶどう園であるとわかりました。「それを農夫たちに貸して(12:1)」彼らは、ぶどう園が必ずや良い実を結ばせるように、それを養い、世話をする者たちでした。良い実が実るように、ぶどう園を守り、育て、耕すことが彼らの責任でした。「ある人がぶどう園を造って、垣を巡らし、…。」つまり、ぶどう園を設けました。ぶどう園の収穫の時には、その人は、収穫を得ることになっていました。一般原則では、不在地主の場合は、ぶどう園からとれた収穫の15%を受け取る資格がありました。それで、地主が15%を得る時になりました。5年目まで集めることはできませんが、地主がぶどうの実を受け取る時になりました。それで、しもべを農夫たちのところへ遣わしました(12:2)。自分のためにぶどう園の実を集めて、得るためでした。

「ところが、彼らは、そのしもべをつかまえて袋だたきにし、何も持たせないで送り帰した。そこで、もう一度別のしもべを遣わしたが、彼らは、頭をなぐり、はずかしめた。また別のしもべを遣わしたところが、彼らは、これも殺してしまった。続いて、多くのしもべをやったけれども、彼らは袋だたきにしたり、殺したりした。その人には、なおもうひとりの者がいた。それは愛する息子であった。彼は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう。』と言って、最後にその息子を遣わした。(12:3-6)」さて、もちろん遣わされたしもべは、代々の預言者たちです。大体において預言者の職務は、イスラエルにおいては、危険な立場でした。事実、ステパノは議会において弁明をし、彼らの歴史を語りましたが、これまでに彼らの父祖がいかに神のご計画を拒んできたかを示しました(使徒7章参照)。ヨセフは、兄弟たちに捨てられました。彼らは、「我々が、おまえにおじぎをし、仕えるのか。冗談を言うな。そんなことがあるわけがない。(創世37:7-8参照)」と言いました。彼らはヨセフを奴隷として売り飛ばしましたが、

最後には、ヨセフが見た夢のとおり、彼らは確かにおじぎをし、敬礼したのです(創世42:6参照)。けれども兄弟たちは、彼を1回目は拒んだのです。2回目に彼らは、神がヨセフに与えた地位を認めました。モーセの場合も、最初に民のところに来たとき、民はモーセが民を支配することを拒みました。モーセは逃げて、荒野の中で40年間を過ごしました。2回目のときに、彼らは、神がモーセをエジプトの奴隷状態から導き出す者として任命されたことを認めました。ステパノは、どんどん核心まで話を進めて行きました。彼は当然、あなたは1回目はイエスを殺したが、イエスが再び来られるとき、この方を王の王、主の主として認めるだろう、と言うことを明らかにしていたのです。しかし、この話の聞かせどころに来る前に、いかに彼らが盲目になっているのかを明らかにしたのです。彼はこう言いました。「あなたがたの先祖が石打ちにしなかった預言者があったでしょうか。(使徒7:52の言い換え)」神の真理を憶さずに民に語った預言者で、痛手を受けなかった者の名前を挙げてみて下さい。ですからイエスも、同じ事をおっしゃっていたのです。神がイスラエルの民に遣わされた代々の預言者がしいたげられ、牢に入れられ、むち打たれ、多くの者が殺されました。ヘブル書11章では、神のしもべ、信仰の人たちの苦しみについて語られています。信仰の人たちは、牢に入れられ、石で打たれ、のこぎりで切られ、「この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。(ヘブル 11:38)」彼らは、世に、イスラエルの民によってしいたげられました。預言者たちはみな次々と、この民によって、悪い仕打ちを受けました。

神は依然として実を得たいと望んでおられたので、「私の愛する息子を遣わそう。きっと彼を敬ってくれるだろう。」と言われました。ここでイエスは、ご自身を預言者たちとは全く別の範疇に入れておられます。イエスを預言者のひとりにまで格下げしたいと願う人たちがいつもいます。実際、モハメッドはイエスが預言者のひとりである、つまり、預言者の一人であると言いました。このような考えを受け入れる人がたくさんいます。イエスは、神が遣わされた預言者の一人だ、というものです。けれども、イエスはご自身を、全く別の範疇に入れられていることに気をつけて下さい。「最後に私の愛する息子を遣わす。私の息子なら、敬ってくれるだろう。」と言われたのです。「すると、その農夫たちはこう話し合った。『あれはあと取

りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』(12:7)」イエスがピラトのもとに連れてこられたとき、ピラトは、これは陰謀だと気づいていました。彼らがイエスをねたみ、イエスが彼らに取って代わることを恐れていました。大祭司は、「国民の中で私たちの立場を守るために、ひとりの人が死ぬ必要のあることが、わからないのか。(ヨハネ 11:50の言い換え) 」と言いました。「見よ、すべての人があの人について行っている。このことについて、何とかしなければならない。(ヨハネ 11:49参照?) 」と言ったのです。さもなくば、「彼は、私たちの権力と地位を取り去るだろう。」と言いました。ですから、イエスは基本的に、彼らが既に心に定めてしいたことをお示しになったのでした。つまり、イエスが彼らにとって、脅威となり、危険な者となったので、国民に対する権力と権威と支配を失わないように、イエスは死ななければならないと彼らが考えていたことをお示しになったのでした。「あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、ぶどう園はこちらのものだ。国民に対して支配と権力をふるうことができる。」「ところで、ぶどう園の主人は、どうするでしょう。(12:9)」もちろん、ぶどう園の主人は神です。「彼は来て、農夫どもを打ち滅ぼし、」宗教指導者たちのことです。「ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。(12:9 新改訳脚注参照) 」

それからイエスはこう言われました。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石、それが隅のかしら石となった。(12:10 口語訳参照)』」これは、建物が建てられる親石、あるいはアーチのかなめ石のことです。家を建てる者たちの見捨てた石です。ですから、これはイエスについての預言です。この石、岩は、モーセによって約束されました(1 コリント 10:4?)。この石は、ダニエルによって告げられました。これは、人手によらず切り出され、国のたくらみを打ち砕き、これらを全滅させて、永遠の御国を立てます(ダニエル2:34、44、45参照)。けれども、これは、家を建てる者たち、すなわちイスラエルの民の宗教指導者たちの見捨てた石です。そして、この石は、キリストは、隅のかしら石となりました。さて、ペテロが、これらの者たちと同じ議会の前に立ったとき、そばにはヨハネがいて、足なえの男がいました。生れてからずっと足のなえで、宮に入って

くる人々に施しを求める者として、宮の中でよく知られた乞食でした。彼はいやされて、ふたりといっしょに立っていたのです。議会の議長がペテロに、「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。(使徒4:7)」と尋ねました。どうやってこんなことをしたのか。何の権威によって、だれの名によってしたのか。ペテロは聖霊に満たされて、こう言いました。「イスラエル人たち。私たちがきょう取り調べられているのが、良いわざについてであり」私たちは捕らえられて、この法廷にいますが、もし、この足なえ(lame)の男が歩いているという良いわざのことで、きょう裁判にかけられ、審理を受けているのなら、…つまりペテロは、これはへたな(lame)告発ではないでしょうか、と言っているわけです。この男は歩いている。そのことで、あなたに何か不都合なことでもあるのですか、と言っているのです。「けれども、もし本当に知りたいのなら、私たちの父祖の神が、ご自分の子イエスに栄光をお与えになりました。」そして彼らを指して、「これは、あなたがた家を建てる者たちに立てられた石ではありません。」ギクツ！（訳者注：彼らが気づいたことを表す擬声語。）あれを覚えていますか。ペテロは彼らの痛いところをついています。彼らはイエスが言われたことを聞いていました。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。(12:10)」と、イエスは言われました。そして、ペテロは、彼らに全く同じ聖書のことばを思い起こさせているのです。「家を建てる者たちの見捨てた石、これが礎の石となった。」

「彼らは、このたとえ話が、自分をさして語られたことに気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、やはり群衆を恐れた。(12:12)」彼らは、このたとえ話の要点を理解しました。こいつは、私たちを指している、と。それで、彼らは集まり、民の間でのこやつの人気を何とかしなければいけない、と思いました。民がこやつに反対するようにならなければいけない。彼を取り除くべきだ、と。それで彼らは、イエスを捕らえるにはどうすればよいか考えました。民が反対するようなことを、言わせようと思いました。それで、「彼らは、イエスに何か言わせて、わなに陥れようとして、パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところに送った。(12:13)」イエスの人気が失墜するようなことを言わせようとして、「彼らはイエスのとこ

ろに来て、言った。(12:14)「次は、おべっかです。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。」つまり、こういうことです。「あなたは歯に衣着せぬものの言い方をなさる方です。人を恐れず、真理を語られますが、誰がグサツときているかなど気にされません。あなたは歯に衣着せぬものの言い方をなさる方です。」「カイザルに税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。(12:14)「彼らは、イエスを追い詰めたと思いました。もしイエスが、これは律法にかなっていることで、カイザルに税金を納めなければならない、と言われたら、民はみな彼に反対したでしょう。ローマ政府は全地を統治する際に、ローマといっしょに協力する国を、かなり独立したままにしておきました。ヘロデ大王が支配している時、彼はローマに気にいられていたもので、イスラエルの国は多くの自由を許されました。大王が死ぬと、国は3人の息子に分割されました。アルケライスはエルサレムやユダヤがある南部を取りました。アンティパスはもちろん、上部のガリラヤ地方を取り、ピリピはシリアの方の最北部を取りました。さて、もちろんアンティパスとピリピはローマとうまくやっていたのですが、アルケライスは、才能のない指導者、支配者でした。彼の下でローマに対する反乱が起こり、彼はそれを制するほどの力がなくて、アルケライスが支配していた部分はローマの属州になりました。ローマがローマの総督を遣わして、そこを支配させるようにしたのです。そこにはローマ兵が駐屯し、秩序を保ち法を守るようにさせました。ですから、この場合も同じで、当時その場所はローマの権威と法の下にあって、ローマがここの民に、穀物の10%とぶどう酒の20%に税を課しました。私たちが納めている税と比べると、この税はそれほど悪くないようです(訳者注:アメリカ合衆国政府に対しての皮肉です)。それに、人頭税と呼ばれていたものを納めていました。これは単に、生存権のために納めた税です。けれどもこれは妥当な額で、1デナリだけでした。1年に2、3ドルぐらいのものです。さて、政府が公共サービスを提供している地域に民が住んでいるのなら、納税は適切です。私たちは、税を納めなさいと教えられています。「敬わなければならない人を敬いなさい。税を納めなければならない人には、税を納めなさい。(ローマ 13:7 参照)」洗面所に行って、蛇口をひねって自分の手を洗うと

いう事実があります。出てくる水は、政府が提供しています。それは、何かの手段で支払わなければならないのです。電気をつけることができます。私たちが享受している便益です。週一回のゴミの収集もそうです(訳者注:カリフォルニア州では、ゴミ収集が週に一回のみです)。ゴミ収集がなければ、ものすごく汚くなっていることでしょう。下水処理場がない場合もそうです。これらはみな、政府によって造られたもので、私たちが住みよい生活をするためのものです。ですから政府に対し、何がしかの納税の義務があるのです。「税を納めなければならない人には、税を納めなさい。」けれども、ユダヤ人はローマに税を納めることに反発しました。特に、1デナリの人頭税を払うのが大嫌いでした。単なる生存権の税なので、「生存権のためにローマに支払わなくて、俺には生存権があるのだ。」という感じだったのです。この税金が特に、彼らを苦々しくさせたのでした。「税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。あなたは齒に衣着せぬものの言い方をなさる方です。教えて下さい。」もしイエスが、「律法にかなっていません。それは、律法にかなっていない税金です。」と言われたとしたら、彼らはすかさずローマの本部に行き、「納税に反対して暴動が起こっています。」と言うつもりでした。そして、ローマ政府にイエスを捕らえてもらうことができたでしょう。それではイエスは、何とすることがおできになるでしょう。どちらにしても間違いということになります。

それで、イエスはこう言われました。「デナリ銀貨を持って来なさい。(12:15 参照) あなたがたが人頭税を払うのに使っている、その小さな硬貨を持って来なさい。デナリ銀貨を持って来なさい。」イエスがそれを持っておられなかったのは、面白いですね。イエスが、デザイナー・ブランドの服を着て、大金持ちであったとか言うような人たちがいます。イエスが、彼らを承服させるのに、デナリ銀貨をお借りになったのは面白いことです。それを彼らに見せて、「これはだれの肖像ですか。(12:16)」と言われました。もちろん肖像は、カイザルのでした。彼らは、「カイザルのです。」と言いました。イエスは、硬貨を彼らに戻して、言われました。「もしカイザルのものなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。(12:17 参照)」つまり、私たちは政府に対してある一定の義務を負ってい

ますが、神に対してさらに大きな義務を負っているのです。神のものは神に返します。神のものとは、私たちの存在、私たちのいのちのことです。ダニエルが、酔っ払っていたベルテシャツアルに言ったように、「あなたは、まさにあなたの息をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。(ダニエル5:23参照)」ですから、神のものは、神に返すべきです。栄光、賛美、尊厳、畏敬、誉れをお返しすべきです。なぜなら、この方は私たちの創造主であり、私たちは本当はこの方のものだからです。

それから、ザドカイ人が来ました(12:18 参照)。大祭司はサドカイ人で、祭司のほとんどがサドカイ人でした。この人たちは、パリサイ人のように口伝の言い伝えを守っていませんでした。彼らはミシュナ、つまり口伝の言い伝えに興味がありませんでした。実は、聖書の最初の5つの書物であるモーセ五書しか守っていませんでした。その他の旧約聖書の書物には、疑いさえかけていたのです。けれども、最初の5つの書物は靈感によるものだと信じていました。最初の5つの書物であるモーセ五書は、復活のことを言及していなかったため、彼らは、死んだらそれで終わりだと思っていました。彼らは死後のいのちを信じていませんでした。天使や霊を信じていませんでした。彼らは、当時の人間至上主義者、唯物主義者だったのです。面白いことに彼らが宗教指導者で、ぶどう園でぶどうを栽培するはずだった農夫であり、宗教指導者でした。けれどもここでは、合理主義者であり、人間至上主義者だったのです。そこで彼らはイエスのところに来て、仮定の場合を作り出しました。私はこれがきっと仮定の話だと思います。これが実際に起こったようには思えません。「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、兄が死んで妻をあとに残し、しかも子がいないばあいには、その弟はその女を妻にして、兄のための子をもうけなければならない。』(12:19)」これは、モーセの律法です。実際はモーセの律法の前のもので、創世記のレビに戻ります(訳者注:ユダのことか? 創世38章参照)。彼の息子はタマルと結婚しましたが、死にました。それで弟は、タマルを妻に迎えました。レビにはもう一人息子がいましたが、「すでに息子が2人も殺されている。3番目の息子にはそうなってもらいたくない。」と思いました。これは、律法が与えられる前のレビの状態でした。もう一つの別の場合がありま

すが、オナンがいます。彼は、死んだ兄の子孫を起こすことを拒みました(創世38:8-10)。けれども、これはモーセの律法に組み込まれていました。ある人が死んだら、弟が兄の妻をめぐって、初めの子に死んだ兄の名を継がせ、その家名がイスラエルに消し去られないようにしました。もしこの男が、彼女を妻にめぐりたくないなら、実際に出て行って、さばきつかさの前に出て、自分の言い分を訴えることができました。「これは、私の兄の妻です。兄は死にました。私は、彼女を妻にめぐり取る義務があることを知っていますが、この人を妻にはめぐりたくありません。兄がこのようになってしまったのです、そんなことに関わるのはごめんです。」それで、この人は自分の履き物を脱ぎ、それを彼女に手渡します。彼女は、彼の顔につばきをします。これは律法にあるのですよ。自分で見てください。その人の名は、「くつを脱がされた者の家。」と知られました。これは汚名です。彼は家の義務を果たそうとしませんでした。死んだ兄を尊びませんでした。申命記25章に、彼らが引用している律法があります。

そこで、彼らは仮定の場合を作り出しました。ある人がいたが死んでしまい、弟が彼の妻をめぐり、この弟も死に、次の弟が彼女をめぐり、この弟も死んで、7人の兄弟が、この話しは7人の兄弟がみな、長男の妻をめぐったと教えています。ついに7人目が死んで、子どもがいませんでした。復活の際、だれが彼女を妻にめぐり取るのでしょうか。私は、墓石に次のように書かれているのを讀んだことがあります。実にひどい文句でした。こう書いてありました。「妻と私は隣り合わせに横になっている。さばきの朝が来て、ガブリエルの角笛が空に鳴り響く時、妻が立ち上がっても、私は寝たままだ。("Side by side, here I lie, my wife, and I. And when on that judgement morn', when the skies are filled with Gabriel's horn, if she stands up, I'm lying still.")」復活の際には、彼女はだれの妻になるのでしょうか。「だれが彼女のことを欲しいのか？」と聞きたくくなります。さて、復活の考えがばかげていることを示す場合を作り出そうとしていました。つまり、もし復活があったら、いろいろな問題が起きるではないか、ということです。復活の考えはばかげている、と。そのことを彼らは指摘しようしました。それで、イエスは彼らにこうお答えになりました。「イエスは彼らに言われた。

『そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。』(12:24) 2つの点がここに 있습니다。聖書を知らないこと、2番目は、神の力を知らないことです。「人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。(12:25)」さて、今日ある結婚は、ふたりが、人間的な基準では、最も深い、最も親密な、最も続く関係に入る経験として、神によって定められました。ふたりが一体となることです。これは、神によって定められています。麗しい、近しい結びつきです。神は、結婚を通して、愛があり、豊かで、安全な環境に子供がもたらされるように意図されました。けれども人間は、これはめちやくちやにしました。しかし、良い結婚関係にあるときは、これほど良いものはありません。これは天と地で経験のできる、最も近しい関係です。多くの人が、「天国では、あなたは私の夫にはなれないわ。そんなことになるなら、天国には行きたくない。」と言うのを聞いたことがあります。これは愚かです。もう一つの選択肢を考えてみてください。そこでは、その男はあなたの夫ではありません。「けれども、私は幸せにはなれないわ。」とおっしゃいます。しかし、あなたは、思い違いをしているのです。聖書も神の力も知らないのです。天国における私たちの関係は、ここでの結婚関係よりもまさるのです。天国は、そのようなすばらしい所です、目が見たこともないし、耳が聞いたこともないし、私たちは、ただそれを垣間見ているだけです。いろいろところで、垣間見ることができます。けれども、望んでいること、夢見ること、想像することよりも、はるかにすばらしいのです。それでイエスは、「あなたは思い違いをしています。私たちは、めとることも、とつぐこともなく、御使いたちのようになります。(12:24、25参照)」と言われました。

「それに、死人・・・については、」と、さて、それは、あなたがたの質問の答えになりますが、あなたがたの死人という問題について考えてみましょう。「死人がよみがえることについては、」あなたがたはよみがえりを信じていませんが、死人がよみがえることについて考えてみましょう。「モーセの書にある・・・あなたがたは読んだことがないのですか。」彼らは、最初の五書だけを受け入れていました。「モーセの書にある柴の箇所、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサク

の神、ヤコブの神である。』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。あなたがたはたいへんな思い違いをしています。(12:26-27) イエスは、彼らをやり込められました。「律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、」彼らは、「わあ、これは意味深長だ。そんなことは、考えてもいなかった。」と思いました。「イエスに尋ねた。『すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。』(12:28)つまり、最も重要な命令は何か、ということです。すべての命令の中で、最も重要なのは何でしょうか。「イエスは答えられた。『一番たいせつなのはこれです。「イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。』(12:29)申命記にあるシェマ(Shema)です。『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の命令です。(訳者注:12:30 欽定訳には、 this is the first commandment とあるが、チャックはさらに first or primary commandment と言っている。そこで、マタイ 22:38から日本語訳を参考にした。)」「第二の命令はこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令はほかにはありません。(訳者注:12:31 欽定訳には、 And the second is like, namely this とある。)」この二つが最も大切です。第一は、あなたと神の関係です。神を最上に愛することです。あなたの全てをもって神を愛することです。「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして」つまり、あなたの全てです。第二は、互いの関係です。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」律法の第一の板は、最初の4つの命令があって、の神との関係が取り扱われています。けれども基本的に、神を十分に、完全に愛することにまとめられます。第二の6つの命令は、人との関係についてです。それは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」にまとめられます。「そこで、この律法学者は、イエスに言った。『先生。そのとおりです。「主は唯一であって、そのほかに、主はない。」と言われたのは、まさにそのとおりです。また、「心を尽くし、知恵を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。」ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。』(訳者注:12:32-33 「思いを尽くし」は、欽定訳の with all the soul を翻訳した。)」そのことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも意味があります。あなたは核心をつきま

した。「イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。『あなたは神の国から遠くない。』それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。(12:34)」これで、彼らが質問するのは終わりました。

けれども、イエスは続けて質問しました。「イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた。『律法学者たちは、どうしてメシヤをダビデの子というのですか。(12:35 一部言い換え)』」キリストという言葉は、ギリシャ語の「油注がれた者」です。ヘブル語のメシアク(Mashiach)という言葉も、「油注がれた者」です。どちらも「油注がれた者」を意味します。そしてこれは、王が王位につくとき、油が注がれた事実を指しています。任命用の油が注がれます。それで、王を任命します。ですから、メシヤは神の油注がれた王です。したがってギリシャ語では、キリストス(Christos)という言葉が、油注がれた者です。つまり、これは、ヘブル語のメシアク、メシヤと同じです。これは、名前ではありません。多くの人が、キリストは名前で、イエスの名だと思っています。しかし、彼の名は、イエスです。イエスはメシヤ、油注がれた者です。それで、ダビデがメシヤのことを語って、詩篇110篇ですが、「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。(12:36)」イエスが、ダビデのことばを、聖霊の油注ぎによるものとされていることに注目してください。「聖書はすべて、神の靈感によるものであることを、パウロがテモテに手紙を書いたときに、教えています(2 テモテ3:16)。ペテロが詩篇から引用したとき、「聖霊がダビデの口を通して語られた(使徒1:16参照)」と言いました。ですから、ダビデが聖霊によって油注がれていたことを認めています。そのことばは、神の靈感によるみことばだったのです。「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』」ダビデ自身がメシヤを主と呼んでいるのに、どういうわけでメシヤがダビデの子なのでしょう。(12:36-37 一部言い換え)」メシヤがダビデの子なら、どういうわけでダビデはメシヤを主と呼んだのでしょうか。その社会は、父が死ぬまで支配するような族長社会でした。ヤコブは、自分が死ぬまで家を支配しました。これがその文化だったのです。どんな父も、子を主と呼ぶことはありませんでした。社会秩序や文化

とはまったく逆でした。ですから、イエスは彼らに、メシヤの名前の一つがダビデの子だという、真の問題を提示されていたのです。それなのに、ダビデは聖霊によって、メシヤのことを主、「私の主」と呼んだのでしょうか。ダビデは、メシヤが自分の子であると言ったときに、彼のことを主と呼んだのです。これによって彼らは黙ってしまい、群衆は喜びました。「いいぞ。また、ぎゃふんと言わせた。」と。

「イエスはその教えの中でこう言われた。『律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが大好きで』(12:38)」彼らは派手な衣をまとうのが大好きで、幅広い経札、小さいふさを衣に縫い付けるのが大好きです。ふさの青色は、靈的であることを示しています。彼らは、まもっていた衣によって、宗教的な者として認められるのが大好きでした。あでやかで、派手な衣は、宗教階級の中での地位を表していました。これが大好きだったのです。イエスは言われました。「彼らに気をつけなさい。彼らは、長い衣をまもって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが大好きです。」彼らは、衣をまとい、広場を歩き回って、自分がいかに正しいか見せびらかしていました。人々から、「ラビ、ラビ。」と言われるのが大好きでした。「また会堂の上席が…大好きです。(12:39)」これは、人々に面する正面の席です。それによって人々は、トーラーがしまつてある箱の前に彼らが座っているのを見ることができました。彼らはその場所が大好きで、靈的指導者として認められたかったのです。数年前に、私はスウェーデンにある教会で話をしました。説教壇はバルコニーと同じくらい、高くなっていました。その壇には、王様の椅子のような巨大な椅子がありました。教会の長老はみなその椅子に座り、会衆を見下ろしていました。何だか居心地がよくありませんでした。バルコニーにいる人々と視線が同じになり、他の人は見上げているのです。でもこれは、律法学者が正面に座って人々を見て、人々から靈的だと認められている会堂のようです。彼らはこれが大好きでした。「彼らは、…宴会の上席が大好きです。(12:39)」上席は、大切な場所でした。彼らは、宴会の席の順序が大好きで、名誉のある席に着きたかったのです。イエスは、「宴会に招かれることがあって、行ったなら、上席ではなくて、末席に着きなさい。(ルカ14:10 参照)」と言われた

のを思い出してください。末席に着いて、誰かが、「どうぞもっと上席にお進みください。」と言う方が、上席に着いて、誰かが、「あの、ちょっと座る場所が間違っているのではないでしょうか。あなたの席は末席の方です。」と言うよりもよいのです。

「また、やもめの家を食いつぶし(12:40)」人々を利用していたのです。やもめの社会保障を利用するために、やもめに手紙を送りました。自分たちのミニストリーが大緊急事態に直面しているという手紙です。「もしあなたがすぐに送金しなければ、私たちはどう存続してゆけばよいか、わかりません。どうか同封の封筒を使って、できるだけ寛大な額で小切手を書いてください。このミニストリーを救ってください。サタンが、滅ぼそうとしています。あなたに信頼しているんですよ。どうか、救ってください。」まさにこれが、彼らの問題なのです。主を信頼していないのです。あちこちを回って、「見えを飾るために長い祈りをします。(12:40)」イエスは、「彼らはことば数が多ければ聞かれると思っています。(マタイ 6:7)」と言われました。つまり、くり返しだったのです。祈りは、繰り返し祈られました。イエスは、祈るときに同じことばをただ空虚にくり返すことを話されました。あなたは友だちに、ことばを空虚にただくり返して話したりしません。多くの人が神に語るように、あなたが友だちに語るなら、友だちはあなたが気がふれたと思うでしょう。あなたが友だちに話すときは、考えて意味のなすことを語ります。したがって、私たちは祈るときは、考えて祈るのです。友だちに話すように、神に話さなければいけません。けれどもここでは、「見えを飾るために長い祈りをします。」イエスは、「こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。(12:40)」と言われました。霊的に人々を利用するからです。霊的に見えるように見えを飾ることは、ことさらにきびしい罰を受けます。地獄には罰の段階があります。ルカ12章でそのことを話します。

さて、イエスは弟子たちとともに、献金箱の近くにおられ、「人々が献金箱へ金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。(12:41)」どう献金しているか、金を投げ入れる様子を見ておられました。見せびらかして献金することもできます。イエスは、おそらく誇張されてたのですが、こう言われました。「施しをするときは、パリ

サイ人のように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。(マタイ 6:2参照)」パリサイ人たちの前には楽団がいて、ラッパを吹きならし、贈物をかかげて献金箱に入れて、人々の注意を自分に引いていました。イエスはおそらく誇張してお語りになられたのでしょう。しかし、イエスと弟子たちは、人々が献金している様子を見ていました。金持ちが来て、派手に見せびらかして献金をしていました。「そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは1コドラントに当たる。(12:42)」1コドラントは、1セントの4分の1で、1レプタは1コドラントの4分の1、つまり、1セントの8分の1です。ですから、このやもめは、大体4分の1セントを投げ入れたのです。(訳者注:1996年現在での為替レートでは、1セントは約1円。)

「すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。『まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。』(12:43)」これら金持ちが投げ入れたすべてより、このやもめはたくさん投げ入れました。「みなは、あり余る中から投げ入れたのに(12:44)、」つまり、彼らは何も犠牲を払うことはありませんでした。あり余るものを持っていたからです。「この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。(12:44)」ですから、主にささげるのは金額ではなく、実は、それにどれだけの犠牲が伴っているかが大切なのです。犠牲を払う時に、真のささげ物となるのです。自分の財産を主にささげ、自分の持っているあり余るもの以上のものをささげるのです。真に犠牲を伴うささげ物を主は認めて下さいました。それは、他の誰よりもたくさんだったのです。

これで、13章まで来ました。13章を読んでおいて下さい。私はある章を読む時、まず、その章で起こっている様々な出来事を自分の頭の中で把握しておきます。ざっと頭に入れておくのです。そして、読み続け、少し難しいと思う箇所については、注釈書を見えます。その節をもう少しよく理解するために、ストロングやヤングのコンコルダンス(用語索引)を使ったり、場合には、ギリシャ語やヘブル語を調べます。そして、この箇所は自分にとってどういう意味があるのだろうかと自問してみます。この箇所は、今日私にどう当てはまるのだろうか。自分と神との関係、イエス・キリストとの関係において、どの箇所が私に本当に語りか

けてくれているのだろうか。その箇所は、神について私に何を語っているのか。イエスについて何を語っているのか。私たちは、毎週1章つづしか進んでいませんので、毎日13章を読んで下さることを希望します。頭の中で、出来事の順番、順序を把握できるようにして下さい。13章の出来事の順番を列挙できるようにしておいて下さい。そして、自分に最も強く語りかけてきたのは何かを考えて下さい。それが、今日自分にどう当てはまるのでしょうか。それは、自分に何を語っているのでしょうか。自分で、神のみことばによって養われることを求めて下さい。イエスが約束されたように、聖霊ご自身があなたを教えて下さいますので、聖書の洞察と理解を得て下さい。それにより、みなさんが、恵みの中で成長し、主であり救い主であるイエス・キリストについての知識が増し加わりますように。

マルコの福音書13章(Mark13)(#8041)

今朝お話ししましたが、マルコの福音書は、大体において福音書の短縮版であり、13章にあるのは、よくオリーブ山の大講話と呼ばれているものの短縮版です。これは、神殿破壊の前兆と、主の来臨と終わり時の前兆について、弟子たちが質問し、それに促された講話でした。それでイエスは弟子たちに、神殿破壊の時を示す前兆を話されました。ご自分が再臨する時の前兆と異邦人の支配の時の終わりの前兆を話されました。これは、栄光ある王国時代、すなわち、神が地に御国を立てられる前に起こることです。

そこでマルコは、次のように伝えていきます。「イエスが、宮から出ていかれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。『先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。』(12:1)」おそらく、ヨセフスが宮について最も詳しい描写をしています。面白いのは、宮の建物の偉大さがわからなかったので、書かれていないことです。イエスが宮に来られたことがわかります。イエスは、宮を食べ物にしてバザールのようにし、両替をしたり、いけにえの羊を宮の中で売っていた人たちを、2度追い出されました。イエスは宮のことを、「わたしの父の家」と呼ばれました。パリサイ人がイエスにしるしを求めた時、「この体をこわしてみなさい。」というか、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、3日でそれを建てよう。(ヨハネ 2:19)」とおっしゃいました。この神殿を建てるのに46年かかったという事実があったので、彼らは、「あなたはそれを、3日で建てると言うのですか。」と言って馬鹿にしました。ですから、イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのだと書かれています(ヨハネ 2:14-21参照)。ヨセフスによりますと、紀元前19年と20年の間に、ヘロデが神殿の建設を始めました。最初にヘロデが神殿建設の計画を持ち出した際、ユダヤ人たちは否定的な反応を示しました。ユダヤ人が捕囚から帰還した時にゼルバベルが建てた神殿を、ヘロデが破壊しようとしているのだと考えていた人もいました。新しい神殿の事業は完成されないだろうと考えていました。それでヘロデは人々に演説をしました。その演説の中で、この巨大

な記念建造物建設計画の概要をおおむね打ち出しました。その当時存在したどの建物よりもさらに大きな建物になるはずでした。無論その当時、エペソに巨大な神殿がありました。ギリシャのアテネに巨大な神殿がありました。しかし、この神殿はそれらすべてを越えた、栄光に満ちた荘厳なものになる予定でした。ヘロデは、この神殿が自分の功績を飾るものにしたかったのです。ヘロデは、自分の名が人類の歴史年代記に永遠に記されるような記念建造物にしたかったのです。これは、ヘロデの偉大な建物になるはずでした。長い年月が経った後も、エルサレムに建立された広大な神殿複合建造物が、ヘロデ大王によるものだということで、常に思い起こしてもらえるはずでした。神殿が完成しないのではないかという人々の不安を一掃するために、ヘロデは、実際に神殿建設事業が開始する前にすべての建築資材を集めると言いました。まず取りかかったのは、巨大な擁壁を築くことによって、神殿の立つ丘を拡張することでした。タイロピオンの谷(Tyropeon Valley)では、擁壁は、タイロピオンの谷の谷底から250フィート(75m)の高さでした。そして、タイロピオンの谷を横断してかけられていた、50フィート(15m)の幅の巨大な橋梁(きょうりょう)がありました。エルサレムの上部に住んでいた人は、この橋梁を渡ることができました。この橋梁の一部は今日も現存しています。神殿の丘の地区に行きますと、西の城壁に行くと門に入ると、左側に巨大なアーチが見えます。それは、タイロピオンの谷を横断してかかっていた橋梁のアーチの一つです。この橋梁の全長は約300フィート(90m)で、エルサレムの上部に住んでいた人は、谷まで下ってまた上ってこなくても、この橋梁を渡って神殿に来ることができました。この橋梁の最上端部は、谷底から250フィート(75m)の高さでした。ですから、そこに実際に行って、ただ橋梁を建設するために使われた巨大な石を見ると、全く肝をつぶしそうです。神殿の中庭などを拡張するために、神殿の丘の南と東の地区の周りに築かれた擁壁のために使われた巨大な石もあります。無論、神殿だけではありません。神殿以外にも神殿に関連して多くの建物が建設されました。柱廊(colonnade)や廊(porch)など神殿の周りには、荘厳な建物がありました。ヨセフスによりますと、神殿自体120キュビトの高さでした。それはおよそ180フィート(54m)になりますが、それはほぼ18階建ての高さのビルに相当します。ですから、かなり巨大な大きさでした。ヨセフスによりますと、神殿建物の下層

階に使用された石の中には、長さ40フィート(12m)、高さ12フィート(3.6m)、厚さ18フィート(5.4m)のものがあつたとされています。歴史家の中にはヨセフスが誇張法を使ったふしがあると批判する人がいます。つまり、少し大袈裟に書いたのだということです。しかし、西の城壁に沿った部分の発掘によると、つまり神殿の丘の地区、擁壁、西の城壁からアントニヤの要塞までの間で、私は、長さ47フィート(14.1m)の石に降りました。厚みがどれだけあつたかわかりませんが、高さは6から7フィート(1.8-2.1m)でした。推定160から180トンの重さであるとされています。ですから、ヘロデは、これを代々自分の記念建造物にするために、実際この神殿にすべてを注ぎ込むつもりだったようです。しかし、神には別の考えがありました。

弟子のひとりがイエスに、石について、ヘロデが用いた巨大な石について、また金メッキされた美しい門のあるすばらしい建物自体について、一言述べました。門の柵は、朝日が当たるとキラキラ輝き、その輝きはあまりに眩く、太陽を見ているようで、太陽の反射を見ているようで、柵を見ることのできないほどでした。弟子のひとりが、巨大なすばらしい建物を、神殿を、中庭への出入り口(porte-co-chere)を、柱廊を指摘している時に、「イエスは、彼に言われた。『この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。』(13:2)」これまでにイエスがおっしゃったことの中で、これが最も非現実的に見えたにちがいありません。このように荘厳な構造物、神殿のように巨大な構造物を誰が壊すことができえましょうか。しかしここに、「石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」というイエスの驚くべき予言があります。人が予言をする時、彼がにせ預言者か、真の預言者かどうかは、そのとおりになるかどうかで、容易にわかります。そうならなければ、にせ預言者だったことは明らかです。もしそうならば、その人を真の預言者として受け入れる前に、他にも調べてみる必要があります。あなたの救いについて、何を信じ、信頼するように教えているかなどです。しかし、ここに驚くべき予言があります。イエスが真の預言者か、にせ預言者かを確立する予言があります。彼らは神殿地区をあとにし、ケデロンの谷(Kidron Valley)を通り、オリーブ山に向かいましたが、そこにはイエ

スがよく弟子たちといっしょにオリーブ山で過ごされる場所がありました。ここで、それは宮の向かいであったと言われていました。つまり、オリーブ山で彼らが座っている所から宮が見える場所だったのです。もちろんオリーブ山からは、神殿地区のすばらしい景色が見えます。特にオリーブ山の中腹には、下に向かう小道があり、そこからの神殿地区全体、大きな神殿の丘の地区と建物の眺めは格別です。ですからイエスは、そのような神殿の丘、神殿、建物などを見下ろすことができる場所におられたのです。「ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、」つまり、ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネの兄弟たちです。彼らが、「ひそかにイエスに質問した。『お話しください。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。また、それがみな実現するようときには、どんな前兆があるのでしょうか。』(13:3-4)」マタイは、弟子たちが、イエスの再臨と世の終りの前兆について質問したと書いています(マタイ24:3参照)。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。いつ、神殿が破壊されるのでしょうか。ですから、このオリーブ山の大講話では、実際、神殿破壊の前兆を取り扱った預言、ならびにイエスの来臨と異邦人の時の終りの前兆を取り扱った預言があります。先にも言いましたように、マタイとルカはオリーブ山の大講話について、より詳しい記述をしています。

ですから、イエスは弟子たちに答えて話を始められました。「人に惑わされないように気をつけなさい。(13:5)」さて、偽メシヤ、偽キリスト、欺きの前兆の一つは、「わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそは、キリストだ。』あるいは、『メシヤだ。油注がれた者だ。』と言って、多くの人を惑わす(マタイ 24:5)」ことです。イエス・キリストの真理を拒絶すると、人が信じるものは悲劇だと、私はよく言いました。もしあなたが、何でも信じるおめでたい人になりたいなら、イエスを信じなければいいのです。イエス・キリストの知識を拒絶した人たちを見ます。ハリー・クリシュナの人たちは、サフラン色の服を着て、指のシンボルをつけて、剃髪しています。街角で踊っているのを見ますと、何たる悲劇かと思うのです。イエス・キリストの真理を拒絶すると、何と愚かなことを信じるようになるのかと思うのです。主は、そのようなことについてお話になっています。テサロニケ人への手紙第2で、「彼らは真理の知識を受け入れなかったので、それゆえ神は、彼らが真理ではなく、偽りを信じるように、惑

わす力を送り込まれます。(2:10-11 参照) 」と言われました。自分をメシヤだと宣言する人に従っている人たちを見ます。例えば、テキサス州ウエイコーのコレシュがいますし、ガーナのジミー・ジョーンズがいます。ごく最近では先週、カリスマ的指導者だと思われた人物に従った人たちが、自殺しました。どうやら、他殺と自殺のどちらもあったようです。神の真理を拒絶すると、人々が信じることについてですが、神はそのような人たちを惑わす力にお渡しになります。それは、その人たちが、真理の知識が欲しくないからで、神はそのような人たちがだまされやすくなり、様々な空想的だが実のないものを信じることをお許しになります。

ですから、イエスは、まず、はびこるであろう誤った宗教に対して警告されています。「また、戦争のことや戦争のうわさを聞いても、あわててはいけません。それは必ず起こることです。しかし、終りが来たのではありません。(13:7)」つまり人間は、ともに平和に生活することを、まだ学んでいないし、学ばないし、学ばないでしょう。理想主義者は、どれほど長いこと平和な世界を唱道し、望み、夢見てきたことでしょう。地球に平和をもたらす条約を結ぶことを、どれほど追及してきたことでしょう。もちろん、国際連盟やもっと最近では国際連合など、世界平和を達成するために、世界政府のたぐいを樹立しようとしてきました。しかし、今日の私たちの世界を見てください。私たちはたくさん問題を抱えています。戦争や戦争のうわさがありますし、今また、戦争のうわさがあります。でもイエスは、そのようなことは起きますと言われました。みなさんの期待を壊したくないのですが、いや、実は誤った期待は壊したいのです。幻想の世界に生きていても意味がありませんし、惑わされて、すべてにおいて世界がどんどん良くなっていると考えても無意味です。すべてにおいて世界がどんどん良くなっている、と私の祖母は言っていました。そんなことは起きていないのです。それに、そんなことは起こりません。聖書によると、世界はどんどん悪くなっていきます。邪悪な日は、ますます悪に落ちていく(2 テモテ3:13参照)とは、終りの日には困難な時代がやって来る(2 テモテ3:1 参照) ことについて語られているのです。それは、人々が神よりも快樂を愛する者になるからです(2 テモテ3:4 参照) 。そして、人が肉に、肉の欲に自分を引き渡した結

果が、みな自分が目の正しいと思うことを行なったノアの時代のようになるまでになりません。私たちが世界平和の寸前にいると考えて、誤った幻想を持って生きないでください。実際、パウロが、「人々が、『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。(1 テサロニケ5:3)」と述べていますので、そのような平和の叫びには注意していきましょう。イエスは、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょう、これらは起こりますし、起こってきましたし、主が来られるまで起こり続けます(マタイ 24:6、マルコ 13:7 参照)、と言われました。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、ききんも起こるはずだからです。これらのことは、産みの苦しみの初めです。(訳者注:英語では「産みの痛み」の部分が sorrows「悲しみ」となっています。マルコ 13:8)」つまり、民族は民族に、国は国に敵対し、地震が様々な場所で起こり、飢饉や疫病が起こります。そして、もちろん私たちは今日これらの一部を、産みの苦しみの初めを見えています。

「だが、あなたがたは、気をつけていなさい(13:9)。」イエスは、弟子たちにどのような事が起こるかをお話になっているのです。つまり、神殿の破壊の前のことです。「人々は、あなたがたを議会に引き渡し、また、あなたがたは会堂でむち打たれ、また、わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。それは彼らに対してあかしをするためです。(13:9)」ですから、イエスは、「わたしの弟子になるのは、わたしに従うのは、容易なことではありません。あなたは、迫害され、宗教議会の前に引き出され、支配者の前に立たされ、なぐられます。このようなことはすべて、わたしのゆえに行なわれます。」と言われているのです。それで、私たちは使徒行伝4章(訳者注:5章のことか?)でそれを読むのですが、そこで、ペテロとヨハネは殴られ、イエスの名によってこれ以上教えるはならないと命じられました。そこで、彼らは、イエス・キリストのために迫害されるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行ったのでした(使徒行伝5:41参照)。彼らが殴られていた時に、イエスのことばを思い起こしたに違いありません。殴られていた時に、彼らは、「そうだ。イエスはそうおっしゃった。イエスは預言者だったから、そのとおりになった。」と考えていたに違いありません。

せん。

「こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません(13:10)。」この聖書の箇所を、海外宣教プログラムの主な起動力としている宣教グループが、たくさんあります。イエスは、「福音は全世界に宣べ伝えられて、それから、終りの日が来ます。(マタイ24:14参照)」と言われました。全世界に行って、あらゆる人に福音を宣べ伝えることは、教会に与えられている命令です。これは、イエスが弟子たちに、教会にお与えになった命令です。今日、多くの教会が海外宣教へのビジョンを持つようになっているのを見ると、心が踊ります。今晚、世界中で主に仕えているカルバリー・チャペルの宣教師が何とたくさんいることでしょう。この福音のわざを、福音があらゆる民族に宣べ伝えられる、主がどのように達成して下さるか、完全にはわかっていません。確かに衛星通信は、福音を全世界に伝えるのに、新しい分野を開いてくれます。つい先週、大型の25万ワットの短波送信機とアンテナを所有し、メキシコと南米に送信している、ある宗教放送団体から、このようなラジオによる宣教を私たちに引き渡したいとの働きかけを、私たちは受けました。このラジオによる宣教によって、メキシコと南米に伝えることができます。私たちは、現在このことについて祈っています。送信機とタワーを移転するために、アイダホで土地を探しています。それらを移転する必要が出てくるためです。しかし、ラジオを通して福音を伝える機会になります。もちろん数日後には、衛星通信も開始する予定です。先週、衛星に向かってテスト信号を送信しました。実際、まだそのための局は設置されていませんが、国中でアンテナを所有している人、特に、辺境地に住んでいる人のアンテナに受信することができます。すでに、衛星受信アンテナで信号を受信した方から、電話が来ています。ですから面白くなりそうです。私たちは、福音伝道を拡張するもう一つの方法として、この方向で進んでいます。メキシコは、宗教放送自体は許可していません。しかし短波ですと、メキシコに伝えることができます。政府もそれは止めることができません。私たちがしているのは、信号を電離層に反射させているだけで、それで、メキシコを網羅することができます。世界全体に福音を伝える機会はいくつもあります。黙示録14章では、大患難時代に、中天を飛ぶ天使が永遠の

福音を携えることが、わかっています。たぶんイエスは、天使がメッセージを携えることを言及しておられたのかもしれませんが。このことが起こってから、終りの日が来ます。神は真実な方です。神は、世界に対し、最後の証しを与えて下さっているのだと信じます。神は、ひとりとして滅びることなく、みなが悔い改めに至ることを望んでおられます。世に対する最後のあかし、イエス・キリストを人が信じるか拒絶するか最後の機会です。ですから、最後の日の前兆の一つは、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられることです。「彼らに捕らえられ、引き渡されたとき(13:11)、」つまり、それは議会の前に連れて行かれたときなどですが、「何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」ですから、イエスは、「自分がどう弁明すればよいのか心配しなくてもよいのです。聖霊が話すべきことばを示します。」とされているのです。その典型的な例を、パウロが逮捕され、長官たちの前に連れて行かれたときに、聖霊がパウロに靈感を与え、証言したことに見ることができます。ステパノの場合にも見ることができます。ステパノは議会の前に連れて行かれていましたが、聖霊がステパノに傑出した説教を与えて下さいました。

「また、兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。また、わたしの名のために、あなたがたはみなの方に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。(13:12-13)」ですから、状況は簡単ではなく、困難になります。みなさんは、暗い世界の中で光となります。しかし世界は、光を望みません。みなさんは、世が腐るのを防ぐ塩になりますが、世は、そのような防腐剤を欲しくないのです。わたしの名のために、人々は、あなたのことを憎み、迫害します。自分の家族まで、あなたを裏切り、裁判所に引き渡すかもしれません。

「『荒らす憎むべきもの』…を見たならば(13:14)」ここで、私たちは、力と栄光を帯びてイエス・キリストが地に来臨される前兆に進みます。「預言者ダニエルによって語られた、『荒らす憎むべき者』が、許されていない場所に立っているのを見たならば(訳者注:現代訳を参考に欽定訳を訳者が日本語に訳しました。)」マタイは、「聖なるところに立つのを見たな

らば(マタイ 24:15)」と述べています。ダニエル書9章は、荒らす忌むべきものについて語っています(訳者注:「憎むべき者」も「忌むべきもの」も同じ英語)。また、ダニエル書の後の方でも再びそれが言及されています。ダニエルが述べていることから、荒らす忌むべきものは、反キリストによって再建された神殿が汚されることであるとわかっています(訳者注:新改訳では、これを人物ととらえている時は、「荒らす忌むべき(憎むべき)者」となっており、事象ととらえている時は、「者」が平仮名になっている。)。どうやら、反キリストが権力を握ると、イスラエルの国と契約を結ぶようになります。7年間の契約です。この契約の中で、イスラエルが神殿を再建する許可を承諾するようです。このことは、今日の大勢のユダヤ人が望んでいることです。国が再生したので、彼らはメシヤを待ち望んでいます。メシヤを待ち望んでいるユダヤ人がたくさんいます。彼らはメシヤが人間であることを言っていますが、だれがメシヤであるか認識できると信じています。それは、自分たちに神殿をもたらすのはメシヤであるというふうに、メシヤが神殿再建を先導することを信じているからです。ですからダニエルからは、この罪の人(新改訳2テサロニケ 3:2脚注参照)、反キリストによって、この契約がイスラエルと結ばれるのだと思います。たぶんこの契約の中で、エルサレムの神殿の丘の場所の北の部分に神殿再建の許可を承諾するでしょう。おそらく岩のドームとモスクの横に壁を築き、北側全体は、ユダヤ人の宗教の中心として取っておき、イスラム教徒が岩のドームとアクサ(Aqsa)・モスクのある南側を保有することができるというものです。興味深いことに、ヨハネが再建される神殿を測るとき、主は外庭は異邦人に与えられているので、外庭は測らないように命じられます(黙示11:1-2参照)。そして、エゼキエルが見た新しい神殿では、聖なるものと俗なるものとを区別する壁が建てられていました(エゼキエル 42:20)。ですから、実際イスラム教徒と聖戦を起こさずに、神殿再建を許す契約が、イスラエルと結ばれるようです。そして7年間の最中に、契約が結ばれて3年半の後、反キリストがエルサレムに来て、常供のいけにえのささげ物と祈りをやめさせ、テサロニケ人への手紙第二2章によると、神の宮の中に立ち、自分が神であると示し、自分を神として礼拝するように要求します。これが、ダニエルが荒らす、と言っている忌むべきものです。これが、人間の神に対する最終的な公然たる侮辱です。この時点で、神の御怒りの憤りがあふれ、

聖書が語っている3年半の大患難時代が始まります。ですから、この3年半の大患難時代は、イエス・キリストが栄光に満ちて再臨される前に来ます。イエス・キリストは、この3年半の大患難時代の終りに来られます。ダニエル書12章によると、イエス・キリストは、神殿が汚されてから、荒らす憎むべきものから、実際1390日後に来られます(訳者注:1260日後では? 黙示11:6参照)。「預言者ダニエルによって語られた、『荒らす憎むべき者』が、許されていない場所に立っているのを見たならば、」つまり、新しい神殿の至聖所に立っているということです。「(読者はよく読み取るように。)」つまり、みなさんは主の命令の下にいるのです。これを読むときに、理解する必要があります。荒らす憎むべきものを理解するためには、ダニエル書9章からその最後までに戻る必要があります。

「ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。(13:14)」さて、ヨハネの黙示録12章によりますと、神はイスラエルの国、女に大わしの翼をお与えになり、荒野に飛んで行けるようにし、そこで3年半養われます。一時と二時と半時の間、つまり3年半の間、神はイスラエルの民のために準備されたこの荒野の場所で、彼らを養われます(黙示12:14 参照)。ですから、荒らす憎むべき者を見たら、逃げる時になったのです。「屋上にいるものは降りてはいけません。家から何かを取り出そうとして中にはいってはいけません。(13:15)」つまり、急ぎなさい、急いで出て行きなさいということです。「畑にいるものは着物を取りに戻ってはいけません。だが、その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、このことが冬に起こらないように祈りなさい。その日は、神が天地を創造された初めから(13:16-19)、」今に至るまで、この惑星と呼んでいる地球で人間が経験した中で、最も困難な日となります。この混乱の日、争いの日、天変地異的なさばき、神の怒りは、人類の歴史上比類のないものになります。ノアの洪水より激しく、ソドムとゴモラの破壊よりも激しいものとなります。「その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。(13:19)」これ限りです。歴史上これ限りです。このようなことは、いまだかつてなかったし、またこれからもないのです。「そして、もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、主は、ご自

分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてくださったのです。(13:20)「ひとりとして救われる者はないでしょう」という言葉についてですが、興味深いことに、最近開発された兵器の中で、汚い爆弾(dirty bombs)と呼ばれているものがあります。核爆弾で、非常に放射性降下物の多いものです。このような爆弾は、建物を破壊しないために考案されたものです。超放射能により、物質の中では人間の体だけを破壊します。この超放射能は、勿論、潰瘍をおこしたり、肉を蝕ばんだりします。面白いことにゼカリヤ書で、エルサレムを攻めに来た者がどのように滅ぼされるかを神は説明しておられます。主は彼らの滅ぼされかたを説明されていますが、人々が受けるのはまるで放射能による火傷のように聞こえます。「主は、エルサレムを攻めに来るすべての国々の民にこの災害を加えられる。彼らの肉をまだ足で立っているうちに腐らせる。彼らの目は穴の中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。(14:12)」今ではもちろん、肉を食い尽くす新しいウィルスが存在します。ですから、「ひとりとして救われる者はないでしょう」という、興味深い言葉が選択されています。

「そのとき、あなたがたに、『そら、キリストがここにいる。』とか、『ほら、あそこにいる。』とか言う者があっても、信じてはいけません。にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます。だから、気をつけていなさい。わたしは、何もかも前もって話しました。(13:21-23)」あなたに、事前に話しました。「だが、その日には、その苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。(13:24-25)」イザヤは16章で、この出来事について語っています。ヨエルは、これを2章と3章で語っています。アモスも語っています。太陽が輝かなくなり、月が光を放たなくなり、大量の隕石が地球に降って来る日です。天の万象は揺り動かされます。実際、イザヤは、「地は酔いどれの酔うに、ふらふら、ふらつき(イザヤ24:20)」、揺り動かされると説明しています。大異変が起こります。「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。(13:26)」ですからイエスの来臨の前兆は、壮観な天での異変が、太陽が輝かず、月が輝かず、大量の隕石が降って来てクライマックスを迎える大患難時代です。そして、イエスが偉大な力と栄光を帯びて

雲に乗って来られます。「そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます。(13:27)」ここの「その選びの民」とは、教会ではなくユダヤ人です。イザヤ書11章12節は、イエスがご自分の再臨と四方からその選びの民を集めるとおっしゃっているときに引用されている箇所の違いありません。「主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」これはイスラエルに言及しています。これは教会のことだと言って、教会を大患難時代に入れてしまう人がいますが、神はイスラエルを退け教会がイスラエルだと言う人は、預言の見方がぐちゃぐちゃになっていて、どうしようもありません。もう神はイスラエルの国を退けられた言うのは、危険です。神は、「昼と夜がある限り、イスラエルと結んだわたしの契約を忘れない。(訳者注: As long as there is day and night, He will not forget His covenant. エレミヤ 33:20、25?)」とされています。ですから、もしあした日が上るなら、イスラエルと結ばれた神の契約は、まだ有効なのです。イスラエルを締め出してはいけません。神は、この国と結ばれた契約を破られていませんし、これからも破られることはありません。彼らに過酷な経験を通らされますが、神は契約と約束を彼らと結ばれました。教会は、イスラエルに置き換えられるものではないのです。私たちは、イエス・キリストによる神との関係において、自分たちの持ち場がありますが、イスラエルもその持ち場があるのです。神はまだ、イスラエルに働きかけられていません。イスラエルの国とは、7年間の契約がまだ成就していません。「人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。そのとき、人の子は、御使いたちを送り、…その選びの民を集めます。(13:26-27)」

「いちじくの木から、たとえを学びなさい。(12:28)」旧約聖書では、いちじくの木はイスラエルの国の象徴として使われています。神は預言者を通して、イスラエルの破滅について語られましたが、「わたしのいちじくの木を引き裂(いた。)(ヨエル 1:7)」と叫ばれました。エレミヤ書で神は、イスラエルをいちじくのかごにたとえられました。それは腐ったいちじくでした。腐っていたので、捨てなければいけませんでした。イエスがいちじくの木をのろわれました

が、そこには象徴の意味がありました。実を結ばない木だったため、のろわれて、枯れて死にました。イスラエルの国も同じです。神の願われた実を結ぶことがなかったので、呪われて、枯れて死ななければなりません。けれどもエゼキエル37章では、神は彼らを墓から連れ戻されます。「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出てくると、夏の近いことがわかります。(13:28)」ですから、いちじくの木は春に緑の葉を出し始めます。新しい実です。すると、夏の近いことがわかります。夏が近いのです。ちょうど、サンタクロースやクリスマスツリーのしるしが飾られると、感謝祭が近いことがわかるようなものです(訳者注:会衆はここで爆笑しているのですが、それは、アメリカにおいて、11月の終りの感謝祭の祝日の前からクリスマス商戦が始まってしまうことが皮肉られているからでしょう。)ですから、このような前兆が、これらのことが起こるなら、まことに、あなたがたに告げます。「そのように、これらのことが起こるを見たら、そのことが戸口まで近づいていると知りなさい。(新改訳 13:29脚注参照)」これらが、キリストの再臨の前兆です。これらのことを見たら、近づいていると知りなさい。「まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。(13:30)」さて、ここでのギリシャ語の言葉ジェネア(訳者注:genea ギリシャ語ではゲネアと発音するが、チャックは英語読みをしている。)は、おそらくイスラエルの国、あるいはユダヤの民族を言及していると思います(新改訳 13:30脚注参照)。これらのことが全部起こってしまうまでは、ジーンつまり遺伝子(genes)は、ユダヤの遺伝子(Jewish genes)は過ぎ去りません。注目すべきことは、ユダヤ人は、祖国を持つことなく、ほぼ2千年間にわたり民族の独自性を保ち続けてきたことです。これは、人類の歴史上比類なきことです。他の民族で、祖国を持たないで民族の独自性を維持できた民族はありません。ふつう、ひとつの国の民が捕らえ移されると、3世代か4世代目で国民の独自性を失ってしまいます。しかしながら、ユダヤ人は2千年間も、祖国を持たないで国民の独自性を維持して来ました。ですから、もし「時代」がユダヤ人全体のことを言っているのなら、これは驚くべき預言であり、この預言は成就しました。この「時代」は、いちじくの木の新芽が出るのを見る人たち、つまりイスラエルの国の誕生を見た時代だ、と言う人がいます。これは、おおむね過去のものになりつつある時代です。私は、

イスラエルの国の誕生を見ましたが、私は過去のものになりつつあります(訳者注:英語は generation であり、ふつう「世代」と訳される。)。イスラエルの国の再生を見た人、1948年に生きていた人たちはイスラエルの国の再生を見ました。そして、この世代が過ぎ去らないと言う人がいます。いちじくの木の新芽が出ることは、国の誕生なのでしょう、それとも、それは、ひょっとすると1967年に、エルサレムが再びイスラエルの領土になった時のことでしょうか。イエスは、ルカの福音書21章で、オリーブ山の大講話の同じ文脈において、「異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。(21:24)」と言われました。ですからもし、実際にいちじくの新芽が出るのがイスラエルの国のことだったのであれば、1967年にエルサレムが再びイスラエル政府の支配下におかれた時、エルサレム全域がすべて完全にイスラエル政府の支配下におかれたが、いちじくの新芽が出ることのしるしだったのでしょうか。この解釈の仕方には何通りかあります。すべて、というか、これらのどれ一つとして、度外視できません。ただ預言については、実際にそのことが起こった後でなければ、はっきりとわかりません。すると、「ああ、その通りだ。」と言うのです。預言の解釈については、とても独断的な解釈をして、たくさんの方が間違いをしてきました。間違っていることがしばしば証明されました。

「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。(13:31)」ここに、イエスのことばがあります。興味深い予言です。神殿が破壊されるという予言は成就しました。神殿の破壊の前に起こることについての予言は、成就しました。イエスの再臨の前に起こることについて予言されていますが、今日そのような事が起こっているのを見ることができます。イエスのみことばは、残ります。面白いのは、今晚イエスのみことばがあり、私たちは、イエスのことばを学ぶためにここにいることです。聖書ほど、批判的な分析を受けた本は他にありません。聖書ほど、ひどく攻撃を受けた本は他にありません。聖書を反証を挙げようと決心した人が実に多くいます。無論それは危険なことです。聖書を信じないので反証を挙げよう、聖書が間違っている証拠を挙げよう、というわけです。そんなことが、よくできたものだと思います。これは異ななので、注意して下さい。なぜかと言いま

すと、聖書が間違っていると証拠を挙げようとする人の中で、結局、聖書を信じるようになった人を私はたくさん知っているからです。靈感の内在的証拠が余りに強いので、聖書の反証を挙げようとした人たちが、結局、強く信じるようになっているからです。ですから、イエスは、自分のことばは滅びないと言われました。イエスのことばは滅びていません。今晚ここにあり、今晚私たちは読んで、今晚それを学んでいます。またもう一つ預言が成就したことは、すばらしいことです。「この天地は滅びます。」この地はゆっくりと滅ぶ過程をたどっています。私たちの宇宙は、ゆっくりと衰退する過程をたどっています。太陽は、毎秒120万トンの質量を失っています。偉大な科学者のサージーンは「地球は、巨大な時計のようなものだ。というか、宇宙は、ネジの巻かれた巨大な時計のようなものだが、ゆっくりとネジが元に戻っている。」と言いました。熱力学第一と第二の法則によって、大量損失が起きています。衰退の過程をたどっています。もちろん宇宙はとても巨大なので、自然にそのようなことが起こるのには、長い時間かかります。しかし聖書によると、天変地異によって、宇宙の終りが早まります。この天地は滅びますが、イエスのみことばは永遠です。ですから、私たちは、主のことばを学び、大きな関心を持つべきなのです。主のことばは残ります。主のことばは永遠です。

「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。(13:32)」つまり、主が教会のために来られる日や時はだれもはっきりとは知らないということです。ギリシャ語では、「その時の日は、だれも知りません。」という意味です。あなたは知りません、というのがイエスの言われていることです。イエスが来られない88の理由、いや、1988年にイエスが来られる理由と、時を設定しようとしている人がまたいるようですが、なぜそのようなことを考えようとするのか私には理解できません。そういう本が出されましたが、「あなたはあの本を、聞いたことがあるか。」と全米で大騒ぎです。たくさんの方が、私にこの賢明かつ気違いじみた本を送って下さいました。しかし、この本は、結局そんなに賢明ではなく、ほぼ気違いじみた本だと判明しました。その通りにはなりません。すると著者は、大胆不敵にも、計算違いをしたのだ、1989年の間違いだったと言いました。それで、何人かの信奉者

がいましたが、1989年には、あまりその数は多くありませんでした。今年でさえ、また別の人が、今年だと言ったのです。この人は、かなり有名人です。もっと、まともな分別を持つべきです。しかし、どうも時を設定するのが魅力的なのか、たくさんの人が興奮します。しかし、一旦その時が過ぎてしまうと……。でも勿論、このようなことはずいぶん昔からあることで、西暦1000年にもありました。たくさんの人が、その時に主が来られると信じました。紀元1000年に主が来られないと、というのも、エルサレムは異邦人の支配下にあったので、主が来ることができるようにと、十字軍が行って、聖地を解放しなくてはならないということになったのです。十字軍の背後にあった推進力は、これだったのです。そして、1847年、1857年に、イリノイ州ザイオンのある男性が、主の来られる日が計算できたというので、人々に白い衣を着せ、主の再臨を待ちました。エホバの証人も、主の来られる日を設定しましたが、もうすでに3つか4つの設定された日が過ぎてしまいました。しかし、その日、その時がいつであるかは、だれも知らないのです。ただ、それだけなのです。実際、「天の御使いたちも子も知りません。(13:32)」ですから、もし、主が、その日、その時を明らかにされたとあなたが言うのであれば、あなたは相当特別な人に違いありません。子さえも知らないからです。さて、その日、その時を知らないので、イエスのお言葉は、「気をつけなさい。祈っていなさい。その定めの時がいつだか、あなたがたは知らないからです。(13:33 脚注参照)」です。私たちが、それがいつであるか知らないので、私たちに命じられているのは、ただ、気をつけて、祈ることです。「それはちょうど、人の子は、遠くに旅に立つ人のようで、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて権限を与え、門番には目をさましているように言いつけるようなものです。(13:34 欽定訳を訳者が日本語に訳しました。また、新改訳の脚注参照。)」ですから、教会を後にして遠くに旅に立ったのは、イエスでした。私たちに、様々な責務を任命されました。しかし、イエスは、門番に対して、目をさましているように言いつけられました。「だから、目をさましていなさい。家の主人がいつ帰ってくるか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、わからないからです。主人が不意に帰って来たとき眠っているのを見られないようにしなさい。わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。(13:35-37)」ですから、目をさましていなさい。

みなさんはわかりません。私たちはわかりません。ひょっとすると今晚かもしれません。今晚だったら、私はワクワクするでしょう。明日かもしれません。週末になる前かもしれません。目をさましていなさい。主がいつ戻ってこられるか、私たちにはわからないからです。重要なことは、私たちが準備できていて、目をさましていることです。

マルコの福音書14章(Mark14)(#8042)

マルコの福音書14章です。さてマルコは、イエスの生涯の最後の一週間に起きた出来事について、日を追ってスケジュールを伝えようとしています。それで、イエスの勝利のエルサレム入城を伝えています。それは日曜日だったことが分かっています。その日は通常、棕櫚の聖日と呼ばれています。ですから11章で、マルコは、勝利のエルサレム入城を語っています。そして、11章12節で、「翌日」あるいは、次の日と言っています。つまり、それは月曜日だったはずで、彼らがベタニヤからエルサレムに戻って来た時、イエスは、実がなっていないいちじくをご覧になり、これをのろわれました。イエスは宮に来られ、両替人や鳩を売っている商人などを追い出して、宮きよめをされました。そして11章20節で、朝(訳者注:英語では「翌日」となっています。)、つまり火曜日だったはずで、「通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。」そしてイエスは、弟子たちに信仰について話され、宗教指導者と対決されました。対決の後、宮の地区を一行が離れようとしていたとき、弟子たちはイエスに対して、みごとな石と建物を指摘しました。そして、イエスが宮の破壊について予言されたのは、一行がオリーブ山に到着したときでした。

さて14章で、マルコは、「さて、過越の祭りと種なしパンの祝いが二日後に迫っていたので、祭司長、律法学者たちは、どうしたらイエスをだまして捕らえ、殺すことができるであろうか、とけんめいであった。彼らは、『祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから。』と話していた。(14:1-2)」と語っています。二日後は、過越の祭りや種なしパンの祝いでした。民衆の騒ぎが起こらないように、群衆から離れたところで何とかひそかにイエスを捕らえようと、ユダヤ人の指導者が陰謀を企てました。特に、安息日や祭りの日には実行したくなかったのです。彼らが分かっていたのは、出来事を掌握しているのは自分たちではないということでした。イエスご自身が掌握されていたのです。旧約聖書で、イスラエルの子らがエジプトで奴隷状態であったときに、神はモーセをパロのところに遣わし、彼ら

を解放するように要求させました。続けて起きた災いの後、神は、パロの息子を含むエジプト全土の初子が死ぬという、究極の災いをもたらそうとされていました。エジプト人が起きてみると、人が死んでいるのを発見しました。モーセは、イスラエルの子らに、群れの中から子羊を取り、それをほふり、その血をを鉢の中に入れ、ヒソプの束で、家のかもと門柱につけなさいと命じました。「わたしが夜にエジプト全土を歩き巡るとき、門に血があるのを見れば、その戸口を過ぎ越す。」と主は言われました。それで、過越という言葉ができました。門に血があれば、その家は初子が死ぬのを免れました。なぜなら、子羊が身代わりだったからです。門の血は、その家の初子の身代わりの死でした。面白いのは、家のかもと門柱には、血が十字架を描いてつけられたことです。その後、過越のときに神がイスラエルの民をエジプトから連れ出されたことを思い起こさせるために、過越の祭りが定められました(出エジプト11章と12章参照)。さて、パウロは、これらの旧約聖書の祭りの日や安息日は、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのだと述べています(コロサイ2:16-17 参照)。ですから、過越は記念の祭りでしたが、イエスによって成就されるものの型でもあったのです。したがって、イエスが過越の祭りの日に十字架につけられることがどうしても必要でした。ユダヤ人の1日は、日没から始まることを覚えておくことが重要です。ですから、イスラエルにいて、ユダヤ人のしきたりを守っているのであれば、もうすでに月曜日になっています(訳者注:この説教は、日曜の夕方のバイブル・スタディでのもの)。今日の夕方の6時以降は月曜日です。日没の時に月曜日が始まり、月曜日は明日の日没の時に終わります。ですから、ユダヤ人は、日没から日没までで一日を測ります。私たちは、真夜中から真夜中までで測りますが、ユダヤ人は、日没から日没までで一日を測ります。したがって、イエスが過越の祭りをなさったのは夕刻でしたが、次の日が、実際の過越の祭りの日でした。祭りの日の前日の晩に過越の子羊がほふられました。それは、過越の食事のときに子羊を食べたからです。ですからマルコは、過越の祭りと種なしパンの祝いが二日後に迫っていたときに、イエスを捕らえる陰謀があったと伝えています。しかし、騒ぎを起こしたくないので、祭りの間はいけないとされていたとしています。

「イエスがベタニヤで、らい病人シモンの家におられたとき(14:3)、」さて、ここでちょっと問題が出てきます。ヨハネがベタニヤでのこの祭りについて記したときに、過越の6日前であったとしています。あるいは、土曜日、イエスの勝利のエルサレム入城の一日前であったとしています。あるいは、過越の6日前であったとヨハネの福音書13章に、失礼、12章1節で述べています。「イエスは過越の祭りの6日前にベタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマリアとマルタは給仕していた。そして、このマリアが非常に高価な香油を取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。(ヨハネ 12:1-3 参照)」ですから、ひよっとすると、マルコは時間を追って書いていないのかもしれませんが。ただ、その出来事を思い出して、この時点で書き入れたのかもしれませんが。それはマルコは、イエスの死とイエスを殺す陰謀について語り始めているからです。ともかく、「イエスがベタニヤで、らい病人シモンの家におられたとき、食卓に着いておられると、ひとりの女が、純粋で、非常に高価なあるいは値段が高いナルドの油のはいった石膏のつぼをもって来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。『何のために、香油をこんなにむだにしたのか。』(マルコ 14:3-4 参照)」さて、ヨハネは、異議を唱えたのはイスカリオテ・ユダだったと述べています。「この香油なら、300ペンス以上に売れて、(訳者注: 欽定訳を訳者が日本語にした。)」ペンスとはデナリのことでした。1デナリは、労働者の一日の労働賃金に相当するものでした。ですから、この金額は、ほぼ一年間の労働者の給料に相当するもので、非常に高価な香油でした。「この香油なら、300デナリ以上に売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。」とユダが言い、ユダにつられて弟子たちが女の行為を責め始めました。さて、ヨハネによると、ユダがこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、ユダは一行の会計係のような人で、金を預かっており、ユダが金を盗んでいたと述べています(ヨハネ 12:6 参照)。ですから、ユダがこの高価な香油を見て、「わあ、それがこの金入れの中にあつたら、もっと盗めるのになあ。」というわけです。ユダは、貧乏な人たちに配慮をするような英雄ではありませんでした。ユダは、とても強欲だったのです。「すると、イエスは言われた。

『そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らに良いことをしてやれます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。(14:6-7)』ですから、イエスは、こうおっしゃっているのです。「彼女のするままにしておきなさい。つらくあたってはいけません。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らを助けてやればいいではないか。それでいいではないか。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。」と。「この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。(14:8-9)』ですから、ここで私たちは、彼女がしたことについて語っています。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事、つまり、高価な香油を捧げ、埋葬の用意にイエスに油を塗ったことが語られるのです。どのようなものでも、イエスにささげられたものに対して、「何のために、こんなにむだにしたのか。」とはひどい言い方です。イエスにささげられたもので、むだになるものは何もありません。そのことを知っておいて下さい。

12弟子のひとりであるイスカリオテ・ユダは、このことで気分を害したようです。ユダは、イエスにしかられた形となりました。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。貧しい人に施したいなら、貧しい人に施せばよいではないか。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。彼女がそうしたのは、私の埋葬のためです。」とイエスは言われました。それで、ユダは気分を害し、「イエスを売ろうとして祭司長たちのところへ出向いて行った。(14:10)」「彼らは」これは祭司長たちのことですが、「これを聞いて喜んで、金をやろうと約束した。そこでユダは、どうしたら、うまいぐあいにイエスを引き渡せるかとねらっていた。(14:11)」祭司長たちは、群衆の面前ではなく、ひそかにイエスのことを捕らえたいと願って

いたことを覚えていますか。ですから、群衆がいないときに、イエスのことを捕らえる必要がありました。ユダは、イエスの所まで手引きをすると、言っているのです。それで、彼らは金をやろうと約束したのです。

「『種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。』そこで、イエスは、弟子のうちふたりを送って、こう言われた。『都にはいりなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。そして、その人がはいつて行く家の主人に、「弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる。」と言いなさい。するとその主人が自分で、席が整っている用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。』(14:12-15)」ですから、弟子のふたりを送り、イエスとその弟子たちのために食事の用意をされました。「夕方になって、」つまり、日没に過越が始まったときに、「イエスは12弟子といっしょにそこに来られた。そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。弟子たちは悲しくなって、『まさか私ではないでしょう。』とかわるがわるイエスに言いだした。イエスは言われた。『この12人の中のひとりで、わたしといっしょに、同じ鉢にパンを浸している者です。』(14:17-20)」

さて、弟子たちは過越の準備をしました。過越の時には、過越の祭りを守るのに必要なものがいくつかあります。まず、カーデシュ(Kah-Desh)の杯がありました。これは、聖別や分離を意味します。家長が杯を取り、祈って飲みました。そして、杯を仲間の間で分かち合いました。過越の食事そのものですが、過越に関する絵画がありますが、たいていテーブルに着いていて、美しい食器やらナイフやフォークやらがのっているのですが、実際は全くそのようなものではありませんでした。食べる時は床に寄り掛かっていました。左の肘で寄り掛かって、右手で食べました。そのように食べるのが当時の習慣でした。食器やらナイフやフォークやらはありません。ふつうは手で食べていました。このため頻繁に手を洗いました。過越の祭りの間に3度も手を洗いました。そして、それは祭りを祝う人だけが行ないました。

その人は、規定どおりに手を洗わねばなりませんでした。それから、パセリすなわちレタス、エンダイブを食べます。それは、食塩水が入った鉢に浸されたものです。これは食事の前菜のようなものですが、重要なものでした。パセリすなわちエンダイブの苦みは、血を門柱にぬるのに使ったヒソプを思い起こさせるためのもので、塩からい水は、エジプトで奴隷状態であった時に先祖が流した涙と人々を連れ出すために神が分けてくださった紅海の塩水を思い起こさせるためのものでした。そしてパンが裂かれました。パンは3つあり、真ん中のパンが裂かれました。パンが裂かれ、いくつか祈りささげられました。そして一番年下の子供が、「今晚が他のすべての晩と違うのは、どうしてですか。」と質問をすることになっていました。すると、家族の中の最年長者が、男の最年長者が、神がエジプトから先祖を救い出して下さったことと、死をもたらず御使いが過ぎ越したことを話しました。儀式の中で、この時点で、詩篇113篇と114篇を歌います。詩篇113篇から118篇までは、ハレル詩篇です。賛美の詩篇です。これらが過越の食事の間に歌われました。けれどもこの時点では、113篇と114篇を歌いました。それから、2番目の杯を取りました。食事はぶどう酒の杯で始まりますが、これは2番目の杯です。ハツガダー(Haggadah)の杯と呼ばれました。ハツガダーは説明とか宣言という意味で、ただ物語を話しました。出席している人は全員、実際の食事に備えて手を洗いました。それで食前感謝の祈りをこう言いました。「地に実をみのらせる私たちの神、主が、ほめたたえられますように。戒めによって私たちを聖別された神が、ほめたたえられますように。(Blessed art thou oh Lord our God who bringeth forth fruit of the earth.Blessed art thou oh God who sanctified us with thy commandment.)」そして、種なしパンのパン切れを食べるように命じられました。それで、小さいパン切れを分け与えました。それから苦菜を食べました。これを二切れの種を入れないパンの間に入れ、カロセトの中に(karoset)に浸しました。カロセトは、ナツメヤシの実やナツなど、彼らが奴隷であった時にれんがに用いられたモルタルを思い起こさせるもので出ています。これは、「浸したパン切れ(sop)」と呼ばれました。イエスは、「わたしといっしょに、カロセトの中にパンを浸している者(マルコ 14:20参照)」と言われたときに、このことを話されていたのです。その時は、苦菜が挟まっている二切れのパンをカロセトの中に浸

しましたが、「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。(マタイ 21:23)」そこで弟子たちは、「主よ。まさか私のことではないでしょうか。」とかわるがわるに尋ねました。ヨハネによると、最後にユダが、「先生。まさか私のことではないでしょう。」と言ったときに、イエスは、「いや、そうだ。今しようとしていることを、今すぐしなさい。」と言われました(訳者注: マタイ 26:25とヨハネ 13:27 参照)。そしてユダはそこを去り、出て行って、大祭司との取り引きを完了させました。ユダが出て行ったとき、イエスは言われました。「確かに、人の子は自分について書いてあるとおりに、去って行きます。(14:21)」つまり、私は死ぬのだとおっしゃっているのです。これは、すでに過去に決定されていたものとなりました。「しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。(14:21)」イスカリオテ・ユダは、主を裏切ったことで、歴史上悪名高き人となってきました。

食事が食べ終わったとき、むろん子羊はすべて残らず食べなければならず、食べ残しがあってはいけなくて、もしあれば焼かなければならなかったのです。そして、残りの種なしパンを食べ、感謝の祈りをささげ、その後ハレル詩篇の第二部、詩篇115篇から118篇をいっしょに歌い、それから4杯目の杯を飲み、この4杯目の杯が、イエスがお取りになり、「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。(1 コリント 11:25)」とおっしゃった杯であると考えられています。「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。(1 コリント 11:26)」つまり、イエスは、過越に全く新しい意味をお与えになったのです。もはや、エジプトでの犠牲の子羊を思い出すためのものではなく、今は、世の罪のために血を流された神の犠牲の小羊を思い出すためのものとなり、イエス・キリストの血により、もうあなたは自分の罪のために死ぬ必要はなくなったのです。それは、イエスがあなたの身代わりとなって死んで下さり、生きていてイエスを信じる人は、決して死ぬことがないのです。そして、ふたつ短い祈りが捧げられ、詩篇136篇を歌って食事を終えます。ですから、もう少しで、彼らが賛美の歌を歌ったところを読みますが、彼らが歌った詩篇は136篇

でした。しかし、「それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、彼らに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしのからだです。』また、杯を取り、感謝をささげて後、彼らに与えられた。彼らはみなその杯から飲んだ。イエスは彼らに言われた。『これはわたしの新しい契約の血です(訳者注:新改訳は「新しい」が入っていないが、欽定訳には入っている)。多くの人のために流されるものです。まことに、あなたがたに告げます。神の国で新しく飲むその日まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。』そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリーブ山へ出かけて行った。(14:22-26)」その当時、録音機器があったらなあと思いませんか。イエスと弟子たちの賛美歌の歌声の録音があればと思いませんか。私は、聞けたら嬉しいのになあと思いません。ああ、聞けたら嬉しいのになあ。手短に、詩篇136篇をご覧いただければ、少なくとも逾越の祭りの食事の後で歌った歌の歌詞だけでも見ることができます。これは何についての詩篇ですか。神の恵みについてです。頻りに繰り返して歌われたのは、「その恵みはとこしえまで。」です。この詩篇はよく交替で歌われます。会衆を半分に分け、こちら側が最初の部分の「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。」と歌い、あちら側が、「その恵みはとこしえまで。」と歌うのです。じゃあ5節くらいやってみましょう。あなたが、初めて下さい。この5つです。あなたの方は簡単なほうです。「その恵みはとこしえまで。」ですから、見なくてもできます。ちょっと、やってみましょう。この詩篇はよく交替で歌われましたが、その感じを出してみましょう。じゃあ、始めましょう。(訳者注:チャックのリードで、詩篇136篇の交読が始まる。)

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。」
「その恵みはとこしえまで。」
「神の神であられる方に感謝せよ。」
「その恵みはとこしえまで。」
「主の主であられる方に感謝せよ。」
「その恵みはとこしえまで。」
「ただひとり、大いなる不思議を行なわれる方に。」
「その恵みはとこしえまで。」
「英知をもって天を造られた方に。」
「その恵みはとこしえまで。」

できましたね。じょうずでした。こういうふうに行なわれたのです。ここでイエスは弟子たちと一しょに神の恵みについて歌われたのです。考えてみて下さい。彼らは詩篇118篇を歌ったところでした。それは、「祭壇の角のところまで祭りのいけにえを綱でひいて行け(新共同訳詩篇118:27)」でした。あと何時間かでイエスは、十字架にかかるのでした。ここ

で、彼らは、「祭壇の角のところまで祭りのいけにえを綱でひいて行け」という預言を歌っていたのでした。そして、今や神の恵みについて歌っていたのでした。ここに、神の最も偉大な恵みの現れが、私たちの罪のためのイエス・キリストの死によってまさに示されようとしていたのです。「その恵みはとこしえまで。」ですから、あの夜、どれほどこれが意味のあるだったことでしょう。弟子たちはその意味を把握していませんでしたが、イエスが、「その恵みはとこしえまで」の賛美リードをされたとき、その意味を知っておられたに違いありません。神の恵みが、すばらしい形でまさに今これから現わされようとしていたのでした。つまり、イエスが私たちの罪を負って下さり、私たちの身代わりに死んで下さろうとしておられたのでした。「そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリーブ山へ出かけて行った。(14:26)」

「イエスは、弟子たちに言われた。『あなたがたはみな、つまずきます。「わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる。」と書いてありますから。しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。』(14:27-28)」主は、「あなたがたはみな、今晚つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる。』と書いてありますから。しかし、わたしがよみがえったら、あなたがたとガリラヤで会います。」と言われました。「すると、ペテロがイエスに言った。『たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません。』(14:29)」ペテロは、自分を他の弟子よりも高く持ち上げています。弟子たちの中で、神の御国での偉大さについて、誰が一番偉くなるかについて議論がありました。このことについて、弟子たちは数日間議論をしてきました。この議論が何度も出てきました。ヤコブとヨハネがイエスの所に来て、「私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」と言いました。イエスは、「何をしてほしいのですか。」と言われました。「あなたが御国に入られたら私をあなたの片側に、ヨハネをあなたのもう片側に座らせてもらえますか。」と言いました。すると他の弟子たちはヤコブとヨハネとても腹を立てました。(マルコ 10:35-45 参照)「そんなことをお願いするなんて、とんでもない奴だ。」と。ペテロはもちろん、「あいつらは、俺が右側に座るのが分からないのか。」と言ったに違いありません。ですからイエスが、「あなたがたはみな、つまずきます。」と言われた時、ペテロは、「そうです主よ。あいつらはそうかも

しれません。でも、私は違います。主よ、私を右側に置いて下さい。私はあなたの味方です。」と言ったのです。「イエスは彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないと言います。』ペテロは力を込めて言い張った。(14:30-31)」ペテロは、ずいぶん感情的になってのめり込み始めました。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。(14:31)」自分の肉と献身を誇りました。聖書は、「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。(1 コリント 10:12)」と教えています。神の恵みによって、そして聖霊の助けを通してのみ、私たちは立つことができます。私たちは、ペテロの優柔不断な様を見て、「恥を知れ、ペテロ。」と、後ろ指をさす必要はありません。私たちはみな、彼とどこいどっこいだからです。御霊の力と助けなしには、私たちは無に等しいし、何もすることができません。イエスは、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。(ヨハネ 15:5)」と言われました。つまり、靈的に価値のあることができないということです。イエスを離れては、靈的に価値のあることは何もできません。ここでペテロは、自分の肉を誇っていました。また、「みなのももそう言った。(14:31)」みなが、「私たちは、あなたに忠実な者となります。」と言ったのです。

「ゲツセマネ」または、オリーブ油搾り機(olive press)「という所に来て、イエスは弟子たちに言われた。『わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。』そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。(14:32,33)」イエスの前には、十字架が待ち構えていました。時が来たのです。後に、イエスはピラトに、「この時のために世に来たのです。(ヨハネ 18:37の言い換え)」と言われました。イエスは父に祈られました。「『ここを離れないで、目をさましていなさい。』それから、イエスは少し進んで、地面にひれ伏し、(14:34,35)」イエスが非常に悲しく、気が重かったことに注目してください。彼らに、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、祈りなさい。(13:34 参照)」と言われました。

「それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自

分から過ぎ去るようにと祈り、」もしできることなら……。聖書は、「イエス・キリストの十字架は、ギリシヤ人にとっては愚かですが、ユダヤ人にとってはつまづきです。(1 コリント 1:23 参照)」と言っています。ユダヤ人のメシヤ観は、支配する王でした。世界の権力を打破し、神の御国を立てる方です。確かにこれは、正しいメシヤ観です。これは、イエスが再臨されて、地上に神の御国を立てられるときに実現します。イエスは、世界にある政府を倒します。ダニエル書にある夢に、ネブカデネザルの夢をダニエルが解き明かしたのと、ダニエルの幻があります。一つの石が人手によらずに切り出され、世界の大国の像とその足を打ち、像が、つまり人による大国が砕けます。この石は大きな山となって全土に満ちます。(ダニエル2:34、35 参照) ダニエルはこれを解き明かして、10人の王の時代に栄光の主が国を起こされ、この国は永遠に立ち続けます、と言いました(2:44参照)。人間の国は、何世紀にも渡って存続しました。けれども、神は永遠の国を、ご自分の国を起こされます。私たちは、「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。(マタイ 6:10)」と、この御国が来るように待ち焦がれ、祈っているのです。イエスは、地面にひれ伏し、「もしできることなら」と祈られました。十字架は、人々によってつまづきです。大ぜいの人がこう言うからです。「神に至る道はたくさんある。すべての人が、自分のやり方で神のところに来るが、どのように神のところに来るかはあまり問題ではない。自分の心の衝動に従順であって、神のもとに来ることが重要であって、どのように来るかはそんなに重要ではない。」十字架は、そのようには言っていません。十字架は、神のもとに来る道は一つしかないと言っています。このために、人々のつまづきになるのです。「実際のところ、仏教徒は天国に行けない、と言うのか。」と人々は怒ります。もし仏教徒が祈りや日課のお参りを守ることによって天国に行くのなら、イエスは死ぬ必要もなかったのです。良い人が天国に行けるのなら、イエスは死ぬ必要がなかったのです。宗教の信条に対し誠実だから天国に行けるのなら、イエスは死ぬ必要がなかったのです。「もしできることなら、この杯をわたしから取りのけてください。(14:36 参照)」人間が他の手段で救われるのなら……。とイエスは言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ 14:6)」キリスト教は確

かに狭いのです。実を言えばそのとおりです。でもイエスは言われました。「永遠のいのちの門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。(マタイ 7:13、14 参照)」そうです。とても狭く、とても小さいのです。十字架がこのことをあかしています。

「またこう言われた。『アバ』これは、父を指すもう一つの言葉です。「パパ」とか「おとうさん。」といった、親しみをこめた言葉です。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。」父よ、あなたは何でもおできになります。どんなことでも、わたしには可能です。「どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。」これがイエスの祈りです。父に、ご自分の心を注がれています。「どんなことでも、あなたにはできます。この杯をわたしから取りのけてください。」すぐに次のように付け加えておられます。「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。(14:36)」ここに、イエスによって、私たちに祈りの模範が示されています。祈りの目的は、私たちの願いがかなえられることではなく、神のみこころがなされることです。今日では、「『わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。』と祈るのは、落ちこぼれた。信仰が足りない。」と言う人たちがいます。イエスご自身が、「どんなことでも、神にはできます。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」とお認めになっているのに、どうしてそのようなことが言えるのでしょうか。後に、イエスは同じ祈りを3回祈られたことが書かれています。2回、3回祈りを繰り返すのなら、最初に祈った時には信仰がなかったのだ、と言う人たちがいます。これらはみな、信仰についての奇妙な教えです。どのようにして、あなたの願いがかなえられるか、どうすれば、神をあなたの命令に対する「可愛い魔女ジニー(Little Jeanny)」にできるか(訳者注:昔のテレビ番組で、願いをするとランプの中からジニーという魔女があらわれて、願いをかなえてくれるという筋書きのドラマがあった。)。彼らは主の祈りを、「私の国が来ますように。私の願いが天でも行なわれるように地でも行なわれますように。」と変えています。ですから、イエスは、ご自分を神のみこころに服従させたのです。

「それから、イエスは戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。『シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかつたのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。(14:37-38)』ああ、このとおりですね。心は燃えていても、私たちの肉は弱いのです。「私はどのような人になろうか。」と心は燃えています。「神のために何をしようか。」と心は燃えています。しかし、ああ、肉体は弱いのです。肉の弱さために、決意が果たされないことが実に多くあります。「イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。そして、また戻って来て、ご覧になると、彼らは眠っていた。ひどく眠けがさしていたのである。彼らは、イエスにどう言ってよいか、わからなかつた。イエスは3度目に来て、彼らに言われた。『では、ぐっすりと休みなさい。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。(14:39-41 41 節については新改訳脚注参照)』さて、この時点で、この41節と42節では、時間の隔たりがあつた可能性があります。3度目のときイエスが来て、「では、眠っていないなさい。ぐっすりと休みなさい。もう十分です。時が来ました。」と言われてから、いくらかの時間がたつていたかもしれません。30分間、1時間かもしれません。イエスは彼らが眠っているのを見ておられたのでしょう。彼らのために祈られていたのだと私は思います。「あなたがたは、わたしとともに目をさましている(watch)ことができなかつた。けれども、わたしはあなたがたを見ていよう(watch)。」おそらく、この時イエスは、弟子たちが経験するものをご存じで、とりなしをしておられたと思います。彼らが経験する心痛、痛み、疑問を知っておられました。この日は、彼らにとって非常に過酷な時になるのです。イエスが十字架にかけられるのを見るときに、彼らの夢が、ぶち壊されるからです。イエスは、ご自分の死が何を意味するのか、彼らに正確に理解させることができませんでした。事実、イエスがご自分の死のことを話されていた時はいつも、彼らはそれを謎のように捉えていました。彼らの望みが打ち碎かれるのをご存じで、彼らが眠っているのを見、彼らのために祈って時を過ぎさせたのだと思います。

ユダは、兵士や祭司長や役人を率いていました。そこでイエスは、「立ちなさい。さあ、行く

のです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。(14:42)」と言われました。「そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、12弟子のひとりのユダが現われた。剣や棒を手にした群衆もいっしょであった。群衆はみな、祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられたものであった。イエスを裏切る者は、彼らと前もって次のような合図を決めておいた。『私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえて、しっかりと引いて行くのだ。』それで、彼はやって来るとすぐに、イエスに近寄って、『先生。先生。』と言って、口づけした。すると人々は、イエスに手をかけて捕えた。(訳者注:14:43-46 欽定訳では「先生」が2回繰り返されている。)」何と恐ろしい背信行為でしょうか。福音書の一つには、イエスが、「口づけで、わたしを裏切ろうとするのか。(ルカ22:48 参照)」と言われたことが記されています。英語ではキス(kiss)という言葉がありますが、かえるにチューをするし、ほおに口づけをするし、赤ちゃんの額にキスをしますが、愛する者たちの間での情熱的な口づけもあります。ギリシヤ語には、口づけにいろいろな言葉があります。ほおに口づけする口づけがあり、「あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。(ローマ 16:16等)」がそれです。古式豊かな田舎に行けば、街角であいさつをかわすとき、握手をするのではなく、抱き合って互いのほおに口づけをします。アラファト(訳者注:PLO の議長)が時々そうするのを見ていると思います。ユダのことを思い出させますね(訳者注:これには、いろいろな意味が含まれていると思いますが、アラファトは偽りと背信のかたまりです)。これは、単なるあいさつの方法です。そして、もちろん、愛する者に対する情熱的な口づけがあります。このギリシヤ語がここでは用いられています。ユダは、情熱的にイエスに口づけをしたのです。ユダのことは後でもっと話しますが、「そういう人は生まれなかったほうがよかったのです。(14:21)」。

「そのとき、イエスのそばに立っていたひとりが、剣を抜いて・・・。」ヨハネは、この人がペテロであることを教えています(ヨハネ 18:10参照)。「大祭司のしもべに撃ちかかり、その耳を切り落とした。(14:47)」ヨハネは、そのしもべの名がマルコスであることを教えています。イエスは彼の耳をいやされました(ルカ22:51 参照)。耳を拾って元に戻されたのです。彼

をいやされました。「イエスは彼らに向かって言われた。」おそらく、ペテロは眠たかったのでしょう。眠りから目覚めたところで、瞼は重かったでしょう。ぐっすり眠っていたのですから。大きな騒ぎがあり、イエスが捕まえられているのを見たペテロの最初の反応ですが、自分の剣をさやから抜き、辺り構わず振り回しはじめました。「自分の前に立ちはだかるものは、注意せよ。」と。その人はたまたまマルコスでした。あわやのところですよ。右の耳が切れました。おお怖い。ある人は、ペテロは右利きでマルコスが離れようとしていた時、右の耳が切れたと言いますが、私にはわかりません。イエスは彼らに答えて言われました。「『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕えに来たのですか。わたしは毎日、宮であなたがたといっしょにいて、教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕えなかったのです。しかし、こうなったのは聖書のことばが実現するためです。』すると、みなが・・・」これは弟子のことです。「イエスを見捨てて、逃げてしまった。(14:48-50)」「あなたがたはみな、わたしのゆえにつまづきます。(14:27 参照)」弟子たちはみな、逃げてしまいました。「ある青年が、素はだに亜麻布を一枚まとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕まえようとした。すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。(14:51,52)」ある推測があって、それはおそらく正しいと思いますが、マルコが自分自身に起こった出来事を記録として短く挿入しているのではないかというものです。マルコはその時点で、おそらく12、13歳だったでしょう。彼の家族や叔父などがみな、イエスにかかわっていたので、この少年は、男の子がよくするように、イエスの回りをうろうろしていたのでしょう。人々が彼をつかんだ時、身に着けていた亜麻布の上着をつかんだ時・・・、これはマルコ自身の短い挿入だと考えられています。マルコの福音書は、大部分がマルコがペテロから聞いたことによって構成されています。ですからマルコの福音書は、基本的にはペテロの記述です。マルコは、ペテロが主についてマルコに繰り返し話して聞かせたことを伝えています。ですから、ここはマルコ自身が、その晩にかかわっていたことを短く挿入したものなのです。

「彼らがイエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな、集まって来た。ペテロは、遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の庭の中まではいって

行った。そして、役人たちといっしょにすわって、火にあたっていた。(14:53,54)」ですから、ペテロは近くにいましたが、近すぎることはありませんでした。イエスといっしょの者だとわかるほど、近くにはいなかったのです。どうい結果になるか気になっていました。「さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える証拠をつかもうと努めたが、何も見つからなかった。(14:55)」彼らは、告発できるものを探しました。イエスが何か死刑になるような罪を犯すのを見た証人を探しました。「イエスに対する偽証をした者が多かったが、一致しなかったのである。すると、数人が立ち上がって、イエスを訴えて、次のように言った。『私たちは、この人が、「わたしは手で造られたこの神殿をこわして、三日のうちに、手で造られない別の神殿を造ってみせる。」というのを聞きました。』(ヨハネ 14:56-58 参照) 」だからイエスを死刑にしてください。「しかし、この点でも証言は一致しなかった。(14:59)」イエスは確かに、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。(ヨハネ 2:19) 」と言われましたが、ご自分のからだの神殿のことを言われていたのです(ヨハネ 2:21 参照) 。彼らは、この点についても一致しませんでした。「そこで大祭司は立ち上がり、真中に進み出て・・」らちがあきません。「イエスに直接尋ねて言った。『何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています。が、弁明はしないのですか。』(14:60 参照) 」しかし、イザヤは預言の中で、「毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。(イザヤ 53:7) 」と言いました。弁明は全くされませんでした。「しかし、イエスは黙ったままで、何もお答えにならなかった。大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。『あなたは、ほむべき方の子、メシヤですか。』(14:61 新改訳脚注参照) 」さて、当時、メシヤは実際神の御子であると信じられていました。ですから、「あなたは、ほむべき方の子、メシヤですか。」という質問がなされたのです。現在のユダヤ人は、「ラビは、メシヤは神の御子ではなく人であると教えている。」と言います。けれども、著書「メシヤを探し求めて(The Search for the Messiah)」の中で、マークは、初期のラビはメシヤは神の御子であると信じていたことを示しています。ここではそれが明らかです。祭司長が、「あなたは、ほむべき方の子、メシヤですか。」といっしょにしています。それは、メシヤについてこう預言されているからです。「主はわたしの主に言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたし

があなたを生んだ。』(詩篇 1:7 参照) 」また、こう書かれています。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は、『不思議な助言者・・・』(イザヤ 9:6参照)」これは明らかにメシヤの預言ですが、この方は「与えられた子」です。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハネ 3:16) 」それで、「あなたは、ほむべき方の子、メシヤですか。」とあるのです。「そこでイエスは言われた。『わたしは、それです。』人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。』すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。『これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、神をけがすこのことばを聞いたのです。どう考えますか。』すると、彼らは全員で、イエスは死刑に当たる罪があると決めた。そうして、ある人々は、イエスにつばきをかけ、(14:62-65)・・・」イザヤは、「つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。(イザヤ 50:6) 」と言いました。東洋では、最もひどい侮辱は、人につばきをかけることです。そこでは、クリスチャンだということで、つばきをかけられることがあります。これによって恥辱と軽蔑を表します。どう避けるか、避け方は身につけてきます(You learn to dodge)。「御顔をおおい、こぶしでなぐりつけ(15:65)、・・・」体は実にすばらしく出来上がっていて、日曜日ごとにクォーターバックの人がものすごい勢いでなぐられたり、エンドの人がパスを受け取ってぶつつぶされたりするのを見ます(訳者注:毎週日曜日にTV中継されるフットボール試合のこと)。彼らは、ジャンプして起き上がります。あんな状態では、立ち上がるなんてできっこないと思います。しかし、ジャンプして起き上がり、ハドル(訳者注:次のプレーを決めるための選手たちの集合) に走り戻ります。立ち上がるのがかなり遅くなる時もありますが、それでも立ち上がります。体は神によって破壊され、いや、組み立てられているので、破壊されることはありません。まあ破壊されうることもありますが、それにはかなり体をいためつけなければなりません。ほとんど本能的に私たちがすることがあります。ああ、殴られるから、殴られたらしかたなくそれにあわせて動いた方がいい、と考えることはありません。自然にそうなります。不意打ちをくらって不用意だと、クォーターバックは、かなり負傷します。相手がやってくるのを見ますと、リラックスして、体を回転させ、いっしょに転げ回ります。そうすると、それほど痛い思いをし

なくてすみます。しかし、相手がやってくるのを知らずに、不意打ちをくらうと、かなり深刻な負傷を負うことがあります。ボクシングをしている人、たがいを拳でうちあっている人を見ますと、一撃が来るのが見えると、本能的にパンチにあわせてローリングすると言います。つまり、パンチがきても、それが来るのがわかっている限りは、反射的にそれにあわせてローリングすることができ、一撃のきつさを感じなかったり、一撃をまともにくらうことがないので、パンチを受けて立つことができるのです。それは、しかたなくそれにあわせて動く、それにあわせてローリングする自然の本能があるからです。しかし、顔や頭に覆いがかけられていると、一撃が来るのを見ることはできません。そうすると、その一撃をまともにくらうことになりません。したがって、イエスの頭を覆うことによって、彼らがこぶしでなぐりつけ始めると、イエスはそれをまともにくらいはじめたのです。「彼らは、あざけり始め、『誰が殴ったか言い当ててみる。』と言いました。また、役人たちは、イエスに平手打ちを食わした。(14:65 参照) 」イエスは、彼らから肉体的な虐待を受けられました。

このことが起こっている一方で、「ペテロが下の庭にいと、大祭司の女中のひとりが来て、「ペテロが火にあたっているのを見かけ、彼をじっと見つめて、言った。『あなたも、あのナザレ人、あのイエスといっしょにいましたね。』しかし、ペテロはそれを打ち消して、『何を言っているのか、わからない。見当もつかない。』と行って、出口のほうへと出て行った。すると、鶏が鳴いた。(14:68 については、新改訳脚注を参照) すると女中は、ペテロを見て、そばに立っていた人たちに、また、『この人はあの仲間です。』と申しだした。しかし、ペテロは再び打ち消した。しばらくすると、そばに立っていたその人たちが、またペテロに言った。『確かに、あなたはあの仲間だ。ガリラヤ人なのだから。あなたはガリラヤ弁を話すから。(訳者注：欽定訳参照) 』しかし、彼はのろいをかけて近い始め、『私は、あなたがたの話しているその人を知りません。』と言った。するとすぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らないと言います。』というイエスのおことばを思い出した。それに思い当たったとき、彼は泣き出した。(14:67-72) 」うちひしがれてしまいました。私たちは、何度主に対し失敗してしまったことがあるでしょうか。約束した

のに実行しなかったことが、どれほどあるでしょうか。誓いを立てて、破ってしまった誓いが幾つあるでしょうか。ペテロの誠実さに疑念をはさむことは、全然正しくないと思います。ペテロが、「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。(マタイ 26:35)」と言った時、ペテロは全く誠実であったと私は思います。ペテロは、自分の魂の誠実さを表明したのです。ペテロは真にそのように思っていたのです。ペテロは、自分のイエスへの一意専心と献身があまりに大きいので、イエスのために死ぬことができると真に信じていました。イエスを否定しない、と。それなのに、ペテロは主を否定したことが書かれています。ペテロがやらないと言った、まさにその通りなことをペテロはしています。使徒パウロは、ローマ人への手紙の7章の後半で、私たちがよく抱える問題について語っています。「私の中に、何らかの邪悪な原理が働いているのを見出だすのです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。私は、ほんとうにみじめな人間です。(ローマ 7:21、19、24 の言い換え)」とパウロは言いました。「実は、自分のしたくないことをしており、すべきであるとわかっていて、したいと思っていることをしていない。」ガラテヤ人に対してパウロは、「肉は霊に逆らい、霊は肉に逆らい、そのために私たちは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。(ガラテヤ5:17参照)」と言いました。イエスがペテロにおっしゃったように、「心は燃えていても、肉体は弱いのです。(マルコ 14:38)」私たちはみな、そのことを理解しています。それがどういうことか、私たちはみなわかっています。私たちはみな、「決してやらない」と誓ったまさにそのことをしてしまうという同じ経験をしています。肉体の弱さです。神の恵みがとこしえまで続くことを知ることは、すばらしいことです。神は、私たちの造りを理解しておられ、私たちが塵であることをご存知です。あなたがたは塵でできているのであって、鉄鋼でできているわけではありません。スーパーマンではありません。神はそのことをご存知です。時間を経ると、私たちは、そのことがわかるようになります。人間のもろさに気づきます。その際に、自分自身にがっかりすることが多いのです。ペテロのように、自分の失敗に対して、泣き出すことが多いのです。そんなこと、したくなかった。そんなこと、するつもりじゃなかった。でも、してしまった、と。ペテロが失敗して、その失敗に対して泣き出しましたが、二つ対照

的なことがあります。イエスを裏切ったイスカリオテ・ユダがいます。後で、イエスが十字架につけられたのを見て、ユダは後悔します。金を返しに来てユダは、「この金を受け取ってくれ。私は罪のない人の血を売った。」と言いました。彼らは、「それはお前の問題だろう。受け取れない。血の代価だから、金庫には入れることができない。」と言いました。それで、ユダは、好きにしろと、床に金を投げました。ユダは後悔して、外に出て行って首をつりました。(訳者注: マタイ 27:3-10参照)ペテロは、苦い思いをし、涙を流し後悔しましたが、赦されました。違いがあります。違いがあります。今日、たくさんの方が自分のしたことを後悔します。しかし、自分が望んでいるように、事が運ばなかったからだけです。自分の弱さと失敗のために、やるつもりではなかったのにと、心から悔いる人もいます。神は、あわれみ深い方で、赦してくださいます。ペテロは、そのようであっても、最初の教父として神に用いられました。非常に力ある宣教をしました。ペテロには挽回する機会がありました。使徒行伝4章で、ペテロはそれを非常に果敢に成し遂げました。ですから、あなたが失敗しても、それで落ちこぼれではないのです。神は、「あいつのことは、ほっとけ。」とは言われません。そうではなく、神は恵み深く、赦してくださるあわれみ深い方です。神は、再びあなたをしっかりと立たせてくださり、もう一度やりなさい、と言ってくださいます。今度は、もっとしっかりつかまりなさい。もっと近くにいなさい。追いかけるのではなく、わたしの近くにいなさい。いっしょにやってみよう、と。キリストによって、私は、どんなことでもできるのです。パウロは、「私は、私を強くくださるキリストによって、どんなことでもできるのです。(ピリピ 4:13 参照。欽定訳ではキリストという言葉がはいっている。)」と言いました。キリストなしには、私は何もすることができません。しかし、キリストによって、どんなことでもできるのです。

マルコの福音書15章(Mark15)(#8043)

私たちの聖書通読の学びは、マルコの福音書15章まで来ました。さて14章のマルコの記述には、弟子たちとの最後の晩餐と過越の祭りがあり、園でユダがイエスを裏切り、イエスが宗教会議の前で審理をお受けになったことがありました。そして14章は、ペテロがイエスを否んだことで終わっています。ユダヤ人の中では午後6時から日が始まるので、まだ同じ日になります。「夜が明けるとすぐに、祭司長たちは長老、律法学者たち、および全議会と協議をこらしたすえ、(訳者注:15:1 欽定訳では、「祭司長たち」が主語になっている。口語訳や新共同訳などを参照。)」この全議会は、祭司たちや律法学者たち、長老たちを含めた、ユダヤ人の全体宗教議会です。「イエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡した。(15:1)」ローマ政府は、イエスが誕生されたちょうどその頃に、死刑を執行する権力をユダヤ人から剥奪しました。実際イエスがナザレにいてまだ少年であったとき、ローマ政府は、ユダヤ人から死刑を課す権力を取り上げました。ユダヤ人はこれを、自分たちの統治が終焉し、その国が終わったと解釈しました。実際、一部のユダヤ人は、荒布をまとい灰をかぶって、神が約束を実現されなかったことをみんなの前で嘆き悲しみました。ヤコブからユダに約束されたことは、シロ、すなわちメシヤが来るまでは、杖はユダから離れないというものです(創世49:10 参照)。ローマ政府によって死刑を執行する権力が剥奪されたことを、杖、つまり権力が奪われたと解釈しました。メシヤが来なかったので、道の通りで神の約束が実現されなかったことを嘆き悲しみました。その時ナザレで、神の定めたご自分の現われの時を待って、メシヤが成長されていたことを彼らは全く知らなかったのです。それで、彼らは死刑の宣告を取り付けるために、イエスをピラトに連れ出さなければいけませんでした。他の場合、例えば使徒行伝のステパノの場合には、ユダヤ人は憤ってステパノを石で打ち殺しましたが、ローマ政府はそっぽを向いていました。彼らは、ユダヤ人たちが騒ぎを起こして人を石で打ち殺すのを、彼らが望むなら止めませんでした。けれども、彼らが法的

に人を死刑にすることはできませんでした。それゆえ、イエスが死刑になる判決を彼らが願ったので、イエスをピラトのもとに連れて行ったのです。ピラトの前で告発するためには、政治的な告発をしなければなりません。「この者は、自分がメシヤであると言っている。」と言うことはできませんでした。ローマ政府にとって、そのようなことはどうでもよいことでした。そのため、イエスが自分が王だと言っていると告発したのです。人々にカエザルに税を払わないようにイエスがけしかけた、と訴えたのです。ピラトがその事件を聞くことができるように、ローマ政府に対するイエスの民事上の犯罪を告発して、でっち上げようとした。イエスをピラトのところに連れ出すことに関して興味深いことは、ローマ政府の処刑の仕方が十字架刑の方式を採っていたことです。ユダヤ人は通常、人を石打ちにして殺していました。それがユダヤ人たちの死刑執行の仕方でした。けれども、ローマ人にとっては十字架刑でした。旧約聖書の預言によると、預言の成就のためには、イエスは十字架につけられなければなりません。したがって、ピラトのところにイエスを連れ出したのは、偶然の事ではなく神のご計画の一部だったのです。詩篇22篇とイザヤ52章13節と14節にある預言が成就するためには、イエスは十字架刑によって殺されなければならなかったからです。彼らはイエスをピラトに連れ出して、「ピラトはイエスに尋ねた。『あなたは、ユダヤ人の王ですか。』(15:2)」これが、イエスが訴えていた事項の一つだったからです。「イエスは答えて言われた。」基本的に、「そのとおりです。」わたしはその王です、と。「そこで、祭司長たちはイエスを多くのことで訴えた。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。(訳者注 15:3 新改訳脚注参照。また、欽定訳には、“But he answered nothing.”が挿入されている。)」イザヤ53章7節では、「毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」とありますが、イエスは、偽りの告発に対して弁明をなさいませんでした。これは通常ではありえないことです。無実の者が死罪の訴えを受けて、偽りの証人が出されて、偽りの証人による告発を受けているのに、それに答えたり応じたりなさっていません。イエスは、ご自分を弁護するようなことはなさいませんでした。そのために、ピラトも尋ねて言いました。「何も答えないのでですか。見なさい。彼らはあんなにもあなたを訴えているのです。(15:4)」イエスは何もお答えにならなかったのも、イエスの沈黙にピラトも驚きました(15:5)

参照)。

「その祭りには、(15:6)」これは過越の祭りのことですが、ローマ政府は、好意の意思表示として、政治的囚人を釈放することを例としていました。これは過越を祝い、ローマ政府が、和解を申し入れることに対し、首を縦に振っていることを表すものでした。それゆえ、政治的囚人を釈放する者として選びました。実はイエスは、政治犯として告訴されていたので、祭りの時に政治的囚人で釈放される該当者の中に入っておられたのです。十分ありうることですが、バラバには、その朝に限ってバラバを釈放するのを要求する仲間がいました。バラバは暴徒でした。イエスが受けておられたのは偽りの告発ですが、彼はまさに該当者でした。つまり、ローマの支配に反逆したのです。この男は、実際に有罪だったのです。ローマに反逆する暴徒たちといっしょにいて、暴動のとき人殺しをしました。しかし、彼はかつて、いや、その時も熱狂者たちの一人でしたが、その仲間がその朝、政治犯の囚人、バラバの釈放を求めるために特別に集まったのかもしれませんが。ですからすでに、バラバの釈放を願うように準備を整えていました。なぜなら、彼らはその時、ピラトに、例となっていた政治犯の囚人の釈放を行なうように頼んでいたからです。彼らがバラバを釈放するためにそこにいたことは、死刑のためにイエスを連れ出していた大祭司の手中で、いよいよ利用されたのかもしれませんが。ですから、ピラトは、その祭りには、人々の願う囚人をひとりだけ釈放していました。マルコは、「バラバという囚人がいて、暴動のとき人殺しをした暴徒たちといっしょに牢にはいていた。(15:7参照)」と伝えています。「それで、群衆は進んで行って、いつものようにしてもらうことを、ピラトに要求し始めた。(15:8)」つまり、群衆が、「囚人を釈放しろ。釈放してくれ。」と叫んだのです。「そこでピラトは、彼らに答えて、『このユダヤ人の王を釈放してくれというのか。』』と言った。ピラトは、祭司長たちが、ねたみ」あるいは嫉妬「からイエスを引き渡したことに、気づいていたからである。(15:9-10)」ピラトは、イエスに対する告発が、でっち上げであることに気づいていたのです。群衆は、囚人の釈放を叫び、ピラトは、「このユダヤ人の王を釈放してくれというのか。」と言ったのです。「しかし、祭司長たちは群衆を扇動して、むしろバラバを釈放してもらいたいと言わせた。そこで、ピラト

はもう一度答えて、『ではいったい、あなたがたがユダヤ人の王と呼んでいるあの人を、私にどうせよというのか。』と言った。すると彼らはまたも、『十字架につけろ。』と叫んだ。(15:11-13)ここで人々には選択がありました。面白いですね。選択肢は、法(law)か無法かでした。イエスは神の律法(law)を代表しておられました。バラバは無法の代表でした。人々は、律法よりも無法を選びました。長い年月を経ても、人間はさほど変わっていません。私たちは選挙を目の前にしていますが、無法が勝利することは確かです。人々の中に、神に逆らう無法さがあります。それで、ここで、彼らはバラバを選びました。

ですから、「それでは、イエスをどうすればよいか。」という質問がなされたのです。ピラトが直面した質問は、これでした。「あなたがたがメシヤあるいはユダヤ人の王と呼んでいるイエスを、どうせよというのか。」これは、ピラトにとってだけの質問ではありません。実は、すべての人が直面しなければならない普遍的な質問です。この質問が、その時ピラトに意味があったと同じくらい、今夜、あなたにも意味があるのです。あなたも同じく決断をしなければなりません。ユダヤ人の王と呼ばれたイエスをどのようにすればいいか、決断しなければならないのです。イエスが主であり救い主であると告白することもできます。イエスは、「わたしを人の前で言い表す者は、わたしも天の父の前でその人を言い表します。(マタイ 10:32参照)」と言いました。イエスを否むこともできます。イエスがあなたの生涯を支配されるのを否んで、この方に逆らうこともできます。イエスは、「しかし、人の前でわたしを拒む者を、わたしも天におられる父の前で、聖なる御使いたちとともに拒むだろう。(マタイ 10:33参照)」と言われました。イエスを主として、救い主として受け入れることもできます。「しかし、この方を受け入れた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:12 参照)」また、イエスを拒むこともできますが、イエスを信じることもできます。「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためです。(ヨハネ 3:16)」あるいは、信じないでいることもできます。黙示録21章では、不信者の結末が教えられています(8 節参照)。イエスの味方になることもできますし、敵になることもできます。しかし、一つできないことは中立でいることです。イエスは、「わたしの味方でない者はわたしに逆らう

者であり(マタイ 12:30)」と言われました。実に多くの方が、イエスに関してどちらでもない立場をとっていますが、イエスがこのような極端な主張をされている限り、中立の余地はありません。イエスは、事実神の御子であるか、あるいはペテン師で、惑わし者で、偽り者であるか、もっと好意的に言うならば、気違いであるかのどちらかでしかないのです。しかし、決断をしなければなりません。中立であることはできないのです。したがって、「キリストと呼ばれるイエスをどのようにすればよいか。」という質問は、あなた自身が答えなければならない質問であり、他の誰かがあなたのために答えることはできません。「お母さんが」「お父さんが」「うちの家族が」「おじいさんが」と言って、他の人の信仰に同乗することはできません。神に孫はおられません。すべての人が、どのようにするか自分で決断しなければなりません。したがって、このローマの裁判官の場合は、自分の決断によって自分の結末が決定されようとしていましたが、それは、すべての人にも同じことが言えるのです。あなたの決断によって、イエスの結末が影響されることは全くありません。けれども、あなたの結末が影響されます。あなたの永遠の運命は、キリスト、ユダヤ人の王と呼ばれたイエスをあなたがどのようにするかで決定されます。あなたの決断が、あなたの将来に影響を与えるのです。ですから、キリストと呼ばれたイエスについて、あなたがどのようにするのか、というのは非常に重要な質問であり、実はこれから答えなければならない質問で最も大切なものです。

使徒パウロは、「私にとっては、生きるのはキリスト、死ぬこともまた益です。(ピリピ 1:21)」と言いました。パウロは、死を実際に何か楽しみに待っているようなものとして話しました。「私は、その2つのものの間に板ばさみになっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。しかしながら、あなたがたを励まし力づけるために、しばらくの間ここにいることが必要なのです。(ピリピ 1:23-24参照)」このからだにいる私たちは、このからだから解放されることを熱心に待ち望んで、しばしばうめきます(ローマ 8:19-23参照)。それは、からだを持たない霊になりたいと思うからではなく、天からのからだを着たいからです(2 コリント 5:1-4参照)。イエスを自分の人生の主とした人は、永遠の希望を与える、キリストにあるいのちを見いだした人です。フランスの有名な無神論者ボルテールには、

イエスに関して好んで使った言い回しがあって、「あの人でなしをつぶせ！(Crush the wretch)」というものでした。面白いことに、彼が死を目前にしたとき、パウロとは全く違いました。パウロは、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけではなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。(2 テモテ3:8)」と言いましたが、ボルテアは、死の床で泣き叫び、「もっと光を。もっと光を。もっと光を。」が彼の最後の言葉となりました。彼は、望みもなく、キリストもなく、永遠の暗やみの中に入っていました。ですから、これは、私たちひとりひとりが自分で答えなければならない非常に重要な質問です。

ピラトは人々に尋ねましたが、人々の答えは、「十字架につけろ。(15:13)」でした。「だが、ピラトは彼らに、『なぜだ。あの人がどんな悪い事をしたというのか。』と言った。(15:14参照)」もはや司法制度は、総壊れしました。判事が群衆と論議をしているのです。想像だにできない光景でしょう。判事がいて、法廷にいる審理の傍聴人たちが叫びはじめましたが、判事が状況を掌握し、静粛を求め、廷吏がそのような人たちを法廷から退出させるのではなくて、その人たちと論議を始めたのです。「なぜだ。あの人がどんな悪い事をしたというのか。」けれども、何の道理もなく、悪い事を何一つ指摘することはできませんでした。道理が何もないときは、ますます大声で激しく叫ぶしかありません。群衆はまさにそれをしたのでした。「彼らはますます激しく、『十字架につけろ。』と叫んだ。(15:14 参照)」十字架につけさせろ、と叫びました。「それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い(15:15)」実に恐ろしい言葉です。人々のきげんをとろうと思って、これまでに、どれだけおぞましいことがなされてきたでしょうか。心の中では正しいとわかっているのに、譲歩してしまうのです。自分の良心に逆らって、譲歩してしまいます。心の中では、なすべきことを知っているのに、それを行なう力と勇気がないので、群衆の叫び、仲間からの圧力に屈服してしまうのです。この圧力に強いられて、この圧力に屈服してしまい、あなた自身絶対に間違っているとわかっていることをしてしまうのです。それが、ピラトの場合でした。

「それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後、十字架につけるように引き渡した。(15:15)」さて、福音書では、このむち打ちのことがそれほど強調されていません。むち打ちは、囚人から自白を引き出すために、ローマ政府が行っていた慣行でした。囚人は、背中が十分丸出しになるように腰をかがめさせられました。砕かれたガラスや骨が埋め込まれた革製のむちを使いました。肉をかき裂くようにできていました。そのため、むち打ちが終わったとき、その人の背中がハンバーガーのように見えました(訳者注:まだ調理されていないハンバーガーの肉のこと)。並々ならぬ痛みと失血のため囚人が死ぬことが、多発しました。むち打ちによって、気がおかしくなって狂人になってしまうことが多々ありました。時には、むち打ちのときむちが顔に巻き付き、むち打ちのために、目がえぐり出されたという記録もあります。これはおぞましい事でした。「イエスをむち打ってのち、…引き渡した。」というのでは、ずいぶん磊落に聞こえます。次のような疑問が出てきます。むち打ちと私たちの救いにどんな関係があるのか。神がこのようなことが起こることをお許しになったとは、このようなことが起こることを計画なさったことさえも、私には信じられないのです。イザヤ書50章6節に、「打つ者に私の背中をまかせ、…」と書かれており、イザヤ書53章には、「彼は、そむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(5節)」と書かれているからです。むち打ちには、何か目的があったはずで、神は何か目的を持っておられたはずで、十字架、つまり、キリストが血を流してくださったことを私たちは十分理解しています。その際、キリストは、ご自分のいのちをささげてくださいましたのです。流された血は、いのちが出てゆくことを象徴しています。その際、キリストの心臓に槍が刺し通され、血と水が流れ出しました。キリストが血を流してくださったことにより、私たちは自分の罪を赦していただくことができます。それは、キリストが私たちの罪の犠牲として身代わりに、犠牲になって死んでくださったからです。そのことは、私たちは理解しています。しかし、むち打ちについては、ほとんど理解していないのではないかと考えるのです。むごい、むごい体験であったのにもかかわらず、新約聖書では、このことについて特に強調されていません。

「兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。そしてイエスに、」王室の色である「紫の衣を着せ、いばら(thorn)の冠を編んでかぶらせ、それから、『ユダヤ人の王さま。ばんざい。』と叫んであいさつをし始めた。(15:16-18)」嘲りです。嘲りと嘲笑です。しかし、興味深いのはいばらの冠です。冠としては興味深い選択です。創世記にさかのぼりますと、いばらはどこから来たのでしょうか。覚えていらっしゃるでしょうか、アダムが罪を犯したとき、神は、「土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。土地はあなたのために、いばらを生えさせる。(創世3:17-18 参照)」と言われました。いばらは、人間の罪のために神が土地をのろわれた結果でした。何年も前のことですが、私がアリゾナのオラクル・ジャンクションの近くで、私たちが、YMCAのキャンプの監督をしていた時…。その場所を、さそりの峡谷(scorpion gulch)の異名で呼んでいました。理由は明白でしたが…。ある少年のグループを放棄された鉱山までハイキングに連れて行き、立坑まで降りて、少年たちに地層について若干説明し、金を求めていた人たちが追及するに価すると思った鉱脈をいくつか見せました。立坑までのハイキングの帰路で、私の後ろにいた少年の一人が、あまりの痛さに叫びました。私は、何が起こったのかと引き返しました。すると、その子の手の甲にしっかりとウチワサボテン(cholla cactus)が刺さっていました。このサボテンは、ジャンピング・サボテン(jumping cactus)と呼ばれていますが、実際にサボテンがジャンプしたりしません。しかし、実にたやすく折れてしまいます。擦れたりすると、折れてしまい、とげ(thorn)はサボテンが折れてしまうと付いてきます。とげはくっついてきます。このサボテンはとげで覆われているので、取る時には注意しなくてはなりません。私がしたのは、2本の棒を取ってきて、下からとげをはさみ、とげをスポッと取りました(訳者注:とげ抜き の原理を利用したと考えられる)。しかし、私が棒ではさんでいる時に、とげがしっかりと刺さっているので、この子はずいぶん痛がり、「アダムのやつ、もう。」と言いました。それで私がその子に、「日曜学校はどこへ通っているの。」と尋ねると、「第一バプテスト教会だ。」と答えたので、私は、「君は、よく勉強しているね。」と言いました。いばら(とげ)は、のろいの結果です。つまり、イエスは、罪ののろいを取り除くために死なれたのでした。ですから、彼らがイエスにいばらの冠をかぶせたことを、私は興味深く思います。いば

らは罪の結果でした。今や、イエスは世の罪を取り除こうとしておられましたが、いばらの冠をかぶらされておられました。

「また、葦の棒でイエスの頭をたたいたり、…。(15:19)」前日の晩に、イエスは大祭司の役人に殴られました。その時までには、イエスが打ちのめされ、役人たちは、イエスの頭に麻布の袋をかぶせ、殴り、「だれが殴ったかを言い当ててみる。」と言いました。前日の晩に、役人たちはイエスを無慈悲に取り扱いました。さて、ここでは兵士たちがイエスをいじめています。兵士たちはイエスの頭を葦の棒、あるいは杖で叩きました。むち打ち(caning)の過程です。杖で叩くことについては、最近若干聞きましたね(訳者注:シンガポール在住の米国人少年がいたずらの罰として、むち打ちに処せられたことに対する言及か)。「つばきをかけたり、…。(15:19)」イザヤ書50章6節です。「つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。」「ひざまずいて拝んだりしていた。(15:19)」人が、心ない人が時々にするように、彼らは、「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」と言ったり、嘲ったり、拝んだりして、イエスをひどくもてあそびました。人が人に対して実に心ないことをできるのには、私には到底理解できません。文明とか文明人とか言いますが、ローマ政府は大変高尚な文明、発達した文明社会だったはずなのです。私たちは、高度に発達した文明社会に住んでいるとされているのですが、文明人が他の人に、他の人間に、どのようなことをし得るかには、驚かされます。あまり昔にさかのぼらなくても、見ることができます。ドイツでのホロコースト(訳者注:ユダヤ人に対する大虐殺)を振り返り、それに関する記録を読みますと、そのようなことを人が他の人にできるなんて、考えられません。しかし、ボスニアで起こっていること、双方で起きている残虐行為を読みますと、人が人に対してなぜそのようなことができるのだろうか、と考えてしまいます。私たちは、イエスに対してもそのようなことがなされたことを見ます。なぜでしょうか。それは罪のためです。サタンが、これらの人の生活を、思考回路を支配しているからです。このような人たちのために、イエスは死なれたのです。罪の結果、人生が邪道に陥った人たちのため、罪の結果、人間以下になってしまった人たちのためでした。まさにイエスが死のうとしておられた対象である人たちが、イエスに痛みを与え、処罰をし、嘲っ

ていたのです。

「彼らはイエスを嘲弄したあげく、その紫の衣を脱がせて、もとの着物をイエスに着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。そこへ、…シモンというクレネ人が、…むりやりに…(15:20-21)。」クレネは、北アフリカのちょうどリビアにあたる場所でした。この男性は、おそらく過越のためにエルサレムに来たと思われます。そこにいる時に、騒ぎを聞き群衆を見て、「ユダヤ人の王ナザレ人イエス(ヨハネ 19:19)」との罪状書を持って、群衆を先導していたローマ兵士を見ました。十字架まで人々が列をつくって進む際に、できるだけ多くの人々が罪状書を見ることができ、人々がローマの権力を恐れるように、実際回り道をして(circuitous)市中を進みました。ですから、列の前には4人の兵士がおり、うち一人が罪状書を持ち、二人が囚人の横に、一人が後ろにいました。そして、囚人は十字架刑の場所まで、十字架を担ぎました。ですから、この人は、兵士が「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」との罪状書を持って行進するのを見ました。すると、兵士の一人が、剣をシモンの肩の上に刃を寝かせてのせました。このため、その人は、その兵士の重荷を1マイル(1.6km)担がねばなりませんでした。反論することはできません。ローマの法律では、もし、兵士が肩の上に剣の刃を寝かせるのであれば、1マイルは、その兵士の奴隷になるしかなく、その兵士の荷物を持って、1マイル担がねばならなかったのです。これがローマの法律でした。このために、イエスは、「あなたに1ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに2ミリオン行きなさい(訳者注: マタイ 5:41 英語では距離の単位としてマイルが使われているが1ミリオンは約1.5km 新改訳脚注参照) 」と言われたのです。「全力を尽くしなさい(訳者注: 英語は、go the extra mile 。直訳すると、もう1マイル行きなさい。)」という考えは、ここから来ています。

「彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼(シモン)に背負わせた。(15:21)」この時点で、イエスの体力が既に衰え始めていたに違いありません。むち打ちにより、かなりの出血がありました。その前夜には、イエスは、大祭司の警備の役人に無慈悲に殴られました。そして、今度はローマ人たちでした。イエスの体力がなくなっていくのを見て、この兵士はおそらく、

この人シモン軽くたたいて十字架を担がせたのでしょう。面白いのは、シモンがアレキサンデルとルポスの父であると説明されていることです。私たちにとって、それはマルコがその人の息子の名前を挿入していると言う事実以外に何の意味もありませんが、マルコがこの福音書を書いて宛てた人たちには、おそらく何か意味があったのでしょう。その人たちは、アレキサンデルとルポスのことを知っていました。マルコの福音書は、ひょっとするとローマにいたクリスチャンのためにまず書かれたのではないかと考えられています。面白いのは、パウロがローマ人に手紙を書く時に、最後の章であいさつを書いている際に、「ルポスによろしく。また彼と私との母によろしく。(ローマ16:13)」とのべています。つまり、パウロは、この女性が自分にとって母のような人であると言っているのです。ルポスの母です。ですから、このルポスのことかもしれません。彼らはルポスのことを知っていました。ルポスの父はシモンでした。シモンがゴルゴダにたどり着いたとき、ひょっとするとシモンは、「もう1マイル担いだのだから、もう俺はこれでやめさせてもらおう。」と思っていたかもしれません。しかし、イエスに対して何か興味がそそられるものがあった可能性もあります。十字架を担いでいた時でさえ、イエスに引かれていたかもしれません。それで、シモンはそこで待っていたのでしょう。彼らがイエスの手に釘を打っている時、イエスが、「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。(ルカ23:34)」と言われるのをシモンは聞いたかもしれません。おそらくシモンは、それに興味をそそられ、そこにずっと長くいて、イエスを信じる者になったのかもしれません。使徒行伝13章に、アンテオケの教会において、このアンテオケの教会の重要な立場にいた人がいましたが、その人の名前はシメオンでした。これは、シモンの別名でした。そこには、「ニゲルと呼ばれる(使徒13:1)」と書かれていますが、それは浅黒い(swarthy)肌の意味です。アフリカ人のことです。クレネ人であったので、その使徒行伝13章のシメオンは、マルコの福音書のシモンであった可能性は十分あります。シモンが回心し、後に教会に知られる人になっていたのでしょう。

ですから、アレキサンデルとルポスの父のシモンが、「いなかから出て来て通りかかったので、彼らはイエスの十字架をむりやりに彼に背負わせた。そして、彼らはイエスをゴルゴ

タの場所(訳すと、「どくろ」の場所)へ連れて行った。(15:21-22)これが、「どくろ」の場所と呼ばれたのは、丘陵の斜面の輪郭のためです。もちろん現在も、エルサレムにあってヘロデの門とダマスコの門の間地点にある、ソロモンの採石所と呼ばれている場所の向かいの城壁の上に立ち、バスの停留所の上を眺めると、モリヤの山の頂上を見ることができ、横には頭蓋骨のように見える洞穴(cave)ができています。空洞になっている眼窩と鼻ばしらのようになっています。洞穴の横にはエレミヤの洞窟(Jeremiah's Grotto)と呼ばれている所があります。あるいは、そこが十字架による処刑場だったので、回りにたくさんの頭蓋骨があったからかもしれません。十字架刑になった人の遺体は埋葬しないというきまりがあったので、ただ遺体を十字架から下ろし、ハゲワシやゴミあさりの犬に食べさせ、骨はそのままにしておいたので、その回りにたくさんの頭蓋骨があったからかもしれません。このために、「どくろ」の場所という名前がついたのかもしれません。

「そして、彼らは没薬を混ぜたぶどう酒をイエスに与えようとしたが、イエスはお飲みにならなかった。(15:23)さて、没薬を混ぜたぶどう酒は麻酔のようなものでした。麻痺させて、痛みを感じなくするものでした。実際、エルサレムにいたある女性のグループは、十字架につけられた人たちのことをかわいそうに感じ、会のようなものを結成し、十字架につけられる人たちに与えるための調合薬をつくっていました。それは、十字架にかかっていることの苦しみや痛みをそれほど強く感じないように、異常な精神状態にするためのものでした。それをイエスに与えようとしたのですが、それをお飲みにはなりません。この麻酔を拒否されました。「それから、彼らは、イエスを十字架につけた。(15:24)」いったん十字架が地面に置かれると、囚人は十字架にのせられ、手を横木に置き、手に釘を打ち付けられました。小さな木製の足掛けがあってそこに囚人が立ち、囚人はゆるく縛りつけられると、囚人は死ぬまで十字架にかけられていました。十字架にかけられて、少し時間が経つと、筋肉がだらりとし体の関節が外れ始めるので、強烈な痛みを襲われます。体が十字架にかけられているため、重力がかかり、関節が外れ始めると、強烈な痛みを襲われます。もちろんこれは、詩篇22篇に、「私の骨々はみな、はずれました。(14節)」と説明されています。通常

は窒息死によって死にました。筋肉がだらりとし十字架にかかっていると、もはや呼吸ができなくなってしまいます。窒息死です。囚人から服を脱がせます。処刑する4人の兵士で囚人の服を分け合うのが、習慣となっていました。しかし、イエスの場合は、彼らは上着(garment)を4つに分けました。しかし、この衣服(robe)は特別なもので、イエスにお供をしていた女性の一人がつくったものに違いありませんが、「それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。(ヨハネ 19:23)」兵士たちは、「これはすてきなもので、4つに裂いてしまうには、もったいない。くじを引こう。」と言いました。彼らは着物は分け合ったが、下着のためにくじを引きました。このため、ここに詩篇22篇18節が成就されました。

「彼らがイエスを十字架につけたのは、第三時(新改訳脚注参照)であった。」つまり午前9時でした。ゴルゴタで、イエスが上げられた時でした。「イエスの罪状書には、(15:26)・・・」この罪状書を掲げて通りを歩き、それを十字架の上に釘付けにしました。それは、囚人が十字架にかかっている時に、告発され有罪になった罪状をみなが見るためでした。「・・・『ユダヤ人の王。』と書いてあった。また、彼らは、イエスとともにふたりの強盗を、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけた。(15:26-27)」イザヤ書53章12節が成就されました。「彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。」そして、「こうして『この人は罪人とともに数えられた』とある聖書が実現したのである。(訳者注:マルコ15章28節について、欽定訳には、この記述がある。新改訳の場合は脚注参照のこと。)」とマルコは教えています。「道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。(15:29)」これで、人々の様子を想像することができます。イエスが十字架にかかられていた時に、人々はただただ叫んでいたのです。頭を振りながら、口汚ない言葉や嘲りの言葉を叫んだのです。「おお、神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。(15:29-30)」人々がイエスにしるしを求めた時、イエスは、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、3日でそれを建てよう。」と言われました。すると、彼らは、「この神殿は建てるのに46年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」しかし、イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのです(ヨハネ 2:18-21参

照)。しかし、彼らはまたこのことを持ち出して来たのでした。「おお、神殿を打ちこわして3日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」と。

「また祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。『他人は救ったが、自分は救えない。』(15:31)」それは、何と真実なことでしょうか。もし、他人を救うためなら、イエスはご自分のことを救うことはおできにならなかったのです。もし、イエスがご自分を救ってしまわれたのであれば、イエスは、あなたのことを救うことはおできにならなかったのです。「他人は救ったが、自分は救えない。」祭司長がこの発言をした時に、自分の言ったことがいかに正確であったか、気づいていなかったに違いありません。イエスは、降りてくることもおできになりました。私たちにはそのことがわかっています。イエスはペテロに、「わたしを救うために、1万の御使いを呼ぶこともわたしにはできることができないとでも思うのですか(マタイ 26:53参照)。しかし、父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。(ヨハネ 18:11参照)」と言われました。したがって、十字架に上げられること、十字架にかかることにより、神のあなたへの愛がどれほどのものかをイエスは証しされました。神は、あなたの魂を罪から救うために、喜んで究極のことまでしてくださったのでした。神のあなたへの愛を決して疑ったり、疑念を挟んだりすべきではありません。万一、疑念を挟んだりするようなことがあるなら、十字架を振り返って下さい。十字架において、神はあなたがたに対するご自身の愛を明らかにし、示して下さいましたが、それは私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことによるのです(ローマ 5:8参照)。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。(1ヨハネ4:10)」決して、絶対に神の愛を疑ってはなりません。「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。(ローマ 8:32)」ですから、ここに私たちは、神の愛がとても力強く示されているのがわかります。イエスは十字架にかかり、十字架にかかってくださっているときに、様々な虐待を身に受けてくださいました。「キリスト、イスラエルの王さま。た

った今、十字架から降りてもらおうか。(15:32)」と彼らは言っていました。律法学者たちは言っていました。「『われわれは、それをみたら信じるから。』また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった。(15:32)」さて、ルカは後で、二人のうち一人の心が変わったことを伝えています。最初の一人は嘲り続けましたが、この男は、「『おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰をうけているではないか。われわれは、自分のしたことの報いをうけているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。』そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。』(ルカ23:40-42)」みなさん、この話を覚えていらっしゃるでしょう。それについては、次にルカの福音書に入ったときに、やることにしましょう。

「さて、第六時」、あるいは、正午「になったとき、全地が暗くなって、第九時まで続いた。(15:33 新改訳脚注参照)」さて、これは日食として説明をつけることはできません。過越が満月にあたるので、満月の時に完全な日食になるのは不可能です。よくご存知のように、満月の時は、太陽が沈む時に満月が昇ってくるからです。完全な日食になるのは、月が太陽の前を通過する時に起こります。それがその時点で、地上に影と闇をつくります。一年のどの時かによって、完全に覆われることがあるのです。しかし、満月の時はそのようなことは不可能です。ですから、この暗闇の現象を日食とは何か別の方法で説明する必要があります。アモス書に、とても興味深い預言があります。8章9節です。「その日には、一神である主の御告げ。— わたしは真昼に太陽を沈ませ、日盛りに地を暗くし、…」ですから、日盛りに(晴れた日に)地が暗くなったのです。「あなたがたの祭りを…」さて、これが起きたのは、過越の祭りの日でしたね。その祭りは、大いなる喜びの祭りでした。それは、神が父祖をエジプトでの奴隷から救ってくださったことを喜んだからでした。「あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたのすべての歌を哀歌に変え、すべての腰に荒布をまとわせ、…」荒布はふつう死の時にまといました。「その日を、ひとり子を失ったときの喪のようにし、…」私は、このことが非常に重要であると考えます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハネ 3:16)」「その終りを苦い日のようにする。(アモ

ス 8:10) 」すごいアモスの預言です。ここに、その成就がみられます。第六時あるいは正午から、イエスが息を引き取られた第九時まで、全地が暗闇で覆われました。3時間の暗闇があって第九時になりました。自然すらこの恐ろしい罪を見ようともしませんでした。イエス・キリストの死に、人間の罪が拡大され具現化されました。最初の罪は自殺(suicide)のようなものでした。それは、神がアダムに、「その木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。(創世2:17参照)」と言われたからです。自分で死刑宣告をすることとなる、と。ですから、食べることにより、アダムは自殺をしたのです。聖書に記述されている二番目の罪は、兄弟殺しの罪(fratricide)でした。それは、カインが兄弟のアベルを殺した時でした。今度は神殺し(deicide)の罪です。人間が神を殺そうと試みる罪です。さて、人間は、そのような試みをやめてはいません。現在でも依然として、神を殺そうとしている人がたくさんいます。それらの人々は、人が持つ神への信仰を抹殺しようとしているのです。彼らは、神に歯向かっています。神という考え、神概念を抹殺しようとしているのです。残念なことに、私たちの教育制度や司法制度の中で、彼らが突出した権力のある地位を得ているため、社会や国民生活から神を根絶しようとする彼らの試みはかなり効果的に行なわれています。彼らは、常に絶えず神を滅ぼそうとしています。ここでのイエスの十字架刑は、神を滅ぼそうとする試みでした。この試みは、現在も続いています。

「そして、第九時に、イエスは大声で、『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。』と叫ばれた。それは訳すと『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。』という意味である。(15:34)」これは、詩篇22篇1節の言葉であることがわかっています。ラビが教える時は、よく詩篇の1節を読みました。人々は詩篇に精通していたので、1節を読みさえすれば、その詩篇が人々の心に浸透しました。ひょっとすると、イエスは、弟子たちに、戻って詩篇22篇を読みなさいと注意を引いておられたのかもしれませんが。弟子たちが戻って詩篇22篇を読めば、何が起きているのか理解できるのです。これは、預言の成就です。事態を掌握できなくなったのではないのです。神は依然として事態を掌握しておられます。私たちの人生における出来事において、事態の掌握ができなくなったと感ずることが多いのですが、

そうではないのです。神は事態を掌握しておられます。神は支配されています。弟子たちは、人間が神を支配することなど恐ろしいことだとおそらく感じていたでしょうが、家に戻り詩篇 22篇を読んでいただければ、これが神がお決めになられたご計画の一部であることがわかります。これは、神がご自身の愛を世に示されるご計画でした。しかし、イエスの死によって、すべてに救いがもたらされるのでした。すべての人がイエスは主であると認める時が来ます。この詩篇の最後は、墓の中にいる者さえも、世界全体が、イエスを認めるとさえ綴っています。後にイザヤ書で預言され、パウロが語ったことは、「すべてが、ひざをかかめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(イザヤ 45:23-24 参照、ピリピ 2:10-11)」です。ですから、これらはすべて神のご計画の一部なのです。家に戻ってお読みください。しかし解釈の際に、「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」そして、続けて「遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。わが神。私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。」とありますが、しかし、3節で捨てられた理由が言われています。「けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。」神の聖さのために、神が私たちみなをイエスに課せられたときに、交わりを絶つ必要があったのです。その瞬間に、神はイエスにあなたの罪と私の罪と世界の罪を置かれました。イザヤが叫んだように、「私たちみなのとがを彼がになった。(イザヤ 53:11 参照)」のです。そして、彼は私たちの民の咎ために叫ばれ、彼は打たれました(イザヤ 53:8 参照)。ですから、私たちの罪を負ってくださった時に、神が私たちの罪を彼の上に置かれたとき、イエスは罪の結果を苦死んでくださいました。それが、父から離れることでした。「神(訳者注:英語では主ではなく神となっている。)の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎があなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、…。(イザヤ 59:1-2)」神から引き離されること、それは常に罪の結果です。イエスが私たちの罪を負ってくださった時、イエスは父から引き離されました。このための叫びでした。何たる痛ましい叫びでしょうか。「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」イエスは弟子たちに、「あなたがたはみな私を見捨てます。それはあな

たがたはみな、つまりくからです。あなたがたはみな私を見捨てるからです。(マルコ 14:27参照)」と言われました。というのも、聖書が、「わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる。(ゼカリヤ13:7参照)」と教えているからです。ですから、イエスは弟子たちがご自身を見捨てることをご存知で、予期しておられました。しかし、この時父がイエスをお見捨てになったということによってだけでも、イエスは、あなたを罪から贖う代価を支払ってくださったのです。ああ、イエスは何とすばらしい救い主なのでしょう。我がイエスは。イエスは何とすばらしい救い主なのでしょう。我が主イエスは。私が永遠に神から引き離されることがないために、その瞬間にイエスは、自ら進んで御父から引き離されてくださったのです。これは、何とすばらしいことでしょうか。もう、私は神から引き離されることはありません。それは、イエスが私の罪を負ってくださり、私のために、神から引き離されてくださったからです。

「そばに立っていた幾人かが、これを聞いて、『そら、エリヤを呼んでいる。』と言った。(15:35)」彼らはローマの兵士でした。彼らは、ヘブル語を知りませんでした。「エロイ、エロイ」が、「わが神、わが神。」であったことがわかりませんでした。彼らは、エリヤと聞こえたと思いました。それで、イエスがエリヤを呼んでいる、と思ったのです。もしかすると、兵士たちは、イエスが譫妄状態(delirium)に陥った、気がふれたと思った可能性もあります。すると、ひとりが走って行って、海面に酸いぶどう酒(訳者注:欽定訳では、vinegar、「酢」となっている。)を含ませ、イエスの唇に近づけました。それで、詩篇69篇21節が成就しました。「私が渴いたときには酢を飲ませました。」むろん他の福音書は、この叫びとともに、イエスが、「わたしは渴く。(ヨハネ 19:28)」と言われたと教えています。すると、ひとりが走って行って、海面に酸いぶどう酒を含ませ、イエスの唇に近づけましたが、他の人たちは、「いや、いや、待て。ひよっとすると、エリヤが来て、彼を助けるかもしれない。ひよっとすると、劇的なことが起こるかもしれない。」と言いました。「それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。(15:37)」他の福音書は、何を叫ばれたのか教えています。イエスは、「完了した。(訳者注:ヨハネ 19:30 It is finished.)」と叫ばれたのです。ギリシャ語では、一言

です。完了(finished)、テテレスタイ(tetelestai)です。人間の贖いは完了したのです。大声で、「完了した。」と。「イエスは…息を引き取られた。(15:37)」あるいは、他の福音書ですと、「霊をお渡しになった。(ヨハネ 19:30)」、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。(ルカ23:46)」となっています。

「神殿の幕が上から下までま真二つに裂けた。(15:38)」これは重要です。それを裂かれたのは神でした。他の福音書は、地震があったと教えています。地震で、実際岩が裂けました(マタイ 27:51参照)。地震の時に、神殿の幕が、聖所と神の臨在のある至聖所を隔てていた重い幕が裂けたのでした。聖なる神の臨在される至聖所には、人が入ることが許されていませんでした。そこは、大祭司だけしか入ることができませんでした。しかも、それは一年に一日だけでした。しかも、たくさんの犠牲を捧げたあとでしか入ることができませんでした。そして、大祭司の足には、衣の縁についている鈴(出エジプト 28:33-34 参照)がちりんちりん鳴るのがやんだ時のために、ロープが縛られていました。鳴るのがやんだら、人々は、犠牲に何か不都合があって大祭司が死んだことがわかりました。それで、大祭司の足にはロープがつけられていて、人々はそれを引っ張ればよいようになっていました。人々は中に入って大祭司を連れ出すこともできませんでした。ですから、足にロープが縛られていたのでした。これでは、中に入るのが心細くなります。足にロープがつけられていて、万事うまくいきますように、という感じです。神の臨在されるところに入って行く時に、細部まできちんとやったかな(訳者注:英語の直訳だと、i にきちんと点をつけ、t に横線を引いたかな)、と。すべて完璧かな、という感じです。普通の人は、そのようなことはできませんでした。人々のために祭司が入っていったのです。しかし、神は今や、全ての人が入ることができるようになった、とおっしゃっているのです。「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル 4:16)」ですから、今や私たちは、イエス・キリストを通して、神に近づくことができます。「神は唯一です。また神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。(1 テモテ2:5)」、この方が、神のおられる所へつな

がる道を備えてくださいました。その道は、愛によってしるしがついていますが、この道が私たちは神のいらっしゃる家へ導いてくれます。ですから、私はここの箇所が好きです。神が裂いてくださって、「お入りなさい。」とおっしゃっているのです。道はできたのです。イエス・キリストをとおして、道が備えられました。あなたの罪は覆われただけではなく、今や罪は取り除かれたのです。旧約聖書では、罪を覆うための箱を造りましたが、今やイエス・キリストをとおして、罪は取り除かれたのです。ですから、イエスキリストをとおして来る者はすべて、御父に近づくことができるのです。

「イエスの正面に立っていた百人隊長は、…(15:39)」この百人隊長は、十字架刑のほぼ全容を見ていたのですが、「イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『この方はまことに神の子であった。』と言った。また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。(15:39-40)」ヨハネは、イエスの母のマリヤもいっしょに、マグダラのマリヤともう一人のマリヤ、これは小ヤコブとヨセの母のマリヤですが、それとサロメもいたと伝えています(ヨハネ 19:25、マタイ27:55-56参照)。これら、イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たち、弟子たちといっしょに旅をし、食事の用意をしてきた女たちは、このグループとは切っても切り離せない一部となっていました。その女たちがそこに立って、見ていました。「イエスがガリラヤにおられたとき、いつもつき従って仕えていた女たちである。このほかにも、イエスといっしょにエルサレムに上ってきた女たちがたくさんいた。(15:41)」ですから、かなりたくさんの方々が立っていたのです。イエスの母のマリヤとマグダラのマリヤは、イエスが十字架から話をするほど近くにいました。愛する弟子ヨハネも近くにいました。イエスがヨハネにお話になり、イエスの母の面倒をみることをヨハネにまかせたからです(ヨハネ 19:26-27)。それは、ヨハネの福音書に記録されていますが、それについてはそこを学ぶ時にやります。

「すっかり夕方になった。(15:42)」イエスは、午後3時ごろ死なれました。イエスは、午後6時までには葬られなければなりませんでした。その次の日が、安息日だったからです。それは祭りの大いなる日でした。種なしパンの祭りの第一日目で、それは安息日でした。また、

それは聖なる日でした。この週には、安息日がだぶってありました。「その日は備えの日、…」つまり、夕方6時までには、全ての備えをしていなければなりませんでした。その時に安息日が始まり、それ以降は何もすることができなかつたからでした。ですから、夕方になっていました。「その日は備えの日、すなわち安息日の前日であったので、アリマタヤのヨセフは、思い切ってピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを」懇願した (craved)、あるいは、「願った(begged)。ヨセフは有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいた人であった。(15:42-43)」さて、ピラトは、イエスがすでに死んだことを知りませんでした。それで、イエスがもう死んだと聞いて驚きました。ピラトはそこにヨセフがおり、「もうイエスは死んだのか。」と驚きました。それで、ピラトは、百人隊長を呼び出し、イエスがすでに死んでしまったかどうかを問いただしました。百人隊長が、「はい。実際、イエスはすでに死にました。」と確認すると、ピラトはイエスのからだをヨセフに与えました。「そこで、ヨセフは亜麻布を買い、イエスを取り降ろしてその亜麻布に包み、岩を掘って造った墓に納めた。墓の入り口には石をころがしかけておいた。(15:46)」それで、イザヤ書53章9節が成就されました。「彼は富む者とともに葬られた。」ですから、アリマタヤのヨセフが自分の墓にキリストを葬ったのです。今日は園の墓が、聖地において一番美しい場所の一つだと思います。そこが実際の墓だったかどうかは憶測の域ですが、その描写にあっている場所でその墓を見るのは、すばらしい体験です。たとえこの墓でなくても、ヨセフがイエスを葬ったのはそれに類似した墓であったに違いありません。岩を掘って造った墓です。むろんエルサレムには、そのような墓がたくさんあります。そしてその前には、石が転がしかけてあります。そのいくつかは王の墓です。そして、ダビデ王ホテル(King David Hotel)の近くには、ヘロデの墓と呼ばれている墓があります。これらの墓は岩を掘って造った墓です。「いったいなぜ、この人が、…」と言った人がいます。非常にお金がかかることで、金持ちだけが実際墓に埋葬されました。その他の人たちは、肉を食う棺である石棺(sarcophagus)に入れられました(訳者注:“sarcophagus”のもともとの意味は「肉食の」であり、この石が死体の肉を分解・吸収すると考えられたために棺石として利用されました)。金持ちだけが墓に埋葬されました。なぜこれだけ金を払ったのでしょうか。園に水をやるための貯水池が園

の墓にあって、かなりの出費です。なぜ自分の墓のためにこれだけの準備をしたのに、なぜそれを他の人に与えてしまったのでしょうか。誰かが、「週末だけだったじゃないか。」と言いましたが……。マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとはついて行った、と締めくくられています。彼らはついて行ったので、墓がどこにあったか知っていました。これで、イエスの復活である次の章のお膳立てができあがりました。

マルコの福音書16章(Mark16)(#8044)

では、マルコの福音書16章を開きましょう。マルコの福音書の最後の章まで来ました。来週はルカの福音書を始めます。

マルコの福音書16章に入りますが、9節から最後の節までのこの章の最後の部分に、疑問や疑念を抱く人たちがいることを知っておくべきでしょう。疑問や疑念の理由は、この章のこの部分の正確性や真正性(authenticity)についてです。と言いますのも、最も古い写本2つでは、この部分が削除されているからです。シナイ写本(Siniaticus)として知られているものと、もう一つバチカン写本(Vaticanus)として知られているものが、その写本です。1800年の半ばに、ティッシェンドルフがシナイ地域のカタリナ修道院で、古代の獣皮紙を発見しました。それは、火をおこすのに使われていたものでしたが、調べてみると聖書の古代の写本であることがわかりました。おそらく、そこにあった本文の量について言えば、現存では最も古い写本の一つです(訳者注:「本文(text)」は、日本語や英語などの聖書の原文になっている原本のことを指します。しかし、それはすべて写本(manuscript)であり、写本の原文(original)は失われています。)。この写本の発見が発表されると、ほどなくバチカンは、バチカンから古い写本、B写本と知られている写本を取り出しました。コデックス・シナイ写本の方は、オリーブと呼ばれています(訳者注:コデックス(codex)は、現代の本の形にされたものを意味しますが、「コデックス」のみで、シナイ写本とバチカン写本を指しません。)。これら二つの写本は、かなり類似していることがわかりました。しかし、完全に類似していたわけではありません。二つの写本の間には違いがありました。聖書の改訂作業を行なう際に、この作業にかなりかかわった人物が二人いましたが、それはウエストコットとホートでした。彼らはギリシャ語の学者で、ギリシャ語の本文を編纂しましたが、その際コデックス・シナイ写本とコデックス・バチカン写本の二つの古代文にかなり依存しました。これら二つの写本は、判明している限りにおいては、紀元420年、430年ごろにさかのぼるも

のです。この二つの写本から、マルコの福音書のこの最後の部分が削除されているので、彼らは、改訂版の本文からも削除するか、最古の写本にはないことを少なくとも特記する必要があると感じました。多くの現代翻訳版には、このような注がたくさんあります。多くの場合、最古の写本と呼んでいますが、中にはずうずうしくも最良の写本と呼んでいるものもあります。なぜ私がずうずうしくも言ったかという、これらの写本が本当にどれだけ良い写本なのか追及する余地がかなりあるからです。当時の何人かの学者、といっても主にシュリブナーとディーンバージンですが、彼らが絶大なる信頼を置いていたコデックス・シナイ写本について、何と言っていたか読んでみましょう。「この文書が最初に記されて以来、修正と訂正の試みがなされたのは10回ほどである。」つまり、これは抹消された箇所のことです。10人の異なる修正者が目を通し変更をしましたが、「多くは、ずっと後の6世紀から8世紀のことであった。」シュリブナー博士は、1864年に、コデックス・シナイ写本の完全な対比を出版しました。それには、説明のはしがきがついていましたが、そこで様々な興味のある点について書いています。「とりわけコデックスについては、至る所に加筆修正が加えられており、その内容は明らかに訂正の性格を帯びたものである。少なくとも10人の異なる修正者がいて、あるところではほぼ系統的に毎ページに及んでいたり、別のところでは所々のものもあり、写本の限定された部分の場合もある。これらの多くが最初の筆記者と同年代の人物で、おおむね6世紀から7世紀の人物である。知性のある読者なら、このコデックス・シナイ写本の作業の偉大さを難なく気づくはずである。修正者が評価した文書がここにある。修正者はコデックス・シナイ写本を評価したが、その唯一の理由は、それが古いものであり非常に純正なので、その他全ての聖書の写本を吟味し訂正する際の基準としてみなされるべきものである・・・19世紀の学者の推定はこのようなものだが、その写本の文面は、その写本を最初に持っていた人から数百年後までの人たちはその写本が非常に純粋性に欠けると評価したので、すべての部分について訂正を必要とするものであったとの証拠を露呈している。」

聖書はこれまで、いわゆる高等批評(訳者注: higher criticism 聖書各書の文学的歴史

的研究)を受けてきました。彼らは、聖書はどのような他の古代文とも同じで、どのような他の古代文と変わらぬ研究をすべきであり実は靈感を受けた神のみことばではない、という前提をもって聖書を読みます。聖書が神の靈感を受けたのではなく無謬ではないということで、誤りを見つけたり、矛盾や証拠を見つけようとします。このような人たちは、長いこと聖書にけちをつけ続けています。高等批評学派は、ウエストコットやホートといった人物を輩出しており、コデックス・シナイ写本とコデックス・バチカン写本を用いて、自分なりのギリシャ語の本文を作成しました。それに基づき、改訂版(Revised Version)ならびに事実上全ての現代の訳本が出てきているのです。基本的には二つの本文の系統があり、バチカン写本とシナイ写本が出たアレキサンドリヤ学派の本文があり、そしてもちろん、大半の本文を網羅している公認本文(Received Text)があります。特記すべきことは、大半の本文にマルコの最後の部分が入っていることです。マルコの福音書の最後の部分が入っていない写本は、先に言及した二つだけです。しかし面白いのは、コデックス・シナイ写本が写されるはるか前に死亡した初代教会の教父の多くが、マルコの福音書の最後の部分を引用していることです。教会史のはじめの頃、紀元140年から202年に生存していたイレニウスは、このマルコの福音書の最後の部分から引用しています。一番古い文書だというのが主な理由でコデックス・シナイ写本を使っているのであれば、「一番古い文書だから、おそらく最も正しいであろう。」と言うのであれば、コデックス・シナイ写本が書かれた200年も前にイレニウスが引用した文書は何であったかを説明する必要があります。紀元130年から235年に生存していたヒッポレイタスも、このマルコの福音書の最後の部分から引用しています。明らかに、彼らはさらに初期の写本から引用しています。ですから、古いから正しいはずだという考えはおじゃんです。なぜなら、聖書教師がマルコの福音書の最後の部分から引用しているからです。ですから、ディーンバーゲンがコデックス・シナイ写本について、どのように言っているかをお読みしましょう。控え目に言ってもあまり高い評価ではありません。彼は、コデックス・シナイ写本の非純正性について語っています。「それは、ほぼ、コデックス・シナイ写本を熟知している人なら十分に認識するところである。もし、証拠としての真価が正しく推定されるのであれば、この古い写本について他の特徴を考慮に入れなけ

ればならない。したがって、これは著しく不注意か、能力がないか、あるいはその両方であった筆記者の作品であるという結論に達する内在的証拠がある。この写本の場合、行の配列が特異であり各ページが縦4段組みになっている。各行は12文字になっており、すべて大文字で間隔なしに書かれている。」つまり、言葉を区切ろうとしていないのです。すべてが大文字で、間隔なしに書かれています。「行の終りで言葉を終わらせる試みがない。2文字しかない単語でさえもそうである。例えば、en とか ek さえも真ん中で切れていて、最後の文字が新しい行に続けられている。」控え目に言っても非常に特異な写本です。「その直前の行に、十分余裕があるのにもかかわらずである。このもう一つの特異性によって、筆記者の性格と能力についての考察ができる。おそらく幼稚園児がやったものだろう。」それだけではなく、シュリブナー博士はこう述べています。「この写本は、行が似たように割り付けされた写本に由来している違いない。というのは、筆記者は時に、ちょうど一行に相当するほどの文字の脱字をしているからである。」つまり、筆記者はまる一行飛ばして、その行を埋めるほどの文字があるはずですが、それらが脱字になっているのです。「しかも、それは全く意味をなさなくなるほどになっている。」つまり、その行が飛んでいるために、書かれたものがまったく意味をなさないということです。「それは、あたかも筆記者の目がすぐ下の行に動いてしまったかのようなのである。」シュリブナー博士は、「まる一行が飛んでいる場合もあるし、書き写している途中の行から、それに相当するすぐ下の行に飛んでいる場合もある。」と述べています。ですから、行が途中まで書かれ、強引に次の行の次の部分が書かれているのです。「このことから、写本作成の作業をした筆記者が不注意で、能力がなかった両方であることは明白である。注意深く写本をした人なら、上記のような間違いやその他の間違いをこのように頻繁に犯さなかったであろう。最低の能力の筆記者であっても、ページを読み返して、脱字で意味がまったく不明になってしまった文章に気づいて訂正したであろう。」つまり、もしこの筆記者が自分の書いたものを見返しさえすれば、その行を飛ばしてしまったことに気づいて、飛ばした部分を挿入し意味がなすようにしただろう、ということです。ですから、筆記者の性格に関してディーンバージンは、こう言いました。「これらのコデックスに示されている非純正さは、意見の問題ではなく事実である。福音書だけをとって

みても、コデックス」これはバチカン写本のことですが、「言葉や句全体が抜けている箇所
が、1,491を下らない。すべてのページにおいて、不注意な写本作業の痕跡を見ることが
できる。コデックス・シナイ写本には、目とペンによる誤謬であふれ、それは、最も重要な文
書にはふさわしからぬ、いやむしろ異例な度合いとなっている。まさに不注意さのために、
10、20、30、40もの言葉が脱落している場合が多くある。文字や、単語や、まる一行さえ
も二度も繰り返して書かれていることがよくあり、あるいは、書き始めているのにすぐに抹
消されたり、その直前の句の終りが同じであるためにある句が脱落しているといった、甚だ
しいばかな間違いが、新約聖書中に、115箇所を下らない。そこで、コデックス・バチカン
写本は、次の点で公認本文(Received Text)とは異なっている。コデックス・バチカン写本
は、少なくとも2,877語の脱字があり、536語が付け加えられており、935語が代替され、
2,098語の順序が入れ替えられており、1,132語が変更されており、計7,578箇所の
言葉の相違点がある。しかし、シナイ写本はさらにひどく、言葉の相違点は合計9,000箇
所以上にもものぼる。」ですから、多くの聖書には最も古い写本と記されていますが、それら
はマルコの最後の部分を欠いています。また、マルコの最後の部分を入れているものにつ
いても、最も古い写本の中にはこの部分を欠くものがあると記していることがよくあります。
その写本は二つであり、シナイ写本とバチカン写本ですが、今いかにいい加減な作業であ
ったかをお読みしました。

ですから、その部分を欠くと、イエス・キリストの復活の話が本当は終わらないのです。こ
れら二つの写本には欠けている部分の前の節、つまり8節を読みます。「女たちは、墓
を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そして
だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。(16:8)」話を終えるには、ものすごい
ところではありませんか。すっかり震え上がって、逃げ去り、それについて話すのも恐ろし
かった。完。それではまだ復活の証拠もありません。イエスがマグダラのマリヤに現れたこ
となどもありません。そこで話が切れてしまいます。そこが話を切る場所ではないことは明
らかです。ですから、誰かがコデックス・シナイ写本は最良の写本の一つだと言っても、欺

かれてはなりません。それは最悪の写本の一つなのです。それに絶大なる信憑性をおいても、単なる無知か、意図的に欺かれているのです。お粗末な、お粗末な写本なのです。ウエストコットとホートがしたように、絶大なる信憑性をおくためには、他の動機をさがさざるをえません。ただ、ニューエージ説は私はどうもいただけません。これは、ニューエージの陰謀の一端だという説です。ニューエージ版(New Age Version)という本の価値は、聖書を変えようとするニューエージの人たちの陰謀を探ることではありません。この本の価値は、本文(text)をつきあわせて比較し、欽定訳に対し現代の翻訳版がどのように変更されているか見ていくことだと思います。欽定訳が、公認本文(Received Text)またはテクスタス・リセプタス(Textus Receptus)の翻訳であることを知っておくべきです。マルチン・ルターの翻訳やウィックリフの翻訳、その他の翻訳は、もちろん公認本文からの翻訳ですが、公認本文は多数本文(Majority of Text)としても知られているものです。この部分は二つの写本からは削除されていますが、千以上の写本には入っているのです。ですから1,000対2の票数です。しかし、どういうわけかこの二つに対し、他の1,000よりもより大きな信憑性がおかれています。他の千以上の写本は様々な出典から来ていますが、この二つの写本とは異なっているという点では、結局みな一致がみられます。この二つの写本については、一方は7,000以上の変更が加えられ、もう一方は、9,000以上の変更が加えられたということを、先程指摘しました。ですから、それを念頭にマルコが何を語っているか見てゆきましょう。

「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤ……。 (16:1)」ああ、もう一つありました。このディーンバーゲンという人ですが、この人はすぐれた学者で、「マルコの最後の12節(The Last Twelve Verses of Mark)」という本を書きました。非常に学究的な本です。その本の中の最終的な結論は、「圧倒的な証拠の量から、それは純正なものであり、そこに属するもので、原典の本文の一部だ。」というものです。マルコの最後の12節のテーマについてこれまでに書かれたどの書物よりも、この著書は詳細で完全にこのテーマについて書いています。

「さて、安息日が終わったので、…(16:1)」これは、土曜日の安息日のことです。聖書から、二つの安息日が続けてあったことがわかります。もちろん種なしパンの祭りがあり、種なしパンの祭りの初日は、律法によると安息日でした。ですから、続いて二つの安息日があったようです。一つは金曜日で、もう一つは土曜日でした。これは土曜日の安息日でした。「それが終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。(16:1参照)」この前の章から、この女たちはイエスの十字架刑を遠くの方から立って見ていました。40節です。また、この女たちは、ヨセフがイエスのからだを下げ渡された時ついて行き、ヨセフが墓に納め、墓の入り口に石がころがしかけられるのを見ていました。彼女たちは安息日の朝早く(訳者注:「安息日の後の」の意味か?)、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を持って行ったのでした。「そして、週の初めの日の早朝、日が上がったとき、墓に着いた。(16:2)」さて、マグダラのマリヤと女たちが、(墓に)来るために出発したのははっきりしていますが、マグダラのマリヤは他の女たちより急いで先に来たに違いありません。まだ暗いうちに墓に到着しました。マグダラのマリヤは、墓から石が取りのけられているのを見て、想像をしました。墓から石が取りのけられているのを見て、墓の中まで入って調べたのではなく、人々がイエスのからだを取っていった、と想像をしました。ですから、マグダラのマリヤは走って行って、ペテロとヨハネにイエスのからだが取っていかれた、誰かが移動したと伝えました。もちろん、ペテロとヨハネは墓のところに走っていきました。その一方で、他の女たちが到着し、マルコはその女たちがどうなったかを伝えています。彼女たちが着いたときに、イエスが置かれたところに御使いが座っているのを見ました。そして、女たちは急いで戻り、御使いが言ったことを弟子たちに伝えました。そして、ペテロとヨハネが到着しました。ヨハネのほうがペテロより早く着きましたが、ペテロの方が先に入り、ヨハネは外で待っていました。そして、イエスが巻かれていた布切れが置かれているのが見つかりました。布切れはありましたが、からだはありませんでした。すると、ヨハネは直ぐにその重要性に、イエスが実際によみがえられたことに気づきました。この2人が去って、この2人に伝えたマリヤが戻ってきて、そこにいたときに、御使いは彼女が涙にむせび泣いているのを見て、「なぜ泣いているのですか。」と言いました。彼女は言

いました。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女が振り向くと、イエスがそこに立っておられましたが、彼女はそれが園の管理人だと思いました。イエスは、「女よ、なぜ泣いているのですか。」と言われました。すると、マリヤは、「だれかが私の主を取って行きました。」と同じことを言いました。ですから、これが出来事の経緯でした。福音書をつなぎあわせると、全体の相関関係がわかり、このような話になるのです。そして、マリヤはイエスを見てすがりつき、イエスは、「マリヤ、わたしにすがりついてはいけません。弟子たちのところに行って、私が確かによみがえったことを伝えなさい。」と言われました。それで、マリヤは弟子たちのところへ行って伝えたのです。(訳者注:以上、4つの福音書の復活の記述を参照してください。)

ですから、これらの女たちは、週の初めの日、つまりこれは日曜日でしたが、その早朝、日が上がったとき、墓に着きました。「彼女たちは、『墓の入り口からあの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか。』とみなで話し合っていた。(16:3)」さて、もし、あの地にある墓とその前にある石のいくつかを見たことがあるなら、彼女たちの質問を理解することができます。私自身、背中を壁につけて、足を踏ん張って、石をころがそうとしたことがあるのですが、できませんでした。かなりの重さで、しっかりと据えてあります。ですから、女たちがなぜ、「あの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか。」と質問をしたのか私には理解できません。といたしますのも、石は大きいと書かれているからです。からだを埋葬する洞窟の入口の前には、ころがしておく石は、大きいのです。ですから、あの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか、と彼女たちは気がかりでした。心配していました。ちょうど私たちの心配の多くのように、不必要で、必要のないことだったのです。というのも、彼女たちがそこに着いたときには、すでにその石がころがしてあったからです。ここで、あの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか、と心配していましたが、すでにそれは済んでいたことでした。何か心配していたけれども、着いてみると、既にそれが片付いていたということがありませんか。なぜ、心配したんだろう。なぜ、そんなに心配したんだろう。心配してエネルギーを浪費してしまいました。主が私たちより先に行って、私がそこに行く前に片づけてくださっ

たのに、私は、そのことをしっかり心配していることがあります。精神的なエネルギーをたくさん使って、心配するのですが、そのようなことは全く必要のないことだったということがあります。ですから、彼女たちもそうだったのです。「ところが、目を上げて見ると、あれほど大きな石だったのに、その石がすでにくろがしてあった。(16:4)」

さて、この前の章では、ヨセフがイエスのからだを引き取り、それを亜麻布に包み、墓に納め、墓の入り口には石をころがしかけておいた、というくだりで終わっています。その石の後ろには、墓の中には、イエスのからだがありました。そこには、死んだ神概念が置かれていました。イエスが来られたのは、人間に神を現してくださるためでした。「神は、むかし先祖たちに、預言者また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。(ヘブル 1:1-2)」神の啓示です。イエスは、「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ 14:9)」と言われました。イエスが、御父について私たちに現してくださったものとは何でしょうか。それは、御父があなたに、とても気をかけてくださっているということです。それは、あなたのことを愛してくださっているからです。あなたのために備えをし、あなたの面倒をみ、あなたを見守ってくださり、あなたの人生のこと細かいことまで全て気をかけてくださっています。あなたが思い描いたり悟ったりする以上に気をかけてくださっています。それは、御父があなたを強く愛してくださっているからです。ですから、イエスは、愛の神の概念を人にもたらしてくださいました。怒りの神や裁きの神ではなく、ご自分の被造物を愛される神です。被造物から遠く離れている神ではなく、被造物に果てしなくかかわってくださっている神です。しかし、人間はそのような神概念を拒絶しました。十字架と十字架の出来事を見ると、愛以外のものしか見えません。人間の不道徳、憎しみが見えます。人々が救い主を十字架に釘づけにし、救い主が死なれたときに人々は嘲り、救い主に悪意が注がれました。ヨセフがイエスを引き取り、亜麻布に包んで、墓に葬り、石を入口にくろがしたとき、石の後ろには人間に拒絶された死んだ神概念が置かれていました。石の後ろには、実際、死んだ宗教が置かれていました。確かに、他の宗教とは違いましたが、宗教の側面はあります。神について、また人間がどのように神に近づくかについて、語

っています。そして、人間が神のところに来るべき信仰について、語っています。しかし、他のほとんどの宗教とは違いました。他のほとんどの宗教は人間が神に近づきますが、この宗教は、神が人間に近づくと教えています。地球を基盤とした有限の人間は、決して神に近づくことはできません。しかし、無限の神が有限の人間に手をのべてくださり、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハネ 3:16)」のです。あなたの努力や行ないによって神を喜ばせるような規則や規制を課す宗教とは違い、この宗教は、あなたが最善の努力をしても神を喜ばすことは決してないと教えています。新たに生まれなければならないのです。新しいのち、霊的ないのちの注ぎがなければならないのです。しかし人間は、この宗教を拒絶しました。どれほど腐敗し軟弱であろうとも、人間は、自分の行ないによって怒りの神をなだめようとしつづけます。そしてもし可能ならば、無限の神に到達しようとしみます。石の後ろに、そこにイエスは置かれていました。そこにあったのは死んだ希望です。イエスが宣教をなさっているときに、弟子たちは非常に興奮していました。弟子たちはメシヤについての預言、神の御国が地上に立てられることを知っていました。地が真の平和を体験するようになる時が来て、「彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、二度と戦いのことを習わなくなること(ミカ4:3 参照)」を知っていました。弟子たちは、その御国が、その時建てられることを望んでいました。平和のうちに、子供たちを育てることができるようになり、主の栄光が地を覆うことを望んでいました。しかし、イエスは十字架にかけられ、彼らはイエスを墓に葬り、墓の入口に石をころがしかけておきました。そして、石の後ろにあったのは、死んだ希望でした。エマオへの途上で、弟子たちは、「この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。(ルカ24:21)」と言いました。しかし弟子たちは、それを過去形にしていました。「それなのに、この方を十字架につけたのです。この事があってから三日目になります。(ルカ24:20-21参照)」希望は打ち砕かれてしまいました。

さて、石が墓の入口からころがされていたというのは、どういう意味でしょうか。つまり、こうです。神概念は死んではいない。神は愛してくださる神だということ、それは真理だという

ことです。。神はあなたのことを気にかけてくださっています。あなたの人生のあらゆる面を深く気にかけてくださっています。つまり宗教は死んではいない、生きているということです。人間は自分の努力では神に到達することができませんが、神が人間に手をのべてくださり、ご自分の御子の犠牲によって、神は、人間が自分の罪を赦され、永遠の神と交わりをすることができる道を備えてくださいました。つまり、イエスがはっきりおっしゃったように、ただ信仰によって、神を信じることによって、あなたが神を知り、神と交わりを持つことができようになるということです。つまり、生ける希望があるということです。ですから、ペテロは、「イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが生ける望みを持つようになったことを神に感謝します。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、・・・。(1 ペテロ1:3-5 参照)」と述べているのです。ああ、このことによって、実に新しい見方で十字架を見ることができるのです。今、開かれた墓をとおして十字架を見ると、全く新しい見方ができます。石がころがされる前は、十字架は人間が人間に対して行なった、とんでもない非人間的な誤りでした。人間がいかに冷酷で残酷になりうるかの典型的な例でした。それは恐ろしい悲劇でした。神の御子が十字架にかけられなければならないなんて。しかし今、十字架を見る時に、全く異なった視点から見ます。敗北として見るのではなく、栄光に満ちた勝利として見ます。十字架で敗北したのは、神ではありませんでした。敗北したのはサタンでした。イエス・キリストの十字架によって、サタンがあなたの人生に対して持っていた力は、打ち負かされました。それは、イエス・キリストが、十字架によってサタンに勝利され、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました(コロサイ2:15参照)。ですから、これは、十字架について私たちに全く異なる見方を与えてくれます。大きな悲劇ではなく、神の愛が非常に目に見える形で人間に示されたのです。ああ、私は、この「石がすでにくろがしてあった。」という聖句が好きです。これで、大きな違いが出て来ます。

「それで、墓の中にはいったところ、真白な長い衣をまとった青年が」これは明らかに御使
いですが、「右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。青年は言った。『驚いて
はいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。
あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納めら
れた所です。』(16:5-6)」そしてこう言いました。「ですから行って、お弟子たちとペテロに、
『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会い
できます。』とそう言いなさい。」「行って、お弟子たちとペテロに言いなさい。」となっているこ
とに注意してください。ペテロはおそらく、主は自分とはもう再び、全くかわりをもたなくな
られるだろうと考えたかもしれません。派手に失敗した時の気持ちがわかりますか。本当に
主を見捨ててしまったとき、どう感じるかわかりますか。主は自分を見限って、もうどんな関
わりをも持ちたくないと思われているだろう。この方をとがめることはできない。私が、危機
の時に主を見捨てたのだ。私が主をがっかりさせたのだなど、罪責の念をペテロは感じて
いました。ですから主は、「ペテロに」と付け加えられたのです。ペテロに知らせてやりな
さい。戸はまだ閉じられていない。赦しはある。理解はある。同情はある。愛はある、と。「弟
子たちとペテロに言いなさい。」「女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上
がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも言わなかった。恐ろしかったからであ
る。(16:8)」

「さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を
現された。(16:9)」これは、他の福音書によって確認できます。特にヨハネの福音書には、
イエスがマグダラのマリヤにご自分を現されたことが伝えられています。「イエスは、以前に、
この女から7つの悪霊を追い出されたのであった。」イエスにお会いする前のマリヤの人生
を想像できるでしょうか。それは、苦悩と束縛の人生でした。彼女にとって、それは7つの悪
霊にとりつかれた生き地獄でした。イエスはこの悪霊どもを追い出され、彼女を自由にされ
ました。イエスが言われたように、「多くの罪を赦された者は、よけいに愛する。(ルカ7:47
参照)」ことがわからないのですか。マリヤがイエスを比較にならないほど愛したのを知って

いますか。この方は、私を地獄から救い出してくださったのです。自由にしてくださったのです。いのちを与えてくださったのです。その時から、マリヤはイエスにつき従い、つねにお供をしていました。イエスが十字架につけられているときに、彼女はそばに立っていました。イエスが墓に運ばれていかれた時にも、ついて行きました。おそらくマリヤが、一番最初に墓に到着した人だったと思います。石がころがしてあったのを見て、走ってそのことをペテロに伝えたのです。しかし、彼女は戻ってきました。そして、イエスにお会いしました。よみがえられたイエスを見た最初の人でした。そこには、優しく特別なものがあります。ヨハネは、マリヤがイエスにすがりついたことを伝えています(ヨハネ 20:17参照)。死に物狂いのしがみつき方をしたのだと思います。おぼれそうになっていたけれども、失ってしまったと思っていた救い主がそこにおられたのです。一度は自分から離れていってしまったけれど、もう決して行かせない、というようなしがみつき方だったのでしょうか。ですからイエスは、「わたしにすがりついてはなりません。このことを弟子たちに伝えなさい。わたしはよみがえったのです。」と言われたのです。ですから、このマグダラのマリヤという女は、イエスが死者の中からよみがえったことを伝えるように任命された最初の証人だったのです。

「マリヤはイエスといっしょにいた人たちが…」これは、弟子たちのことです。「嘆き悲しんで泣いているところに行き、そのことを知らせた。(16:10)」これは3日目のことです。イエスは繰り返し、繰り返し「わたしは十字架につけられるが、3日目によみがえる。(マルコ 8:31など参照)」と言われていたのです。さて、自分が弟子たちよりも優れていると思っていませんが、いやむしろ逆で、弟子たちぐらいになれたらなあと願っても、そうならないことを感じています。しかし、とにかくイエスが、「わたしは十字架につけられるが、3日目によみがえる。」と何度も何度も言われたのですから、私なら3日目にはどうにかして何かを期待していただろうと、思うのです。私なら、きっと待っていて、「おい、もう3日目だぞ。行って、調べてみようぜ。どうなったか。」と言っていたでしょう。けれども、復活を期待して待っていたのではなく、彼らは嘆き悲しんで泣いていたのです。彼らに関して言えば、すべてがお終いだったのです。もう終りでした。そこに、マリヤが現れたのです。彼女がどれだけ興奮して

いたか想像できるでしょうか。きっと最初は言葉がでなかったのでしょうか。興奮と驚喜です。「私は見た。見たのよ。主は生きておられる！生きておられるのよ！」「落ち着け。落ち着け。マリヤ、何を言いたいのかね。」たぶん、マリヤはとても興奮していたので、弟子たちは、「ああ、とうとう気が狂ったか。」と思ったのでしょうか。覚えていらっしゃるでしょうか、ヤコブがヘロデによって首を切られた後に、ペテロは牢に入れられました。ヘロデはユダヤ人の気に入ったのを見て、ペテロを牢に入れたのです。次の日にペテロを引き出して死刑を執行するつもりでした。その夜、主の御使いがペテロを助け出しました。けれども覚えていますが、教会は祈りに専念していたのです。ペテロのために祈っていました。御使いがペテロを牢から救い出し、ペテロは彼らが祈りをしている家に向かいました。そして、その家の戸をたたきました。ロダという若い女中が戸まで対応に来ました。「どなたですか。」「ペテロです。入れてください。」彼女は、祈りで集まっているところまで走り戻りました。「ペテロが、戸のところにはいます！！」と言いました。彼らは、「あなたは気が狂っているのだ。幽霊でも見たのだ。」と言ったのです。ペテロは戸をたたき続けました。ついに彼らは、「だれか対応した方がいいだろう。」と言いましたが、ペテロはそこにいたのです。私たちの信仰はこのようなものです。彼らはペテロのために祈っていましたが、信仰はもっていませんでした。祈りが聞かれたときに、それを信じるのがなかったからです（訳者注：以上、使徒行伝12章参照）。神が祈りを聞いてくださって、驚くことが何度あることでしょうか。神が主権をもって恵みをほどこされたのであり、私のすばらしい信仰によるものではありません。神の主権的な恵みによるのです。ですから、ここでも、またしても女の証言ですが、弟子たちはそれを受け入れることをしませんでした。当時は女性は権利を多く持っていなかったもので、法廷で証言をすることはできませんでした。女の言葉は受け入れられなかったのです。ですから、イエスはマリヤが伝えるように彼女を任命されましたが、彼らは聞きませんでした。依然として嘆き悲しんで泣いていました。喜ぶべきだったのですが、不信仰がそのようなことをさせるのです。不信仰が、そうさせるのです。人を涙にひたさせます。不信仰は人を苦悩の中に置きます。喜ぶべきときに、絶望と悲慘の中に置きます。神が処理をしてくださっているのに、多くの場合もうすでに処理して下さったのに、まだ嘆き悲しみ泣いているのです。不信仰によ

って、神の勝利と御わざの喜びの中に入ることができなくなります。神は御わざをなされて、イエスを死者の中からよみがえらせたのですが、弟子たちは不信仰のために喜ぶことができませんでした。

「その後、彼らのうちのふたりがいなかのほうへあるいていたおりに、イエスは別の姿でご自分を現された。(16:12)」ルカがこのことを詳しく説明しています(ルカ24章 13-35節参照)。ルカは、クレオパという弟子ともうひとりの弟子がエマオに行く途中で、イエスが彼らとともに歩かれたことを伝えています。ルカによる福音書でこのことを学びます。彼らもイエスに話したのです。イエスは別の姿をされていましたが、マリヤも、最初はイエスだとわからなかったように、彼らはイエスだとわかりませんでした。これがどのような意味かは、みなさんが自分で推測してみなければなりません。私には、それがどういう意味があるのかを言う資格はありません。しかし、「イエスは別の姿でご自分を現された。(16:12)」のですが、このふたりの弟子は、暗い顔つきになっていました。イエスが、それはどうしてかお聞きになったからです。二人は、イエスがよく知っておられた話をしました。イエスが十字架につけられたことと、もうそれから3日立つことと、何人かの女がイエスを見たと言ったことも話しました。なぜなら、イエスはマリヤに現れたあと、ほかの女にもご自分を現わされたからです。面白いことに、彼らがエマオに着いたときに、イエスは続けて歩いて行こうとされましたが、「もう遅くなっていますから、私たちといっしょにお泊まりください。」と彼らは言いました。イエスがパンを裂かれたときに、彼らはイエスだとわかったのです。どうやってわかったのでしょうか。たぶん、イエスがパンを裂かれたときに、釘が刺された跡のある手を見たからでしょう。イエスはすぐに消えてしまわれました。そこでふたりは話しはじめました。「道々お話しになっている間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」「そこでこのふたりも、」これは、戻ってきたふたりのことですが、このふたりも、「残りの人たちのところへ行ってこれを知らせたが、彼らはふたりの話も信じなかった。(16:13)」弟子たちが女に偏見を持っていたということで、彼らを完全に責めることはできません。なぜなら、このふたりが戻ってきたときも、彼らは信じなかったからです。不信仰を、疑いを人間の心から取り去ることは、何と

難しいことでしょうか。あなたの心から不信仰が取り去られるために、どれだけのことを、神はどれだけのことをなさらなければならないのでしょうか。「しかしそれから後になって、イエスは、その11人が食卓に着いているところに現れて、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。」または、非難された、叱られました。イエスは、エマオに向かう途中のふたりの弟子にもこのことをされました。「預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。(ルカ24:25)」イエスは、「彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。(16:14)」このことについて、イエスは彼らをお責めになったのです。

「それから、イエスは彼らにこう言われた。(16:15)」この命令はマタイにあります(マタイ28:19参照)。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」これは、教会に対し、世界にイエス・キリストの福音を宣べ伝える命令です。「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。(16:16)」これだけ、はっきりしています。主イエス・キリストを信じれば、救われます。イエスを信じなければ、罪に定められます。聖書はこう告げています。「御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っておらず、神の怒りがその上にとどまる。(1ヨハネ5:12、ヨハネ5:36参照)」「信じる者には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。(16:17-18)」この聖書の箇所を取って、乱用している人たちがいます。過激なグループのなかには、「蛇使い(Snake Handlers)」として知られている人たちがいます。集会を持つと、彼らは次第に狂乱状態になります。輪になっている人たちがガラガラ蛇を手渡していきます。それは、自分の信仰を示すためです。「蛇をもつかみ」という聖句を使って、蛇を手渡していく行為の根拠にしているのです。悪魔がイエスを誘惑したことが、思い起こされます。悪魔は、イエスを神殿の頂に連れて行き、こう言いました。「下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。

イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない。』（マタイ 4:6、7参照）」信仰を試すために故意に蛇をつかむことは、神を試みることです。害を受けないということで、毒を飲むことも同じことが言えます。信仰を試すために故意に青酸カリやヒ素を飲むことは、神を試すことです。この聖句は、このようなことがなされることを意図したものではありません。これらのことは、全世界に福音を宣べ伝えるという文脈の中で行なわれるものだったことに注意してください。全世界に福音を宣べ伝える宣教師の記録の中には、宣教師が猛毒の蛇にかまれても害を受けなかったという記録が実に多くあります。害虫や病原菌がうじゃうじゃいる沼水を飲まなければならなかった時にも、害を受けないことがありました。使徒パウロのときもそうでした。船が座礁して岸に乗り上げてから、彼らは、暖まって、波によって濡れてしまった衣服を乾かすために火を起こそうと、木を集めました。パウロは木を集めて火にくべると、猛毒のまむしがパウロに取りつきました。島の人々は、「この人は、おそろしい人殺しだ。嵐と波から免れて来たのに、神はこの人を生かしてはおかないのだ。」と言いました。彼らはそれはまむしであることを知っていたので、待っていました。2、3分もたてば、ひきつけを起こして死んでしまうからです。パウロが痙攣して死ぬのを見るために待っていましたが、パウロはそれを火の中に振り落として、しばらくしてもひきつけを起こしませんでした。彼らは、「この人は神さまだ。」と言いました。パウロは害を受けなかったのです。しかし、これは、全世界に福音を宣べ伝えるという文脈の中のことです。私は、全世界に福音を宣べ伝えるときに、このようなことが起こると信じます。猛毒のまむしにかまれてしまった場合に、これを神の約束として受け取ることができるのです。必要にせまられて、汚染されているとわかっている水を飲まなければならないときは、神がそれを祝福されるように祈ることができます。害は何も来ないと私は思います。けれどもこれは、全世界に福音を宣べ伝える文脈の中のことです。これは、出て行って信仰によって試すことではありません。ある教職者が、会衆全員に毒を飲ませて信仰を見せるようにしました。「信仰のない人たちは、この教会にはいらぬ。」と言いましたが、この人は、何人か失いました。故殺の罪で告発されていますが、当然だと思います。これは、私たちがただ無鉄砲になって、「神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせるのだから、12階のビルから空を飛ぶのを見

てくれ。」と言うものではありません。悪魔はこのことを薦めましたが、イエスは、神を試すものだということでそれを拒まれました。聖書の箇所を証明するために、聖書の箇所を信じるあなたの信仰を証明するために、故意に自分を危険にさらすことを拒まれたのです。

そして、マルコの福音書は美しい終わりかたをしています。「主イエスは、彼らにこう話されて後、天に上げられて神の右に着かれた。(16:19)」今日もそうです。私たちをとりなすために、そこに着かれています(ローマ 9:34 参照)。上られた方が、地の低い所に下られた方と同じであり、高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れられました(エペソ 4:8-9 参照)。ステパノが石を投げつけられているとき、「人の子が神の右の座に立っておられるのが見えます。(使徒7:56)」と言いました。ここには、「右に着かれた。」とあります。エペソ書で、パウロは、「支配、権威のはるか上に、天上において着かれておられる。(1:20、21 参照)」と述べています。けれども、殉教者が御国に来ようとしているときには、イエスは立ってその者を受け入れられるのです。ですから、ステパノは、イエスが栄光の中に彼を受け入れられるために立っておられるのを見たのです。それでステパノは、「主よ、私の霊をお受けください。(使徒7:59参照)」と言いました。ルカの福音書と使徒行伝は、キリストの昇天についてもっと詳しく伝えています。ルカの福音書と使徒行伝に入ったときに、そのことを取り扱いましょう。マルコの福音書は、短縮版の記録であることは以前にお話しました。「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。(16:20)」アーメン。そのとおりです。これで話しは終わります。彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えました。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされました。これが正しい順番であると、私は思います。しるしが教会において主要な呼び物になるように、神が意図されていたようには思えません。人々をしるしによって呼び寄せて、あつといわせる力を示すのではなく、神のみことばに人を回心させる力があると私は信じます。そして、しるしは伴うのです。したがって、信仰はしるしにあるのではなくて、信仰は神のみことばに立てられるのです。目で見たりしるしに信仰を築き上げるのは危険なことだと思います。なぜならしるし

を見せるペテン師(charlatan)がいることが多いからです。酸素ボンベを持っていたが、それを外して通路を走る男を見たので信じたのであれば、奇跡に見えるものを見て信じるあであれば、祈ったあと酸素マスクを外して走る男を見て、「私は見た。だから私は信じる。見たんだから。」と言ったとします。しかし後になって、その男は実は酸素ボンベを必要とせず、すべて芝居であったことがわかったら、あなたの信仰はどうなりますか。けれども、神のみことばにあなたの信仰が築き上げられるのであれば、それは揺れ動くことはありません。なぜなら、ある意味で信仰に導いた本物のしるしを見たとします。次に人がいやされないかもしれませんが。それでも、私の信仰は神がいやしをされることにあるのであるではなく、私の信仰は神のみことばにあるのです。ですから、これは変わることがありません。それは堅く立ち強いものです。信仰を気持ちに置くことはできません。これもしるしになりえます。「私は温かさを感じた。体じゅう、ぞくぞくした。体じゅう、うきうきしてきた。」けれども明日は、体じゅうひどく調子が悪くなっているかもしれません。ですから、気持ちには信仰を置かないのです。事実には置くのです。真実な神のみことばの事実には置きます。変わることはない神のみことばに。信仰が神のみことばに築き上げられるのであれば、確固とし、不動です。しるしが伴うのは素晴らしいことです。すごいです。けれども、信仰をしるしに置かないください。みことばに信仰を置いてください。